鳥取市

倭文所在城跡・倭文古墳群

姫鳥線整備促進関連事業に係る
倭文所在城跡、倭文２～９号墳の発掘調査

２００４

財団法人　鳥取市文化財団

鳥取市

倭文所在城跡・倭文古墳群

姫鳥線整備促進関連事業に係る
倭文所在城跡、倭文２～９号墳の発掘調査

２００４

財団法人　鳥取市文化財団

北西上空から調査地を望む（手前に切岸と土塁、奥に尾根を切断する堀切が見える）

巻頭図版2

倭文６号墳 主体部検出状況（南南西から）

1．倭文６号墳 主体部出土短甲（中に鉄鏃が見える）

2．倭文６号墳 主体部出土冑（上の短甲の中に鉄鏃と共に納まる）

巻頭図版4

1．倭文６号墳 主体部出土轡

2．倭文６号墳 主体部出土杏葉

3．倭文６号墳 主体部出土金具

序　　文

鳥取市内には数多くの原始・古代遺跡が存在しておりますが、近年の各種開発事業に伴って発掘調査が必要となり、消えていく遺跡もあるのが現状です。しかしながら埋蔵文化財はその地域の先人たちの生活を語る歴史資料であり、後世に継承していくべき市民の貴重な財産です。このような認識のもと、財団法人鳥取市文化財団では開発と文化財の共存をはかるべく、関係各機関の協力を得ながら埋蔵文化財発掘調査事業を進めているところです。

さて、ここに報告いたします倭文所在城跡（しとりしょざいじょうせき）・倭文古墳群（しとりこふんぐん）の発掘調査事業は、中国横断自動車道姫路鳥取線整備促進事業に係る埋蔵文化財発掘調査として鳥取市教育委員会の指導のもとに平成15(2003)年度に実施したものです。これらの遺跡は千代川（せんだいがわ）左岸の丘陵上に展開しておりますが、これまでは一部の皆さんには城跡があると知られているものの他にはあまり知られていなかった遺跡です。今回の調査では中世のものと見られる城跡と、８基の古墳と多くの土壙等が検出され、この地域の古代文化の一端を明らかにする貴重な資料を提供してくれました。ささやかな冊子ではありますが、市民の皆様をはじめとして関係の皆様に広く活用していただければ幸いです。

おわりになりましたが、今回の発掘調査に際し、深いご理解とご協力を賜りました地権者ならびに地元の皆様をはじめ関係の皆様に心から感謝申し上げます。

平成16年８月

財団法人　鳥取市文化財団
理事長　**石　谷　雅　文**

例　　言

1．本書は、姫路鳥取線整備事業に伴って平成15(2003)年度に実施した倭文所在城跡・倭文古墳群の発掘調査報告書である。
2．調査は、財団法人 鳥取開発公社の委託を受けて、財団法人 鳥取市文化財団鳥取市埋蔵文化財調査センターが鳥取市教育委員会の指導のもとに実施した。
3．発掘調査を実施した遺跡の所在地は鳥取市倭文字妙見谷山分５３６－１、同５３７、同５３９、同５４１、同５４６、字家ノ上エ５４４である。
4．発掘調査によって作成された記録類および出土遺物は鳥取市教育委員会に保管されている。
5．本書に掲載した実測図、各種表類、遺物写真は調査に参加した全員の協力を得て調査員・調査補助員で作成した。
6．本書の執筆、編集は山田真宏が担当し、神谷伊鈴がこれを補佐した。
7．現地調査から報告書作成にいたるまで多くの方々からの指導、助言ならびに協力をいただいた。記して厚く感謝いたします。
鳥取県県土整備部道路課、鳥取県姫路鳥取線用地事務所、財団法人 鳥取開発公社、鳥取県埋蔵文化財センター、西村昇、大川康広、八峠興、山上雅弘、山野智久、高田健一、中原斉、松井潔、野田真弓、杉谷美恵子、鈴木一有、阪口英毅、田中晋作　　（順不同、敬称略）

凡　　例

1．本書における方位は座標北の第２図を除いて磁北を示し、レベルは海抜標高である。
2．本書に使用した遺構の略号は次の通りである。
SK：土坑　　P：ピット

目　　次

巻頭図版
序文
例言・凡例
目次
Ⅰ　はじめに …… 1
　1．調査に至る経緯 …… 1
　2．発掘調査の経過 …… 1
　3．調査の組織・体制 …… 2
Ⅱ　遺跡の位置と歴史的環境 …… 3
Ⅲ　倭文所在城跡の調査 …… 5
　1．城跡調査の概要 …… 5
　2．Ⅰ区域の調査 …… 7
　3．Ⅱ区域の調査 …… 10
　4．Ⅲ区域の調査 …… 13
Ⅳ　倭文古墳群の調査 …… 17
　1．古墳群調査の概要 …… 17
　2．倭文２号墳 …… 17
　3．倭文３号墳 …… 20
　4．倭文４号墳 …… 30
　5．倭文５号墳 …… 32
　6．倭文６号墳 …… 49
　7．倭文７号墳 …… 59
　8．倭文８号墳 …… 70
　9．倭文９号墳 …… 82
　10．土壙墓群４ …… 87
　11．土壙墓群３ …… 101
　12．土壙墓群２ …… 117
　13．土壙墓群１ …… 122
　14．その他の遺構・遺物 …… 130
Ⅴ　おわりに …… 133

写真図版
報告書抄録

挿図目次

第１図　倭文所在城跡・倭文古墳群の位置……3
第２図　倭文所在城跡・倭文古墳群周辺遺跡分布図……4
第３図　倭文所在城跡遺構配置図……6
第４図　溝５・平坦面９出土遺物実測図…… 11
第５図　平坦面９出土遺物拓影…… 11
第６図　平坦面８・10・12付近出土遺物実測図 …… 12
第７図　平坦面18出土遺物実測図 …… 14
第８図　倭文２号墳 SK －01実測図 …… 17
第９図　倭文２号墳 主体部実測図 …… 18
第10図　倭文２号墳 主体部出土遺物実測図 …… 19
第11図　倭文３号墳 主体部出土遺物実測図 …… 20
第12図　倭文３号墳 主体部実測図 ……21～24
第13図　倭文４号墳 主体部実測図 ……25～28
第14図　倭文４号墳 主体部出土遺物実測図 …… 29
第15図　倭文４号墳 SK －01～03出土遺物実測図 … 30
第16図　倭文４号墳 SK －01～03実測図 …… 31
第17図　倭文５号墳 第1主体部実測図 …… 33
第18図　倭文５号墳 第１・第２主体部、主体部外
出土遺物実測図 …… 35
第19図　倭文５号墳 第２主体部実測図 …… 36
第20図　倭文５号墳 第３主体部実測図 …… 37
第21図　倭文５号墳 第４主体部実測図 …… 38
第22図　倭文５号墳 第５主体部実測図 …… 38
第23図　倭文５号墳 第４主体部出土遺物実測図 …… 39
第24図　倭文５号墳 第５主体部出土遺物実測図 …… 40
第25図　倭文５号墳 ピット状遺構実測図 …… 41
第26図　倭文６号墳 主体部断面図 …… 42
第27図　倭文６号墳 主体部実測図 ……43～48
第28図　倭文６号墳 主体部短甲内及び
周辺遺物出土状況図 …… 51
第29図　倭文６号墳 主体部出土遺物実測図（１）…… 51
第30図　倭文６号墳 主体部出土遺物実測図（２）…… 52
第31図　倭文６号墳 主体部出土遺物実測図（３）…… 53
第32図　倭文６号墳 主体部出土遺物実測図（４）…… 54
第33図　倭文６号墳 主体部出土遺物実測図（５）…… 57
第34図　倭文６号墳 周溝及び平坦面10の盛土
出土遺物実測図 …… 58
第35図　倭文７号墳 第１主体部実測図 …… 59
第36図　倭文７号墳 第１主体部遺物出土状況図（部分）60
第37図　倭文７号墳 第１主体部出土遺物実測図 …… 62
第38図　倭文７号墳 第２主体部実測図 ……63～68
第39図　倭文７号墳 第２主体部及び盛土・表土
出土遺物実測図 …… 69
第40図　倭文８号墳 第１主体部実測図 ……71～78
第41図　倭文８号墳 第２主体部実測図 …… 79
第42図　倭文８号墳 第２主体部出土遺物実測図 …… 80
第43図　倭文８号墳 検出ピット実測図 …… 81
第44図　倭文９号墳 主体部出土遺物実測図 …… 82
第45図　倭文９号墳 主体部実測図 ……83～86
第46図　倭文９号墳 周溝外縁部土器棺墓実測図 …… 87
第47図　土壙墓群４ 第３主体部出土遺物実測図 …… 88
第48図　土壙墓群４ 第１主体部実測図 ……89～92
第49図　土壙墓群４ 第２主体部実測図 ……93～96
第50図　土壙墓群４ 第３主体部実測図 …… 97～100
第51図　土壙墓群３ 第１主体部実測図 …… 101
第52図　土壙墓群３ 第２主体部実測図 …… 102
第53図　土壙墓群３ 第３主体部実測図 …… 104
第54図　土壙墓群３ 第４主体部実測図 …… 105
第55図　土壙墓群３ 第１・第３・第４主体部
出土遺物実測図 …… 106
第56図　土壙墓群３ 第５主体部実測図 …… 107
第57図　土壙墓群３ 第６主体部実測図 …… 109
第58図　土壙墓群３ 第５・第６・第７・第９・第10
主体部出土遺物実測図 …… 110
第59図　土壙墓群３ 第７主体部実測図 …… 111
第60図　土壙墓群３ 第８主体部実測図 …… 112
第61図　土壙墓群３ 第９主体部実測図 …… 113
第62図　土壙墓群３ 第10主体部実測図 …… 114
第63図　土壙墓群３ 第11主体部実測図 …… 114
第64図　土壙墓群３ 第11主体部出土遺物実測図 … 115
第65図　土壙墓群３ SK －01・02実測図 …… 115
第66図　土壙墓群３ 遺構外出土遺物実測図 …… 116
第67図　土壙墓群２東 出土遺物実測図 …… 117
第68図　土壙墓群２東 第１主体部実測図 …… 118
第69図　土壙墓群２東 第２主体部実測図 …… 119
第70図　土壙墓群２西 出土遺物実測図 …… 119
第71図　土壙墓群２東 第２主体部出土遺物実測図… 120
第72図　土壙墓群２西 主体部実測図 …… 121
第73図　土壙墓群１ 第１主体部実測図 ……123～126
第74図　土壙墓群１ 出土遺物実測図 …… 127
第75図　土壙墓群１ 第２主体部実測図 …… 127
第76図　土壙墓群１ 第２主体部出土遺物実測図 … 128
第77図　土壙墓群１ 第３主体部実測図 …… 129
第78図　土壙墓群１ 第４主体部実測図 …… 130
第79図　土壙墓群１ SK －01実測図 …… 130
第80図　炉１実測図…… 131
第81図　炉１出土遺物実測図…… 131
第82図　炉２実測図…… 132
第83図　土器・鉄製品細部名称図…… 141

挿表目次

第１表　倭文所在城跡出土つぶて石一覧
第２表　倭文所在城跡調査遺構一覧（平坦面）
第３表　倭文所在城跡調査遺構一覧（溝）
第４表　調査古墳・埋葬施設等一覧
出土遺物観察表

付　　図

付図１　倭文所在城跡・倭文古墳群調査前地形図
付図２　倭文所在城跡調査後平面図、各遺構断面図
付図３　倭文古墳群調査後遺存図
付図４　倭文古墳群各墳丘断面図

写真図版目次

巻頭図版１　北西上空から調査地を望む(手前に切岸と土塁、奥に尾根を切断する堀切が見える)
巻頭図版２　倭文６号墳　主体部検出状況(南南西から)
巻頭図版３　１．倭文６号墳　主体部出土短甲(中に鉄鏃が見える)
　２．倭文６号墳　主体部出土冑(上の短甲の中に鉄鏃と共に納まる)
巻頭図版４　１．倭文６号墳　主体部出土轡
　２．倭文６号墳　主体部出土杏葉
　３．倭文６号墳　主体部出土金具

PL.１　１．調査地遠景(南上空から)
　２．調査地遠景(東上空から)
　３．調査地遠景(北上空から)
PL.２　１．調査地調査前全景(北西上空から)
　２．調査地全景・近景(上段右；全景、北東上空から／中段左；全景、西上空から／中段右；北部、南西上空から／下段左；中央部、南西上空から／下段右；南部，北西上空から)
PL.３　１．平坦面１　検出状況(南西から)
　２．平坦面２　検出状況(南西から)
　３．溝１～平坦面３　調査前(北西から)
PL.４　１．切岸・溝１・土塁　検出状況(東から)
　２．切岸・溝１・土塁　検出状況(北東から)
　３．土塁・溝１・切岸　検出状況(西から)
PL.５　１．溝１・土塁　部分断面(東から)
　２．平坦面３　検出状況(南南東から)
　３．平坦面３　断面(東から)
PL.６　１．平坦面４　調査前(東から)
　２．平坦面４　検出状況(南南東から)
　３．平坦面６～４，溝３・溝２付近　調査前(南東から)
PL.７　１．平坦面６～４，溝３・溝２付近　検出状況(南東から)
　２．溝２　断面(北から)
　３．溝３　検出状況(南から)
PL.８　１．溝３　断面(北から)
　２．平坦面17　検出状況(南東から)
　３．平坦面17　南西側裾部断面(北西から)
PL.９　１．平坦面７～17　断面(北西から)
　２．平坦面11　調査前(南東から)
　３．平坦面11　検出状況(南東から)
PL.10　１．平坦面７　調査前(南東から)
　２．平坦面７　検出状況(南東から)
　３．平坦面９　調査前(南西から)
PL.11　１．平坦面９　検出状況(南から)
　２．平坦面12・９　検出状況(南南東から)
　３．平坦面８　検出状況(東から)
PL.12　１．平坦面８　断面(北北東から)
　２．平坦面10　検出状況(南南東から)
　３．平坦面10　断面(東から)
PL.13　１．平坦面13　調査前(北から)
　２．平坦面13　検出状況(北から)
　３．溝６　検出状況(東から)
PL.14　１．溝６　断面(西から)
　２．平坦面14　調査前(北から)
　３．平坦面14　検出状況(北から)
PL.15　１．平坦面18　検出状況(北から)
　２．平坦面18　断面(南南東から)
　３．平坦面18　つぶて石群検出状況(北から)
PL.16　１．溝７　検出状況(北西から)
　２．溝７　断面(南東から)
　３．平坦面15　調査前(北から)
PL.17　１．平坦面15　検出状況(南南西から)
　２．溝８　断面(北西から)
　３．平坦面16　調査前(北東から)
PL.18　１．平坦面16　検出状況(北東から)
　２．溝９　調査前(東から)
　３．溝９　検出状況(北西から)
PL.19　１．倭文２号墳　主体部掘下後全景(北東から)
　２．倭文２号墳　主体部断面(南から)
　３．倭文２号墳　主体部検出状況(南東から)
PL.20　１．倭文２号墳　主体部遺物出土状況(左；北東から／左下；南東から／右下；南西から)
　２．倭文３号墳　主体部掘下後全景(北東から)
PL.21　１．倭文３号墳　主体部断面(南東から)
　２．倭文３号墳　主体部検出状況(北西から)
　３．倭文３号墳　主体部遺物出土状況(右；北東から／左下；北東から／右下；北東から)
PL.22　１．倭文４号墳　主体部堀下後全景(北から)
　２．倭文４号墳　主体部断面(西から)
　３．倭文４号墳　主体部検出状況(西から)
PL.23　１．倭文４号墳　主体部遺物出土状況(左；北から／右；北から／右下；北北西から)
　２．倭文４号墳　ＳＫ－01検出状況(北から)
　３．倭文４号墳　ＳＫ－02検出状況(南から)
　４．倭文５号墳　主体部掘下後全景(北西から)
PL.24　１．倭文５号墳　第１主体部検出状況(西から)
　２．倭文５号墳　第２主体部完掘状況(東北東から)
　３．倭文５号墳　第３主体部完掘状況(北西から)
PL.25　１．倭文５号墳　第４主体部検出状況(北東から)
　２．倭文５号墳　第５主体部検出状況(北東から)
　３．倭文６号墳　主体部掘下後全景(西北西から)
PL.26　１．倭文６号墳　主体部断面(南南東から)
　２．倭文６号墳　主体部検出状況(西北西から)
　３．倭文６号墳　主体部遺物検出状況(東南東から)
PL.27　１．倭文６号墳　主体部遺物出土状況(１段目左；北東から／同右；南西から／２段目左；北北東から／同右；北北東から／３段目左；南南西から／同右；北北東から／４段目左；北北東から／同右；東南東から)
PL.28　１．倭文７号墳　第１主体部掘下後全景(南東から)
　２．倭文７号墳　第１主体部検出状況(南東から)
　３．倭文７号墳　第１主体部遺物検出状況(東から)
　４．同左　部分(東から)
PL.29　１．倭文７号墳　第２主体部検出時全景(南東から)
　２．倭文７号墳　第２主体部蓋石検出状況(南東から)
　３．倭文７号墳　第２主体部蓋石除去状況(北東から)
PL.30　１．倭文７号墳　第２主体部石棺検出状況(北東から)
　２．倭文７号墳　第２主体部完掘状況(北東から)
　３．倭文７号墳　第２主体部遺物検出状況(左；北東から／右；北東から)
　４．倭文８号墳　第１・第２主体部掘下後全景(南東から)
PL.31　１．倭文８号墳　第１主体部蓋石検出状況(南東から)
　２．倭文８号墳　第１主体部石棺蓋石内面状況
　３．倭文８号墳　第１主体部石棺検出状況(南西から)
　４．倭文８号墳　第１主体部完掘状況(南東から)

PL.32　1．倭文８号墳　第２主体部断面(北東から)
　　2．倭文８号墳　第２主体部検出状況(南東から)
　　3．倭文８号墳　ピット検出状況(左上Ｐ－01；北西から／右上Ｐ－02；北西から／左下Ｐ－03，04；北西から／右下Ｐ－05；北北西から)
LP－33 1．倭文９号墳　主体部掘下後全景(南東から)
　　2．倭文９号墳　主体部断面(南東から)
　　3．倭文９号墳　主体部検出状況(南西から)
PL.34　1．倭文９号墳　周溝外縁部土器棺墓検出状況(北東から)
　　2．土壙墓群４　全景(東北東から)
　　3．土壙墓群４　第１主体部検出状況(西から)
PL.35　1．土壙墓群４　第２主体部(左上；蓋石検出状況、北西から／右上；断面、北西から／左下；墓壙検出状況、南南西から)
　　2．土壙墓群４　第３主体部検出状況(東から)
　　3．土壙墓群３　全景(東から)
PL.36　1．土壙墓群３　第１主体部検出状況(東から)
　　2．土壙墓群３　第２主体部検出状況(北東から)
　　3．土壙墓群３　第３主体部検出状況(北東から)
　　4．土壙墓群３　第４主体部断面(北東から)
　　5．土壙墓群３　第４主体部検出状況(北東から)
　　6．土壙墓群３　第５主体部検出状況(東から)
　　7．土壙墓群３　第６主体部断面(北東から)
　　8．土壙墓群３　第６主体部検出状況(南西から)
PL.37　1．土壙墓群３　第７主体部断面(南西から)
　　2．土壙墓群３　第７主体部検出状況(北東から)
　　3．土壙墓群３　第８主体部検出状況(北西から)
　　4．土壙墓群３　第９主体部検出状況(東から)
　　5．土壙墓群３　第10主体部断面(北西から)
　　6．土壙墓群３　第10主体部検出状況(北西から)
　　7．土壙墓群３　第11主体部検出状況(東から)
　　8．土壙墓群３　同左　部分(北西から)
PL.38　1．土壙墓群２東　全景(北から)
　　2．土壙墓群２東　第１主体部検出状況(南から)
　　3．土壙墓群２東　第２主体部検出状況(北から)
PL.39　1．土壙墓群２西　全景(東から)
　　2．土壙墓群２西　主体部断面(北東から)
　　3．土壙墓群２西　主体部検出状況(西南西から)
PL.40　1．土壙墓群１　全景(南南西から)
　　2．土壙墓群１　第１主体部断面(東北東から)
　　3．土壙墓群１　第１主体部検出状況(北から)
　　土壙墓群１　第１主体部上層遺物検出状況(北から)
PL.41　1．土壙墓群１　第２主体部検出状況(左；東から／右；西から)
　　2．土壙墓群１　第３主体部検出状況(左；北から／右；南から)
　　3．土壙墓群１　第４主体部検出状況(北から)
　　4．土壙墓群１　SK－01完掘状況(東から)
PL.42　1．炉１　断面(北から)
　　炉１　炉壁部分(南東から)
　　2．炉１　検出状況(北から)
　　3．炉２　断面(東北東から)
　　炉２　検出状況(東北東から)
PL.43　1．表土・埋土出土遺物(１段目；平坦面９表土／２段目；溝５表土／３段目左；平坦面９表土／３段目右；平坦面８表土／４段目左；平坦面10表土／４段目右；平坦面12表土／５段目左；平坦面10表土／５段目右；平坦面18埋土)
PL.44　1．倭文２号墳　主体部出土遺物(１)
　　2．倭文２号墳　主体部出土遺物(２)
　　3．倭文２号墳　主体部出土遺物(３)
　　4．倭文３号墳　主体部出土遺物(１)
PL.45　1．倭文３号墳　主体部出土遺物(２)
　　2．倭文４号墳　主体部出土遺物
　　3．倭文４号墳　SK－01・02出土遺物
　　4．倭文５号墳　第１主体部出土遺物
　　5．倭文５号墳　第２主体部出土遺物(１)
PL.46　1．倭文５号墳　第２主体部出土遺物(２)
　　2．倭文５号墳　第２主体部外縁部出土遺物
　　3．倭文５号墳　第４主体部出土遺物(１)
PL.47　1．倭文５号墳　第４主体部出土遺物(２)〈線刻部分〉
　　2．倭文５号墳　第５主体部出土遺物
　　3．倭文６号墳　主体部出土遺物(１)
PL.48　1．倭文６号墳　主体部出土遺物(２)
PL.49　1．倭文６号墳　主体部出土遺物(３)
PL.50　1．倭文６号墳　主体部出土遺物(４)
PL.51　1．倭文６号墳　主体部出土遺物(５)
PL.52　1．倭文６号墳　主体部出土遺物(６)
PL.53　1．倭文６号墳　主体部出土遺物(７)
PL.54　1．倭文６号墳　主体部・周溝及び平坦面10の盛土出土遺物(１段目左；主体部／１段目右；平坦面10の盛土／２～４段目；周溝)
PL.55　1．倭文７号墳　第１主体部出土遺物
PL.56　1．倭文７号墳　第２主体部及び表土、盛土出土遺物(１段目・２段目左・３段目左；主体部／４段目左；表土／右２～４段目；盛土)
PL.57　1．倭文８号墳　第２主体部及び同主体部直上出土遺物
　　2．倭文９号墳　主体部出土遺物
PL.58　1．土壙墓群４　第３主体部出土遺物
　　2．土壙墓群３　出土遺物(１)(１段目左；第１主体部／１段目右～２段目；第３主体部／３段目；第４主体部)
PL.59　1．土壙墓群３　出土遺物(２)(１段目左；第５主体部／１段目右～３段目左；第６主体部／３段目右；第７主体部／４段目左；第９主体部／４段目右；第10主体部)
PL.60　1．土壙墓群３　出土遺物(３)(１段目；第11主体部／その他遺構外)
　　2．土壙墓群２東　出土遺物(左下；第１主体部)
PL.61　1．土壙墓群２東　第２主体部出土遺物
　　2．土壙墓群２西　出土遺物
　　3．土壙墓群１　出土遺物
　　4．炉１　出土遺物

Ⅰ　はじめに

1．調査に至る経緯

倭文(しとり)所在城跡は、鳥取市倭文(しとり)集落の後背の標高80m程度の丘陵上に形成された城跡である。これまで文献としては鳥取藩作成の古城の絵図集に記されているだけで、そのために倭文所在城跡とされているが、地元の間には「比丘尼(ビクニン)城」の名前が伝承として言い伝えられている。

これまで倭文地区では本格的な発掘調査が行われたことはなかったが、その周辺地域では近年、浄水施設整備事業や中国横断自動車道姫路鳥取線整備事業に伴って多くの古墳等の遺跡の調査が急速に実施されている。平成11～14年度にそれぞれの事業で実施された近隣の横枕(よこまくら)古墳群の調査では、古墳時代前期から後期の古墳が調査され、周辺地域の古墳の様相が次第に明らかにされつつある。またそれ以降については、当城跡とも尾根続きとなる丘陵上に立地する式内社である倭文神社や、当城跡の南東約1.5㎞強の丘陵上に立地する中世の鵯尾城(ひよどりおじょう)等が所在している。

今回の発掘調査もこの姫路鳥取線整備事業に伴うもので、事業では玉津(たまづ)集落の東側平野部から倭文集落後背の丘陵上を通って長谷(はせ)集落の東側平野部へ抜ける形で路線が計画されている。当初当該地区内周辺には中世の頃かと考えられる城跡と見られる遺構が認められており、鳥取市教育委員会によって平成12年度に倭文神社手前等の周辺丘陵上においても試掘調査が実施されたが、そちらでは明瞭な遺構は検出されなかった。その後これらの結果をもとに当該地区内の埋蔵文化財の取り扱いについて関係機関の間で協議・検討が重ねられたが、路線内の遺跡は現状での保護・保存が難しく、記録保存で対応することとなった。

2．発掘調査の経過

倭文所在城跡の発掘調査は、財団法人鳥取開発公社の委託を受けた財団法人鳥取市文化財団鳥取市埋蔵文化財調査センターが実施することとなり、平成15年度に調査準備の後、現地調査に着手した。調査はまず、５月に立ち木の伐採に着手し、伐採後、資材を搬入しながら伐採木の整理を行った。次いで、調査地は、「Ｓ」字状に曲がる丘陵尾根上に城跡関連施設と見られる平坦面が各所に認められたことから、ある程度尾根のセンターを通るように、なおかつ各平坦面も通ることを考慮しながら調査用の測量杭を角度を振りながら設定した(杭Ａ～Ｒ)。また必要に応じてこれらの杭に直交するその他の杭を設定した。その後、現況の地形を業者委託により航空写真測量し、細かな地形の補足や修正については人手による測量で対応した。表土除去作業は調査区北側の丘陵斜面付近から取りかかり、必要に応じて各所にトレンチをあけて層序確認を行いながら南側にあたる尾根上位へと順次進め、あわせてその都度各遺構の流土、埋土の除去も行って遺構の検出に努めた。

当初調査区内では尾根上に16か所の平坦面と尾根を分断する形のものも含めた９か所の溝状遺構、１か所の土塁状遺構が想定されていたが、調査の結果さらに２か所の平坦面が検出され、平坦面は計18か所を数えることとなった。各遺構は大きくは３区域に分けられると見られ、調査区の北側である丘陵先端付近から中腹にかけて６か所の平坦面と３か所の溝状遺構、１か所の土塁状遺構が、調査地中央部付近に７か所の平坦面と２か所の溝状遺構が、さらにその奥すなわち調査区の南側に５か所の平坦面と４か所の溝状遺構が形成されている。これらの各遺構検出後は、業者委託による航空写真撮影と部分的に業者委託も含めた地形・遺構測量作業、遺物の取上げを適宜行った。

また調査では、中世の城跡に関連すると見られる遺物の検出量は少なかったが、古墳時代前期から中期頃とみられる遺物が検出された。調査が進むにつれ、城跡遺構の下にほぼ重複して古墳等の遺構が遺存することが判明し、これらについても同時に調査を行う事となったが、古墳が８基と４か所の土壙墓群が新たに見つかり、最終的にはその中から計36基もの埋葬施設が検出された。またその中には鳥取

県内ではまだ出土例も少なく、その遺存状態も比較的良好な短甲等を含む埋葬施設もあり、これらの調査時期が冬場にかかったという季節的なことも含めてこれまで以上に慎重な調査が必要となった。そのため協議がなされ、整理・報告書作成作業は翌16年度に実施することとなり、降雪等の合間を縫いながら各古墳やその他の遺構の検出・記録、遺物の取上げを進めた。こうして平成15年12月末および同16年２月後半には現地での報道関係、市民の皆様への現地説明会を開催するなどしながら、各種記録類を作成して平成16年２月末に現地調査を終了した。なお記録類の整理・出土遺物の整理は、現地調査と並行して台帳への記録や土器の洗浄・注記等の一部を行ったが、同16年４月以降に本格的に実施した。その際、短甲等の鉄製品については、その整理作業に慎重を期すため、鳥取県埋蔵文化財センターの指導・協力を得て、ソフトＸ線照射による調査も実施し、現段階では肉眼では確認できないいくつかの点を確認することができた。また短甲の中からは、現地でも確認されていた鉄鏃のほか冑も検出されその作業にはさらに慎重さが要求された。なおこれらの作業を行いながら報告書作成作業も行い、同年８月に終了した。

３．調査の組織・体制

発掘調査の組織・体制は以下のとおりである。

平成15(2003)年度

調査主体　財団法人 鳥取市文化財団

理 事 長　石谷雅文(副市長)

副理事長　中川俊隆(教育長)

三田三香子

常務理事・事務局長　小谷荘太郎

調査指導　鳥取市教育委員会　庶務課　文化財室

事 務 局　財団法人 鳥取市文化財団 鳥取市埋蔵文化財調査センター

所　長　前田　均

調査事務　秋田澄世

調査担当　調 査 員　前田　均　山田真宏　藤本隆之　谷口恭子

調査補助員　神谷伊鈴　杉本利子　木原美和　矢芝泰伸　永田りん太郎

小杉雄貴　下多みゆき　井上初恵　高垣恵巳子　濱橋博子

平成16(2004)年度

調査主体　財団法人 鳥取市文化財団

理 事 長　石谷雅文(副市長)

副理事長　中川俊隆(教育長)

三田三香子

常務理事・事務局長　小谷荘太郎

調査指導　鳥取市教育委員会　庶務課　文化財室

事 務 局　財団法人 鳥取市文化財団 鳥取市埋蔵文化財調査センター

所　長　前田　均

調査事務　秋田澄世

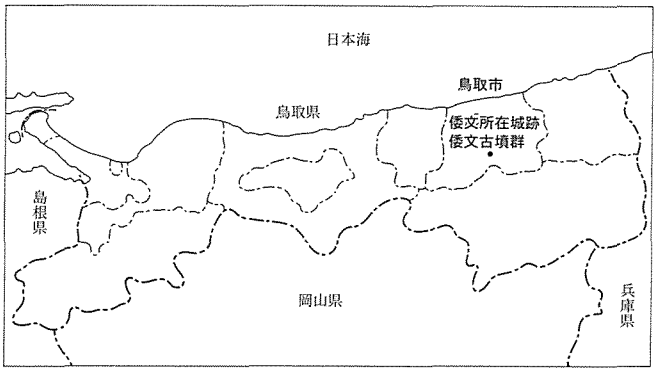
調査担当　調 査 員　山田真宏

調査補助員　神谷伊鈴

Ⅱ　遺跡の位置と歴史的環境

1．倭文所在城跡・倭文古墳群の位置

鳥取市は、鳥取県東部に位置する山陰の中核都市の一つで、平成16年２月現在で、面積237.20㎢、人口15万２千人余りを擁する県庁所在地として政治・経済・文化の中心的な役割を担っている。また現在は近隣の８町村との間で合併協議がなされており、人口20万人を越える特例市としてさらなる発展を目指している。地理的には、市の北側には日本海とそれに臨む広大な鳥取砂丘が広がり、中央部には中国山地に端を発する千代川が北流する。市域の中心はこの千代川の沖積作用によって形成された鳥取平野が占め、この平野の周縁部は丘陵地となっている。



第１図　倭文所在城跡・倭文古墳群の位置

今回の調査対象である倭文所在城跡・倭文古墳群は、鳥取平野南西部に面する標高67mおよび80～86m程度の丘陵上に立地する。JR 鳥取駅からは主要地方道鳥取鹿野倉吉線から主要地方道鳥取河原線を経由して南西方向に計約7.5kmで、倭文集落の西側後背から玉津集落の南約200mに位置する。所在地名は鳥取市倭文である。この周辺では、約４kmほど北側に昭和60(1985)年の鳥取国体を契機として国道29号線(旧国道53号線南バイパス)が整備されたことから次第に開発が広がり始め、近年では浄水施設整備や本調査の契機である道路整備事業が進展しており、今後開発が加速度的に展開しその現風景が一変する可能性も考えられる。

2．倭文所在城跡・倭文古墳群周辺の歴史的環境

鳥取平野において人々の最初の足跡が認められるのは千代川東岸の浜坂地内の砂丘で採取された黒曜石製の有舌尖頭器で、詳細は不明ながら旧石器時代にまで遡る可能性を持つ遺物である。

縄文時代では市域の西端部、白兎海岸から南へ約１kmの丘陵裾部から前期中頃や後期の土器が採取された(内海中所在遺跡)他、本調査遺跡の千代川を挟んだ対岸の丘陵上に立地する美和32・33号墳の盛土下層から前期末や中期の土器が僅かに検出されている。また、市西部の湖山池南東岸の低湿地には、現在のところ前期末を初源とする桂見遺跡や中期の土器も出土している東桂見遺跡、布勢第１遺跡が立地するとともに湖山池に浮かぶ青島遺跡では磨消縄文の浅鉢など多くの土器が出土し、ともに後期を中心とした低湿地遺跡群として知られる。本調査遺跡周辺では、４kmほど北の本高段木遺跡から二次堆積と見られるものの晩期の突帯文土器が、その１kmほど北の山ヶ鼻遺跡からは後期後葉から晩期前葉の土器群が、さらにその１kmほど北の千代川の自然堤防上に立地する古海遺跡からは晩期の突帯文土器が出土している。

弥生時代に入ると縄文時代から引き続き営まれた湖山池南東岸の遺跡群の他、掘立柱建物や水路・水田、各種多彩な遺物が検出された鳥取平野中央部の岩吉遺跡、千代川東岸の西大路土居遺跡から前期の遺物が検出されており、それ以降その他に古海、菖蒲、山ヶ鼻、服部、秋里、帆城、湖山第２、布勢第２、大桷、北村恵儀谷等の遺跡が営まれ、後期にはその数が飛躍的に増加する。またこれらの遺跡の外縁丘陵部に位置する西桂見遺跡や桂見、布勢鶴指奥、服部の各墳墓群には墳丘墓や土壙墓が築かれている。

古墳時代の集落遺跡の調査事例は少ないが、現在のところ古墳の立地する丘陵裾の微高地上等に、あるいは現集落と重なって営まれたものと考えられている。弥生時代から続くものとしては、湖山池周

1．高住古墳群
2．倉見古墳群
3．桂見墳墓群
4．布勢鶴指奥墳墓群
5．里仁古墳群
6．大塚古墳群
7．野坂古墳群
8．桷間古墳群
9．徳尾古墳群
10．古海古墳群
11．本高古墳群
12．宮谷古墳群
13．小森山古墳群
14．下段古墳群
15．上段古墳群
16．上原古墳群
17．釣山古墳群
18．服部古墳群
19．下味野古墳群
20．篠田古墳群
21．横枕古墳群
22．玉津古墳群
23．倭文古墳群
24．長谷古墳群
25．橋本古墳群
26．美和古墳群
27．古郡家古墳群
28．八坂古墳群
29．園原古墳群
30．越路古墳群

A．東桂見遺跡
B．布勢第１遺跡
C．古海遺跡
D．野坂遺跡
E．大桷遺跡
F．小森山遺跡
G．下段遺跡
H．北村恵儀谷遺跡
I．山ヶ鼻遺跡
J．菖蒲遺跡
K．菖蒲廃寺跡
L．本高園ノ前遺跡
M．服部遺跡
N．横枕所在遺跡２
O．横枕所在遺跡１
P．倭文遺跡
Q．倭文所在遺跡(仮)
R．古市遺跡
S．宮長竹ヶ鼻遺跡
T．橋本遺跡
U．湯谷遺跡
V．伊勢谷遺跡

a．松ヶ谷横穴
b．新山城跡
c．鍋山城石
d．桷間１号墳
e．古海35号墳
f．服部23号墳
g．下味野23号墳
h．中村所在城跡１
i．中村所在城跡２
j．中村須恵器窯跡
k．中村所在横穴
l．中村所在城跡３
m．篠坂所在城跡
n．有冨所在城跡
o．横枕55号墳
p．横枕13号墳
q．猪子所在城跡
r．鶏尾城跡
s．倭文所在城跡
t．赤子田城跡
u．橋本城跡
v．古郡家１号墳

—凡例—
集落遺跡・遺物散布地
墳墓群・古墳群
主要古墳
横穴
城跡

第２図　倭文所在城跡・倭文古墳群周辺遺跡分布図

辺の遺跡群があるが、今のところいずれも大集落ではなく微高地上に住居跡が点在する状況である。古墳に目を向けると、鳥取平野周辺部の丘陵上に大小様々な古墳が造営される。このうち千代川左岸の湖山池周辺では、弥生時代からの系譜を引くと見られる小規模な方墳を主体とした桂見古墳群、倉見古墳群の他、服部、釣山、古海、徳尾、下味野、横枕他に多くの古墳が造営される。前方後円墳としては古くて大規模な里仁29号墳(85m)、桷間1号墳(92m)から布勢1号墳(59m)、大熊段1号墳(46.5m)、三浦1号墳(36m)等が点在し、新しくて小規模な桂見6号墳(24.5m)、釣山2号墳(26.4m)等も造られる他、古海36号墳(67m)のような前方後方墳も認められる。また千代川右岸では平野の南側丘陵に古墳時代全般を通して築造され、因幡地域最古の前方後円墳とされる六部山3号墳(63m)や古郡家1号墳(90m)等が点在する他、橋本、美和、八坂、越路、広岡、空山、紙子谷、生山他の古墳群が形成されている。

歴史時代になると、湖山池南東部周辺には古代山陰道、駅衙、郡衙が推定されており、律令期の鳥取平野の中心的地域であったと考えられている。また『東大寺東南院文書』からもこの周辺が東大寺領「高庭庄」として開発されたことを読み取ることができる。遺跡としては現在塔心礎が残る菖蒲廃寺、墨書土器の検出された菖蒲遺跡や山ヶ鼻遺跡、多量の墨書土器や緑釉陶器・木簡・祭祀具等が検出された岩吉遺跡等が知られ、その他に千代川対岸で墨書土器や奈良三彩小壺他の検出された古市遺跡等が知られる。中世以降では15世紀に湖山池東岸の天神山に因幡守護山名氏が城を構え、久松山鳥取城へ移るまで因幡支配の拠点とした。倭文周辺では山名氏の家臣であった武田氏の拠城である鵯尾城や本報告の倭文城他が丘陵上に形成されたものとみられる。

Ⅲ　倭文所在城跡の調査

1．城跡調査の概要(付図1、2，第2、3図，PL1)

倭文所在城跡は鳥取市倭文に所在し、標高47～80m程度の丘陵先端部付近に形成された城跡である。この丘陵は、中国山地から鳥取平野へ延びるもののうち標高377.2mの「衣笠山」を頂きとして東北東に延びるもので、その先には千代川が北流する。これらの丘陵上には後述の倭文古墳群や玉津古墳群、長谷古墳群等が形成されるほか、式内社である倭文神社や猪子所在城跡、玉津所在城跡1(鵯尾城跡)、赤子田城跡等の中世城跡と見られる遺跡がそれぞれ立地している。現在これらの丘陵は一部にわずかながら針葉樹等の植林が見られるものの、主に雑木林や竹林となっている。

今回調査の倭文所在城跡は先述の通り、現在の倭文集落の裏山、即ち西方の丘陵先端部付近に位置している。城跡の東から北にかけては広く展開し始める千代川水系、即ち鳥取平野が一望のもとに見てとれ、果ては鳥取砂丘・日本海まで見受けることができる。また南東側は中国山地への通路ともなる上述の千代川筋も押さえることができる。尾根が続く南から南西方向は眺望はきかないものの、要衝の城の立地条件としては良好な地であるといえる。

現在までのところ、文献にはその名が認められていない城跡ではあるが、この丘陵上には不自然な急斜面や溝、帯状に続く盛り上がり部や平坦面があり、調査以前から城跡の存在は知られていたものである。地元でも古老の間では「比久尼(ビクニン)城」の名前が伝えられているようである。ただその詳細は分かっておらず、わずかに『因伯古城跡図志 因幡国』(文政元年(1818))にその記載が認められるだけである。

調査は諸般の事情から事前の十分な踏査はできず、また伐開後も直ちに表土除去に取りかからなければならなかった。しかしながら調査前の平坦面等の遺存状況は比較的良好であったため、当初の調査前の地形測量で推定した平坦面、溝等は発掘調査後もほぼ同様に確認された。

発掘調査は前述のとおり表土、流土、遺構埋土の除去を行って調査地内の遺構の検出に努めたが、地表面観察以外に適宜トレンチ調査を行って遺構検出、流土・盛土の確認を行った。調査にあたっては、

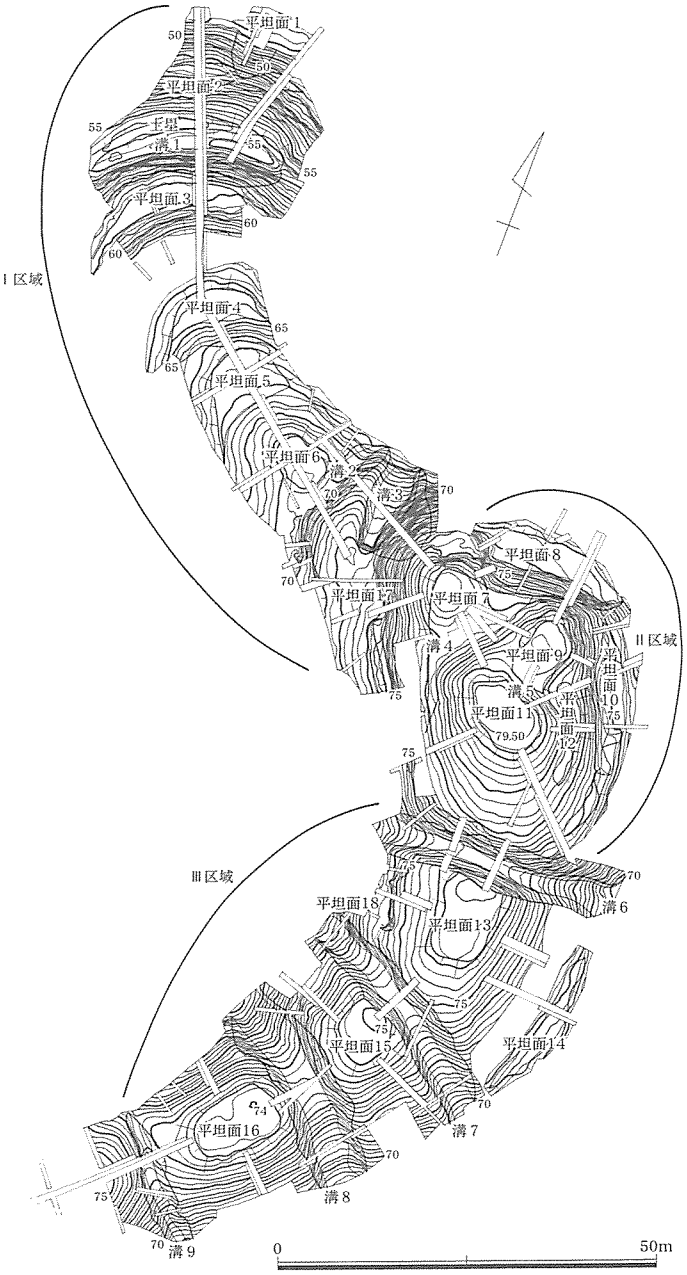
調査前に推定した16か所の平坦面と９か所の溝状遺構に尾根の先端部(調査区北西端部)から尾根の上位(調査区南側)に向けて、それぞれ平坦面１・２・３…、溝１・２・３…と呼称することとしたが、調査中に新たに見つかった２か所の平坦面は続きの17・18とした。

倭文城跡の全体像は、「S」字状に曲がる尾根上およびそこから派生する小尾根上、丘陵斜面に曲輪・堀・土塁・切岸等が展開するものと考えられる。このうち調査地内では尾根続きでさらに昇っていく南端を除くと最高所で尾根の屈曲部でもある調査地中央部(Ⅱ区域)には、本城跡の中心となる３か所の平坦面が形成され、これらの周囲に進入路の可能性のあるものも含む別の平坦面・溝状遺構が配置されている。そしてここから北西へ下る尾根上(Ⅰ区域)には複数の平坦面や竪堀、横堀、土塁が配され、主尾根中腹の護りとしたものと思われる。また今回の調査範囲外であるが、主要部から北北東に下る小尾根上にも複数の平坦面と横堀、土塁が認められ、これもⅠ区域と同様の防御施設かと考えられる。さらに主要部から屈曲して南西に延びる主尾根上(Ⅲ区域)には、尾根を分断する多重の堀切と平坦面を配し、防御を固めているかの感がある。このⅢ区域の南西には上述のとおりかなりの傾斜で昇る尾根が続き、その先にこれもまた今回の調査範囲外ではあるが、複数の平坦面と見られる地形が認められる。本城跡を見下ろすその位置関係から本城跡の関連施設の可能性は十分考えられる。

次いで層序についてみると、本城跡はその多くの施設は地山・岩盤を削平・掘削して構築しているものと見られるが、表土は全体的に薄くなっている。そのため表土下は直ちに地山の岩盤となるところも多く、崩壊・風化の度合いも高かったのか堀などには各断面図土色名のカッコ内に「地山岩」とした岩盤の崩壊・風化したものと見られる小礫を多く含む土が堆積する。但し主要部の北から東の本来急斜面であった位置に形成された平坦面は、尾根頂上部を削平した際の残土や平坦面の端部に続く斜面を切岸状に掘削した際の残土を利用した盛土によって構築されている。またⅠ区域等に見られる土塁も横堀や切岸掘削の際の残土を利用した盛土によるものと思われる。

遺物については、当該期のものは量的には少ないが、検出された土器類は上述のⅡ区域の一部に集中し、また比較的多く検出されたつぶて石は、Ⅱ区域とⅢ区域のⅡ区域寄りに集中する。

なお本報告での遺構の呼称については、調査時のものをそのまま使用することとし、その性格についてはそれぞれ述べることとする。



第３図　倭文所在城跡遺構配置図

2．Ⅰ区域の調査（付図２，第３図，PL２～９）

本区域は、主要部の北西から北に下る尾根上に位置する。主要部最高所から約７m下がった平坦面から約75mの間に比高差約30mにわたって下る調査範囲内に、調査前の観察では尾根先端付近から２段の平坦面、土塁・横堀・切岸の１セット、さらに４段程度の平坦面、そして２か所の竪堀等が本城跡主要部へ向けて配されているものと想定された。

1）平坦面１（付図２，第３図，PL３）

調査区の最北西端部、丘陵尾根の先端近くに形成された平坦面で、尾根に沿って北西に緩やかな傾斜が認められるが、中央付近で標高は47.5mを測る。標高20m前後の丘陵裾からの比高差は27m程度である。現況ではやや不定形ながら東西に長く南北に短い幅広の馬蹄形状を呈すると考えられるが、その東側は調査範囲外のため不明確で、西側も削平あるいは崩落の可能性が考えられ、本来はもう少し東西方向に広がっていたとも考えられる。

調査前にはその位置が丘陵裾に近く現在の墓地等もすぐそばにあることから現代の改変も考慮したが、調査の結果、さらに古い時期の遺構が重複するものの、後世の時期を示すものは検出されなかった。また、丘陵の上位側、即ち南側をやや地山カットして本平坦面は造成されており、その上位には明らかに当該期の遺構（溝１）が存在することから、消極的ながら本平坦面も当該期の遺構（曲輪）として取り扱うこととした。調査で検出した平坦面は最大長15.6m、最大幅4.9mで、面積は約46.9㎡の規模を持つ。なお本平坦面からはピット等の遺構は全く検出されなかったが、表土中から唯一つぶて石と見られる河原石１点が検出されている。

2）平坦面２（付図２，第３図，PL３）

平坦面１の南西約５m、比高差約６m上位の尾根上に位置する。現況では東西に細長い形状を持つが、西側は崖で崩落しており、本来の規模は不明である。標高は中央付近で51.5mを測り、調査で検出した規模は最大長8.8m、最大幅1.5mで、面積は約13.2㎡である。

断面観察では表土下の微妙な傾斜の変換を認める以外は明確には造成の跡は確認できなかった。従って、下層に重複する古い時期の遺構への自然堆積によってできた自然地形としての平坦面の可能性もあるが、平坦面１と同様に、そのすぐ上位に明瞭な当該期の遺構（溝１）が存在していることから、それと連携した当該期の遺構（曲輪）の可能性も考えておきたい。なお本平坦面からはピット等の遺構は全く検出されず、遺物も検出されなかった。

3）溝１（付図２，第３図，PL３～５）

平坦面１の南約14m、比高差約7.5m上位で、平坦面２の南南東約８m、比高差約3.5m上位の尾根斜面上に位置する。標高は東側底面で54.5mで、丘陵裾からの比高差は35m程度である。本遺構は地山の岩盤まで掘り込む横堀で、現況では尾根を東西に円弧状に横断するが、調査区の東端近くでは収束する様相を呈する。また西端近くでは次第に浅くなり不明瞭となるが、調査区外となり明確にはできなかった。ただそれぞれの延長線上には調査区外に、東側は尾根東側斜面に地表面観察ながら同様の遺構が認められるのに対し、西側にはそれらしき痕跡は見受けられない。このことから東側端部付近に土塁や横堀から上位に立地する施設との連絡路が存在した可能性も考えたが、明確にはできなかった。

調査で検出した遺構の規模は長さ26.0m、最大幅2.5mを測る。本横堀の南側には硬い地山の岩盤にもかかわらず、上位の平坦面３の端部から斜度40°強の切岸が明瞭に設けられており、また前面、即ち北側には切岸や堀を掘った際の残土を利用したと見られる上面最大遺存幅約１m、盛土最大遺存厚約0.5mの土塁が設けられている。土塁から堀の底までの見かけの深さは0.3～0.4m程度が遺存しており、堀全体としての断面は浅い皿状となる。横堀と土塁を合わせた面積は約81.2㎡である。これらのことから、本溝（横堀）および土塁上面からはピット等の遺構は全く検出されなかったとは言え、本遺構が防御施設としての大きな役割を持っていたことは想像に難くない。なお遺物は上位からの転落遺物と思われる土

師器甕の複合口縁部片１点が検出されたのみである。

４)平坦面３（付図２，第３図，PL５）

溝１のすぐ南側上位に連続して位置し、標高は中央部で59mを測る。溝１との比高差は４m程度である。現況では東西に細長く、さらに南西側に曲がりこみながら幅が狭くなり不明瞭となる。東側は緩やかながらやや角度をもってきり上がり端部を形成するものと考えられる。

調査で検出した遺構の規模は長さ25.0m、最大幅3.5mを測り、面積は約61.4㎡である。本平坦面の南側の遺存状況は良好で、斜度30°強で高さ２m程度硬い地山の岩盤がしっかりとカットされている。また北側にも上述のとおり溝１に向けた切岸が設けられている。これらのことから、本平坦面もその下位に連続する溝１と同様にピット等の遺構は全く検出されなかったが、防御施設（曲輪）としての役割が考えられる。なお遺物は重複するさらに古い時期の下層の土師器片が溝１へ切り落される切岸の上位から検出されたが、それ以降の遺物は検出されなかった。

５)平坦面４（付図２，第３図，PL６）

平坦面３の南南東約12m、比高差約5.4m上位に位置し、尾根の傾斜が比較的緩やかとなる傾斜変換点付近に形成された平坦面である。標高は中央部で64.4mで、丘陵裾からの比高差は45m程度である。現況では東西に長く、やや半月に近い三日月状の平面形を呈している。検出した規模は、最大長12.7m、最大幅4.0mを測り、面積は約48.4㎡である。本平坦面の南側の遺存状況は良好で、斜度40°強で高さ0.7m程度硬い地山の岩盤をしっかりとカットしている状態がよく見て取れる。東側から西側肩部については傾斜の変換がやや甘く自然地形をそのまま利用した可能性も考えられるが、頂部は削平して平坦面を造成した可能性も考えられる。また当初の地表面観察では南西方向に幅0.4～0.5m程度の微妙な傾斜の変化を認めたが、調査の結果は不明瞭で、尾根の上位施設への通路かどうか明確にはできなかった。

これらのことから、この遺構も尾根中腹の防御施設（曲輪）の一つとも考えられるが、ピット等の遺構も遺物も全く検出されず、その人為的な改変も比較的少ないことから、あるいは城内で別の利用をされた平坦面の可能性も考えられる。

６)平坦面５（付図２，第３図，PL６～７）

平坦面４の南東側上位に比高差2.1mをもって隣接する平坦面で、本城跡の主要部付近から北西に延びる尾根中腹の中央付近に位置する。標高は中央部で66.6mを測り、現況ではかまぼこ形の平面形を呈している。検出した規模は、最大長11.0m、最大幅7.5mを測り、面積は約70.7㎡である。本平坦面の外縁は、平坦面４と同様にその多くは傾斜の変換がやや甘く、自然地形をそのまま利用した可能性も考えられる。造成の状況が見て取れる南側も、尾根中央付近で、斜度35°で高さ0.4m程度地山の黄褐色粘質土と岩盤をカットしているのが認められる程度である。ただ頂部については削平して平坦面を造成した可能性が考えられる。またその南西隅から南方向に向けて幅0.5～0.7m程度の平坦面がやや延びる傾向が認められる。これは次第に狭まり不明瞭となるが、平坦面４では確認できなかった尾根の上位施設への通路の可能性も考えられる。

これらのことから、この遺構も平坦面４と同様の尾根中腹の防御施設（曲輪）の一つ、あるいは別の利用をされた平坦面と考えられるが、ピット等の遺構は全く検出されなかった。ただ遺物については、西側肩部付近の表土下から唯一つぶて石と見られる河原石１点が検出されている。

７)平坦面６（付図２，第３図，PL６～７）

平坦面５の南東約６m、比高差約2.6m上位に位置し、標高は中央部で69.2mを測る。現況では北西～南東に長く、角のとれた台形状の平面形を呈している。尾根上位の南東側は溝２によって区画され、南側コーナーから南西にかけては溝の延長で地山カットされ周囲より一段高くなっているが、その他は平坦面４や５と同様に傾斜の変換がやや甘く、自然地形をそのまま利用した可能性も考えられる。調査で検出した規模は、最大長7.5m、最大幅5.0mを測り、面積は約30.7㎡である。また本平坦面の南西側

にはかなり緩やかな傾斜地が認められる。その北西側には上述の平坦面５から延びかけて不明瞭となった幅0.5～0.7m程度の平坦面が位置し、あるいはここに下位施設からの通路が続いていた可能性も考えられたが明確にはできなかった。

なお本平坦面からはピット等の遺構も遺物も全く検出されなかったが、遺構の性格としては上述の平坦面４や５と同様に尾根の中腹を守るための防御施設（曲輪）の一つ、あるいは別の利用をされた平坦面と考えられる。

８）溝２（付図２，第３図，PL６～７）

尾根中腹に緩やかな傾斜で続いた平坦面４～６の各施設とそれより南東側の施設とをある程度区切るかのように平坦面６の南東に北北東から南南西方向に尾根を横断する形で掘り込まれた堀である。調査で検出した規模は、長さは約11m、幅は尾根中央部付近の上端間で2.5m、深さは尾根の上位側と下位（平坦面６）側でかなり異なるが、上位側で１m、下位側で0.3mを測る。断面形は逆台形状で、底部幅は1.55mである。現況では北北西側は次第に浅くなるが、調査区外となり地表面観察でもその端部を明確にすることはできなかった。しかしながら南南西側は、平坦面６の境で堀の北西側壁は途切れるものの、南東側壁は１mの比高差を残したまま「く」の字状に南側へ回り込む様相を呈する。このためその性格を知るためのトレンチを調査地境界部分に直行方向に設定したが、このカット部分が次第に高さを減じながら続くことと、カット底部のすぐ西側から自然地形の傾斜で落ちていくことが確認できたにとどまった。これらのことからこの堀は、これより北西側の諸施設との境界的な性格をもつもの、あるいは溝の北北西側から主要部への通路的な性格をもつ可能性も考えられる。

なお本溝（堀）からは尾根中央付近の北西側底部から性格不明の径60cm、深さ25cm程度の落ち込みを検出した以外は乱杭等の施設は検出されず、遺物も検出されなかった。

９）溝３（付図２，第３図，PL６～８）

溝２の東側１～５mに位置し、尾根の中央付近から北側斜面に向けて掘り落とされた堀である。調査範囲内で検出した規模は、検出長約12m、南側端部上端幅2.5mで、深さは南側端部付近で1.0mを測るが、地表面観察の結果、調査区外の北側の丘陵斜面にもさらに竪堀状に続く様相を呈する。断面形は溝２と同様の逆台形状で、底部幅は1.6mである。また東南東の壁面についてみると、その上位には本城跡の主要部が位置し、平坦面７の端部から斜度40°弱の切岸が設けられており、堀の底からの見かけの高さは7.5m程度を測る。なお本溝（堀）からは乱杭等の施設は検出されず、遺物も全く検出されなかったが、その性格としては防御施設としての竪堀の性格をもつものとも考えられる。また本溝（堀）と溝２の間には細長い残地が掘り残された形となって残っている。断面観察では表土下は一層を挟んで地山の岩盤となり竪土塁等の人為的な改変かどうか明確にはできなかったが、その位置関係等からあるいは上位の平坦面17への通路の性格をもった残地の可能性も考えられている。[註１]

10）平坦面17（付図２，第３図，PL８～９）

平坦面６の南東約５m、比高差３m前後上位で、本城跡の主要部の西側に隣接して位置する。標高は中央部付近で72.5m前後を測り、主要部との段差は5.5～７m程度ある。また丘陵裾からの比高差は52m程度である。当初の地表面観察では溝２と溝３の間の残地が少し広くなった自然地形かと考えていたが、調査の結果平坦面４～６より一段高く、しかも本城跡の主要部西側直下に当たる位置に形成された平坦面と判断したものである。上述のとおり、通路の可能性も考えられる溝２と溝３の間の残地が北側に延び、北西から西にかけては溝２から続く高さ１m程度の段差によって区画される。南側については、自然崩落の可能性も考えられるが、比較的フラットであった平坦面から明確な境を持つこと無く次第に角度をもって丘陵斜面へと変化する様相を呈する。東側は上述のとおり本城跡主要部の端部から斜度45°の角度を持った切岸が明瞭に設けられている。またこの切岸裾には上面幅１m程度のスロープが南に向けて少しずつ上る形で延びており、一部調査が及ばなかったものの主要部への通路あるいはさらに

南側施設への通路である可能性が考えられる。従って本平坦面の北東隅と南西隅は溝３とスロープが連続した形となるが、調査で検出した規模は、長さは上述のとおり不明確ながら13m以上で、最大幅は8.0mを測る。また面積は90㎡以上である。

なお本平坦面からはピット等の遺構も遺物も全く検出されなかったが、隣接する溝やスロープ、切岸の状況から主要部を守るための防御施設(曲輪)であることは間違いなかろう。

３．Ⅱ区域の調査(付図２，第３図，PL２、９～12、43)

本区域は本城跡の主要部を形成する区域で、「S」字状に曲がる調査区のほぼ中央、調査尾根の一つのピークに位置する。標高は80m弱で調査前の観察では中央部に３か所の平坦面と２か所の溝、北側の一段下に細長い平坦面が、さらに東側にも２段にわたる細長い平坦面が認められた。

１)平坦面11(付図２，第３図，PL９)

本平坦面は本区域の中央よりやや南の最高所に位置する本城跡の主郭というべき平坦面である。標高は79.6mを測り、丘陵裾からの比高差は60m程度ある。このため南東は千代川水系の上流部が、北は鳥取平野、果ては日本海まで一望のもとに見てとることができる。調査で検出した規模は、最大長10.0m、最大幅7.0mを測り、面積は約58.3㎡である。現況では平面形はややいびつな卵形であるが、北西側は斜度20°程度の傾斜で切られて比高差2.2mをもって溝４へ続き、この斜面は溝５および平坦面９の北西側とともに一つの壁を形成する。南西側について見ると、北西側と同様に斜度20°弱の傾斜で1.3m程度下った後やや傾斜が緩み、途中からさらに斜度35°程度の切岸が設けられて平坦面17へと続く。南側の造りは、大きく加工した様子は見られず、斜度10°程度の緩やかな傾斜で下り平坦面12へ続く。また北東側は斜度35°程度で切られ、南に隣接する平坦面12から延びながらまわりこんで上ってくる幅1.6m程度の平坦部、あるいは溝４へと続く。

このように成形された本平坦面からは表土直下で地山の岩盤を掘りこむピット状遺構２基が南東部から検出された(第25図)。しかしながら時期を示す遺物もなく当該期の遺構か不明であったためとりあえず後述することとした。また遺物については、表土中から周辺下層の古墳からの混入と考えられる埴輪片等がわずかに検出されたほかは、つぶて石と見られる河原石５点が検出されたのみである。

２)平坦面７(付図２，第３図，PL10)

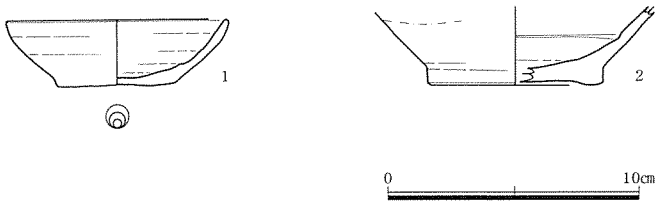
平坦面11の北西約10m、本区域の最北西端部に位置する平坦面で、ちょうど先に述べたⅠ区域の平坦面群を真正面に見下ろす位置となる。標高は77.9mを測り平坦面11より1.7m程低いが、北西側直下の溝３の底面からは前述のとおり7.5m、西側の平坦面17からは5.4m程度高くなる。本城跡の尾根上部分についてはほぼ同様であるが、いずれも後述する古墳等の古い時期の遺構と重複しており、特に本平坦面は元々の斜面に多量の盛土を行なって造成された古墳の頂部を削平して平坦面を広げた可能性が考えられる。

調査によって検出した規模は、北東～南西６m、北西～南東５m程度で、面積は約27.8㎡である。現況では溝４、平坦面11の立地する南東側以外は切岸状態で切り落とされ、北東側は平坦面８へ、北西側は溝３へ、南東側は平坦面17へと続く。南東側は斜度約15°程度の傾斜で緩やかに0.8m程下って溝４の当該期の底部となる。調査の結果、本平坦面からはピット等の遺構も遺物も全く検出されなかった。

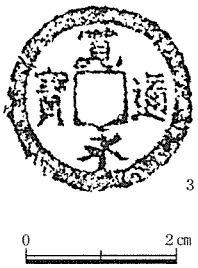
なお本平坦面の北側には、１m程度下った位置に最大長６m、最大幅２m程度の小平坦面が見受けられる。当初ここには狸等の小動物の生活痕跡が明瞭に遺存しており、遺物等も全く検出されなかったことから当該期の遺構とすべきか判断に苦しむが、名称は付けないものの、あるいは腰曲輪である可能性も残しておきたい。

３)溝４(付図２，第３図，PL10)

平坦面11と平坦面７との間に位置し、標高は中央付近で77.1mを測る。上述のとおりその南西側は



第４図　溝５・平坦面９出土遺物実測図



第５図　平坦面９出土遺物拓影

斜度20°程度の傾斜の壁を1.4～２m強上がってそれぞれ平坦面11、９、溝５となり、北西側は、15°程の緩い傾斜で上がって平坦面７となる。北東側と南西側は、前者は端部から30°強の傾斜で下りさらに途中からその傾斜は60°弱の切岸となって平坦面８へ続く。また後者は端部から斜度35°程度の切岸が設けられて平坦面17へと続く。規模は最大長15m、最大幅3.5m程度で、断面形は浅い皿状となる。遺構の性格としては、下層の遺構面のこともあり溝としたが、周辺の平坦面との関係やその規模から、当該期にはあるいは平坦面(曲輪)としての機能も持った可能性も考えられる。なお本溝からはピット、乱杭等の遺構は全く検出されず、遺物も検出されなかった。

４)溝５(付図２，第３図，PL11、43)

平坦面11と平坦面９との間に位置し、標高は中央付近で78.6mを測る。規模は最大長7.5m、底部幅3.5m程度で、断面形は浅い皿状となる。現況では、南西側は30°強の傾斜で１m程上がると平坦面11となり、南東側は端部から0.5m程のやや強い傾斜の段差をもって上述の平坦面12から平坦面11に沿ってまわりこんで延びてくる平坦部へと続く。北東方向は、斜度７°程度の緩い傾斜で0.2mほど上がって平坦面９となる。また北西側は、上述のとおり平坦面９および平坦面11と連動した斜度20°程度の壁を切って溝４へと続く。さらに西北西隅付近には、平坦面11部分の下層遺構関連あるいは単なる自然崩壊の可能性もあるが、南側の平坦面11へ向けてやや緩やかな傾斜地が認められる。これらのことから溝５は当初平坦面９と11を分ける溝と考えたが、平坦面12から平坦面11に沿ってまわりこんで延びてきて両平坦面に連絡する通路の可能性も考えられる。なお本溝からはピット、乱杭等の遺構は全く検出されなかったが、唯一表土中ながら、内湾気味に立上り端部が丸くおさめられた底部糸切りの土師皿(第４図－１)が検出された。

５)平坦面９(付図２，第３図，PL10、11、43)

平坦面11の北東約４mに溝５を挟んで位置する。調査区内の北東部にあたり、調査区外ではあるがここから北北東に派生する小尾根上に形成された平坦面群を真正面に見下ろす位置で前面には千代川、鳥取平野が広がる。標高は平坦面11より一段低い78.8mを測り、規模は南北5.9m、東西5.3mである。面積は約30㎡である。現況では、上述のとおり北西側は溝５および平坦面11と連動した斜度20°程度の壁を切って溝４へと続き、南西側から南東にかけては斜度７°程度の緩い傾斜の高さ0.2m程の段差をもって溝５となる。南東から東にかけては30～50°の傾斜で切られて比高差3.5mをもって平坦面10となり、北側については端部から斜度40°弱の切岸が設けられて平坦面８へと続く。本平坦面からはピット等の遺構は全く検出されなかったが、その位置関係等から本城跡の主要な平坦面(曲輪)であったことは間違いあるまい。なおほかと同様遺物の出土はほとんどなかったが、表土中から白磁碗底部片(第４図－２)１点と書体等から新しい時期の様相を示す寛永通寶(第５図)１点が検出されている。

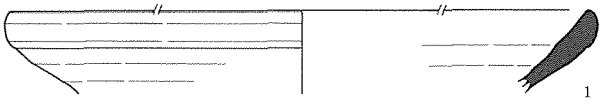
６)平坦面12(付図２，第３図，PL９、11、43)

平坦面11の南に隣接して立地する平坦面で、上述のとおり平坦面11から斜度10°程度の緩やかな傾斜でつながっている。標高は中央付近で77.7mを測る。平坦面11につながる北側以外の外縁も肩部が甘く、自然地形のままのようにも見受けられるが、そのさらに南約８m付近まで緩やかな傾斜が続いた後溝６によって尾根が完全に遮断されることや、前述のとおり北西部分から平坦面11をまわりこむよ

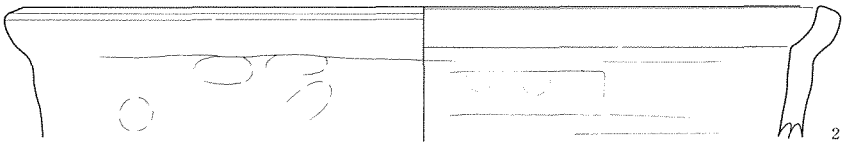
うに北西の溝５方向に幅約1.6mの平坦部が延びていくことなどから一応平坦面(曲輪)としてとらえることとした。検出規模は最大長８m、最大幅2.8m程度で、面積は14.9㎡である。またこの北西に延びる平坦部については本平坦面の延長としてとらえてきたが、あるいは通路を兼ねた帯曲輪としてとらえることも可能であろう。この部分の面積は23.9㎡程度である。なお本平坦面からはピット等の遺構は全く検出されなかったが、北西に延びる平坦部の表土中から、端部に面をもち屈曲が甘い受け口状の口縁部をもつ土鍋片(第６図－４)１点が検出されている。また本平坦面周辺からは今回の調査地内から出土したつぶて石と見られる河原石全体の２割弱の16点が出土している。

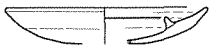
７)平坦面８(付図２，第３図，PL11、12、43)

調査区内の最北東部、平坦面９の北側に位置し、標高は中央部付近で73.8mを測り、丘陵裾からの比高差は54m程度である。また上位の平坦面９までの比高差は５m程度である。土層の観察から元々のこのあたりの地形は平坦面９も含めて斜度30°弱の丘陵斜面であったことが推定される。ここにまず平坦面９の位置に盛土と地山整形によって古墳が築かれ、その後その上面を削平して本城跡の平坦面(曲輪)として人工的な手がさらに加えられている。本平坦面部においても丘陵斜面の裾カットと大量の盛土を行って一見北側端部から斜度35°程度、さらに途中から50°弱の切岸状に切り落した形の平坦面(曲輪)を造成したものと考えられる。このことは本平坦面下、旧表土上の盛土の中から平坦面９下層の古墳のものと考えられる埴輪片が検出されることからも明らかである。また、南側は前述のとおり平坦面９や溝４から斜度40°弱～60°程度の切岸がなされ壁を形成しているが、西端部はこれが鉤状に北へ折れ曲がりその後不明瞭となる。東側については不明瞭で、西端部と同様の可能性も考えたが明確にはで

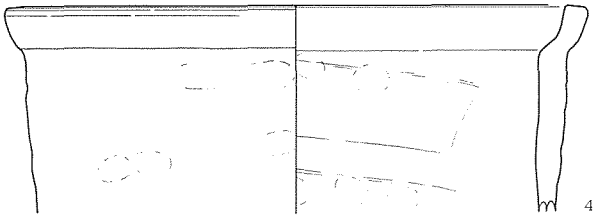


平坦面８





平坦面10



平坦面12

第６図　平坦面８・10・12付近出土遺物実測図

きなかった。[註2]こうして調査によって検出した本平坦面の規模は、東南東側がやや不明瞭ながら、最大長17.5m、最大幅4.5mを測り、面積は約62.8㎡である。なお本平坦面からは明瞭にピット等と判断される遺構は検出されなかった。また遺物も須恵器の口縁部片(第6図－1)1点が出土したにとどまる。

8)平坦面10(付図2，第3図，PL12、43)

平坦面11の北東約10m、平坦面12から北西に延びるあるいは帯曲輪とも考えられる細長い平坦部から一段下りた丘陵斜面にこの細長い平坦部にほぼ並行に位置する。土層観察の結果この平坦面部も平坦面8と同様に多量の盛土によって造成されていることが判明したが、標高は中央部付近で75mを測り、丘陵裾からの比高差は55m程度である。また上位の平坦面12までの比高差は2.5m、平坦面11までは4.6m程度である。本平坦面の端部について見ると、南西側は平坦面12から北西に延びる平坦面の北東側端部から斜度45°程度の切岸が切って落され壁をなしており、北西側は不明瞭となる。北東側は斜度30°弱から50°強へ変化する切岸が設けられる。南東側は不明瞭ながら、段をもってあるいはスロープ状に細長く平坦面12の南側の緩やかな斜面あるいは溝6まで続く可能性も考えられる。こうして調査によって検出した本平坦面の規模は、長さは10m以上で最大25mの可能性をもち、幅は最大3.5mを測る。面積は最大で約53.6㎡である。なお本平坦面からは明瞭にピット等と判断される遺構は検出されなかった。遺物については、表土直下から端部に面をもつものの屈曲が甘くなった受け口状の口縁部をもち体部もやや外傾する土鍋片(第6図－2)1点と内面に環状の仕切りをもつ灯明具の下皿(同－3)1点が検出されたほか、つぶて石とみられる河原石4点が検出された。

4．Ⅲ区域の調査(付図2，第3図，PL2、13～18、43)

本区域は本城跡の主要部の後背部を形成する区域で、「S」字状に曲がる尾根の南側に位置する。本城跡の主要部からは一段下がるが、比較的平坦な尾根上地形である。調査前の観察では尾根を両断する溝状遺構4条とそれらに挟まれた形の平坦面3か所が認められた。

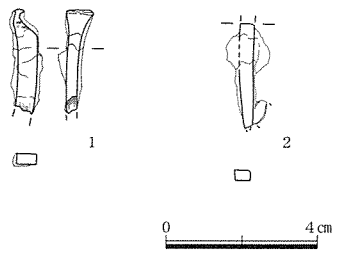
1)溝6(付図2，第3図，PL13、14)

本城跡の主要部とその後背部を区切る溝で、南北方向に延びる尾根を東西に完全に両断する堀切である。底面の頂点はほぼ中央部に位置し、標高は74.9m程度で、そこから東側は比高差5m強で段差が不明瞭となるがその先が調査区外となり明確にできなかった。また西側は比高差3mまで検出し調査区外となるが、さらに下方へ延びるとみられる。いずれにしても、堀の中央部の約15mは比高差1m程度と比較的平坦であるが、標高74m程度以下は東側も西側も角度をもった竪堀状に切り落されている。調査で検出した規模は、長さ30m、中央付近の上端間で幅7.48m、断面逆台形状の底部幅は中央付近で1.82mを測る。堀のそれぞれの斜面は、平坦面12につながる北側は同12から斜度10°程度の緩やかな傾斜で下ってきた後、まず20°で、途中から45°弱の2段階に切る形で掘り込まれ、その深さは2.24mを測る。また平坦面13につながる南側は、北側と同様にまず25°で、途中から45°弱の2段階に切る形で掘り込まれ、その深さは1.63mを測る。なお本溝からは乱杭等の施設は検出されなかったが、つぶて石とみられる河原石が13点検出された。

2)平坦面13(付図2，第3図，PL13)

溝6と溝7に挟まれた台形状の平坦面で、本城跡主要部平坦面12の南約9mに位置する。標高は中央部で76.3mを測り、東側丘陵裾からの比高差は46m程度、主要部平坦面11からの比高差は3.3mである。規模は最大長11.0m、最大幅8mを測り、面積は約72.2㎡である。平坦面の北端は堀によって切られているものの、その他の肩部の造りは甘く、あるいは自然地形に近いのかもしれないが、面積もあり一応堀とあわせての防御施設(曲輪)としてとらえた。外縁についてみると、北側は上述の溝6となり、東側は端部から斜度20°強の傾斜で下り平坦面14へ続く。南側は斜度15°弱の傾斜で比高差0.6m程度下り、さらに7°程度の傾斜に変化して下った後溝7となる。西側は斜度15°強の傾斜で下って平坦面

18へ続いている。なお調査当初本平坦面上には40cm内外の石４点が礎石状に配置された状況で認められた。しかしながら、土地所有者等から昭和まで山の番小屋が在ったとの情報が得られ、且つまたその床面付近から現代の釘の破片等も検出されたことから、当該期の遺構ではないと判断した。またそれ以外のピット等の明確な遺構は本平坦面からは検出されなかったが、外縁付近も含めてつぶて石と考えられる河原石が９点検出されている。



第７図　平坦面18出土遺物実測図

３）平坦面14（付図２，第３図，PL14）

平坦面13の東11mに位置し、標高は中央部付近で70.7mを測る。平坦面13からの比高差は5.6mで、東側丘陵裾からの比高差は40m程度である。調査前の地表面観察で南北に細長い傾斜の変換を認めたため平坦面14として調査を行ったが、断面観察によると40cm程度の盛土と考えられる黄褐色粘質土が認められたことなどからほかの施設との関係は不明ながら当該期の平坦面（曲輪）としてとらえた。規模は最大長21.5m、最大幅2.6mを測り、面積は約41.7㎡である。なお本平坦面からはピット等の遺構は全く検出されなったが、つぶて石と考えられる河原石が表土および検出面から４点検出されている。

４）平坦面18（付図２，第３図，PL15、43）

平坦面13の西５mに位置し、標高は中央部付近で73.9mを測る。平坦面13からの比高差は2.4mで、西側丘陵裾からの比高差は40m強である。調査前の地表面観察では平坦面13から続く緩やかな傾斜地との認識であったが、調査の結果、狭いながら人為的な平坦部が検出されたことから平坦面18として取り扱うこととなった部分である。東側は上述のとおり平坦面13から斜度20°程度の傾斜で下ってきた斜面を斜度50°の傾斜で深さ0.4～0.6m程度カットしている。そしてこのカットによってできた壁面は南側で西に向かって曲がり込む様相を見せながら次第に高さを減じて消滅している。西側については、調査区外となるが再び傾斜をもった丘陵斜面となる。北側については、途中で南側と同様に東側壁面がやや西側に回り込む様相を呈する。ただ調査では不明瞭ながらそこからさらに北側へ延びる可能性も残っており、その場合は溝６まで続くこととなる。このため最大長は6.0mあるいは9.5mとなり、最大幅は2.3m程度となる。面積は12.4～15.6㎡である。なお本平坦面からはピット等の遺構は全く検出されなったが、つぶて石と考えられる河原石が南側に集中して検出された。本平坦面から出土したものは今回の調査で出土したものの１/３以上の28点を数える。また埋土中から断面長方形の鉄釘片２点（第７図－１，２）が検出されている。

５）溝７（付図２，第３図，PL16）

平坦面13と同15を区切る溝で、北から南西に「Ｓ」字状に曲がる尾根を北西～南東方向に完全に両断する堀切である。底面の頂点はほぼ中央部に位置し、標高は74m程度で、そこから南東側は比高差4.7mまで検出し調査区外となるが、地表面観察からさらに下方へ延びるとみられる。北西側についても比高差3.7mまで検出し調査区外となるが、地表面観察ではやや不明瞭ながらさらに下方へ延びる可能性も考えられる。当初の地表面観察では堀の中央付近に微妙な盛り上がりが認められたため、土橋等の遺構の存在も考慮して調査を行ったが、断面観察でも確認できず土橋は存在しなかったことが判明した。また同様に堀の南東壁上にも微妙な変化が認められたため、堀を掘った際の土を利用した土塁が存在する可能性を考慮して調査を行った。(註3)その結果、溝１部分の土塁のように顕著ではないものの、わずかながら北東壁の一部に盛土の可能性も考えられる土層が認められ、現在は流失しているものの、この堀の両側に盛土を行い防御施設の土塁として使用した可能性を示唆するものとなった。調査後の堀のそれぞれの斜面は、中央部付近で、平坦面13につながる北側は斜度30°強で掘り込まれ、その深さは1.5mを測る。また平坦面15につながる南西側は、まず30°弱で、床上30cm程度から50°の２段階に切る形で掘り込まれ、その深さは1.18mを測る。次いで、堀の底面についてみると、堀の中央部の12m程度

は比高差１m程度と比較的平坦であるが、標高73m程度以下は南東側も北西側も溝６と同様に角度をもった竪堀状に切り落された形となっている。そのほか調査で検出した規模は、長さ31m、中央付近の上端間で幅6.46m、断面逆台形状の底部幅は中央付近で2.04mを測る。なお本溝からは乱杭等の施設も遺物も全く検出されなかった。

６）平坦面15（付図２，第３図，PL16～17）

溝７と溝８に挟まれた平坦面で、平坦面13の南南西に上述の溝７を挟んで位置する。標高は中央部で74.9mを測り、東側丘陵裾からの比高差は45m程度、平坦面13よりやや低く比高差は1.4mである。規模は最大長7.5m、最大幅７mを測り、面積は約42.3㎡である。平坦面の南北両端は堀によって切られているものの、平坦面13と同様にその他の肩部の造りは甘く、下層に遺存する古墳の地形に近いとも思われるが、面積もあり一応堀とあわせての防御施設（曲輪）としてとらえた。上述の北東側の溝７以外の外縁部は、南東側は端部から斜度25°の傾斜で下り比高差2.4m程下りたあたりから斜度15°強の緩やかな傾斜へ変化する。南西側は斜度13°程度の緩い傾斜で比高差１m程下りたところで溝８となる。北西側は斜度30°の傾斜で比高差2.1m程下りたあたりから斜度13°の緩やかな傾斜へ変化する。これらのことから、緩やかな傾斜地でもあり遺構もないながら、本平坦面の南東側および北西側下位にも本平坦面や堀切と連携したそれぞれ別の平坦面（曲輪）の存在した可能性も考えておきたい。なお本平坦面からはピット等の遺構は全く検出されず、遺物も検出されなかった。

７）溝８（付図２，第３図，PL17）

平坦面15と同16を区切る溝で、北東から南西に延びる尾根を南東～西方向にやや曲がりながら完全に両断する堀切である。底面の頂点はほぼ中央部に位置し、標高は72.6m程度で、そこから南東側は比高差4.4mまで検出し調査区外となるが、地表面観察からさらに下方へ延びるとみられる。西側についても比高差4.7mまで検出し調査区外となるが、地表面観察では小さな谷地形が続くようで、地域の方の話によると以前この辺りに尾根を横切る道が存在したとのことで、あるいはこの谷から本溝を経由する道が存在した可能性も考えられる。また溝７と同様に当初の地表面観察で堀の中央付近に微妙な盛り上がりが認められたため、土橋等の遺構の存在も考慮して調査を行ったが、断面観察でも確認できず土橋は存在しなかったことが判明した。

調査後の堀のそれぞれの斜面は、中央部付近で、平坦面15につながる北東側は崩壊の可能性もあるが、まず斜度35°弱で、途中から50°弱の２段階に切る形で掘り込まれ、その深さは1.5mを測る。また平坦面16につながる南西側は、北東側と同様にまず20°弱で、途中から30°強の２段階に切る形で掘り込まれ、その深さは1.0mを測る。次いで、堀の底面についてみると、堀の中央部の７m程度は比高差0.6m程度と比較的平坦であるが、標高72m程度以下は南東側も北西側も溝６、７と同様に角度をもった竪堀状に切り落された形となっている。但し本溝はほかの溝よりも幅が広く、中央付近の上端間で幅8.36m、断面逆台形状の底部幅は中央付近で3.78mを測るが西側境界付近ではやや広がりぎみとなる。また床面についてみると西側の竪堀状部分の床面はほかの溝に比べて凸凹できれいな整形となっていない。これらのことは先述の以前の道かということにも関連があるのかもしれないが現段階では不明である。なお本溝からは乱杭等の施設は検出されず、遺物も全く検出されなかった。

８）平坦面16（付図２，第３図，PL17～18）

溝８と溝９に挟まれたⅢ区域南西部の平坦面で、平坦面15の南南西に上述の溝８を挟んで位置する。標高は中央部で73.8mを測り、東側丘陵裾からの比高差は44m程度、平坦面15よりやや低く比高差は1.1mである。規模は最大長11.6m、最大幅7.5mを測り、面積は約70.4㎡である。平坦面の北東端は堀によって切られているものの、平坦面13と同様にその他の肩部の造りは甘く、あるいは自然地形に近いのかもしれないが、面積もあり一応堀とあわせての防御施設（曲輪）としてとらえた。上述の北東側の溝８以外の外縁部は、南東側は端部から斜度25°弱の傾斜で下る。南西側は斜度11°程度の緩い傾斜で比高差0.8

m程下り、その南西側には部分的ながら平坦部が続いた後に溝９となる。この南東部の部分的な平坦部については当初からその先の溝９のあり方も含めてその性格の理解に苦しむが、あるいはさらにその先で再び上り始める尾根へのなんらかのステップの可能性を考える必要があるかもしれない。北西側はまず斜度20°弱のの傾斜で下りた後、斜度35°弱の傾斜へと変化する。なお本平坦面からはピット等の遺構は全く検出されず、遺物も検出されなかった。

９)溝９（付図２，第３図，PL18）

本城跡主要部の後背部であるⅢ区域とさらにその奥の区域とを区切る溝である。北東から南西に延びる尾根を南東から北西に横断する形で掘り込まれており、北西端部が浅くなり不明瞭となるが堀切としてとらえられよう。標高は検出長の北西側約１/４付近がもっとも高く72.6mを測り、西側丘陵裾からの比高差は33m程度である。この位置の前後５m程はほぼ水平に近く、その南東側は10cm程やや段状に下がった後さらに６m程度は比高差１m弱と比較的平坦であるが、標高71.5m程度以下は角度をもってきり落されている。標高69m付近まで確認し、それ以下は調査区外となるが、地表面観察ではさらに下方へ延びるものとみられる。北西側については頂点のレベルがほぼ調査範囲まで続くが、両側の壁が次第に高さを減じて境界付近で不明瞭となる。

調査で検出した規模は、長さは18.7mを測り、幅は、次第にすぼまり傾向のお椀形の断面の中央付近の両端間では1.9mであるが、その南東側では最大幅3.5m程度である。堀のそれぞれの斜面は、平坦面16につながる北東側は斜度45°弱で掘り込まれ、南西側即ち25°程度の傾斜で再び上り始める尾根側は斜度60°強で堀込まれる。なお本溝からは乱杭等の施設は全く検出されず、遺物も検出されなかった。ただ、溝の北西端部についてはほかの溝６～８の堀切とは様子が異なり、土橋の可能性を指摘するむきもあるが(註１)、調査では明確にできなかった。

10)その他

なおこれまで述べてきた各施設の所在する尾根の南西側には前述のとおり標高83m付近まで溝９から比高差10m程度の間ではあるが斜度約25°の傾斜で上る尾根が続いている。調査前の地表面観察でその途中で微妙な変化を認めたため、トレンチ調査を実施した。その結果表土下は直ちに地山となり、溝９のすぐ南西にやや傾斜の緩む部分を認めたため直交方向にもトレンチを入れて確認したが、そのほかも含めて明確に地山加工した痕跡を認めることができなかった。このためこの斜面には当該期の城跡に関係した施設はなかったものと判断した。但し、境界外ではあるが尾根の南東側続きには地表面観察によると平坦面が認められ、今回調査した城域を見渡すことのできる位置でもあることなどからここにも何らかの施設が存在するものと考えられる。

(註１)山野智久氏のご指摘による。
(註２)山上雅弘氏の言われる「段状遺構」の可能性も考え平坦面10とのつながりにも注意したが、明確にできなかった。
(註３)山上氏のご指摘による。

Ⅳ　倭文古墳群の調査

1．古墳群調査の概要(第２図)

倭文古墳群は、倭文集落の西側背後、中国山地から北に延びてきた丘陵の北側先端部の小丘陵の一つに平成になって１基の古墳(倭文１号墳)が記録されたことがその始まりである。ただ周辺の丘陵裾付近には小規模ながら果樹園等の造成がなされており、かつてその辺りで古墳らしきものが在ったとの言い伝えも残っていることから、地元では周辺に１号墳以外にも古墳が存在するとの認識はあったようである。鳥取市倭文地内での今回の調査でも標高80m程度の丘陵上に立地する中世城跡の調査とのことで着手したが、事前に明確に古墳が存在することは不明であったが、可能性は指摘されていた。調査の結果、城跡の遺構と重複して予想を越える数の古墳と古墳に伴わない土壙墓等が検出され、周知の１号墳と合わせて倭文古墳群として括ることとした(倭文２～９号墳)。なお周辺の詳細な分布調査がまだあまり行われておらず、今後の分布調査で周辺の30～100m程度の丘陵上および裾部付近から古墳を含めた新たな遺跡が確認されることが予測される。

調査の結果、Ｓ字状に曲がる尾根上の南西端部を除くほぼ全域から、ほぼ城の遺構と重なる形で８基の古墳と、それに伴わない木棺、土器棺、土壙等が４か所でまとまりを持って21基検出された。埋葬形態には木棺直葬、箱式石棺、土器棺、埴輪棺等があり、前二者の中からは転用枕の鼓形器台や土師器高杯、須恵器蓋杯とともに鏡、鉄刀、鉄剣、鉄鉾、刀子、鉋、鉄鏃、短甲、冑、馬具等の金属製品や、玉類が出土している。また詳細は不明ながら、土坑７基とピット状遺構９基、炉跡(？)２基も検出した。

2．倭文２号墳(付図３、４，第８～10図，PL19、20、44)

1)位置と墳丘

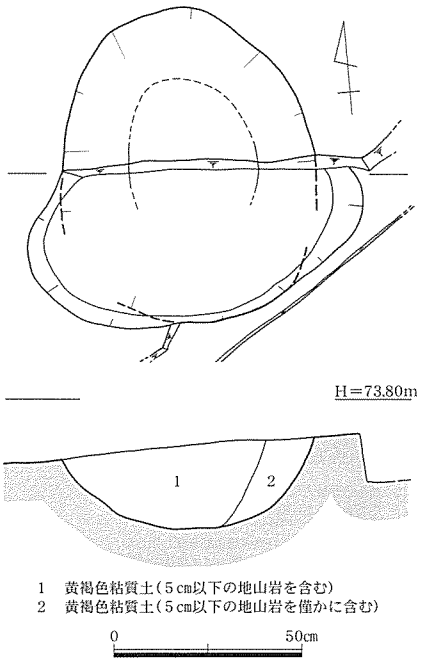
倭文２号墳は倭文集落の西側後背の丘陵尾根上、調査地南西部で傾斜が上りに変わる手前に位置し、前述の城跡の平坦面16にほぼ重なる。標高は墳頂部中央より北東寄りで73.96mを測る。墳形は長方形を呈し、北東側は後世の堀切によっていくぶん切られていると考えられるが、規模は北西～南東墳裾間で15.1m、北東堀切裾～南西墳裾間で16.7m、高さは南西側墳裾から0.94m、南東側墳裾から3.07mを測る。

墳丘は尾根に並行方向の裾部を削り出すとともに、直行方向は尾根を横断するように掘り込む地山整形を行って墓域を形成し、その上に盛土を行うことで築造されている。

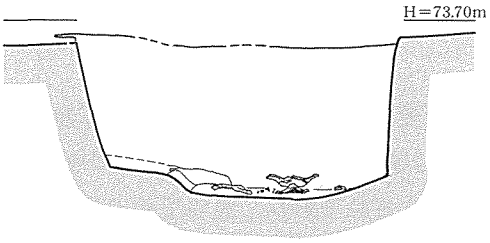
2)埋葬施設と出土遺物等

主体部は墳頂部ほぼ中央から尾根と直行方向のＮ－47.5°－Ｗに主軸をとって１基が検出された。盛土上から地山の岩盤を掘り込む墓壙は、隅丸の長方形で部分的ながら二段墓壙状となる。規模は長さ3.92m、幅1.40m、深さ0.65mを測り、断面観察からこの中に納められたと考えられる木棺の規模は、長さ2.9m、幅0.58m程度が想定される。

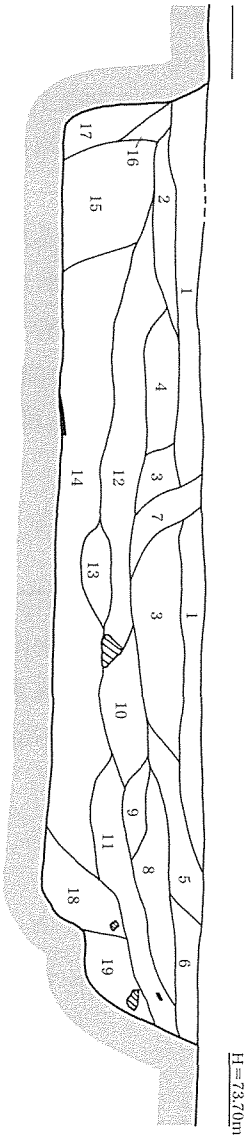
墓壙内の遺物は、南隅で床面から20cm程度浮いて検出された高杯の打ち欠き部片とみられる土師器片以外はいずれも棺内遺物と考えられ、北隅床面に一部に布目痕の残る柳葉形の鉄鏃３点(第10図－3～5)が切先を棺内方向に向けて置かれる。その20cm程棺内中央には杯部の一部を打ち欠いて枕に転用した赤彩高杯(同－１)が位置し、その床面付近から風化が著しく図化できなかっ

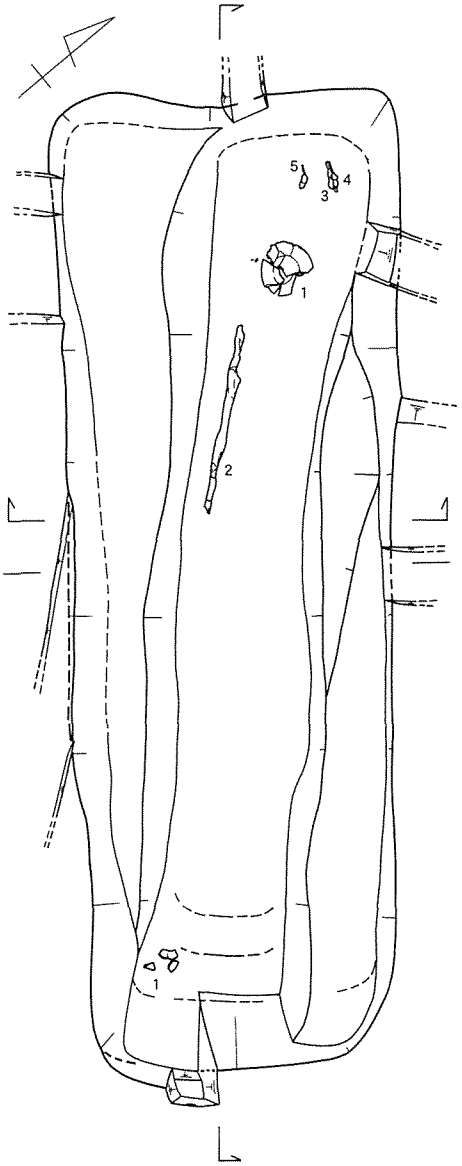


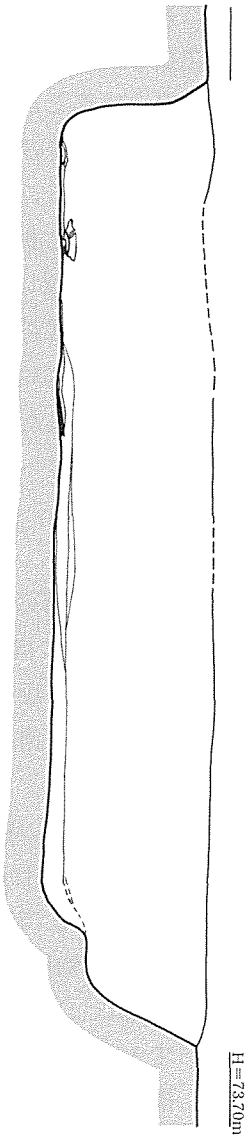
第８図　倭文２号墳 SK －01実測図



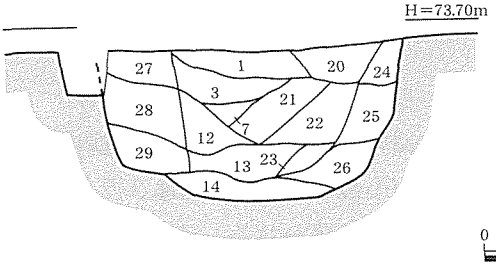
1　黄褐色粘質土(0.5cm以下の地山岩を極僅かに含む)
2　暗褐色粘質土(炭片を含む；黒色かかる)
3　褐色粘質土(1～6cm大の地山岩を僅かに含む；炭片を含む；黒色かかる)
4　黒褐色粘質土(1～8cm大の地山岩を極僅かに含む；炭片を含む；黒色かかる)
5　黒褐色粘質土(5cm以下の地山岩を含む；炭片を含む)
6　褐色粘質土(3cm以下の地山岩を極僅かに含む)
7　暗褐色粘質土(3cm以下の地山岩を含む；黒色かかる)
8　にぶい褐色粘質土(暗褐色粘質土ブロック及び炭片を含む；1～6cm大の地山岩を僅かに含む)
9　褐色粘質土(1cm以下の地山岩を極僅かに含む；炭片を含む)
10　暗褐色粘質土(5cm以下の地山岩を含む；炭片を含む；黒色かかる)







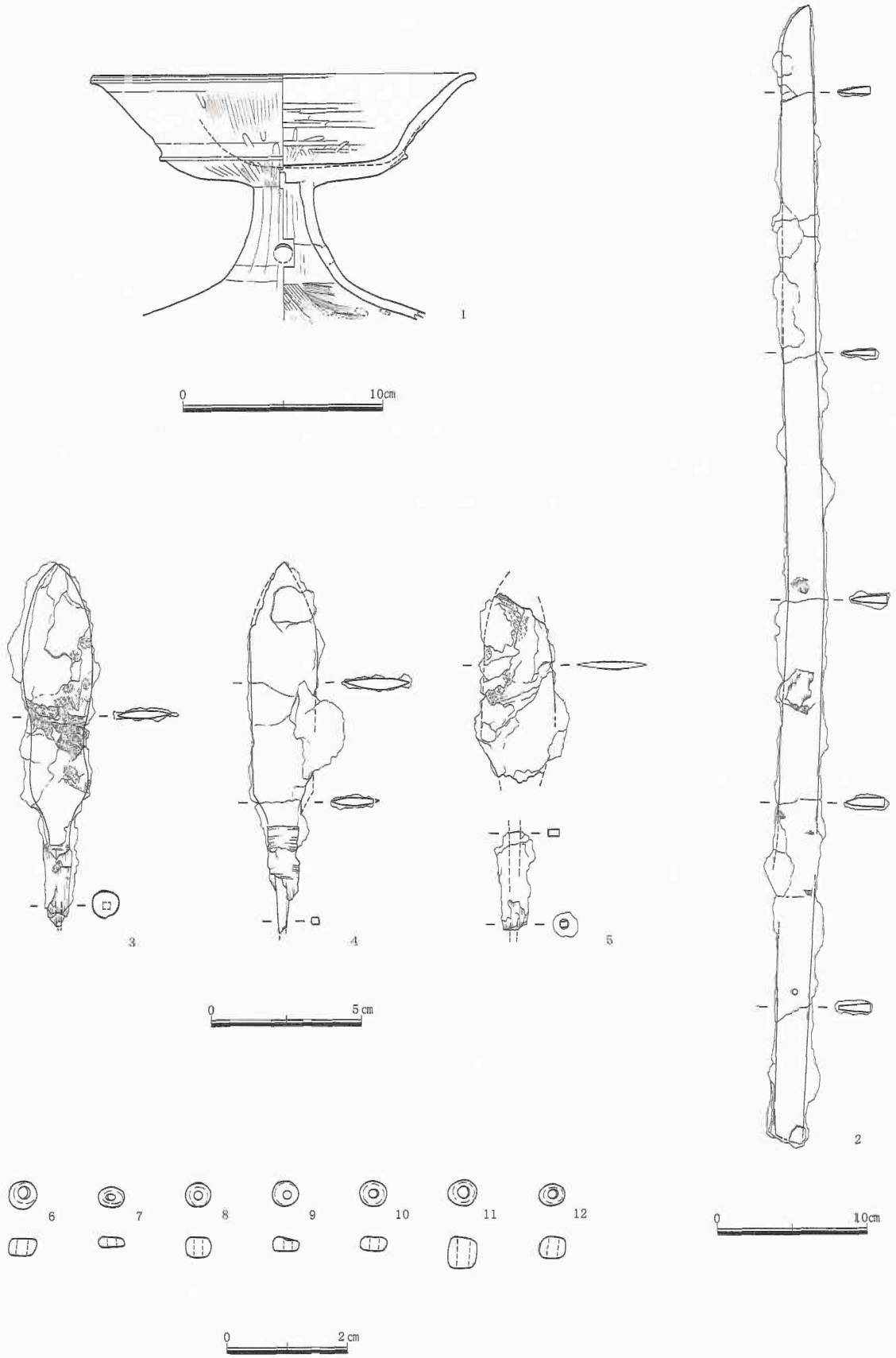
11　黒褐色粘質土(2cm以下の地山岩を極僅かに含む；炭片を多く含む)
12　にぶい褐色粘質土(1～8cm大の地山岩及び炭片を含む)
13　暗褐色粘質土(5cm大の地山岩及び炭片を含む；黒色かかる)
14　にぶい黄褐色粘質土(5cm大の地山岩を僅かに含む；炭片を含む)
15　明褐色粘質土(1～8cm大の地山岩及び炭片を極僅かに含む)
16　明褐色粘質土(15よりやや明)
17　橙色粘質土(3cm以下の地山岩を極僅かに含む)
18　明褐色粘質土(10cm以下の地山岩を含む)
19　橙色粘質土(10cm以下の地山岩を僅かに含む)
20　黄褐色粘質土(6cm大の地山岩を極僅かに含む)
21　暗褐色粘質土(1～5cmの地山岩及び炭化物を含む；黒色かかる)
22　褐色粘質土(2～4cm大の地山岩を僅かに含む)



23　褐色粘質土(22よりやや暗；3cm大の地山岩を極僅かに含む)
24　明褐色粘質土(1～5cm大の地山岩を極僅かに含む)
25　黄褐色粘質土(2～12cm大の地山岩を多く含む)
26　明褐色粘質土(5cm大の地山岩を多く含む)
27　褐色粘質土(1cm以下の地山岩を極僅かに含む)
28　橙色粘質土(1cm以下の地山岩を極僅かに含む)
29　橙色粘質土(28よりやや明；1～6cm大の地山岩を僅かに含む；黄橙色シルトブロックを含む)

0　1m

第9図　倭文2号墳 主体部実測図



第10図　倭文２号墳 主体部出土遺物実測図

たが、管玉１点とガラス小玉８点(同－６～12)が出土している。また棺北西半南東側部では切先を南東に、刃部を外側に向けた状態で長さ75.8cmの鉄刀(同－２)が置かれる。

なお遺物からみて本古墳の埋葬時期は古墳時代前期後半代と考えられる。

３)その他の遺構

主体部の50cm程北側墳頂部から土坑１基(SK －01)を検出した。平面は不定楕円形で、断面は皿状、規模は長さ0.83m、幅0.67m、深さ0.24mを測るが、遺物もなくその性格等の詳細は不明である。

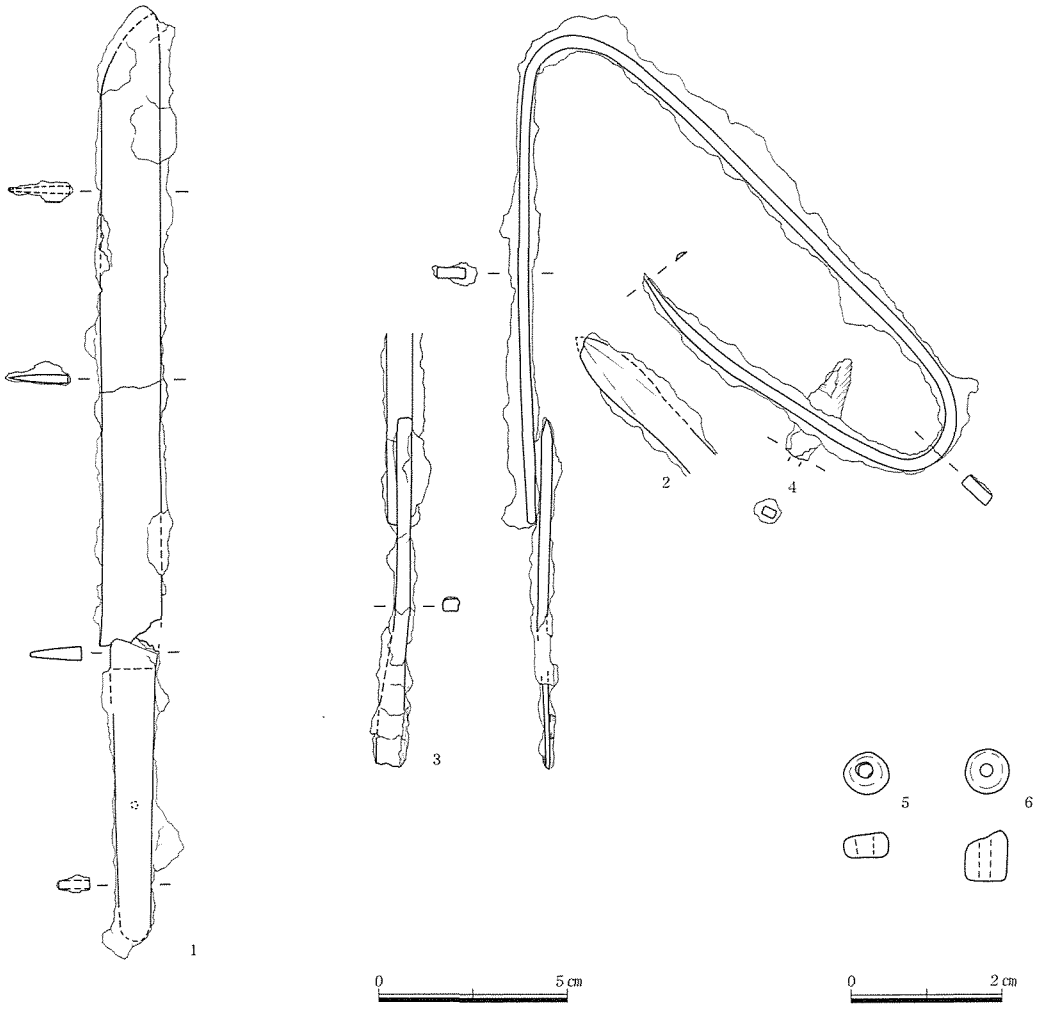
３．倭文３号墳(付図３、４，第11、12図，PL20、21、44、45)

１)位置と墳丘

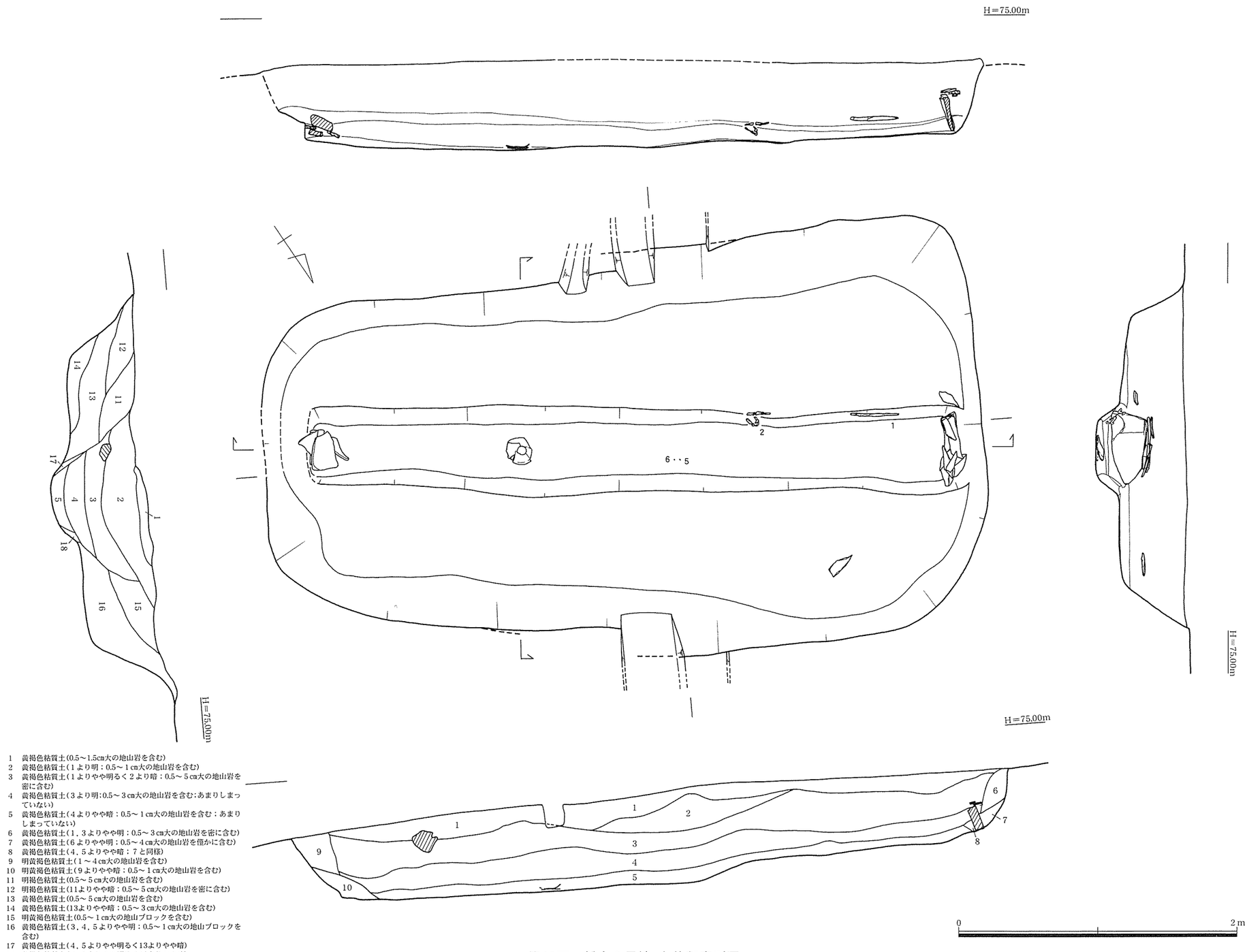
倭文３号墳は調査地南西部の丘陵尾根上に立地し、２号墳の北東に隣接する。前述城跡の平坦面15にほぼ重なり、墳丘の北東および南西端はその際の堀切によって切られているものと考えられる。そのため墳形はやや平行四辺形気味な長方形となっている。標高は最高所で75.2m程度で、規模は北西～南東墳裾間で12.5m、両堀切裾間で13.75m、高さは北西側墳裾から2.1m、南東側墳裾から1.8mを測る。墳丘は２号墳と同様に堀切で不明な部分以外は墳裾の削り出しと盛土によって築造される。

２)埋葬施設と出土遺物等

主体部は遺存する墳頂部の中央部より北東側に偏るが、尾根と直行方向のＮ－54.5°－Ｗに主軸を



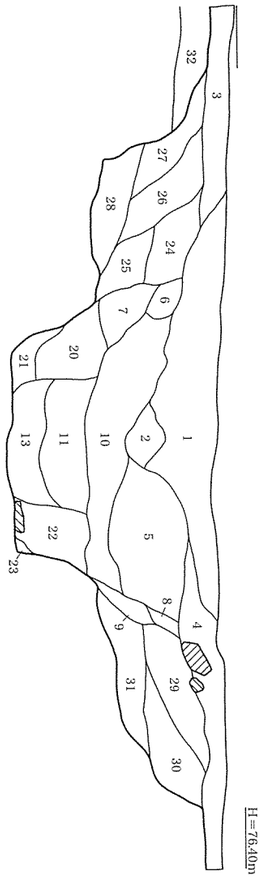
第11図　倭文３号墳 主体部出土遺物実測図

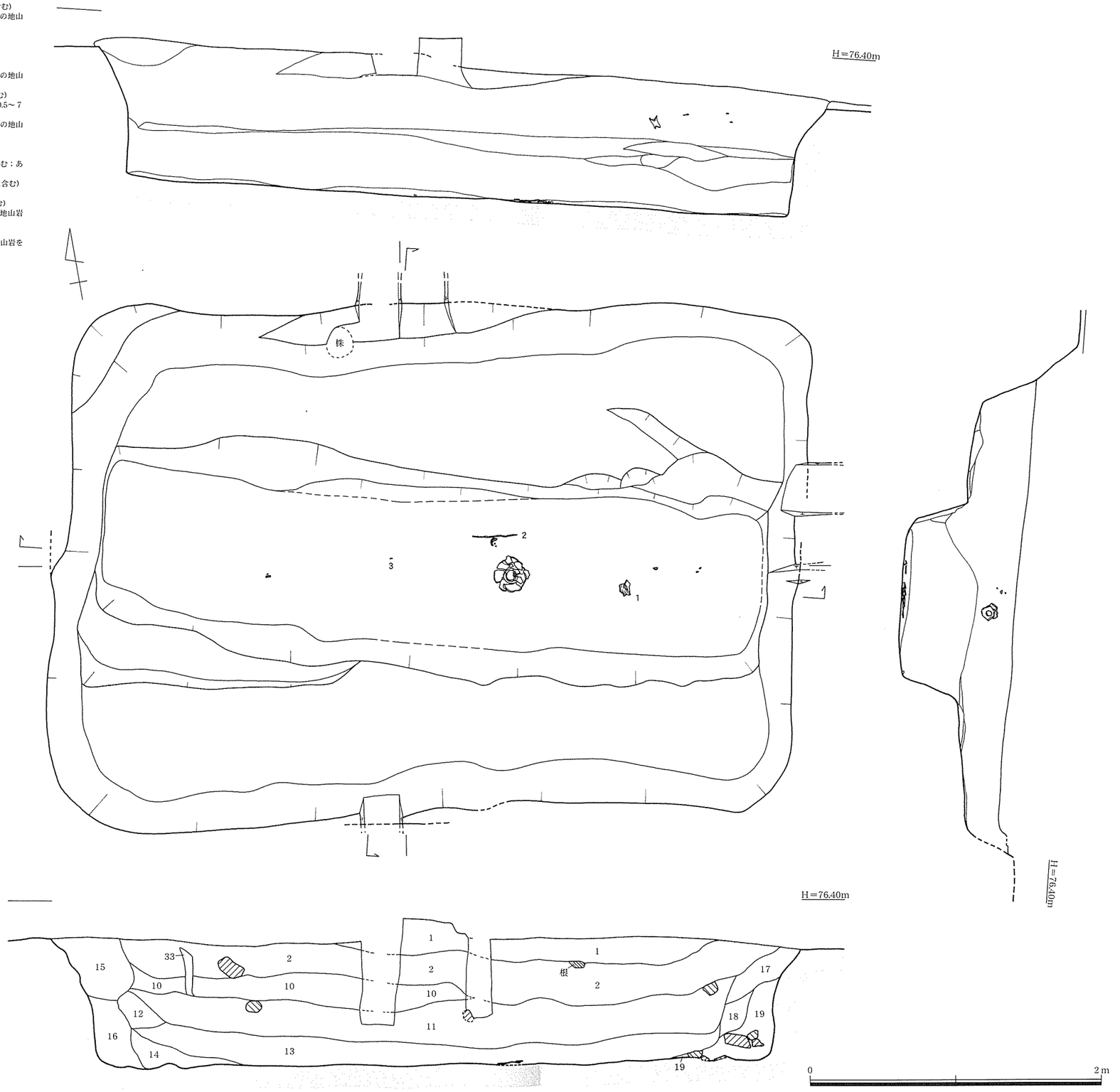


1　黄褐色粘質土(0.5～1.5cm大の地山岩を含む)
2　黄褐色粘質土(1より明：0.5～1cm大の地山岩を含む)
3　黄褐色粘質土(1よりやや明るく2より暗：0.5～5cm大の地山岩を密に含む)
4　黄褐色粘質土(3より明:0.5～3cm大の地山岩を含む:あまりしまっていない)
5　黄褐色粘質土(4よりやや暗：0.5～1cm大の地山岩を含む：あまりしまっていない)
6　黄褐色粘質土(1，3よりやや明：0.5～3cm大の地山岩を密に含む)
7　黄褐色粘質土(6よりやや明：0.5～4cm大の地山岩を僅かに含む)
8　黄褐色粘質土(4，5よりやや暗：7と同様)
9　明黄褐色粘質土(1～4cm大の地山岩を含む)
10　明黄褐色粘質土(9よりやや暗：0.5～1cm大の地山岩を含む)
11　明褐色粘質土(0.5～5cm大の地山岩を含む)
12　明褐色粘質土(11よりやや暗：0.5～5cm大の地山岩を密に含む)
13　黄褐色粘質土(0.5～5cm大の地山岩を含む)
14　黄褐色粘質土(13よりやや暗：0.5～3cm大の地山岩を含む)
15　明黄褐色粘質土(0.5～1cm大の地山ブロックを含む)
16　黄褐色粘質土(3，4，5よりやや明：0.5～1cm大の地山ブロックを含む)
17　黄褐色粘質土(4，5よりやや明るく13よりやや暗)
18　黄褐色粘質土(4，5よりやや明るく16よりやや暗)

第12図　倭文３号墳 主体部実測図

1　にぶい黄褐色粘質土(0.3～10㎝大の地山岩を多く含む：炭片を含む)
2　灰黄褐色粘質土～にぶい黄褐色粘質土(１より暗：0.5～10㎝大の地山岩を多く含む：炭片を含む)
3　にぶい黄褐色粘質土
4　黄褐色粘質土(１㎝大の地山岩を含む)
5　黄褐色粘質土(10よりやや明：0.5～８㎝大の地山岩を密に含む)
6　黄褐色粘質土(10，24よりやや暗：１～２㎝大の地山岩を含む)
7　黄褐色粘質土(10，24よりやや暗く６よりやや明：0.5～１㎝大の地山岩を含む)
8　褐色粘質土～黄褐色粘質土(５より暗：１～３㎝大の地山岩を含む)
9　褐色粘質土～黄褐色粘質土(８よりやや明るく ５，10より暗：0.5～７㎝大の地山岩を含む)
10　黄褐色粘質土(５よりやや暗く６，７，９よりやや明：１～５㎝大の地山岩を含む)
11　明黄褐色粘質土(１～３㎝大の地山岩を僅かに含む)
12　にぶい黄褐色粘質土(あまりしまっていない)
13　明黄褐色粘質土(11よりやや暗：１～３㎝大の地山岩を僅かに含む：あまりしまっていない)
14　にぶい黄褐色粘質土(12より暗：0.5～３㎝大の地山岩を極僅かに含む)
15　にぶい黄橙色粘質土(0.3～５㎝大の地山岩を密に含む)
16　にぶい黄褐色粘質土(14よりやや暗：0.5～10㎝大の地山岩を含む)
17　黄褐色粘質土～明黄褐色粘質土(11よりやや暗：0.5～７㎝大の地山岩を含む)
18　黄褐色粘質土(17よりやや暗；あまりしまっていない)
19　黄褐色粘質土～明黄褐色粘質土(18よりやや明：１～20㎝大の地山岩を密に含む)





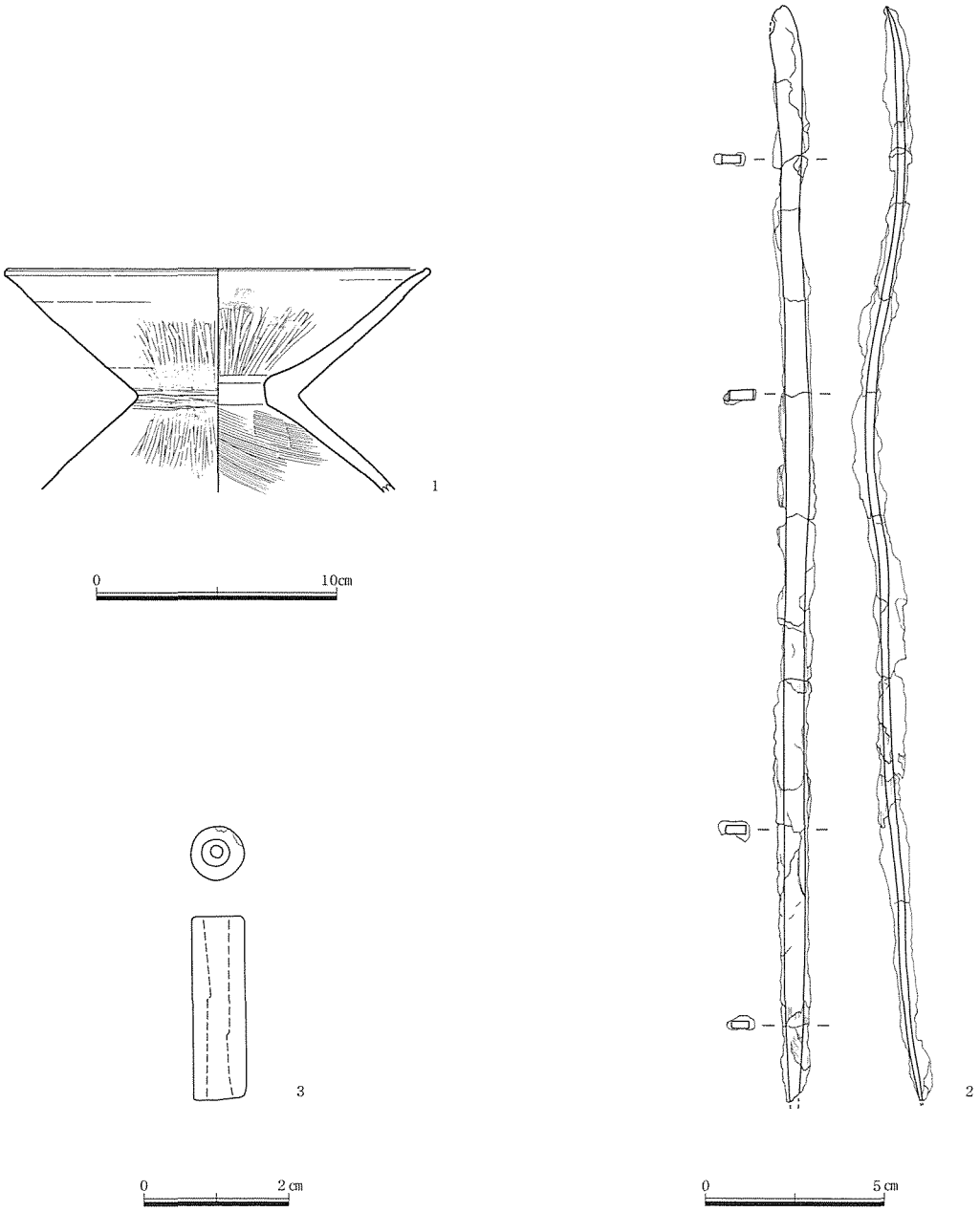
20　黄褐色粘質土(７，10よりやや暗：１～８㎝大の地山岩を密に含む)
21　にぶい黄褐色粘質土(１～３㎝大の地山岩を多く含む)
22　明褐色粘質土(３～８㎝大の地山岩を多く含む)
23　明黄褐色粘質土
24　黄褐色粘質土(６よりやや明：0.5～２㎝大の地山岩を密に含む)
25　黄褐色粘質土(24よりやや明：0.5～３㎝大の地山岩を密に含む)
26　明黄褐色粘質土(0.5～３㎝大の地山岩を含む)
27　明黄褐色粘質土(26よりやや暗：0.5～３㎝大の地山岩を含む)
28　黄褐色粘質土(３～10㎝大の地山岩を密に含む)
29　褐色粘質土～黄褐色粘質土(８，９よりやや暗：0.3～10㎝大の地山岩を密に含む)
30　黄褐色粘質土(29より明：0.5～３㎝大の地山岩を密に含む)
31　黄褐色粘質土(８，９，29より明るく30よりやや暗：１～６㎝大の地山岩を密に含む
32　明褐色粘質土
33　根痕

第13図　倭文４号墳 主体部実測図

とって１基が検出された。元々の地山の傾斜からほぼ地山付近から掘り込まれる墓壙は、隅丸の長方形状を呈し、その断面形から割竹形の可能性も考えられる木棺を安定させるためか底部中央がU字状に掘り窪められ、さらにその両小口には小口板あるいはその裏込めとして板石数枚がそれぞれに立てられている。規模は長さ5.19m、幅3.15m、深さ0.76mを測り、棺の規模は長さ4.3m程度が想定される。

墓壙内の遺物はいずれも棺内遺物と考えられるが、棺北西半南西壁に沿って北西側から刀子(第11図－１)が、その60cm程南東に銹化のため癒着しているが、「の」の字状に折り曲げられた鉈(同－２)、鑿の可能性の考えられる鉄製品(同－３)、鉄鏃片(同－４)が置かれる。床中央よりやや北東側壁面寄りの床面からはガラス小玉２点(同－５、６)が、さらに床中央よりやや南東小口側寄りに土圧で押しつぶされたうえ遺存状況がきわめて悪く図化できなかったが、また打ち欠きがあるかどうか不明であるが、接合部に稜を持つ鼓形器台が置かれている。

なお遺物からみて本古墳の埋葬時期は古墳時代前期後半代と考えられる。



第14図　倭文４号墳 主体部出土遺物実測図

4．倭文４号墳（付図３、４，第13～16図，PL22、23、45）

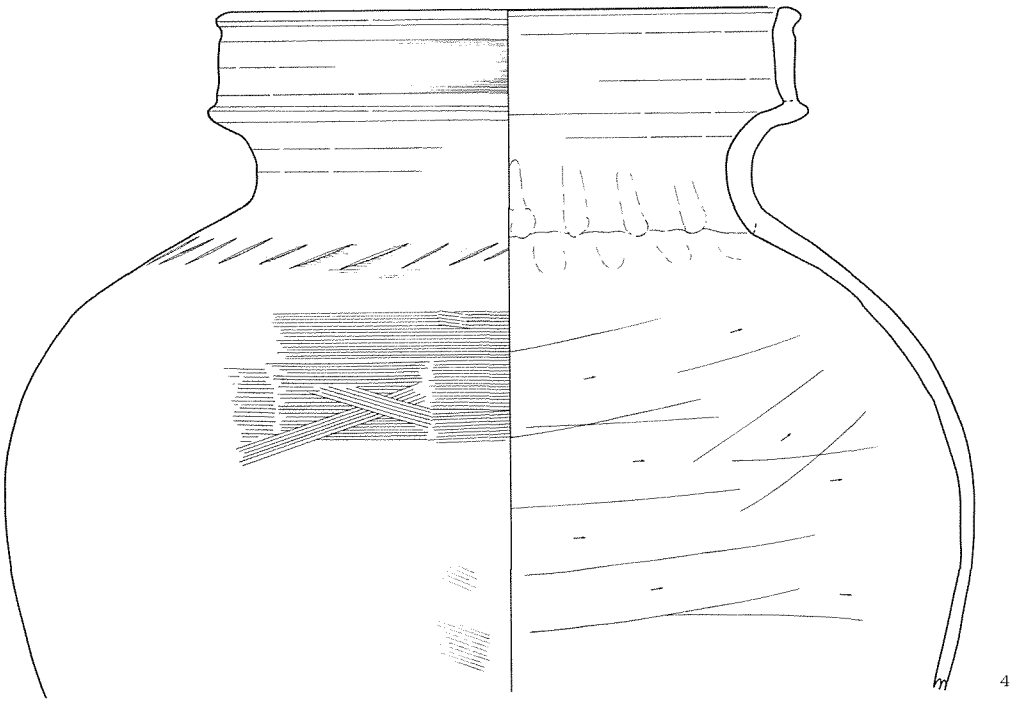
１）位置と墳丘

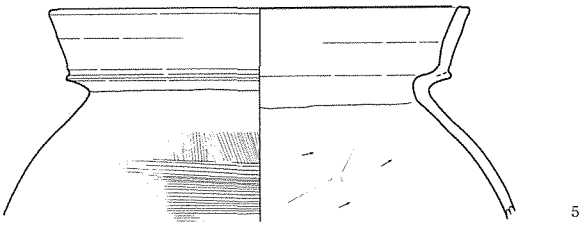
倭文４号墳は調査地南西部の丘陵尾根上に立地し、３号墳の北東に隣接する。前述城跡の平坦面13にほぼ重なり、墳丘の北東端はその際の堀切によって切られているものと考えられる。標高は最高所で約76.5mで、墳形は長方形となっている。規模は東西墳裾間で12.6m、北堀裾～南墳裾間で14.8m、高さは東側墳裾から1.83m、南側墳裾から0.77mを測る。墳丘は２、３号墳と同様に、堀切で不明な部分以外は墳裾の削り出しと盛土によって築造される。

２）埋葬施設と出土遺物等

主体部は墳頂部のほぼ中央部から尾根と直行方向のN－76°－Wに主軸をとって１基が検出された。元々の地山の傾斜もあり、ほぼ地山付近から掘り込まれる墓壙は、隅丸の長方形状を呈し、二段に掘り込まれる。規模は長さ5.13m、幅3.59m、深さ１mを測り、断面観察から内側の掘り込みの中央部に長さ3.92m、幅0.5m程度の棺が設置されたものと考えられる。棺上埋土の上位層には、城の時期に削平を受けた可能性はあるものの、炭片を含む暗めの土が棺の陥没とともに落ち込んだ状態で検出され、中央部より東側小口寄りのこの土の中から接合部に稜もたない鼓形器台（第14図－１）が出土している。

そのほかの墓壙内の遺物は、棺中央よりやや西側小口寄りの床面から10cm程度浮いた状態で検出さ

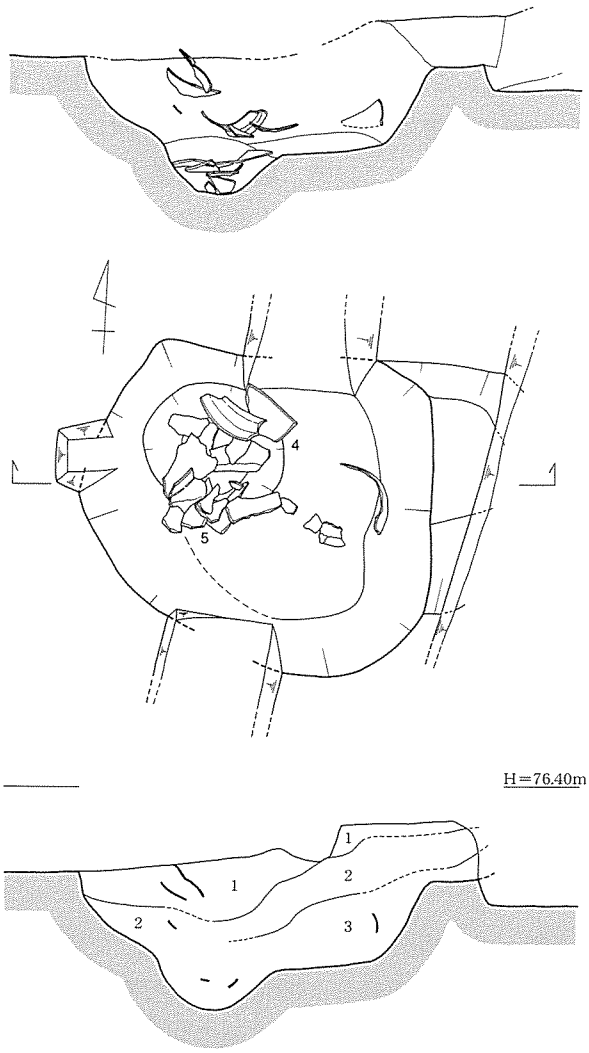




0　10cm

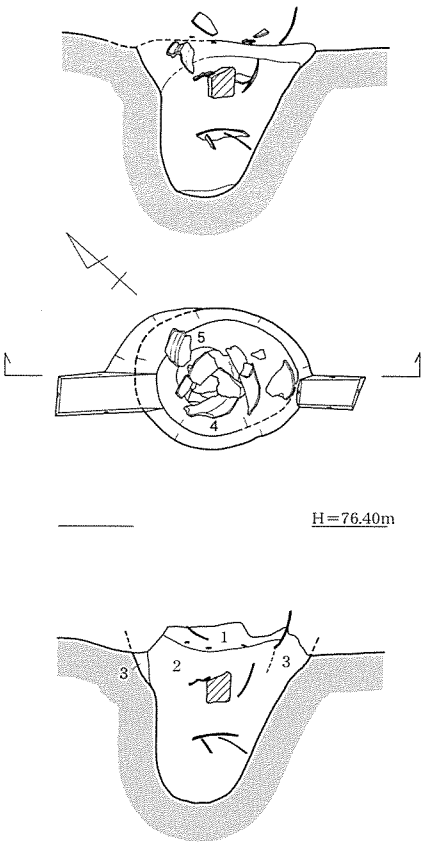
第15図　倭文４号墳 SK －01～03出土遺物実測図

SK －01　　H＝76.40m



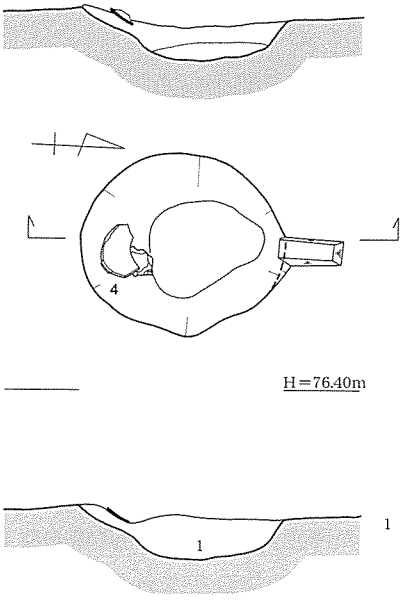
1　にぶい黄褐色粘質土(0.5～４㎝大の地山ブロックを含む)
2　にぶい黄褐色粘質土(１よりやや明；0.5～５㎝大の地山ブロックを含む)
3　にぶい黄褐色粘質土(１よりやや暗；0.5～10㎝大の地山ブロックを含む)

SK －02　　H＝76.40m



1　にぶい黄褐色粘質土(0.3～１㎝大の地山ブロックを含む)
2　にぶい黄褐色粘質土(１よりやや暗；0.5～１㎝大の地山ブロックを含む)
3　黄褐色粘質土(0.3～１㎝大の地山ブロックを含む)

SK －03　　H＝76.40m



1　にぶい黄褐色粘質土～褐色粘質土(0.3～1.5㎝大の地山ブロックを含む)

第16図　倭文４号墳 SK －01～03実測図

れた土師器細片以外はいずれも棺内遺物と考えられ、棺中央やや北寄り床面から管玉(第14図－３)が、中央よりやや東小口側床面から、遺存状況がきわめて悪く図化できなかったが転用枕としたとみられる接合部に稜を持つ鼓形器台が検出されている。この器台からその西側にかけての長さ約60cm、幅約25cmの範囲内には水銀朱が薄く広がり、その北側10cm程の位置には、小型の銅鏡が置かれる。掘り下げ中に一部破損してしまったが、全体的に錆化が進んで脆弱となっている。応急的に薬剤を塗布して保存処理待ち状態のため図化できなかったが、直径約６cmの内行花文鏡である。厚さ２mm程度の縁の内側に櫛目文帯がつき、その内区に８花程度が想定できる。さらにこの鏡のすぐ北からは接するように西側に反り返る切先を向けた遺存長30.2cmの鉈(第14図－２)が検出されている。また棺中央より西側小口寄りの床面には径30cmの範囲で薄く粘土が検出されている。

なお遺物からみて本古墳の埋葬時期は古墳時代前期後半代と考えられる。

３)その他の遺構

主体部の１m程南側墳頂部から土坑３基(SK －01～03)を検出した。平面形は01は不定形、02は楕円形、03は不定な楕円形で断面も深さもまちまちであるが、それぞれから別々に出土した土師器片のいくつかが接合することが判明した。内傾気味に立ち上がる複合口縁を持ち、体部外面に横および斜位のハケ目後肩部上位に連続刺突文を施したやや厚手の壺(第15図－４)はSK －01～03、また外傾して立ち上がる複合口縁を持つ甕(同図－５)はSK －01、02出土片の接合したものである。このことはこれらの土坑がほぼ同時期に埋まったあるいは埋められたことを示し、埋葬儀礼等を考える上で一つの資料となろう。なおこれらの土坑の時期は、遺物からみて古墳時代前期後半代と考えられる。

５．倭文５号墳(付図３、４，第17～25図，PL23～25、45～47)

１)位置と墳丘

倭文５号墳はＳ字状に曲がる調査地のほぼ中央部、主尾根の小ピーク上に立地し、４号墳のほぼ北13mに位置する。前述城跡の平坦面11にほぼ重なり、その北西端および北隅、また墳頂部は築城の際に掘削、削平された可能性が考えられる。さらに北側には６号墳が隣接して本墳の北北東端の一部を切って造営されている。そのため墳形は一部に乱れがあるものの、長方形状をとるものと考えられる。標高は最高所で79.6m程度で規模は東西14m、南北18.6m、高さは西側墳裾から1.82m、東側墳裾から1.63mを測る。墳丘は、調査の結果は墳裾部の削り出しによって行われているが、表土下が直ちに地山となることや、後世に城が造営されていること、墳裾、周溝部分の流土、埋土の堆積状況などからすると、２～４号墳と同様に若干の盛土がなされていた可能性も考えられる。

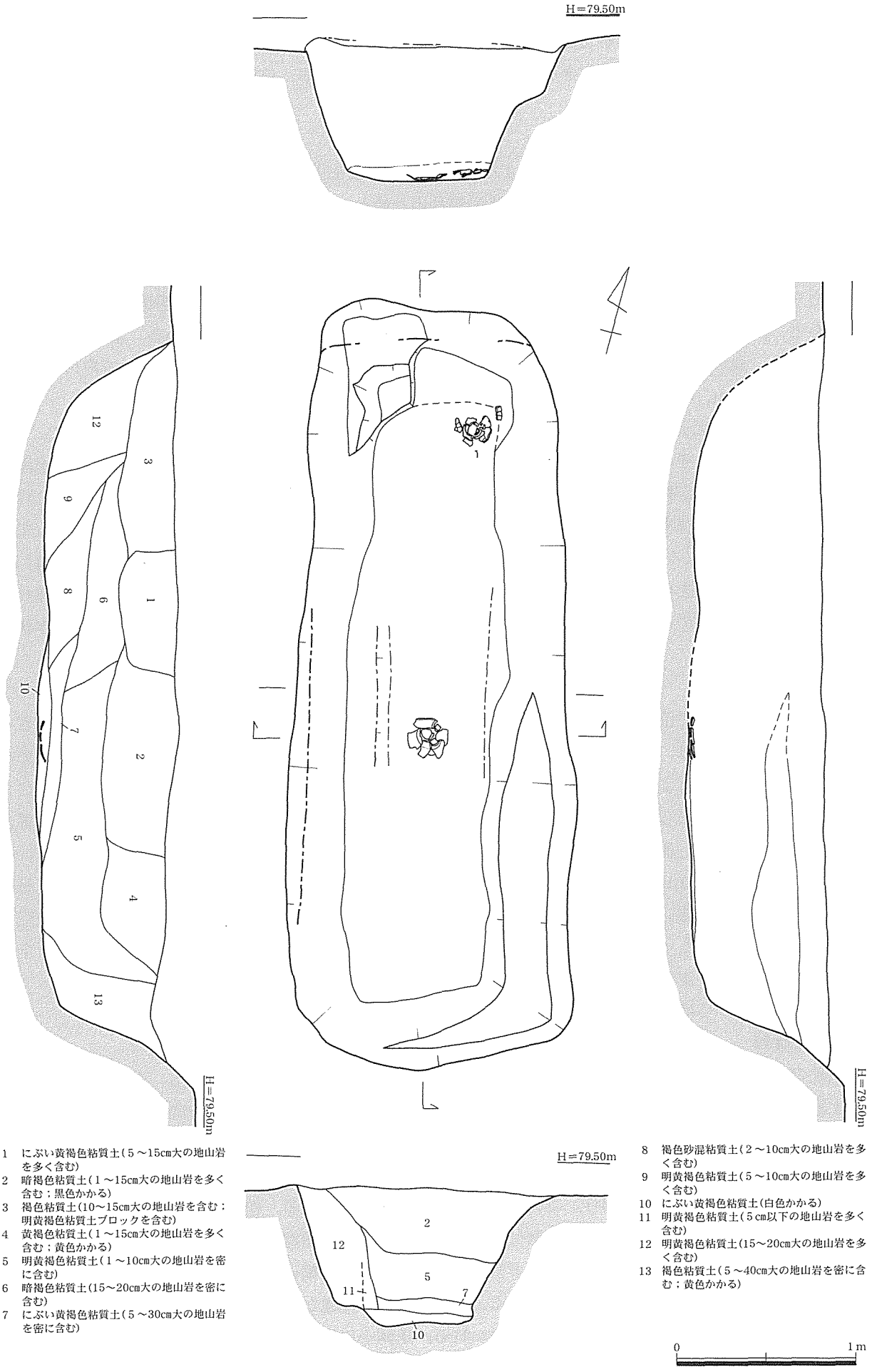
２)埋葬施設と出土遺物等

埋葬施設は、墳頂部ほぼ中央から１基(第１主体部)、北北西側肩部～墳丘斜面から１基(第２主体部)、西北西側墳丘肩部～墳丘斜面から並んで２基(第４、５主体部)、南側墳裾部から１基(第３主体部)の計５基が検出された。

①第１主体部

本主体部は尾根の主軸とはやや角度を振ったＮ－14°－Ｗに主軸をとる。硬い板状節理の地山の岩盤を掘り込む墓壙は隅丸の長方形で、断面観察ではその東側壁側に寄せて木棺が設置されたものと考えられる。規模は、長さ4.15m、幅1.62m、深さ0.77mを測り、断面観察からこの中に納められたと考えられる木棺の規模は、長さは不明ながら幅は0.52m程度が想定される。

墓壙内の遺物は、北側半埋土中から土師器片が掘り下げ中に出土したほか、墓壙北隅床面付近から鼓形器台(第18図－１)が、また中央よりやや南側床面から高杯が検出された。いずれも土圧で押しつぶされ遺存状態が極めて悪く、器台のみの図化となった。(１)は受部の開き具合が比較的直線的なもので、受部内面はヘラ磨きされ、台部内面はヘラ削り後軽くナデられる。時期的なことはあるが、打ち欠きが



1　にぶい黄褐色粘質土（5～15cm大の地山岩を多く含む）
2　暗褐色粘質土（1～15cm大の地山岩を多く含む；黒色かかる）
3　褐色粘質土（10～15cm大の地山岩を含む；明黄褐色粘質土ブロックを含む）
4　黄褐色粘質土（1～15cm大の地山岩を多く含む；黄色かかる）
5　明黄褐色粘質土（1～10cm大の地山岩を密に含む）
6　暗褐色粘質土（15～20cm大の地山岩を密に含む）
7　にぶい黄褐色粘質土（5～30cm大の地山岩を密に含む）
8　褐色砂混粘質土（2～10cm大の地山岩を多く含む）
9　明黄褐色粘質土（5～10cm大の地山岩を多く含む）
10　にぶい黄褐色粘質土（白色かかる）
11　明黄褐色粘質土（5cm以下の地山岩を多く含む）
12　明黄褐色粘質土（15～20cm大の地山岩を多く含む）
13　褐色粘質土（5～40cm大の地山岩を密に含む；黄色かかる）

第17図　倭文5号墳 第1主体部実測図

あるかどうか不明でその位置も北側コーナーということもあり転用枕かどうか不明である。また高杯は有段の杯部を持つもので、打ち欠きがあったかどうか不明であるが、位置的には枕であった可能性も考えられる。

②第２主体部

墳丘の北北西側肩部～墳丘斜面に位置する本主体部は、第１主体部とほぼ直行方向のＮ－77.5°－Ｅに主軸をとる。城造成の際かあるいはその後の撹乱のためか、表土除去中から周辺に板状石材片が散乱しており、石棺あるいは石蓋土壙の存在を示唆したが、調査の結果、壁材は既に抜き取られていたものの、側板、小口板を据え付けるそれぞれの溝が検出されたことから墓壙内に組合せ式の石棺が設置されていたものと考えられる。地山の岩盤を掘り込む墓壙は、その北側は削平により不明瞭となっているが、もともと二段墓壙で、長い側板が小口板を挟む形にそれぞれの溝が掘り込まれている。墓壙の規模は遺存値ながら、長さ3.32m、幅1.67m、深さ0.72mを測る。また側板溝、小口板溝等から石棺の規模は、内法で長さ1.76m、幅0.48m程度と推定される。

遺物は撹乱のため元位置を必ずしも保っていないが、墓壙埋土中から鼓形器台片（第18図－２、３）と杯部片（同－４）、その他土師器片が、床面直上から鉄剣片（同－５）が、さらに墓壙外すぐの検出面から低脚杯片（同－６）が検出された。このうち口縁部が外傾し端部が外反して丸く納める鼓形器台（２）は、比較的受け部が深く径も大であるが、（３）は同様の口縁部を持つものの深さ、口径とも小さくなっている。やや厚手の杯部（４）は内湾して立ち上がるが浅めで、不明瞭ながら赤彩の可能性がある。鉄剣（５）は切先部および茎部を欠くうえ銹化が進み鎬も不明瞭である。また主体部外から検出された低脚杯（５）は、口縁部を欠くものの、内外面ともヘラ磨き調整される椀状の杯部を持つもので、脚部はハの字状に開く。

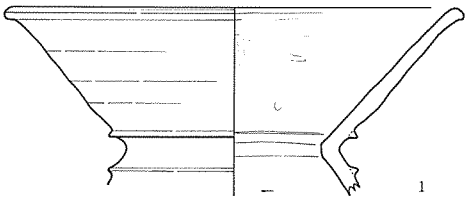
③第３主体部

墳丘の南側墳裾部に位置する本主体部は、浅い窪みの中に当初から厚さ６㎝程度の板石が突き刺さるように顔を出しており、なんらかの遺構が存在する可能性を示唆したが、撹乱が著しく主軸もつかめなかったため石材を通るように墳丘に対して並行、直行方向のベルトを残して掘り下げたところ、段についてはやや不明瞭ながら、地山を掘り込む二段墓壙と考えられる土壙を検出した。主軸は第１主体部よりやや西に振ったＮ－22°－Ｗにとる。規模は、長さ2.35m、幅1.53m、深さ0.66m程度で、さらにそのほぼ中央付近が長さ1.2m、幅0.42m、深さ0.3m弱程度掘り込まれる。細かな調製はしてない石材はこの上の段辺りから浮いた状態で検出されたが、墓壙には石材を据え付けたような溝等の痕跡は見受けられず石棺が存在した可能性は低いと思われる。土層の断面観察では確認できない木棺の可能性も全く否定はできないが、直埋葬の石蓋土壙であった可能性も考えておきたい。

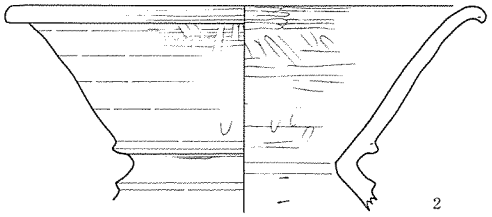
なお本土壙内からは土師器細片が出土したのみである。

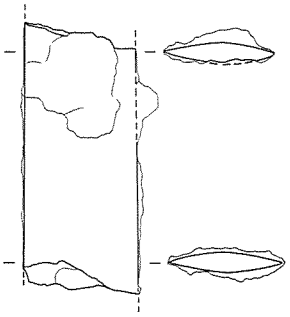
④第４主体部

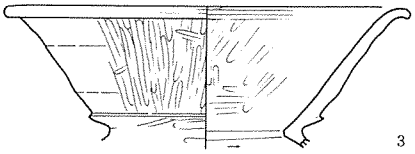
墳丘の西北西側墳丘肩部～墳丘斜面に位置する本主体部は、小型の埴輪棺である。表土除去時点で既に土器の小片がやや密集して認められたため注意して掘り進めたところ、南北方向に横たえられた棺本体が検出された。墓壙は築城時の削平かあるいは流失によりその西側は棺ぎりぎりまで失われているが、地山を掘り込む隅丸の長方形で、主軸を第１主体部とほぼ並行のＮ－９°－Ｗにとる。規模は、長さ0.89m、幅0.51m、深さ0.38mを測り、このほぼ中央部に棺が設置される。棺は、小型の円筒埴輪１個体を棺本体として使用し、別の壺片を本体据付けの支えや片側小口の閉塞、透孔の塞ぎに使用している。棺の使用方法としては、埴輪１個体をそのまま墓坑内に南北方向に横に寝かせ、別の壺片を支えにしながら設置する。その際、蓋の中央に透孔が来るように当初から配慮が認められる。さらに北側小口部にはそれを覆い塞ぐように縦に半截された壺が置かれる。南側小口には現況でみる限り何も遺存していないが、棺内と棺外で土層が異なり、木板等の蓋があった可能性も考えられる。

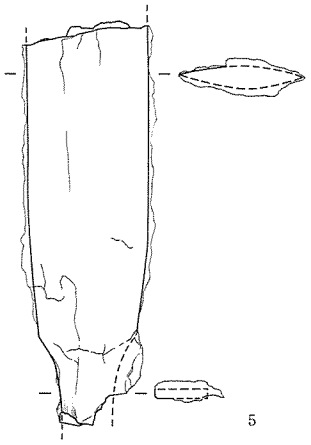


第１主体部

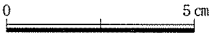


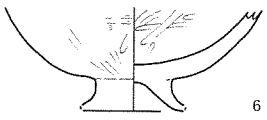


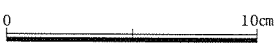




第２主体部

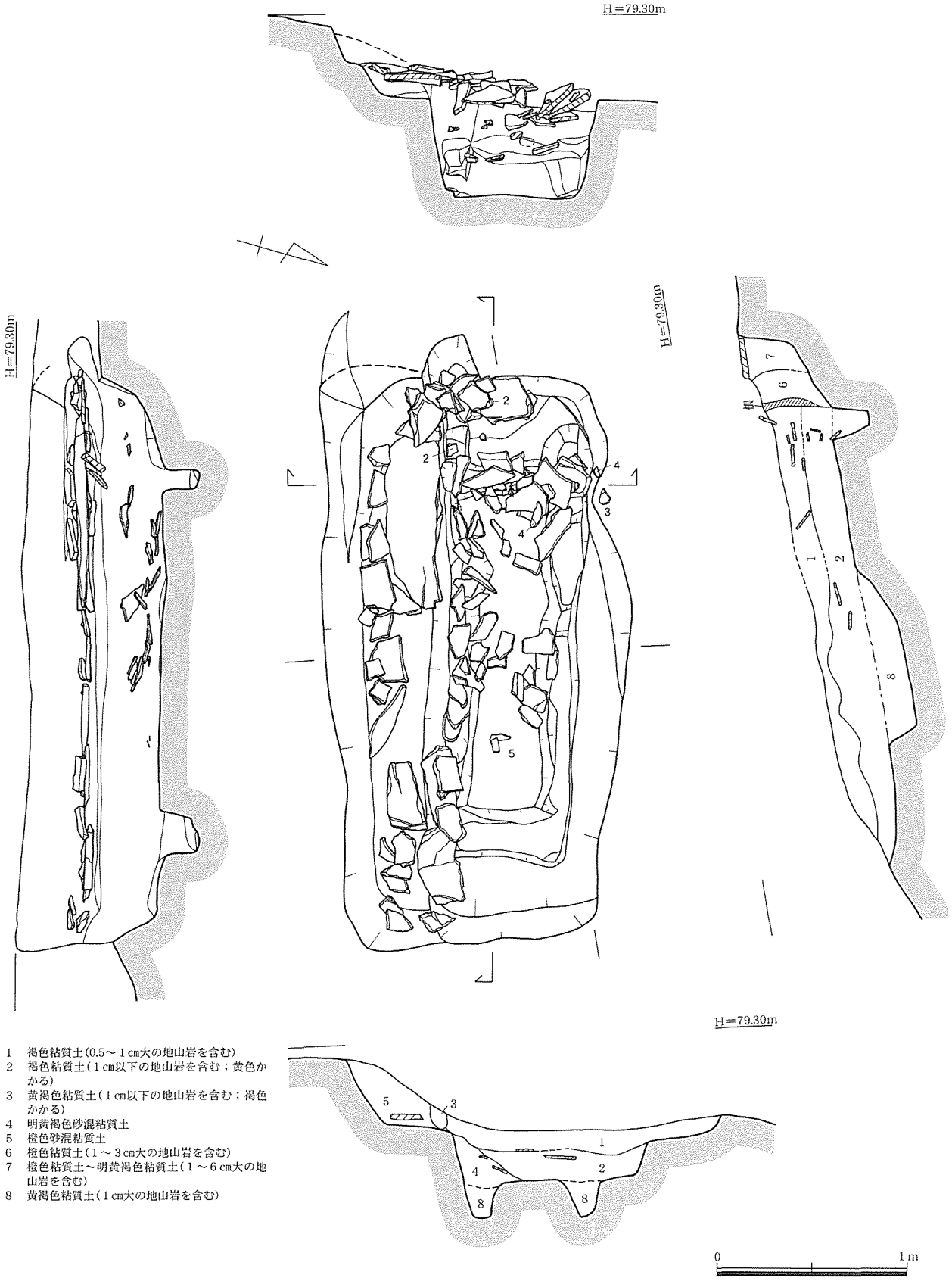






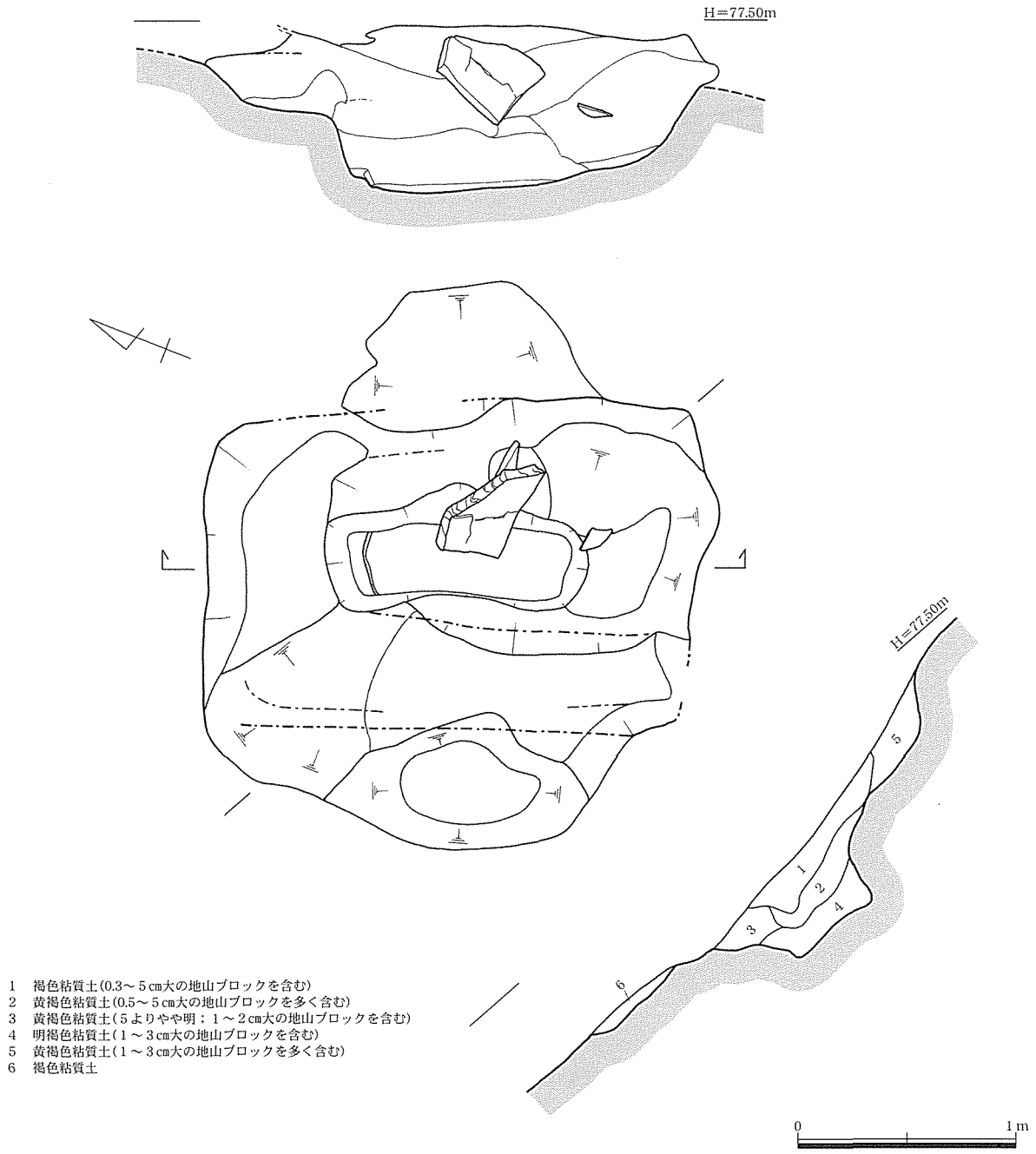
主体部外

第18図　倭文５号墳 第1・第２主体部、主体部外出土遺物実測図



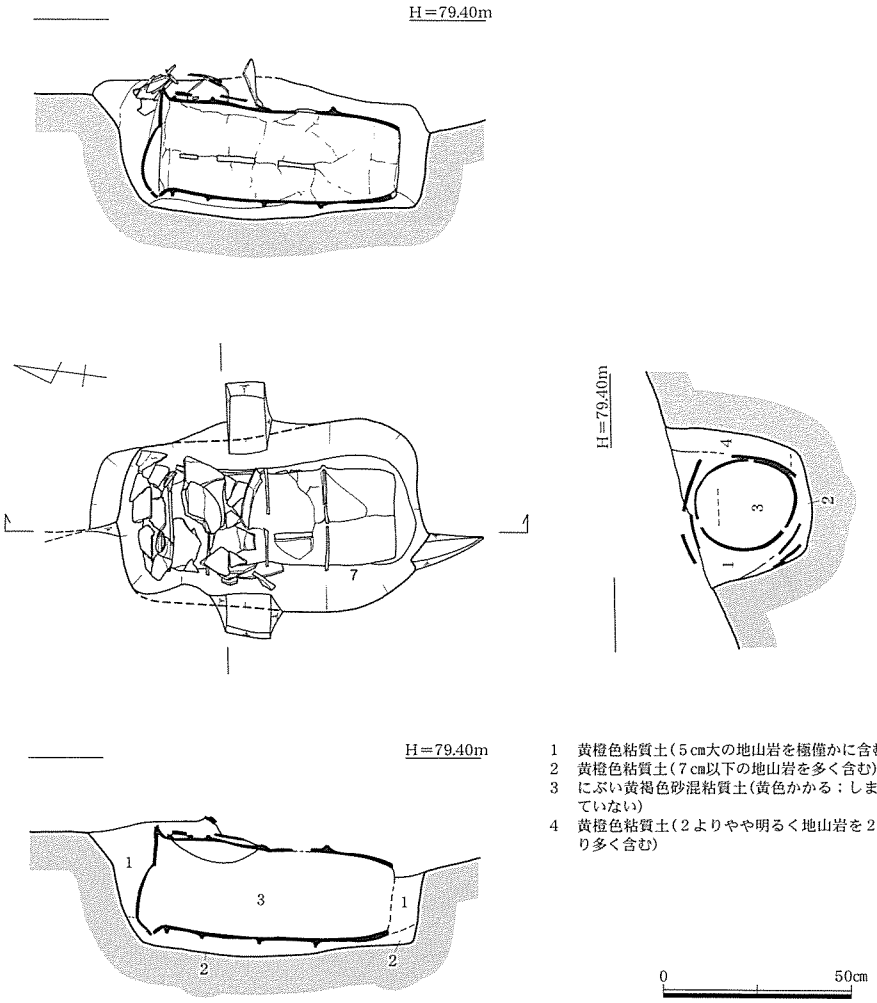
1　褐色粘質土(0.5～1㎝大の地山岩を含む)
2　褐色粘質土(1㎝以下の地山岩を含む；黄色かかる)
3　黄褐色粘質土(1㎝以下の地山岩を含む；褐色かかる)
4　明黄褐色砂混粘質土
5　橙色砂混粘質土
6　橙色粘質土(1～3㎝大の地山岩を含む)
7　橙色粘質土～明黄褐色粘質土(1～6㎝大の地山岩を含む)
8　黄褐色粘質土(1㎝大の地山岩を含む)

第19図　倭文5号墳 第2主体部実測図

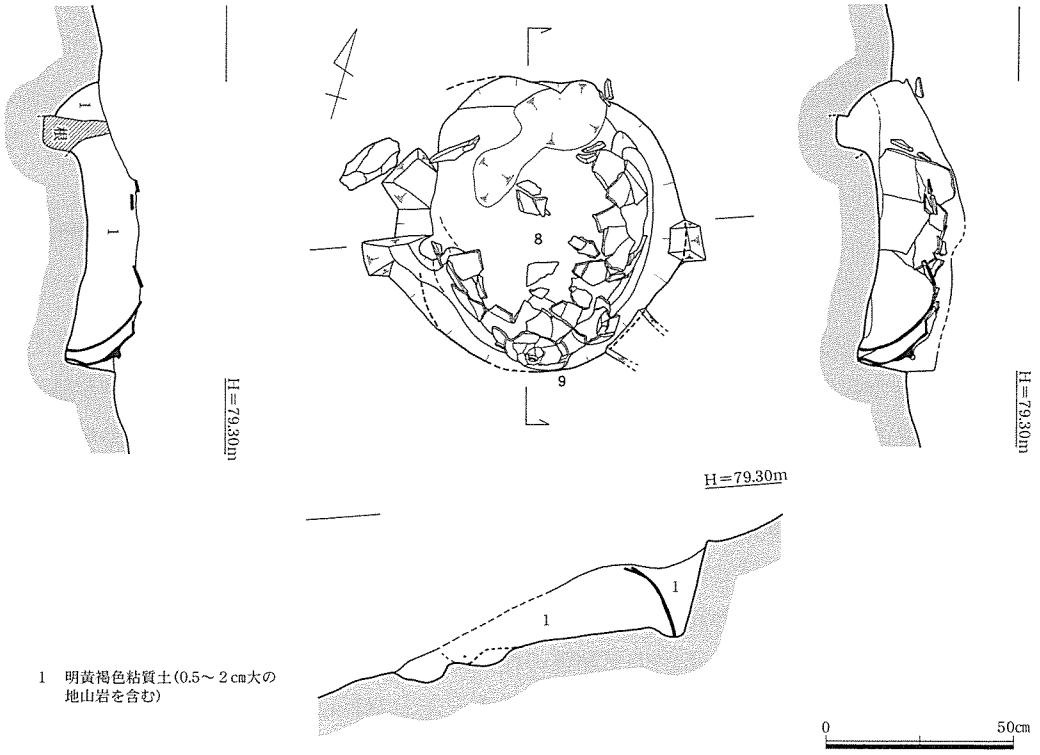


第20図　倭文5号墳 第3主体部実測図

棺本体の円筒埴輪(第23図－7)についてみると、ほぼ直立して立ち上がる胴部に外傾して端部に凹面を持つ口縁部を持つものである。器高63.9㎝、口径29.2㎝を測る。胴部に4条の凸帯が施され5段構成となるが、最上位の凸帯は口縁部と近接した形状を取る。断面は上稜にわずかに突出を残すようにも見える台形状である。調整は、外面縦ハケ目で、内面は上半ナデ、下半縦ハケ目後ナデで外面には黒斑が認められる。上から2～4段目にそれぞれ3方向の透孔を持ち、その形状は一方向の上から2、3段目にそれぞれ逆三角形と分銅型状を置き、そのほかは全て長方形である。またこの2段目の逆三角形透孔の5㎝横に正三角形状にも見える線刻が、3段目の分銅形状透孔の正裏よりやや片側に寄って一部を長方形の透孔に切られる形の線刻絵画がナデ調整の後になされる。棺としてはこの絵画はちょうど下側、すなわち床面と接する位置となる。この絵画は一見すると左右対称に見えるが、その細部については対称性を外して描かれている。抽象的ではなく、幾何学的でもなく、なんらかの具象的なモチーフをもと



第21図　倭文5号墳 第4主体部実測図



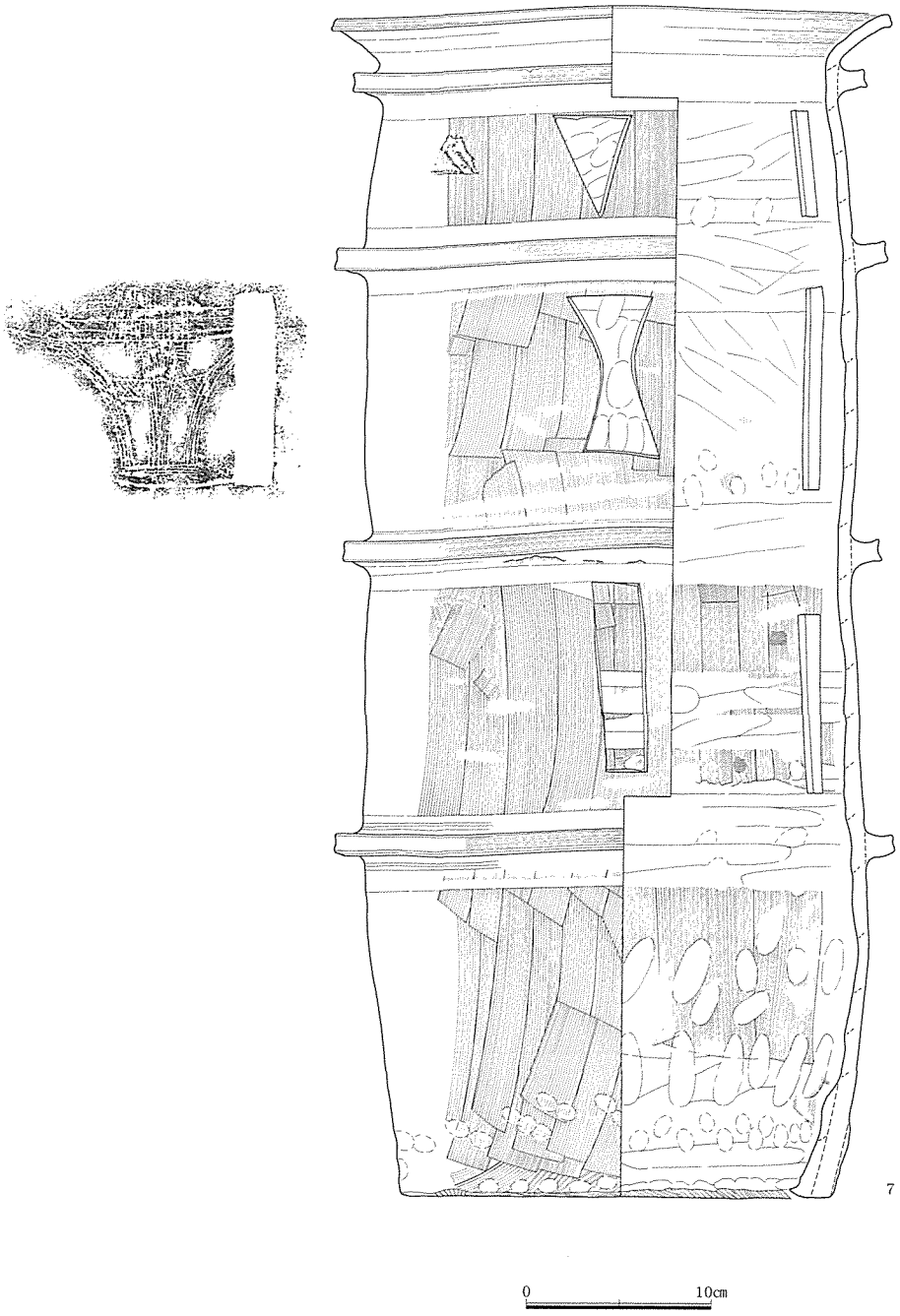
第22図　倭文5号墳 第5主体部実測図

に描いたものと考えられ、可能性として船、刺青のある人面、建物、蓋（きぬがさ）等を考えてみたが、現段階でそのモチーフを特定することができない。ただ、２段目の線刻や分銅形状の透孔あるいはそれらの埋葬に際して置かれた位置等とも合わせて考える必要があろう。

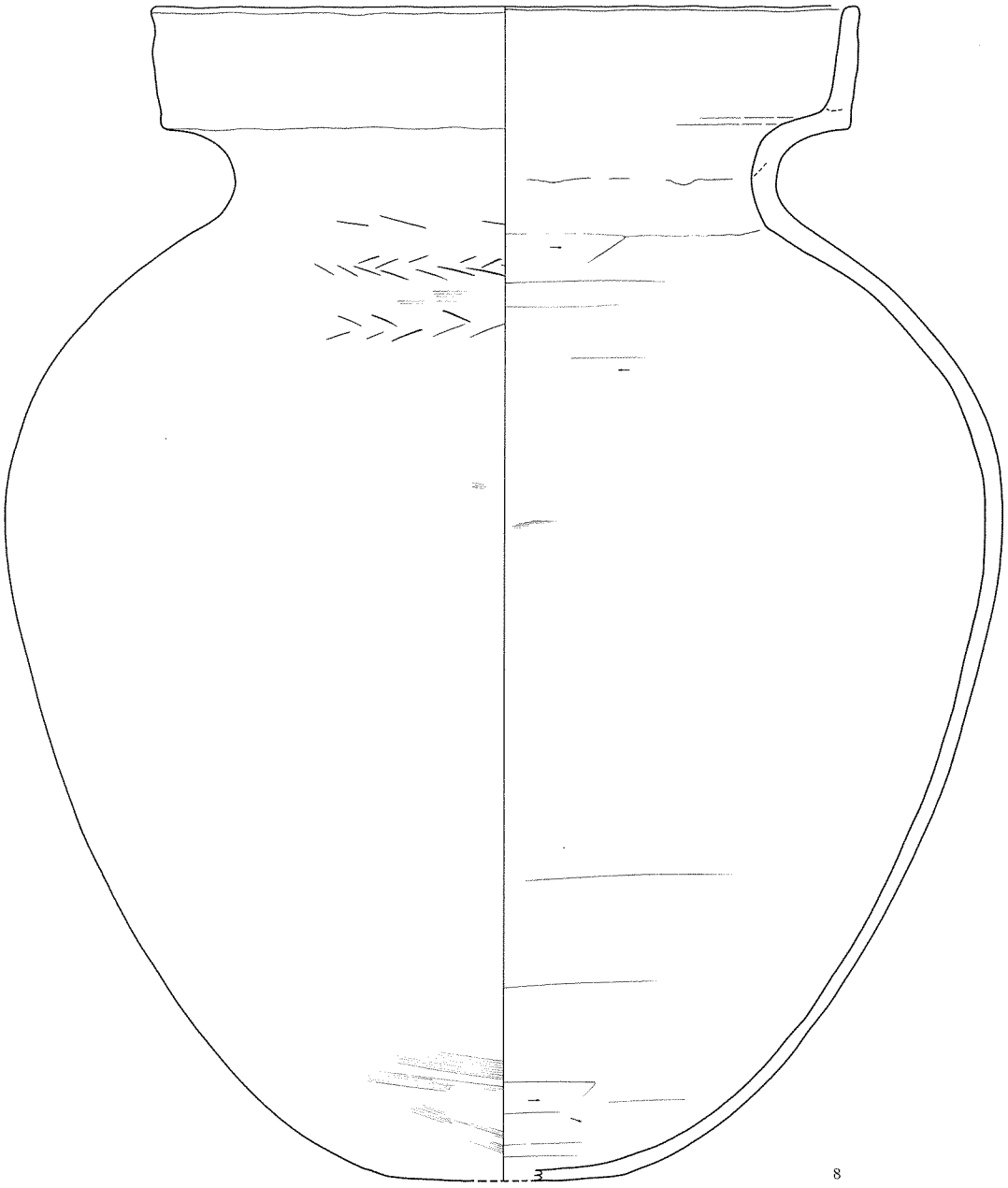
なお本棺に使用された壺については第５主体部のものと接合しているため後述する。

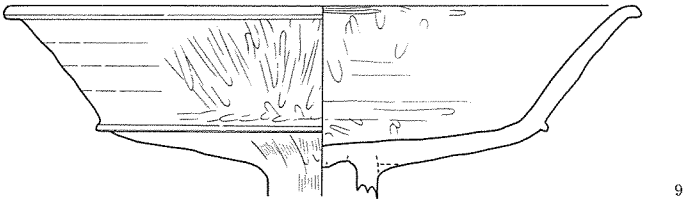
⑤第５主体部

墳丘の西北西側墳丘肩部～墳丘斜面で第４主体部の１m北に位置する本主体部は、小型の壺棺である。表土除去時点で既に土器の小片が散乱して認められたため注意して掘り進めたところ、南北方向に長い不定な楕円形状の墓壙を検出した。築城時の削平かあるいは流失によりその上位の多くが失われたものと考えられるが、地山を掘り込む墓壙は、主軸を第１主体部、第４主体部とほぼ並行のN－15.5°－Wにとる。規模は、遺存値で長さ0.78m、幅0.73m、深さ0.28mを測り、このほぼ中央部に棺が設置される。棺は壺と高杯を使用している。



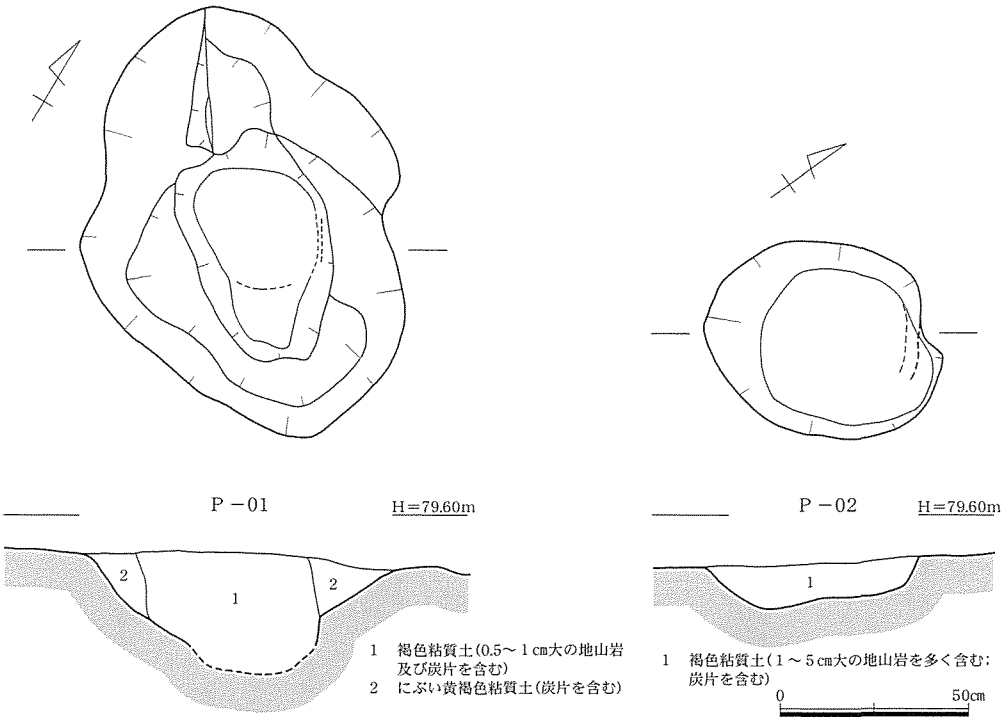
第23図　倭文５号墳 第４主体部出土遺物実測図





0 10cm

第24図　倭文５号墳 第５主体部出土遺物実測図



第25図　倭文５号墳 ピット状遺構実測図

棺の使用方法としては、その上位は失われていたものの、検出状況等から中型の壺を大きくいくつかに割り、その一部を上述第４主体部の支え、蓋、覆いに使用し、そのほかは本主体部の床面にドーム状に立てて蓋のように使用したものと考えられる。その際、南側端部付近は壺底部に高杯の杯部を覆いかぶせるような形で検出されている。

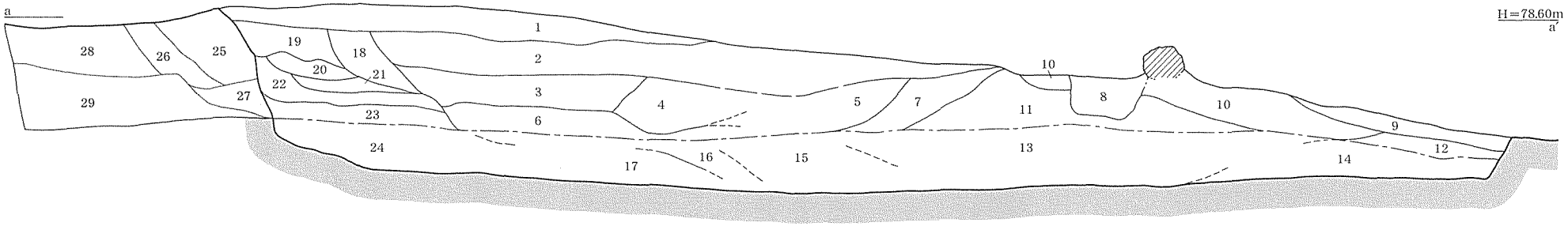
棺本体の壺(第24図－８)についてみると、器壁が比較的厚く、肩部の張りはなく縦長で底部はやや平底気味となる。口縁部は直立して立ち上がり、端部に平坦面を持つ。全面風化が著しく調整は不明瞭であるが、部分的ながらハケ目痕が認められ、肩部には連続刺突文が、さらにその下位に綾杉状の連続刺突文２段がなされる。また高杯(同－９)は、杯底部から屈曲して段をもち、口縁部は外傾し端部でさらに外反して面をもつ。内面と口縁部外面はヘラ磨きである。

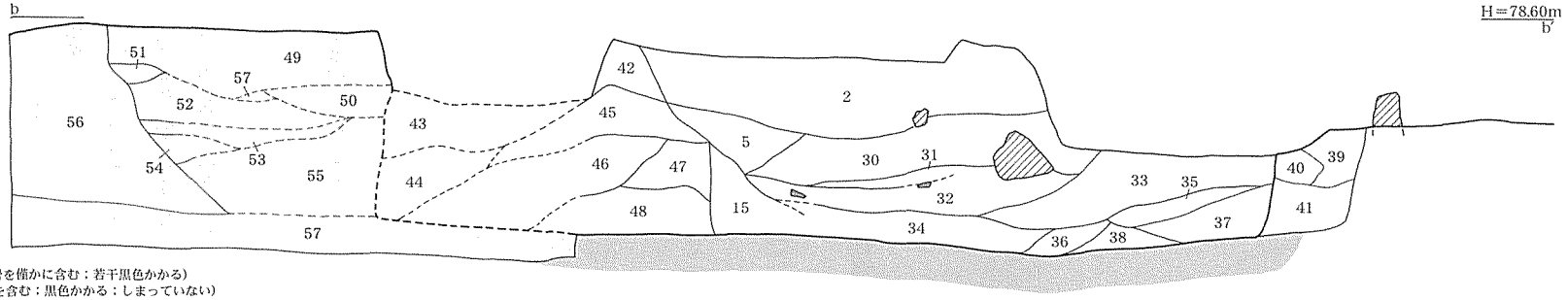
なお上述の第１～５主体部検出の遺物からみて本古墳の埋葬時期は古墳時代前期後半代と考えられる。

３)その他の遺構

前章で述べたとおり、本古墳墳頂部南東側、第１主体部の南東約２m付近からピット状遺構２基(P－01、02)を検出した。いずれも表土直下で地山の岩盤を掘り込むものである。

P－01は地山岩盤の板状節理のためか平面、断面ともに不定形であるが、中央部が径約30㎝程の範囲で一段深くなっている。規模は最大値で、長さ1.17m、幅0.86m、深さ0.32mを測る。P－02はP－01の南約1.5mに位置する。平面形は検出面では釣鐘状であるが、床面は角がとれて円みを帯びた方形が推定でき、断面は、浅いながら床の片側がいくぶん凹む傾向の逆台形状を呈する。規模は最大値で、長さ0.56m、幅0.51m、深さ0.14mを測る。これらの遺構は位置的には上述の第４、５主体部と第１主体部を挟んでほぼ対角線上に位置する。P－01の断面形状から消極的ながらピット状遺構としたが、遺物もなく城の時期のものか古墳の時期のものか等時期も含めて詳細は不明である。

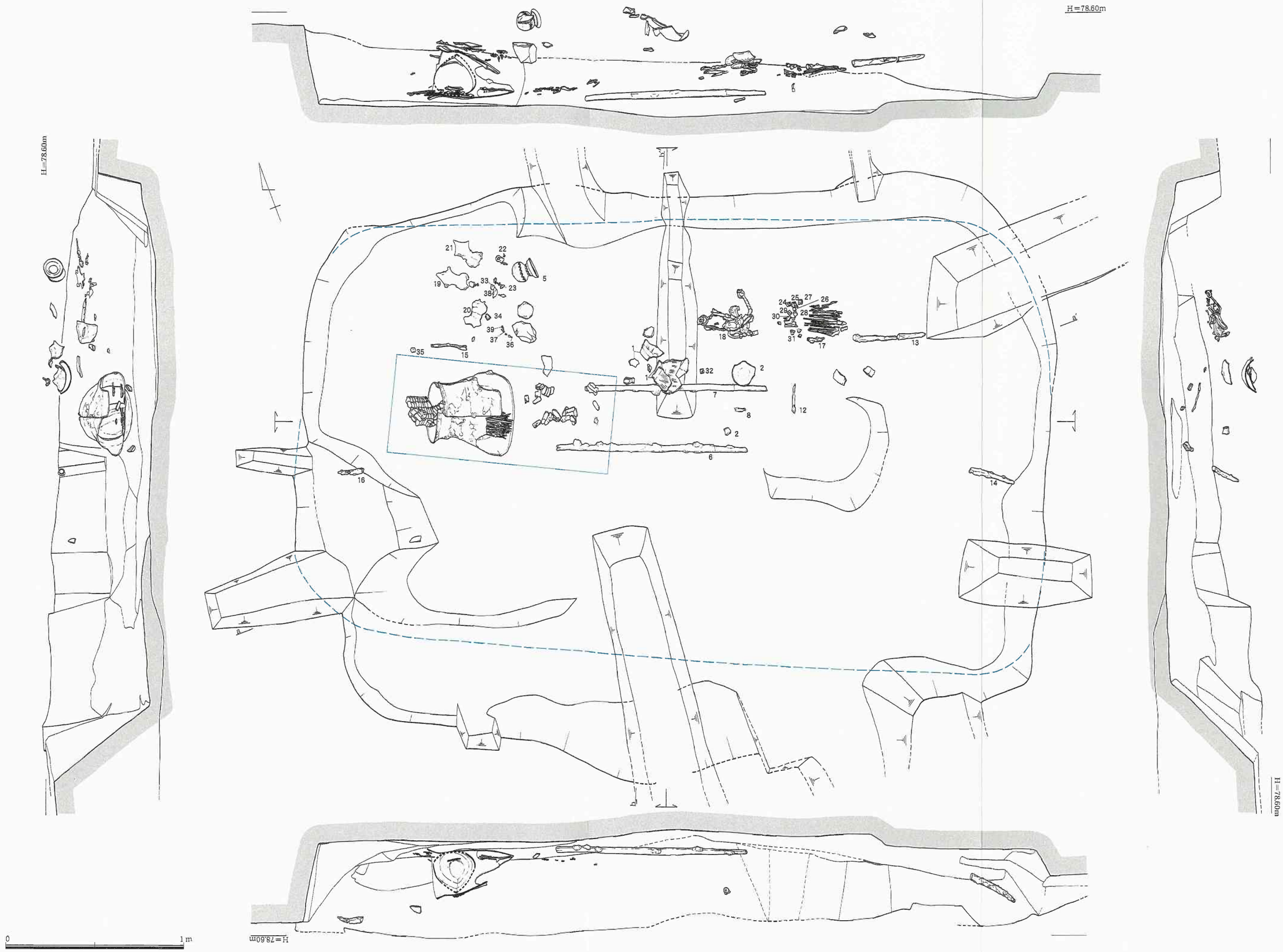




1　明黄褐色粘質土(0.5～1㎝大の地山岩を僅かに含む；若干黒色かかる)
2　黄褐色粘質土(0.5～12㎝大の地山岩を含む；黒色かかる；しまっていない)
3　明黄褐色粘質土(0.5～3㎝大の地山岩を含む；黒色かかる)
4　にぶい黄褐色粘質土(1～3㎝大の地山岩を含む；黒色かかる)
5　にぶい黄褐色粘質土～黄褐色粘質土(4よりやや明；1㎝大の地山岩を含む；若干黒色かかる)
6　黄褐色粘質土～にぶい黄褐色粘質土(5よりやや明；1～3㎝大の地山岩を含む；黒色かかる)
7　明黄褐色粘質土(1㎝大の地山岩を僅かに含む；橙色かかる)
8　褐色粘質土(1～3㎝大の地山岩を含む)
9　明黄褐色砂混粘質土(0.5～3㎝大の地山岩を僅かに含む)
10　明黄褐色粘質土(0.5～3㎝大の地山岩を含む)
11　明黄褐色粘質土(1～5㎝大の地山岩を含む；10より黄褐色かかる)
12　明黄褐色粘質土(0.5～2㎝大の地山岩を僅かに含む；9よりやや明るく10よりやや橙色かかる)
13　土色不明の為空白
14　土色不明の為空白
15　にぶい黄褐色粘質土～にぶい黄橙色粘質土(1㎝以下の地山岩を含む；黒色かかる)
16　にぶい黄褐色粘質土(15よりやや暗；1㎝以下の地山岩を僅かに含む；黒灰色かかる)
17　褐色粘質土～にぶい黄褐色粘質土(16よりやや暗；1.5～3㎝大の地山岩を含む；黒色かかる)
18　明黄褐色粘質土(0.5～2㎝大の地山岩を含む；黒色かからない)
19　明黄褐色粘質土～黄褐色粘質土(橙色粘質土ブロック及び1～2㎝大の地山岩を含む)
20　明黄褐色粘質土(1㎝以下の地山岩を18より極僅かに含む；黒色かからない；橙色粘質土ブロックを含まない)
21　にぶい黄橙色粘質土(黒色かかる)
22　明黄褐色粘質土(橙色粘質土ブロック及び1㎝大の地山岩を含む)
23　にぶい黄褐色粘質土(0.5～2㎝大の地山岩を含む)
24　土色不明の為空白
25　明黄褐色粘質土(1よりやや暗く22よりやや明；0.5～6㎝大の地山岩を多く含む；橙色粘質土ブロックを含まない)
26　黄褐色粘質土(0.5～10㎝大の地山岩を多く含む)
27　明黄褐色粘質土(25よりやや暗；1～5㎝大の地山岩を多く含む；黒色かかる；橙色粘質土ブロックを含まない)
28　明黄褐色砂混粘質土(1㎝以下の地山岩を僅かに含む)
29　黄橙色砂質土～明黄褐色粘質土(27，28よりやや明；1～5㎝大の地山岩を多く含む)
30　にぶい黄褐色粘質土～黄褐色粘質土(1㎝大の地山岩を含む；やや橙色かかる)
31　にぶい黄褐色粘質土(30よりやや暗；1㎝以下の地山岩を含む；黒色かかる)
32　橙色砂混粘質土～明褐色砂混粘質土(1㎝以下の地山岩を含む)
33　にぶい黄褐色粘質土(30よりやや暗；0.5～3㎝大の地山岩を僅かに含む；橙色かかる)
34　にぶい黄褐色砂混粘質土(15，33よりやや暗；1～2㎝大の地山岩を含む；橙色粘質土ブロックを含まない；黒色かかる)
35　橙色粘質土～明褐色粘質土(1～5㎝大の地山岩を含む)
36　にぶい黄褐色砂混粘質土(33よりやや暗；橙色粘質土ブロックを含む；1㎝大の地山岩を含む；若干黒色かかる)
37　にぶい黄褐色粘質土(1～3㎝大の地山岩を含む；黒色かかる)
38　橙色粘質土～明褐色粘質土(35よりやや暗；1～2㎝大の地山岩を多く含む)
39　にぶい黄褐色粘質土(2㎝大の地山岩を含む)
40　明褐色砂混粘質土～橙色砂混粘質土(1㎝以下の地山岩を僅かに含む)
41　にぶい黄褐色粘質土(37よりやや暗；1㎝大の地山岩を含む；若干黒色かかる)
42　にぶい黄褐色粘質土(1㎝大の地山岩を僅かに含む)
43　にぶい黄橙色粘質土(0.5～2㎝大の地山岩を含む；若干黒色かかる)
44　にぶい黄褐色砂混粘質土(0.5～2㎝大の地山岩を含む；黒色かかる)
45　橙色砂混粘質土(0.5～3㎝大の地山岩を含む)
46　にぶい黄橙色砂混粘質土(1㎝大の地山岩を含む；若干黒色かかる)
47　にぶい黄褐色粘質土(15よりやや暗；1㎝大の地山岩を僅かに含む；黒色かかる)
48　にぶい黄褐色砂混粘質土(47よりやや明；1～5㎝大の地山岩を含む；黒色かかる)
49　にぶい黄褐色粘質土(0.5～3㎝大の地山岩を含む；黒色かかる)
50　明黄褐色粘質土～黄褐色粘質土
51　黒褐色粘質土
52　にぶい黄橙色粘質土～にぶい黄褐色粘質土(0.5～5㎝大の地山岩を含む；若干黒色かかる)
53　橙色砂混粘質土～明褐色粘質土(1～5㎝大の地山岩を多く含む)
54　明黄褐色粘質土(1～5㎝大の地山岩を密に含む)
55　明黄褐色粘質土(53よりやや暗；1～10㎝大の地山岩を多く含む；橙色かかる)
56　明褐色粘質土(1～10㎝大の地山岩を密に含む)
57　明黄褐色粘質土～にぶい黄橙色粘質土(55よりやや暗；0.5～10㎝大の地山岩を多く含む)

0　1 m

第26図　倭文6号墳 主体部断面図



第27図　倭文６号墳 主体部実測図

6．倭文６号墳(付図３、４，第26～34図，PL25～27、47～54)

１)位置と墳丘

倭文６号墳は調査地のほぼ中央部、５号墳のすぐ北に位置し、部分的に丘陵をみると一つのピークに位置する５号墳を中心に３方向に延びる丘陵尾根上に４、６、７号墳が近遠の違いはあるものの造営された位置関係となる。このうち本６号墳は前述城跡の平坦面９にほぼ重なり、５号墳より１m弱低く標高は78.8mを測る。墳丘の南側には幅3.5m程度の円弧状の周溝が５号墳の北隅を削ってめぐらされている。墳形は円形であるが、前章で述べたとおり、墳頂部とその北西から北東にかけての裾部は自然崩落以上に築城時に削平あるいは掘削された可能性も考えられる。

墳丘の造営は上述の丘陵尾根肩部、５号墳の一部を円弧状に掘削して尾根から切り離すことから始まる。次いで断面観察から地山と旧表土の関係をみると、さらにその円弧状掘削の内側の高位側を削り窪めて斜面下位側の旧表土上に盛って斜面の傾斜を軽減する。その上へ高位に薄く、低位に厚く盛土を行いながら徐々に盛土上面を水平にもっていき、こうしてできた土台とでも言うべき墳丘平面上にさらに多量の盛土を行って墳丘を構築したものと考えられる。こうして造営された墳丘の規模は、上述の通りかなり削平された可能性も考えられるが、遺存値で、直径13.0m強、高さは南側周溝底から0.84m、東側墳裾から3.36m、西側墳裾から1.74mを測る。盛土の深さは現況で0.95m程度である。

２)埋葬施設と出土遺物等

埋葬施設は墳頂中央部よりやや南側、即ち尾根高位側にやや寄った位置から１基検出した。検出に当たっては平面精査を丹念に繰り返したが墓壙の確定ができず、当初墳丘周辺にはかなりの土量の流土あるいは築城時の盛土が認められたため、本墳の主体部も喪失している可能性も考えて途中からベルトを残したグリッド調査に切り替えて墳頂部を徐々に掘り下げていった。その結果、墓壙上遺物とみられる土師器、須恵器が検出され、さらに慎重に精査を繰り返したがやはり墓壙の確定ができず、サブトレンチを掘り下げて断面観察によって墓壙を確認するにいたった。

こうして検出した墓壙は、盛土中に掘り込まれ、さらにその上にまた盛土あるいは封土がなされたものと考えられる。ただ検出当初唯一地山岩盤をカットしており、きれいに立ち上がる壁面とみた南壁はその後の調査でそれより内側にある立上りが墓壙の立上りで、こちらは墳丘築造時の地山カット部の可能性が高いことがわかった。また墓壙の南東側小口部はかなりの盛土が流失しておりその検出に手間取ったが、最終的に検出した墓壙は、南東側がやや広い隅丸の長方形で、規模は、長さ4.25m、推定幅2.55m、最大深0.64mである。断面観察から木棺が設置されていたものと考えられる。主軸はN－69.5°－Wにとる。

埋葬施設およびその周辺でみると、遺物は大きくは３つの場所から検出されている。一つ目は墓壙上におかれたものと考えられる墓壙床面から40cm前後浮いた状態で検出された土師器や須恵器である。次に墓壙内の棺外遺物である。棺側の墓壙床面から25～30cm前後浮いた状態で武器、馬具が検出されている。そして棺内遺物である。棺内床土か棺据付けの土か明確にはできていないが、墓壙床面から5～10cm前後浮いた状態で武器、武具が検出されている。以下それぞれの遺物について少しふれるが、金属器についてはその処理方法が未だ決まらず、無理に清掃、銹落し等を行うとそのものの破損はもとよりそのほかの情報も失う可能性があるため、現段階で可能な処理までに留めている。そのため調査段階での所見と現在までの所見に基づいた観察結果を記したい。

①墓壙上遺物

墓壙の上位層がかなり失われていると考えられるため、棺直上におかれたものかあるいは棺上方の墳丘上に置かれたものが棺の腐食による陥没によって現位置になったものか不明であるが、土師器甕(第29図－１)が墓壙中央よりやや北北東側から、高杯(同－２～４)が甕の50cm程東南東側から、須恵器甑(同－５)が甕の北北西75cm程度のやや側壁寄りから検出された。甕(１)は底部は欠失しているものの、

器壁が比較的厚い球形の体部で、くの字状の口縁部は内側に肥厚しないで丸く納めている。体部外面には横および斜位のハケ目が重複してなされ、内面は上半が縦ハケ目で下半が丁寧なヘラ削りされる。高杯(2)(3)は口縁部が内湾して立ち上がる椀状のもので、(2)は外面ナデ、口縁部内面ハケ目後軽いナデで、(3)は口縁部外面ヨコナデ後軽いナデで、内面にはハケ目痕が残る。(4)の高杯脚部はやや小形で、徐々に開く脚柱部から裾部でハの字状に大きく開いて端面をもつ。瓶(5)は口頸部が外傾して後口縁部で段をなしてさらに外傾して延びるもので、体部はほぼ球形で肩はあまり張らず底部も尖らない。頸部と体部とに波状文をもつが頸部はまだそれほど延びておらず、口縁部径が体部径よりわずかに大きい。

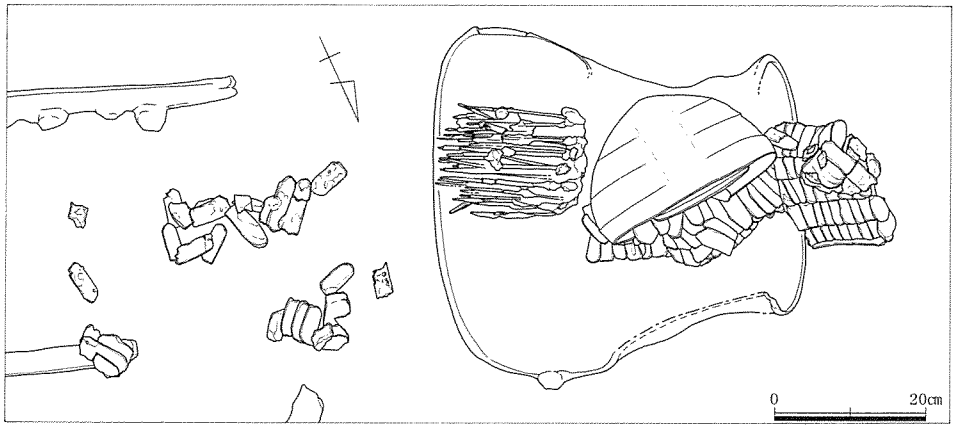
②棺側遺物

想定した棺の両側から遺物が検出されている。まず棺の南西側からは、セットと考えられる切先を南東小口方向に向けた鉄鉾(第31図－14)と先端部を北西小口方向に向けた石突(同－16)が一直線上に墓壙東西端部近くからそれぞれ検出されている。また棺の北東側からは、南東側から順番に並んで、切先を南東小口方向に向けた鉄鉾(同－13)、同じく切先を南東小口方向に向けた鉄鏃、先端部を南東小口方向に向けた石突(同－17)、金具類(第33図－24～32)、轡部(第32図－18)、金具・鋲類(第33図－22、23、33、34、36～39)、杏葉(同－19、20、21)、切先を北西小口方向に向けた鉄鉾(第31図－15)、金具類(第33図－35)が検出された。

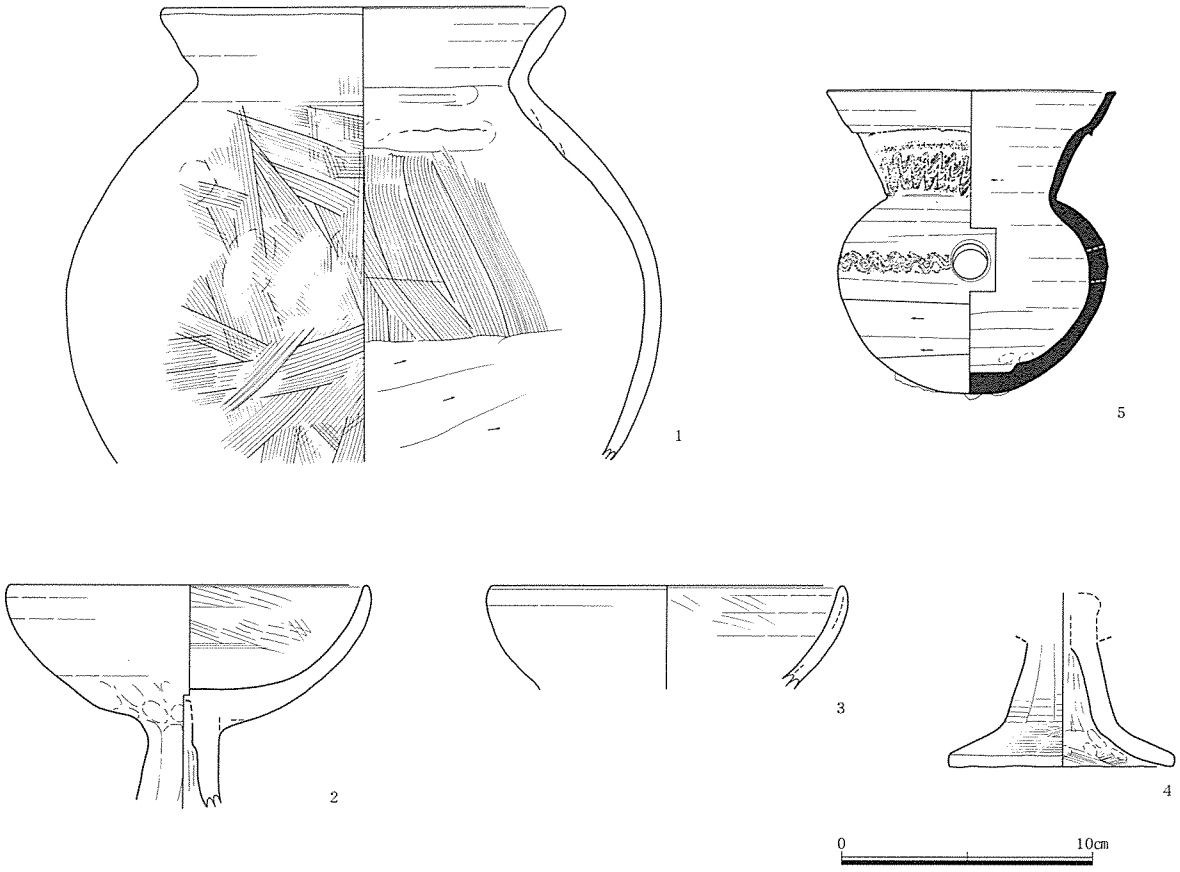
鉄鉾(14)は先端を欠失しているが、遺存長は38.4cm、袋部長15.75cmを測る。鉾身断面が正方形に近い菱形で、袋部断面は6角程度の多角形とみられる。袋端部に山形の切込みが入り、袋部内に柄木がしっかり遺存している。位置的にこれとセット関係にあると考えられる石突(16)は、わずかに先端が欠失するが、遺存長は12.5cmを測る。袋部断面は楕円形で、柄木がしっかり遺存している。この(14)～(16)の先端間の距離は3.86m程度で、これが棺の南西側におかれた鉄鉾の長さと考えられる。

棺の北東側の南東側小口近くに置かれた鉄鉾(13)は全長39.7cmを測り、袋部長6.5cm以上である。鉾身は3cm以上と幅広く断面は薄く押しつぶれたような菱形で、袋部断面は楕円形で端部に山形の切込みが入る。袋部内には柄木が遺存している。またこれとは逆の北西側小口近くに置かれた鉄鉾(15)は全長20.6cmを測る小型品で、袋部長は5cm以上である。鉾身断面が正方形に近い菱形で、袋部断面は楕円形である。袋部内には木質が遺存している。位置的にこれとセット関係にあると考えられる石突(17)は、わずかに先端が欠失するが、遺存長は11.0cmを測る。袋部断面は楕円形であるが、先端部は断面方形の加工が施されている。内部には木質が遺存している。この(15)～(17)の先端間の距離は2.23m程度で、これが棺の北東側におかれた一方の鉄鉾の長さと考えられ、(13)の長さは不明ながら、その切先のむきからこちらの棺側には2本の鉄鉾が互い違いに入れられたものと考えられる。(註4)

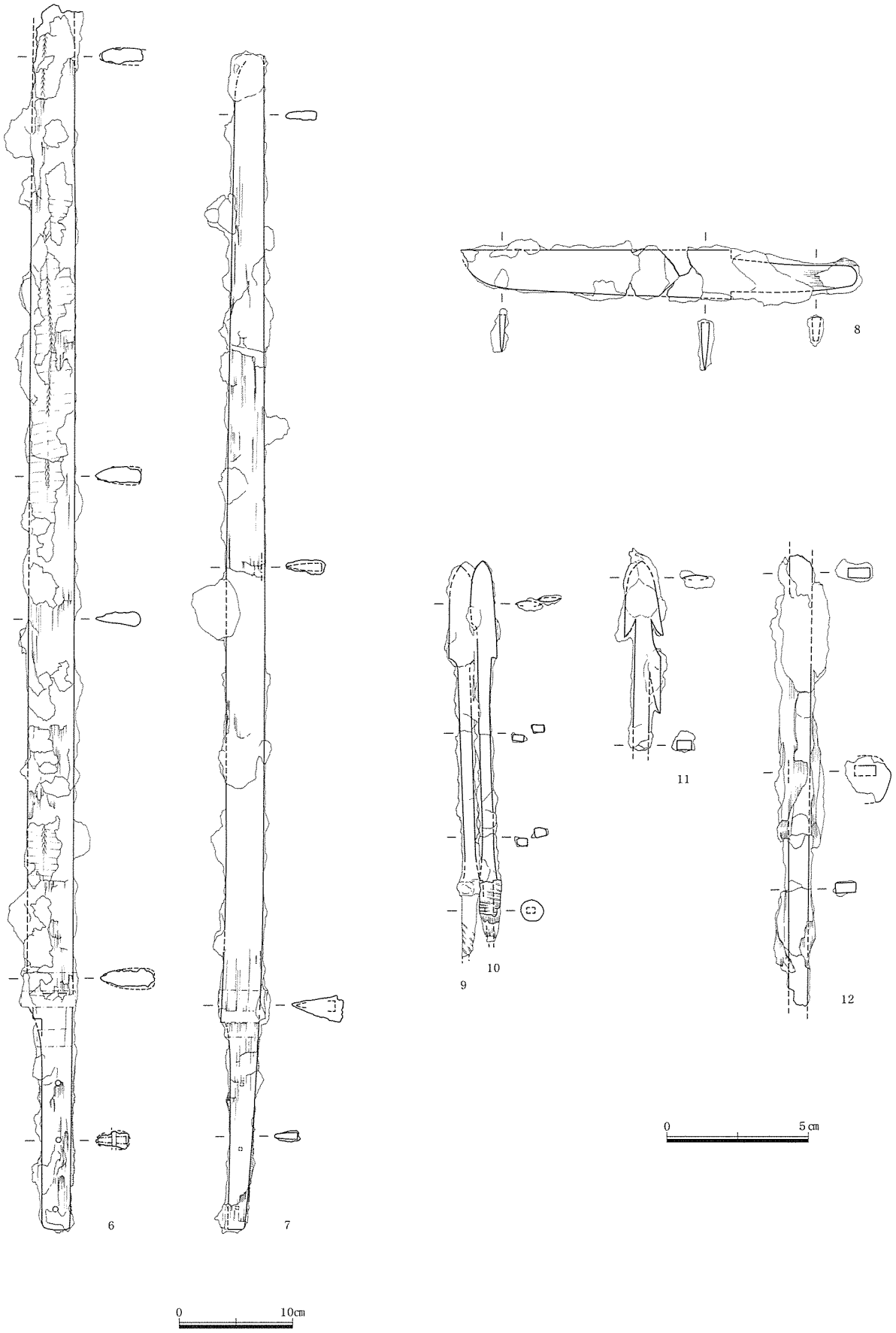
石突(17)のすぐ北東には鉄鏃が置かれる。検出状況から盛矢具に納められた状態で置かれたものと考えられ、北西側延長線上には60cm程度までの間で矢柄の可能性が考えられる薄皮状の有機物が検出されている。現在その銹着が著しく、個別の観察ができないが、長さ20cm程度の長頸鏃が10本程度のまとまりをもって4束程認められ、全体では40本程度の総数と見受けられる。このうち一部ではあるが、調査途中で剥離した(9～11)について図化した。(9)は銹のため詳細は不明であるが、平面長三角形状の長頸鏃で、細身の鏃身をもつ。(10)も銹が著しく片刃か両刃かの判断も困難で断定はできないが、片小爪逆刺あるいは段違いの逆刺をもつ可能性もある。(11)は茎部は欠失しているが、頸部上位に鏃身部が発達した独立片逆刺が認められる。鏃身部長3.10cm、片逆刺長2.3cmを測る。鉄鏃のすぐ北西から複数の方形板金具(24～31)が検出された。鉄鏃に近接し、その検出幅も比較的似通っているため、当初盛矢具関連の遺物の可能性も考えたが、上述した矢柄の可能性が考えられる薄皮状の有機物がこれらの下からの検出であることや後述遺物との関係で、馬具の面繋を構成する辻金具と判断した。2cm強の金銅装の方形板に銀被せの可能性も考えられる鋲を使用する。介在する責金具(28)には表面に螺旋状の刻み目が認められる。これらの北西側には轡部(18)が位置し、鏡板、立聞、鉤金具、銜、引手、



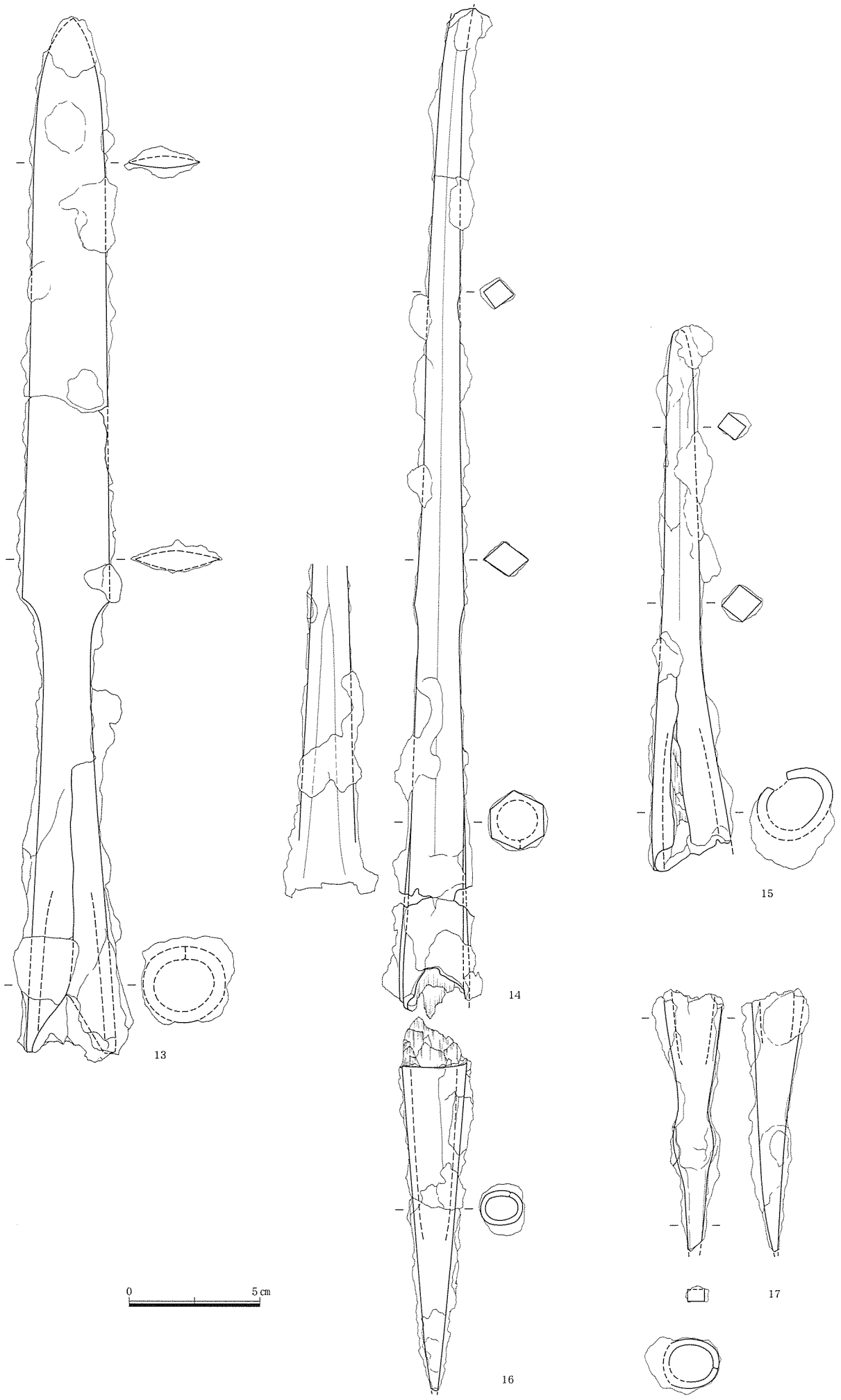
第28図　倭文６号墳 主体部短甲内及び周辺遺物出土状況図



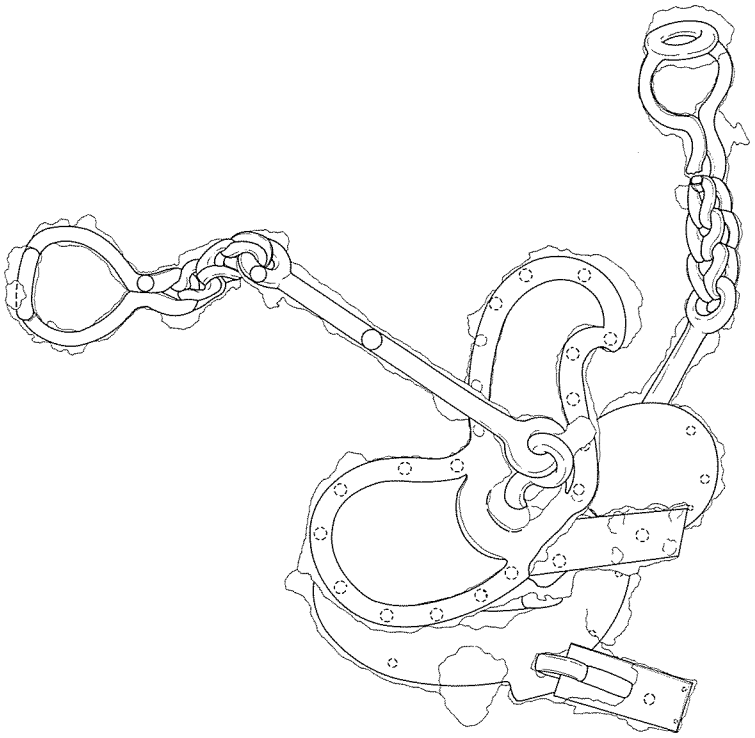
第29図　倭文６号墳 主体部出土遺物実測図（１）



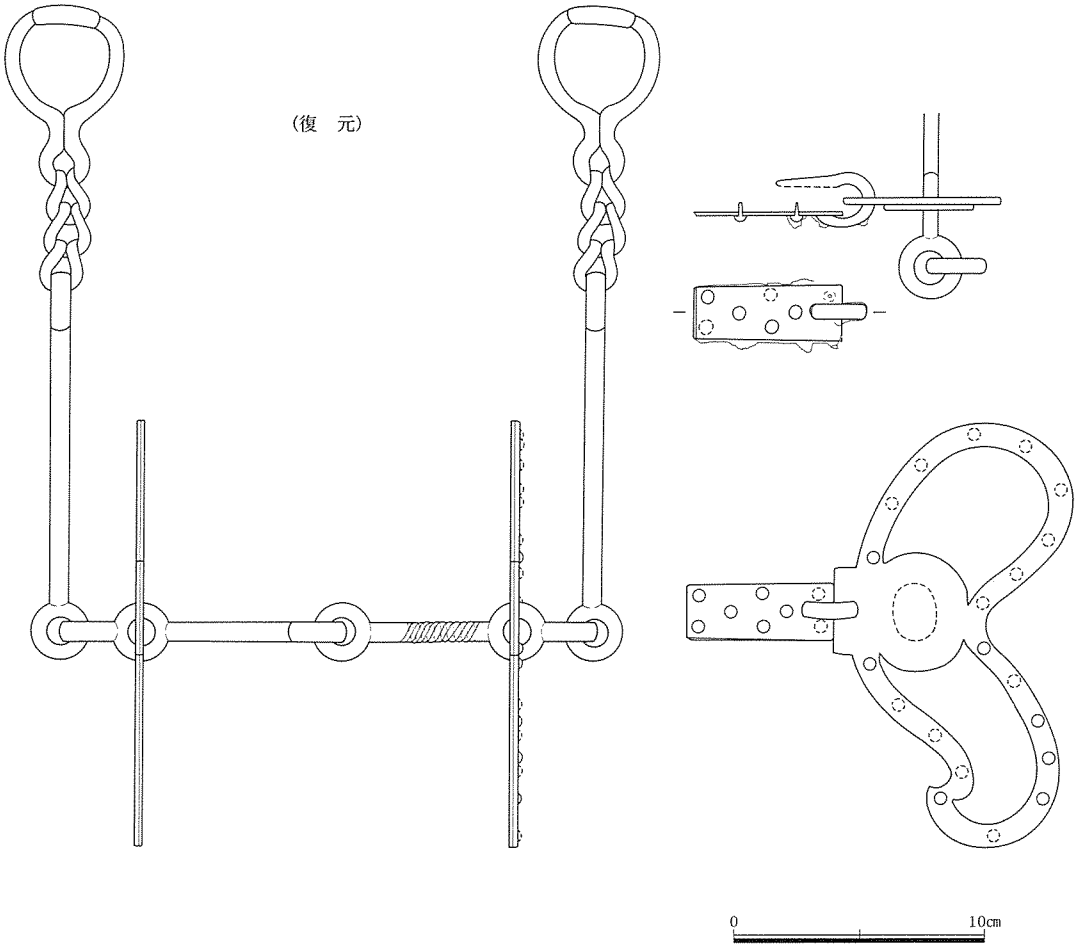
第30図　倭文６号墳 主体部出土遺物実測図（２）



第31図　倭文６号墳 主体部出土遺物実測図（３）



18



第32図　倭文６号墳 主体部出土遺物実測図（４）

兵庫鎖、引手壺の各部位が遺存する。このうち鏡板はいわゆる「f」字形を呈し、長さは17cmと大きく、屈曲も強くなっている。地板と縁金はそれぞれ別々に金銅板を貼ったとみられ、X線撮影によると20程度の鋲で固定している。銜は2条の鉄棒を円環によって結合しているが、別造りの細い線によって螺旋状に巻かれている。この銜と引手とは直交する形で取り付いた円環によって結合され、さらに3連の兵庫鎖を介して手綱を掛けるための円環が先端についた瓢形の引手壺につながっている。この轡部から約1m北西に金具・鋲類(同－22、23、33、34、36～39)が位置する。このうち(22、23)は馬具の鉸具で、前者は環状の輪の部分と木製鞍等に打ち込む脚の部分が一体化して造られており、そこには木質痕跡が認められる。ほかの遺物との位置関係からこの木質は木製鞍の可能性が考えられ、とするとこの鉸具は鞍金具と考えられる。また、そのほかの金具(33)やまとまって検出された長さ2cm程度の鋲(36～43)は位置的にみて馬具の尻繋か鞍に伴うものの可能性が考えられる。これらのすぐ北西には杏葉(19～21)が置かれる。(20)は一部欠失しているが、いずれも20cm程度とやや大型のいわゆる剣菱形杏葉で、その先端部分の角度は比較的鋭角となっている。傷みが著しく且つ未処理のため明確にはできていないが、現段階では鉄製のようにも見受けられる。ただ、X線撮影で確認したところ、縁金と身全面に一つ一つに箔の丁寧な覆いを施した鋲が乱打状態で打ち込まれていることが判明した。さらにこの杏葉の周辺から金具(34、35)が検出されている。このうち(34)は欠失しているものの、両側をやや折り返した長方形状の鉄板で、内側に木質痕が認められ、且つ端部に鋲1が確認されることから、木芯輪鐙に使用された内湾鉄板の可能性が考えられる。(註4)

③棺内遺物

棺の中央部両側にそれぞれ1振りの鉄刀(第30図－6、7)が切先を北西小口側へ、刃部をそれぞれ主体部中心部へ向けて置かれる。その両者に挟まれた南東側に北西小口側に切先を向けた刀子(同図－8)が、さらにその南東側外に頸部(同図－12)が位置する。また鉄刀の北西側では、その挟まれる端部当たりから外にかけて一部連接する小札状鉄製品が、さらに北西側小口部分に前胴を上に向けた短甲1領が置かれている。

棺の南西側面から検出した鉄刀(6)は銹化して刀身に木製の鞘が、茎部には木製の柄の木質が銹着した状態で遺存している。このためX線撮影で確認を試みたが、刀身の形態は明確にはできなかった。ただ目釘孔3と鞘の一部に足金具様の装具が遺存する可能性を確認することができた。また鞘の表面には飾板の一部なのか漆膜状の皮膜に覆われているが、不明確ながら見ようによっては何らかの帯状の巻き締めの上に塗布されているようにも見受けられる。長さは鞘も含めてながら107.4cmと長大な鉄刀である。棺の北東側面から検出した鉄刀(7)も銹化して刀身に木製の鞘が銹着している。こちらもX線撮影では刀身の形態は明確にはできなかったが、目釘孔3を確認した。また肉眼では全く確認できないものの、鞘にX線を遮りやすい何らかのものがある可能性を教えていただいた。(註5)長さは鞘も含めてながら103.3cmとこちらも長大な鉄刀である。なおこれらの鉄刀は現段階ではこれ以上の処理ができず詳細は不明である。その間に位置する刀子(8)は、切先をわずかに欠失するものの遺存長14.2cmを測る。両端部を欠失する頸部(12)は断面長方形で、幅はほぼ一定、全体に木質が認められるが形態は不明である。

鉄刀の北西側からは、図化はできなかったが小札が検出されている。遺存状態が悪く少数ながら、約6.5×2.2cmおよび約5.0×2.2cm程度の2種類の平札が一部わずかながら連接して認められた。甲冑の付属具の一部と見られるが、今後まだ整理検討が必要である。

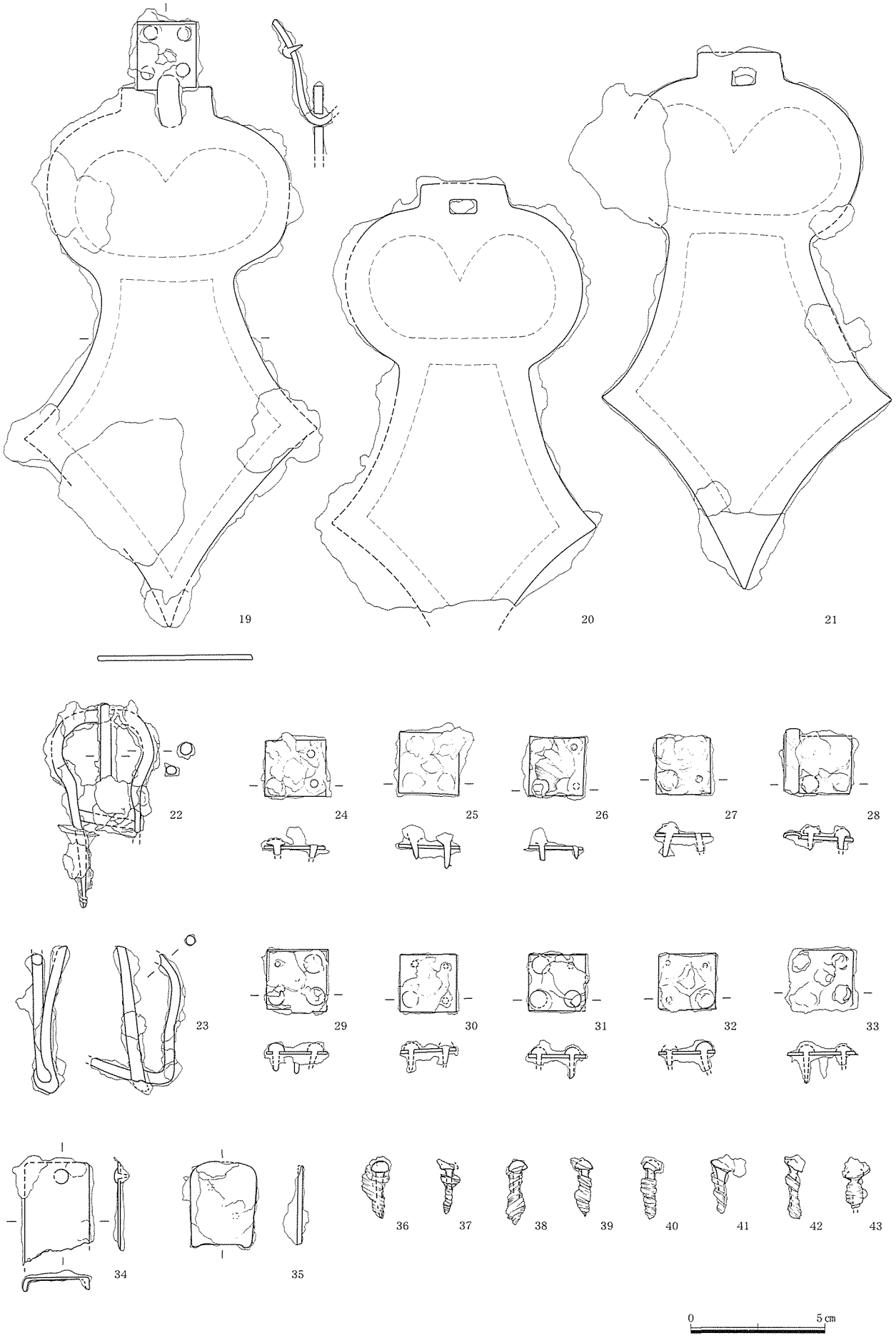
この小札の北西側小口部分からは上述の通り前胴を上に向けた短甲が検出された。現在まだ本格的な処理ができない状況のため、図化もままならないが、現段階で観察できたことを記したい。本短甲は、主体部首軸と並行になるように前胴を上にして裾を北西小口側にあけるように寝かせた状態で検出された。胴の中には冑や付属具、多量の鉄鏃が納められている。発掘調査時に後胴の一部のひびがやや進行したが、それ以外はほぼ完存に近く遺存状況は比較的良好と見られた。しかしながら、結果的にはそれ

もいたしかたなかったと考えているが、安全を期するために樹脂で固めて取り上げた結果、現在詳細な観察が困難となっている。本短甲は鉄製で、右前胴開閉式の三角板鋲留短甲である。清掃が未完のため概数となるが、大きさは前胴高37.2cm、後胴高47.5cm、横幅46.2cmである。構成は前胴・後胴ともに竪上３段・長側４段の７段構成を取るものと見られる。前胴竪上第２段は左は欠失しているものの、肉眼観察とＸ線撮影によると三角板で細分せず、横矧板を用いているものと思われる。また肉眼観察とＸ線撮影によって所々認められる鉄板の重ねあわせ部分を見てみると、竪上第１段が左前胴は欠失しているもののおおよそ前胴２枚・後胴１枚、竪上第２段が前胴２枚・後胴３枚程度とみられ、それ以下については不明瞭ながら、通有の地板は９枚程度である可能性が考えられる。短甲全体の銹化が著しく、鋲も径４mm程度の小振りなものと思われるが不明瞭で、今のところＸ線撮影でもその連接の数を明確にはできていない。蝶番についても長方形あるいは方形を推定したがやはり不明瞭である。覆輪は引合板部は不明瞭であるが、ほぼ全周する鉄包覆輪であると思われる。

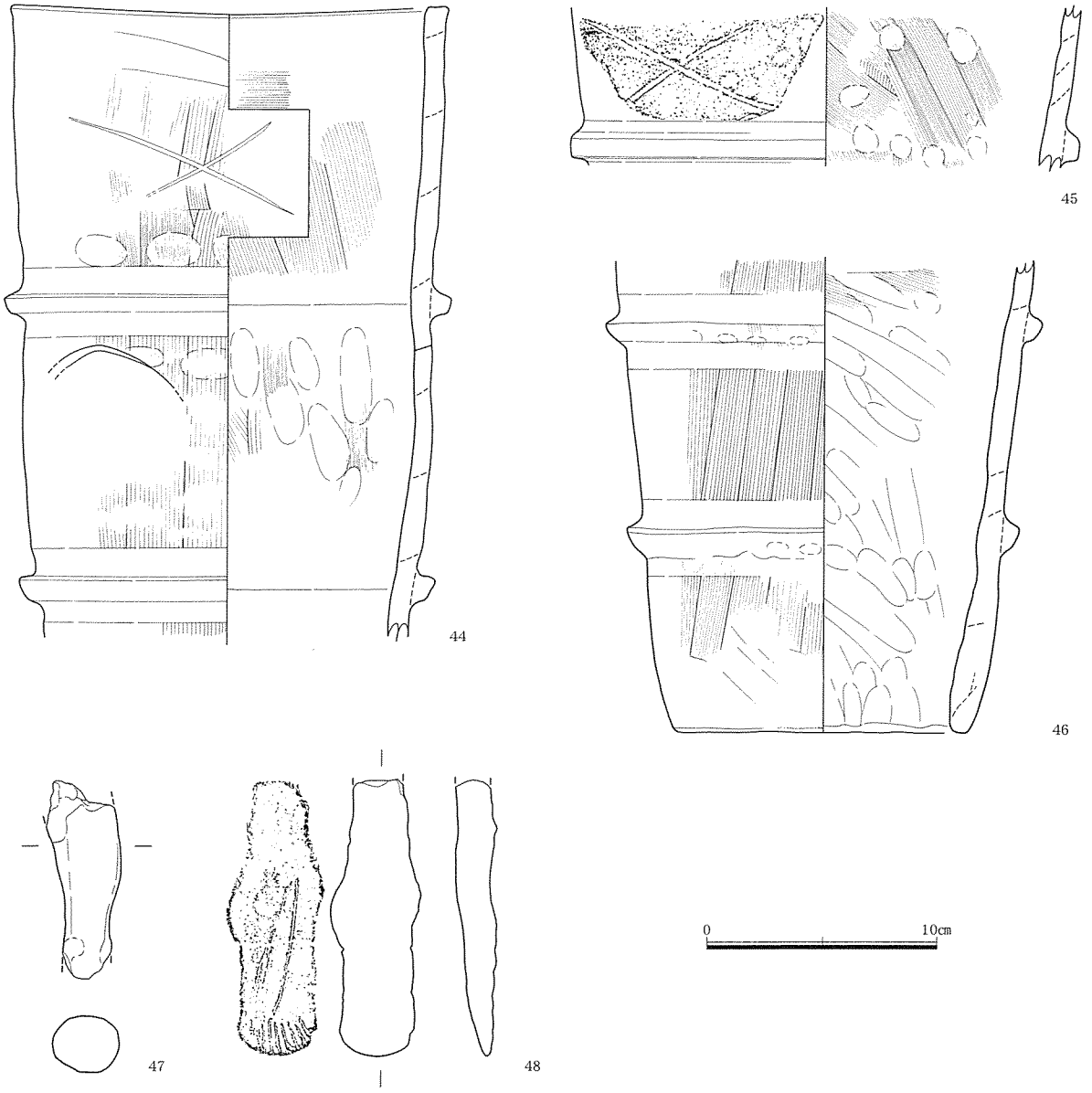
上述のとおり、横に寝かされたこの短甲の中で前部を上にして立った状態で冑が検出された。横矧板鋲留衝角付冑で、前頭部が短甲内面と銹着しており、現段階では取外し不可となっている。構成は５段で、土圧でややつぶれているが、全長約23.5cm、幅約22.8cm、鉢の深さ約14.5cmである。確認が困難であるが、地板は１段２段ともに１ないし２枚の可能性が考えられる。衝角底板は外接式で、竪眉庇は衝角底板を叩き曲げて造りだしているようである。腰巻板の右側面に２孔を確認したが、冑の背面からは２段ないし３段の錣と見られる小札が検出された。小札には長さ6.5×幅2.2cm程度と長さ5.0×幅2.2cm程度の２種類が認められ、計50枚程度を数える。また短甲の端から外にかけて別の小札が検出された。小札の大きさは錣とみられるもののこぶりなほうと同様の長さ5.0×幅2.2cm程度で、２つのブロックが重なっていたようで、上のブロックは３段で計７枚程度の遺存であったが、側辺に覆輪痕跡とみられる有機質がわずかに認められた。また下ブロックは５段構成と見られ、１段が６枚程度、２段が８枚程度、３段が９枚程度、４段が９枚程度、５段が９枚程度確認できる。全体としては縦約18cm、横約14cmの平行四辺形で内反り気味に曲げられている。５段目の片端の小札には隅切り加工が施されているようにも見受けられ、同段下辺には幅１cm程度の覆輪痕跡が認められる。これらのことからこの２ブロックの小札は頬当の可能性を考えておきたい。さらに短甲の中からは主体部中心側後胴上から鏃身を北西小口側に突っ込んだ形で多量の鉄鏃が検出されている。ちょうど中の冑との間に１cm弱の隙間があいており、盛矢具等に納めて置いたものと考えられる。長さ17～18cm程度の長頸鏃で、総数40～50本程度と考えられるが、現段階で取り出しができないため各鉄鏃の形式、形態、セット関係等の詳細は不明である。

３）その他の遺物

本古墳周辺からは主体部以外に、周溝・墳裾から多くの埴輪片、また前章で述べたとおり平坦面10の盛土中から本墳に伴うと考えられる埴輪片が検出されている。しかしながらいずれも細片が多く、実測可能なものいくつかを図化した。周溝・墳裾から検出した円筒埴輪（第34図－44）は、ほぼ直立して胴部から口縁部まで立上り口縁部端部に凹端面をもつ。２条の凸帯が遺存するが、断面は台形状からやや崩れている。胴部外面は縦ハケ目で、残存部の上から２段目に２方向の円形透孔をもつ。最上段には「×」状のヘラ記号がなされる。平坦面10の盛土中から検出した円筒埴輪（45）は胴部に１条の凸帯の遺存である。外面縦ハケ目上に「×」状のヘラ記号がなされる。周溝・墳裾から検出した円筒埴輪（46）は、基部から徐々に開きながら立ち上がる胴部をもち、２条の凸帯が遺存する。外面は縦ハケ目調整であるが、凸帯の突出度は低くなっている。周溝・墳裾から検出した形象埴輪（47）は遺存値で長さ8.5cmを計る。断面楕円形の一端から徐々にその径を減じ、いったんくびれてからまたやや広がる。形状から小型の人物埴輪の腕部分が考えられる。同じく周溝・墳裾から検出した形象埴輪（48）は遺存値で長さ12.0cm、幅3.95cm、厚さ1.8cmを計る。片端以外はほぼ遺存しており、中央部両側がやや飛び出る。遺存する端部の片面にはヘラ状工具によって８条程度の刻みが入れられ、さらに同一面に２条の線刻がなされる。



第33図　倭文６号墳 主体部出土遺物実測図（５）



第34図　倭文６号墳 周溝及び平坦面10の盛土出土遺物実測図

ただ何のどの部位か等の詳細は不明である。

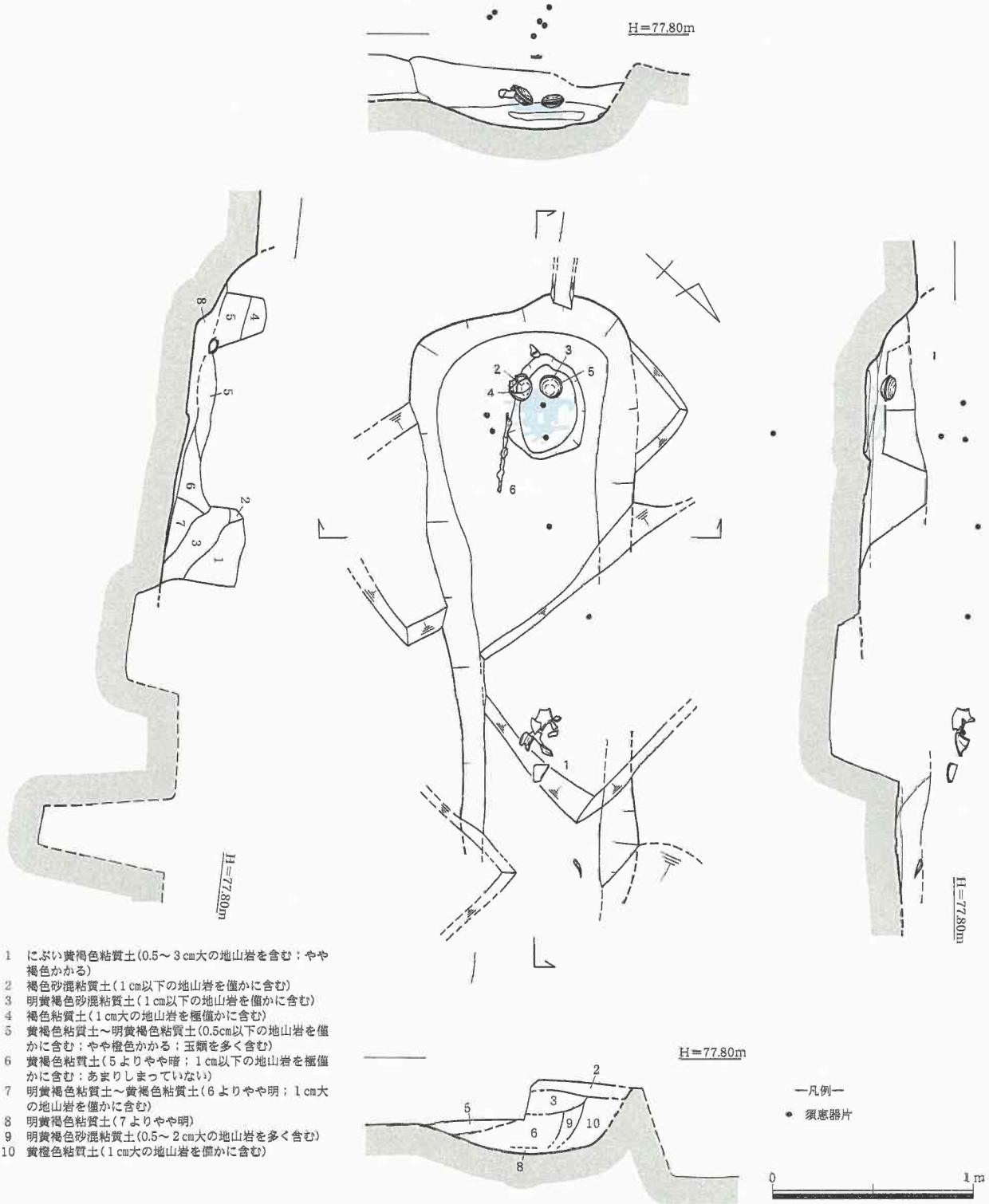
なお上述の遺物等から見て、倭文６号墳の埋葬時期は古墳時代中期末と考えられる。

7．倭文７号墳（付図３、４，第35～39図，PL28～30、55、56）

１）位置と墳丘

倭文７号墳は調査地のほぼ中央部、５号墳の北西、６号墳の西に隣接して位置し、前述城跡の平坦面７にほぼ重なる。標高は77.9mで、５号墳より1.7m程低いが、尾根一ピークの端部に当たり、西から北、東にかけて一望できる。

墳丘は現況では尾根の高位側、即ち墳丘の南から東、北にかけて円弧状に掘削して尾根から切り離しその内側に多量の盛土を行って造営しているように見られる。ところが調査の結果本古墳からは墳頂部と盛土下の２か所から時期差のある埋葬施設が検出されている。このことからもう少し詳しく見ると、

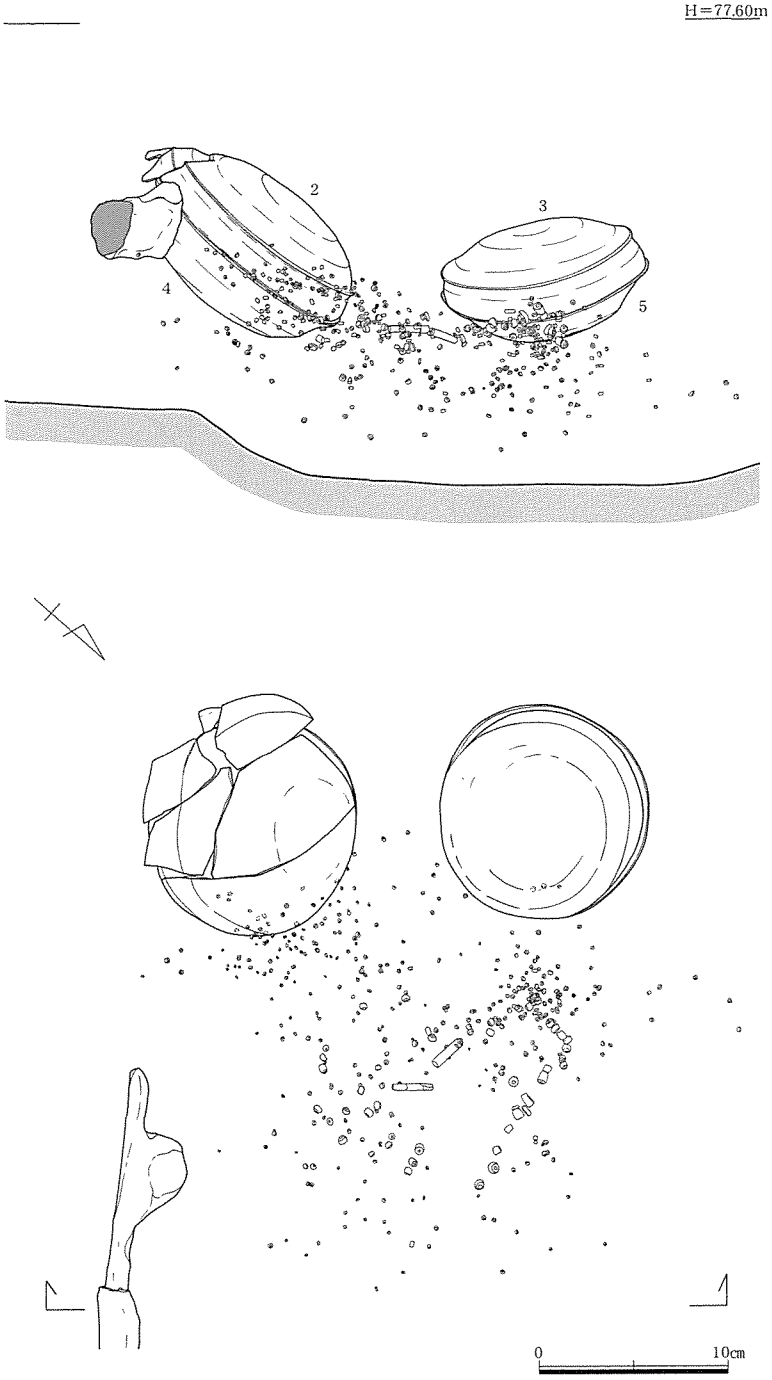


第35図　倭文７号墳 第１主体部実測図

現況で見る限りまず墳丘基底部の下位側に標高76m付近までほぼ水平になるように盛土(下位盛土)を行っている。この時点ではその上位側には盛土はなされず、地山状態で、この地山に最初の墓壙(第2主体部)が掘り込まれる。次いでその上に約0.8mの盛土(中位盛土)が行われる。この際第2主体部上の盛土に乱れはなく、盛土下の埋葬であることは明確である。ただ、現況の東西方向でみると第2主体部はあまりにも西端に位置し、この時点での墳丘盛土の範囲は現況よりまだ広かった可能性も考えられる。その後この上にさらに盛土(上位盛土)がなされるが、現在その厚さは1m程度遺存している。そしてこの上から別の墓壙(第1主体部)が掘り込まれている。円弧状の掘削とそれぞれの盛土の時期の関係が明確ではないが、現況の墳形は円形である。また規模は遺存値で、直径13.3m、高さは北西裾から4.55m、南東周溝底から1.15mを測る。盛土の遺存高は最大で2.2m程度である。

2)埋葬施設と出土遺物等

埋葬施設は上述のとおり墳頂部中央付近から1基(第1主体部)と墳丘西端付近の盛土下から1基(第



第36図　倭文7号墳 第1主体部遺物出土状況図(部分)

２主体部)の計２基を検出した。

①第１主体部

本主体部は検出に当たっては平面精査を丹念に繰り返したが須恵器片が散見するものの墓壙の確定ができず、途中からベルトを残したグリッド調査に切り替えて遺物がややまとまりをもつ北側を先行して掘り下げたが、やはり墓壙が検出できず、南側の掘り下げで枕とみられる遺物を検出するに至ってようやく墓壙を確認した。上面がかなり流失、削平されており北東側小口は不明であるが、隅丸長方形と考えられる墓壙は主軸を尾根に直交方向のＮ－46.5°－Ｅにとる。盛土中に掘り込まれるもので、規模は遺存値で長さ2.96m以上、幅1.13m、深さは最深部でも0.3m程度である。

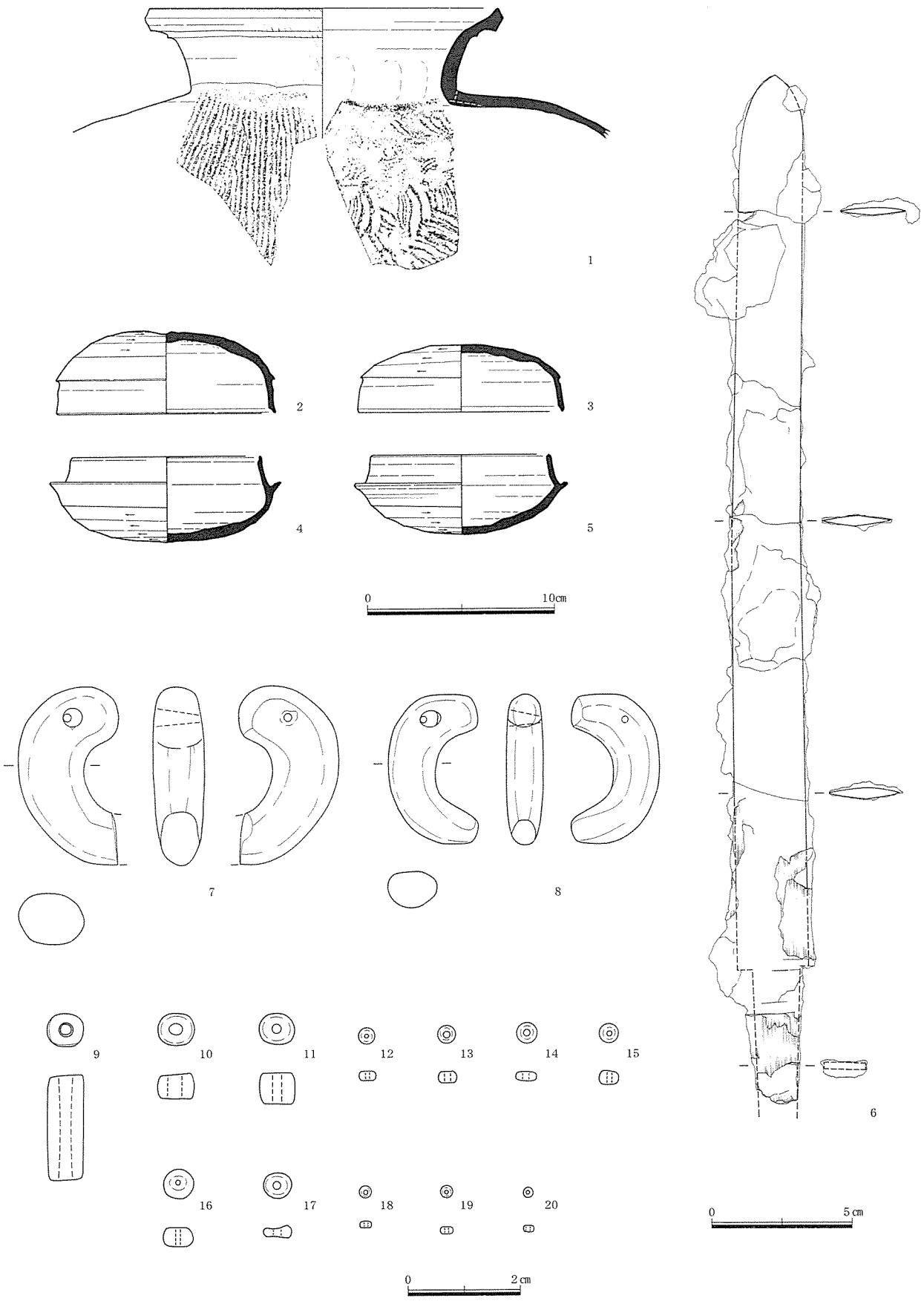
遺物は上述のとおり墳頂部から墳丘斜面にかけて須恵器体部片が散見されたが、いずれも後世の撹乱によって元位置を保っていないものと考えられる。ただ、主体部中央よりやや北東から検出した甕(第37図－１)は比較的まとまりをもっており、あるいは元位置に近い可能性もある。墓壙内遺物についてみると、南西小口壁から20cm強の床面から蓋杯２セット(同図－２・４、３・５)とその北東側から玉類(同図－７～20)、さらにその東から切っ先を南西小口側に向けて主体部中心側に下がるようにやや傾けた遺存長36.7cmの鉄剣(同図－６)を検出した。蓋杯の２セットは５cm弱間をあけてそれぞれその内側に下がるように傾斜をつけて置かれており、その出土状況から土器枕とみられる。甕(１)は口縁部が外傾して開き端部で上下につまみ出し肩部は大きく張り出す。頸部外面に波状文はなく、肩部は外面叩き目で内面は当て工具痕が認められる。杯蓋(２、３)は天井部は丸みをもち、天井部と口縁部の境の稜は鈍い。杯身(４、５)は立ち上がりは内傾し、(４)は端部に段をもつ。玉類は遺存状態の悪いものもあり数が特定しかねるが、図化した(７～20)を含めて勾玉２点、管玉２点、小玉432点以上が墓壙床面から２～10cm強浮いた状態で検出されている。出土位置が明確なもののうち、検出範囲の中央から北寄りに位置する管玉とやや大振りの小玉には規則性が認められ連結されていたことが推定されるが、その他については不明である。

②第２主体部

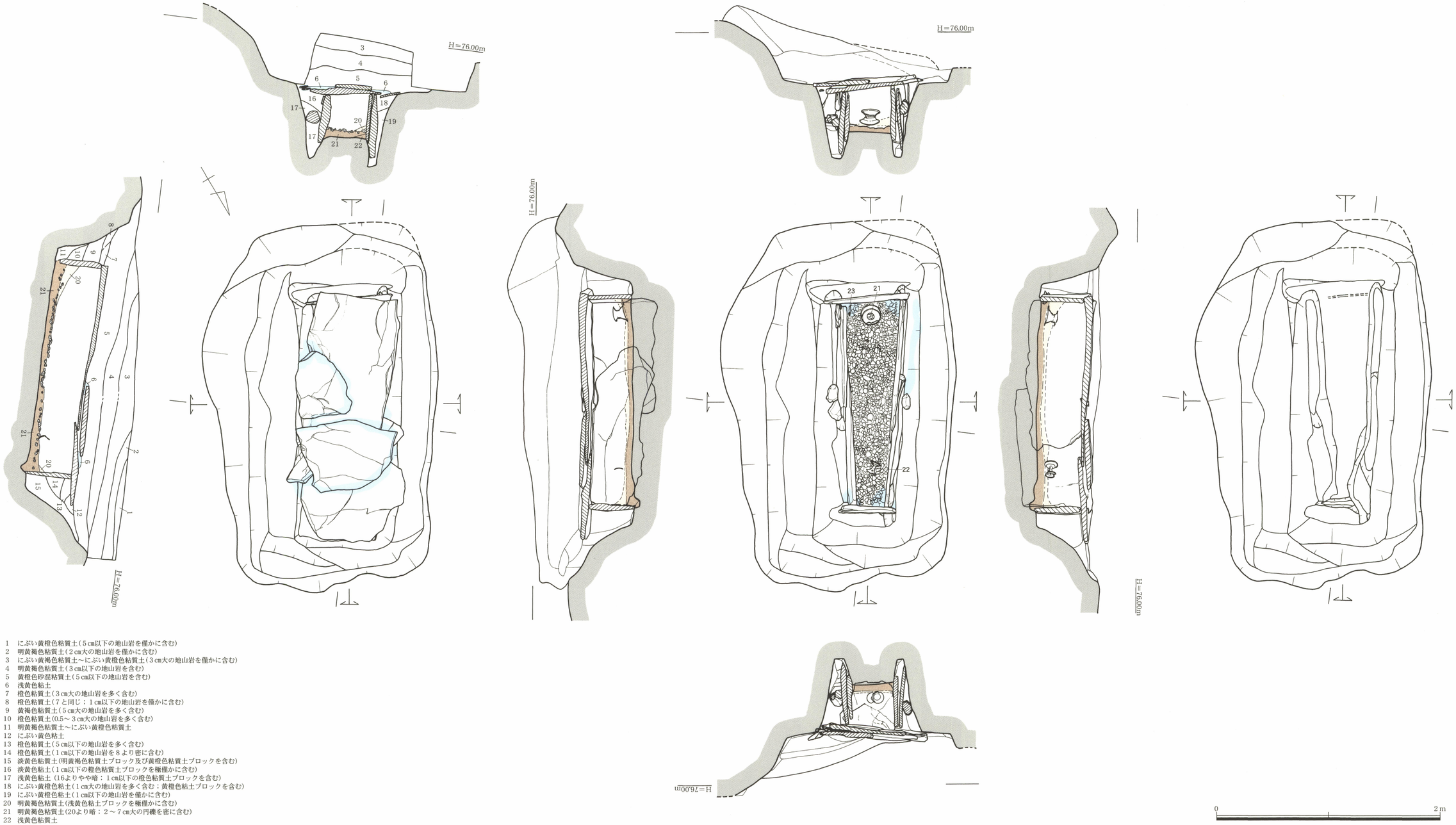
本主体部は盛土確認の墳丘断割の際その一部が検出され、盛土除去を行って調査を実施した。上述のとおり盛土前の地山上から掘り込まれる墓壙は、隅丸の長方形状を呈し、二段墓壙となる。主軸は第１主体部とやや軸を振るＮ－30.5°－Ｅにとり、その中に板石を組み合わせた箱式石棺が納められている。墓壙の規模は、長さ3.30m、幅2.11m、深さは最大値で1.0mである。墓壙底には小口および側板を据え付けるための溝が両側に深く、両小口側に浅く掘られている。

石棺の規模は、内法で長さ1.82m、幅は南側小口(頭位)で0.48m、北側小口(足位)で0.30m、深さは南側で0.38m、北側で0.30mを測る。頭位に深く広い傾向がみられる。棺構造としては、両側に２枚ずつの板石を用い、それらを挟むように両小口に各１枚の板石を配して上面レベルがほぼそろうように組み合わせている。小口板と側板の接点付近には目張りにされたとみられる粘質土が認められる。棺内床面には２～５cm程度の円礫を敷き詰めて床としている。蓋石はまず大きな２枚の板石の一部を重ねて棺を覆い、つぎにこの２枚の隙間と棺との隙間を覆う別の小振りな板石を置いている。そしてそれらの接する外周には丁寧に粘質土による目張りが施されている。なお各板石についてみると上面に当たる部分は丁寧なカットがなされているが、両側の石についてはその下位は土に刺さりやすくするためか尖った状態で残されている。両小口の板石の下位は尖った状態とはいえず、その溝の状況とあわせると側板を小口板が挟むというよりは側板に小口板を添えて固定しているといった方がよいのかもしれない。

遺物は棺内から、南小口側板に近接して打ち欠かれた台部を上にした鼓形器台(第38図－21)と、南小口側に切先を向け東側板側に刃部を向けた刀子(同図－23)が、また北小口板から30cm弱中心側から高杯(同図－22)が検出された。その検出状況から転用枕と考えられる鼓形器台(21)は受部・台部ともに直線的に端部方向へと開き、接合部には短く鋭い稜をもつが、台部が短い傾向がみえる。有段の高杯



第37図　倭文７号墳 第１主体部出土遺物実測図



1　にぶい黄橙色粘質土（5㎝以下の地山岩を僅かに含む）
2　明黄褐色粘質土（2㎝大の地山岩を僅かに含む）
3　にぶい黄褐色粘質土～にぶい黄橙色粘質土（3㎝大の地山岩を僅かに含む）
4　明黄褐色粘質土（3㎝以下の地山岩を含む）
5　黄橙色砂混粘質土（5㎝以下の地山岩を含む）
6　浅黄色粘土
7　橙色粘質土（3㎝大の地山岩を多く含む）
8　橙色粘質土（7と同じ；1㎝以下の地山岩を僅かに含む）
9　黄褐色粘質土（5㎝大の地山岩を多く含む）
10　橙色粘質土（0.5～3㎝大の地山岩を多く含む）
11　明黄褐色粘質土～にぶい黄橙色粘質土
12　にぶい黄色粘土
13　橙色粘質土（5㎝以下の地山岩を多く含む）
14　橙色粘質土（1㎝以下の地山岩を8より密に含む）
15　淡黄色粘質土（明黄褐色粘質土ブロック及び黄橙色粘質土ブロックを含む）
16　淡黄色粘土（1㎝以下の橙色粘質土ブロックを極僅かに含む）
17　浅黄色粘土（16よりやや暗；1㎝以下の橙色粘質土ブロックを含む）
18　にぶい黄橙色粘土（1㎝大の地山岩を多く含む；黄橙色粘土ブロックを含む）
19　にぶい黄橙色粘土（1㎝以下の地山岩を僅かに含む）
20　明黄褐色粘質土（浅黄色粘土ブロックを極僅かに含む）
21　明黄褐色粘質土（20より暗；2～7㎝大の円礫を密に含む）
22　浅黄色粘質土

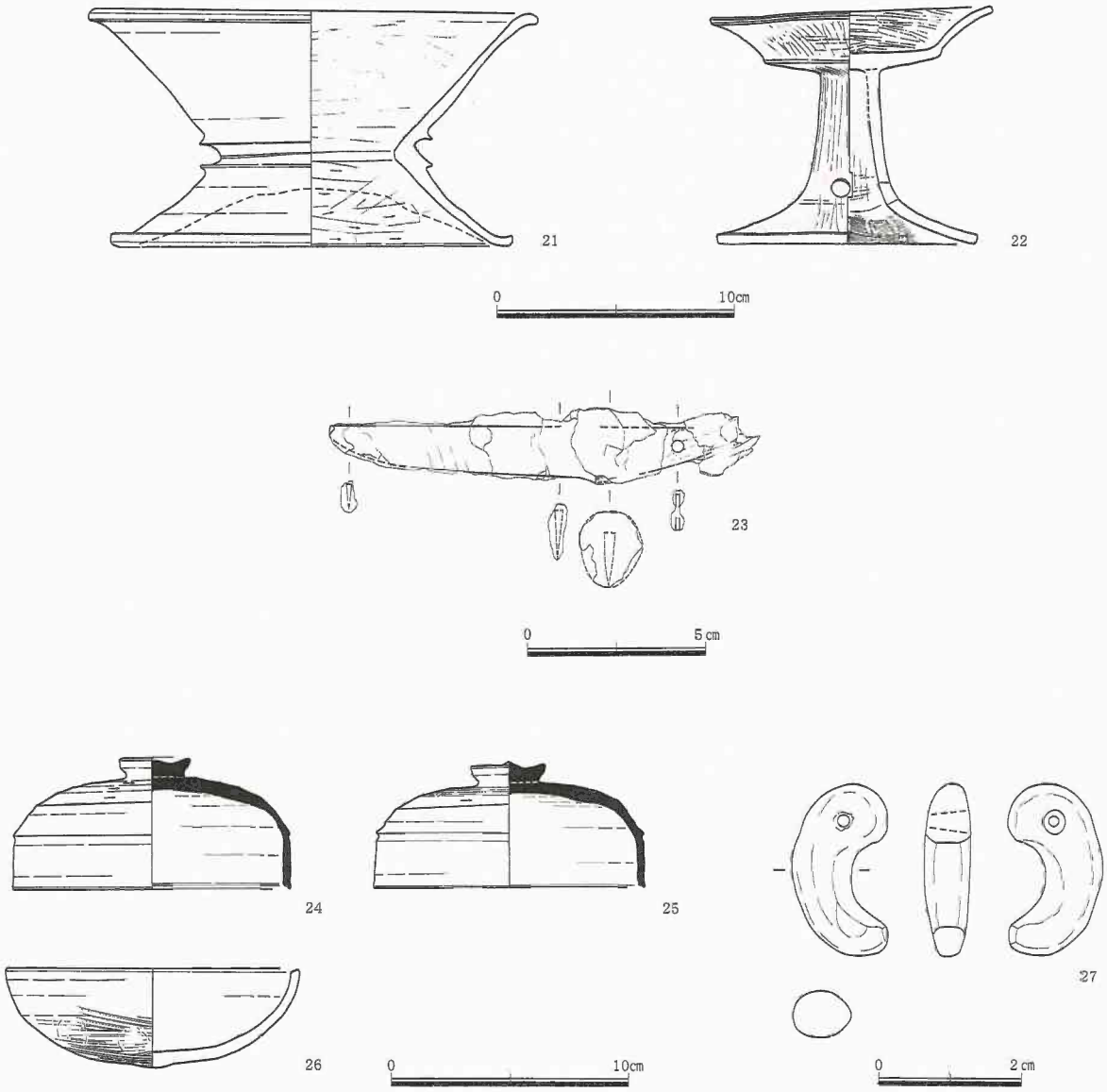
第38図　倭文7号墳 第2主体部実測図

(22)は浅い口縁部は外反して開き、わずかに開きながら下りる脚柱部は下位に円孔３がなされ裾部でハの字状に大きく開く。刀子(23)は切先がわずかに折れ曲がるが完存の12.08cmを計り、鞘口部分には鞘の遺存か、何らかの有機物状のものが認められる。

３)その他の遺物

本墳からは埋葬施設以外に、北側墳丘斜面表土中から勾玉(第39図－27)、上位盛土と中位盛土の境界付近から須恵器蓋(同図－24、25)、土師器椀(同図－26)、赤彩の高杯片が出土している。勾玉(27)は濃緑色の碧玉とみられ、ほかの勾玉とは材質が異なり、第１主体部からの流出遺物かどうか詳細は不明である。有蓋高杯の蓋とみられる(24、25)はいずれも天井部中央に中央が凹むつまみをもつもので、天井部と口縁部とを分ける稜は鋭さに欠けている。椀(26)は内湾して立ち上がる口縁部の端部に面をもつ。

なお上述の遺物から、倭文７号墳の第１主体部の埋葬時期は古墳時代中期末と考えられ、第２主体部の埋葬時期は古墳時代前期後半代と考えられる。時期差があるが、古い古墳の上に新しい古墳が造営されたものと考えるべきか不明である。



第39図　倭文７号墳 第２主体部及び盛土・表土出土遺物実測図

8．倭文８号墳(付図３、４，第40～43図，PL30～32、57)

1)位置と墳丘

倭文８号墳は調査地中央から北西に伸びる尾根上に立地し、７号墳の北西約15mに位置する。前述城跡の平坦面６にほぼ重なる。標高は69.2mで、７号墳より8.7m程低い。

墳丘は、自然の流失によるものか城の時期の削平か明確ではなく、かなり不明瞭となっているが墳形はややつぶれた円形と考えられる。現況では前章で述べたとおり尾根の高位側は城の時期の堀によってくっきりと掘り込まれている。堀の方が大きいのか断面で確認はできなかったが、位置的に見ても本墳もおそらく堀とほぼ重なる位置にまず周溝を掘り、墳丘を丘陵から切り離していたものと考えられる。と同時に断面観察から他の外周も裾部を地山カットし、さらに盛土を行うことで墳丘を形成したものと考えられる。規模は、径は北東～南西で12.23m、北西～南東で10.93mとややつぶれ、高さは北東裾から2.08m、北西裾から1.63mを測る。明確な旧表土層は認められないが、盛土の遺存高は最大で0.5m程度とみられる。

2)埋葬施設と出土遺物等

埋葬施設は現況の墳頂部中央よりやや南東側から１基(第１主体部)と、その南東側に近接して平行しながらやや南東にずれて１基(第２主体部)の計２基を検出した。

①第１主体部

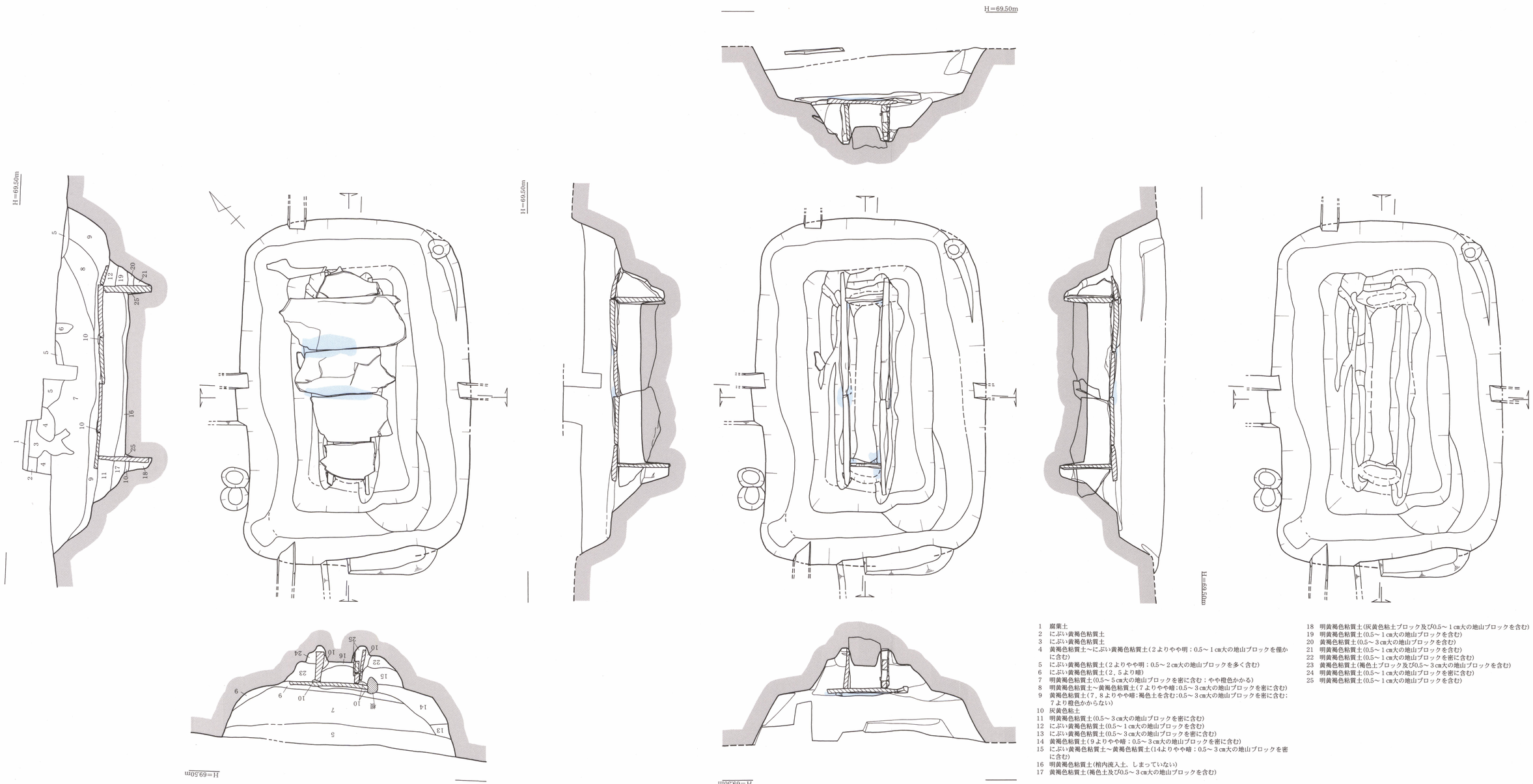
本主体部は検出に当たっては平面精査を丹念に繰り返したが墓壙の確定ができず、途中からベルトを残したグリッド調査に切り替えて掘り下げたが、やはり墓壙が検出できず、サブトレンチを掘り下げて石材が確認された段階で最精査を行ってようやく検出した。組合せ式の箱式石棺を内部主体とする墓壙は、盛土中から地山まで掘り込んでおり、隅丸の長方形状を呈する。二段墓壙で、主軸は尾根と直交方向のN－43°－Eにとる。規模は、長さ3.39m、幅2.30m、深さ0.81mを測る。墓壙底の各壁直下より内側には小口および側板を据え付けるための幅20cm前後、深さ15～20cm程度の溝が両小口側に深く、両側側に浅く掘られている。

石棺の規模は、内法で長さ1.57m、幅は北東側小口で0.35m、南西側小口で0.30m、深さは北東側で0.22m、南西側で0.26mを測る。棺構造としては、両側に２枚ずつの板石を用い、それらに挟まれるように両小口に各１枚の板石を配している。その際両側のそれぞれの石材は、組合せの端部を丁寧に調整しており、端部を重ねるのではなくまっすぐ一直線状になるように小口面をつないで組み合わせている。また両小口部の石材のレベルが微妙に高いが、ほぼ上面レベルがそろうように組み合わせており、各石材の接点付近には目張りにされたとみられる粘土が認められる。棺内には別の土で床を形成した痕跡は認められなかった。蓋石についてみると、基本的に４枚の板石で北東側から大きい順に横長に並べて棺を覆い、ほとんど棺外であるが北東端に小さな板石を置いている。その際、側石と同様に各石の端部は重ね合わせるのではなく、各小口面を接して、しかも必要に応じて対する石の小口面に合わせるように丁寧な調整を行ってできるだけ隙間のないようにつなぎ合わせている。さらにそのつなぎ部分には粘土による目張りが施されている。なお棺内には蓋の内面も含めてベンガラとみられる赤色顔料が認められる。また棺内から遺物は検出されなかったが、棺幅や蓋石の配置状況から北東頭位と考えられる。

②第２主体部

本主体部は上述のとおり第１主体部の南東20cm程度にやや南東にずれてほぼ平行に位置する。盛土中から地山まで掘り込んでおり、隅丸の長方形状を呈する。主軸は第１主体部とほぼ同様のN－40.5°－Eにとり、断面観察によるとその中に木棺が納められていたものと考えられる。規模は、長さ3.03m、幅1.08m、深さ0.42mを測り、第１主体部よりその床面は30cm程度高くなる。

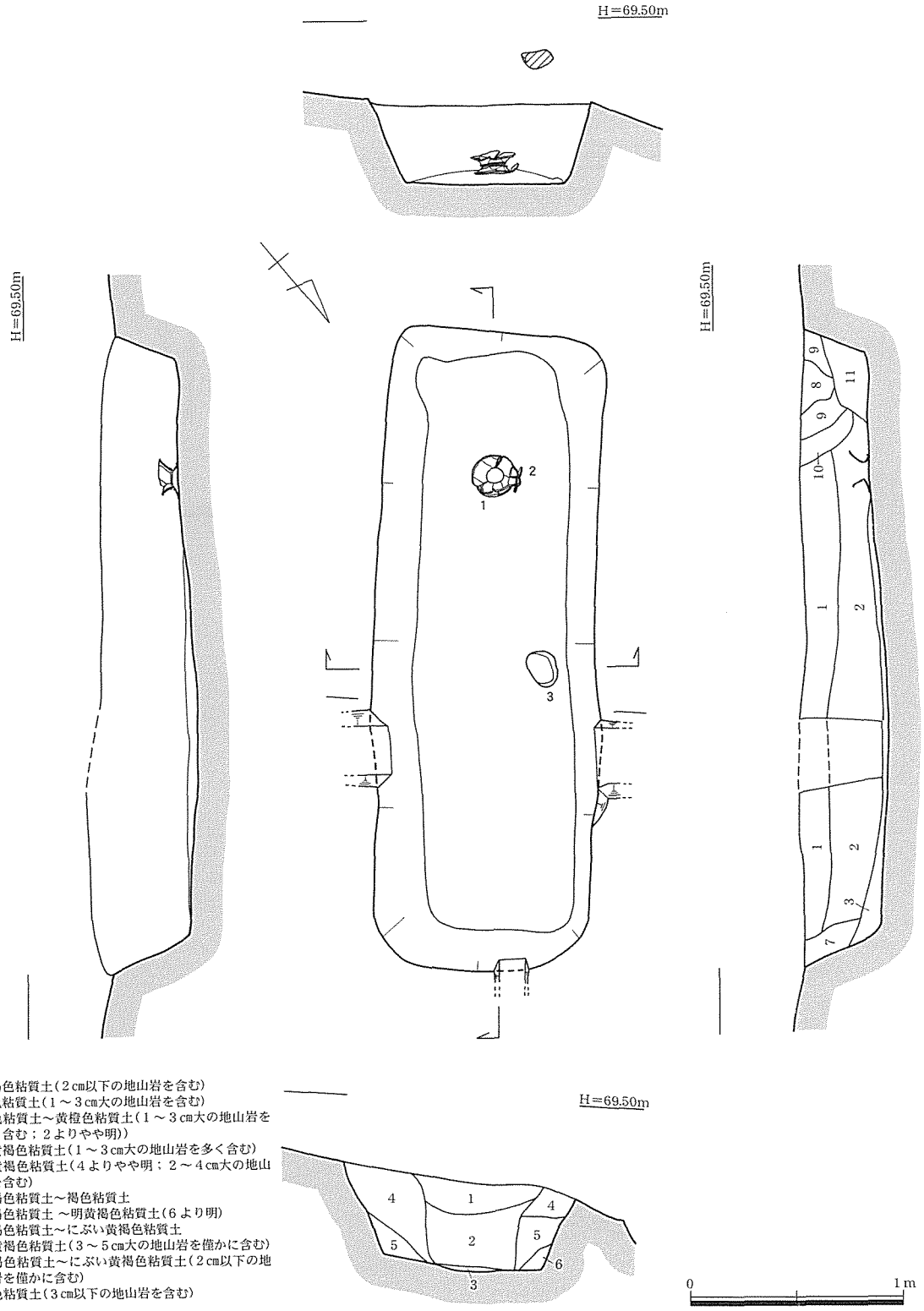
遺物は南西小口から約50cmほど内側の棺内から鼓形器台(第42図－１)とその北東裾から鉇(同図－２)が、また墓壙直上の墳丘上から磨石(同図－３)が検出された。鼓形器台(１)は受部、台部ともに端



1　腐葉土
2　にぶい黄褐色粘質土
3　にぶい黄褐色粘質土
4　黄褐色粘質土～にぶい黄褐色粘質土（2よりやや明；0.5～1㎝大の地山ブロックを備かに含む）
5　にぶい黄褐色粘質土（2よりやや明；0.5～2㎝大の地山ブロックを多く含む）
6　にぶい黄褐色粘質土（2，5より暗）
7　明黄褐色粘質土(0.5～5㎝大の地山ブロックを密に含む；やや橙色かかる）
8　明黄褐色粘質土～黄褐色粘質土（7よりやや暗；0.5～3㎝大の地山ブロックを密に含む）
9　黄褐色粘質土（7，8よりやや暗；褐色土を含む；0.5～3㎝大の地山ブロックを密に含む；7より橙色かからない）
10　灰黄色粘土
11　明黄褐色粘質土(0.5～3㎝大の地山ブロックを密に含む）
12　にぶい黄褐色粘質土(0.5～1㎝大の地山ブロックを含む）
13　にぶい黄褐色粘質土(0.5～3㎝大の地山ブロックを密に含む）
14　黄褐色粘質土（9よりやや暗；0.5～3㎝大の地山ブロックを密に含む）
15　にぶい黄褐色粘質土～黄褐色粘質土(14よりやや暗；0.5～3㎝大の地山ブロックを密に含む）
16　明黄褐色粘質土(棺内流入土，しまっていない）
17　黄褐色粘質土(褐色土及び0.5～3㎝大の地山ブロックを含む）
18　明黄褐色粘質土(灰黄色粘土ブロック及び0.5～1㎝大の地山ブロックを含む）
19　明黄褐色粘質土(0.5～1㎝大の地山ブロックを含む）
20　黄褐色粘質土(0.5～3㎝大の地山ブロックを含む）
21　明黄褐色粘質土(0.5～1㎝大の地山ブロックを含む）
22　明黄褐色粘質土(0.5～1㎝大の地山ブロックを密に含む）
23　黄褐色粘質土(褐色土ブロック及び0.5～3㎝大の地山ブロックを含む）
24　明黄褐色粘質土(0.5～1㎝大の地山ブロックを密に含む）
25　明黄褐色粘質土(0.5～1㎝大の地山ブロックを含む）

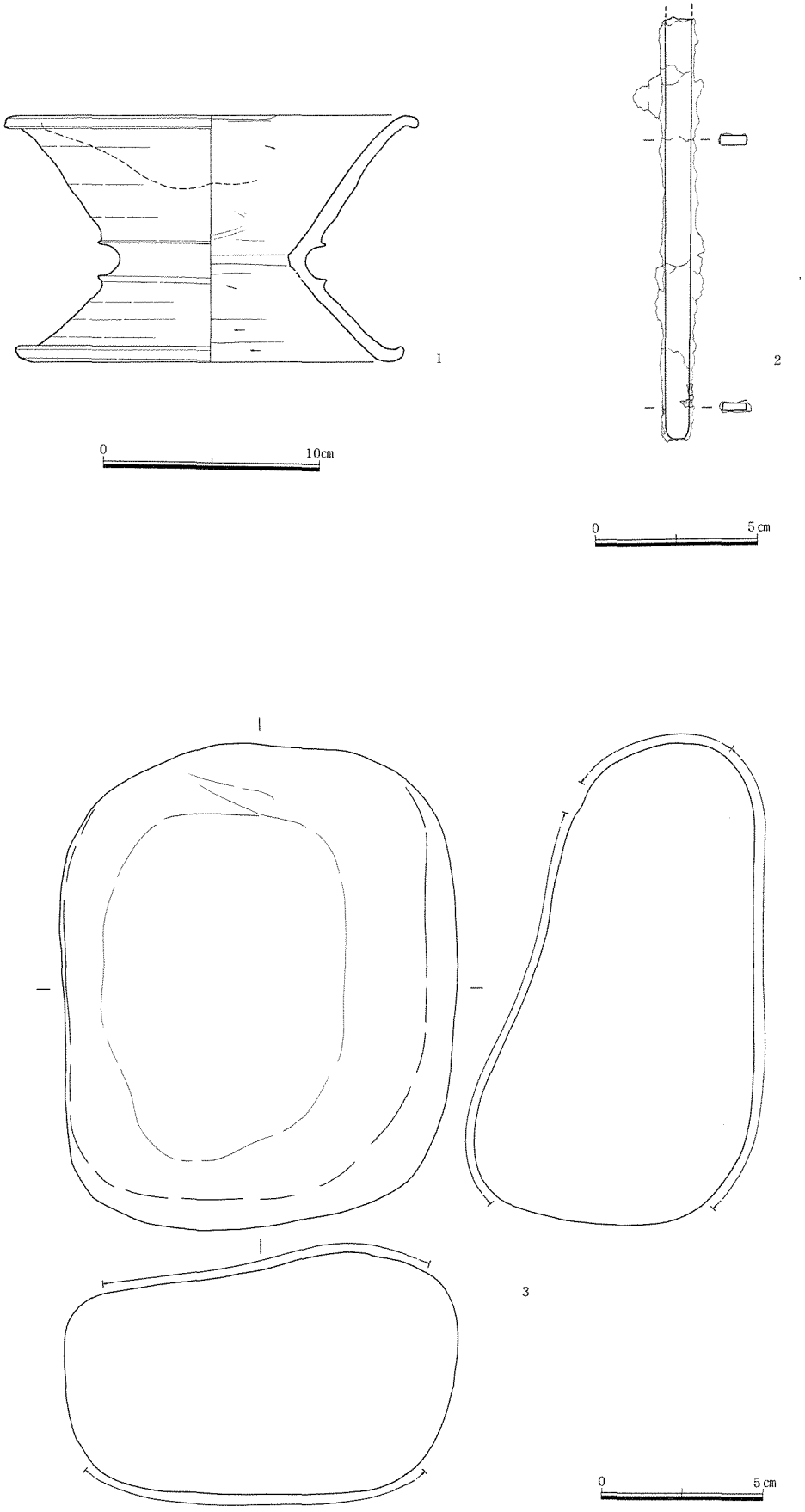
0　2m

第40図　倭文８号墳 第１主体部実測図



1　黄褐色粘質土（2cm以下の地山岩を含む）
2　橙色粘質土（1～3cm大の地山岩を含む）
3　橙色粘質土～黄橙色粘質土（1～3cm大の地山岩を多く含む；2よりやや明））
4　明黄褐色粘質土（1～3cm大の地山岩を多く含む）
5　明黄褐色粘質土（4よりやや明；2～4cm大の地山岩を含む）
6　明褐色粘質土～褐色粘質土
7　明褐色粘質土 ～明黄褐色粘質土（6より明）
8　黄褐色粘質土～にぶい黄褐色粘質土
9　明黄褐色粘質土（3～5cm大の地山岩を僅かに含む）
10　黄褐色粘質土～にぶい黄褐色粘質土（2cm以下の地山岩を僅かに含む）
11　橙色粘質土（3cm以下の地山岩を含む）

第41図　倭文8号墳 第2主体部実測図



第42図　倭文８号墳 第２主体部出土遺物実測図

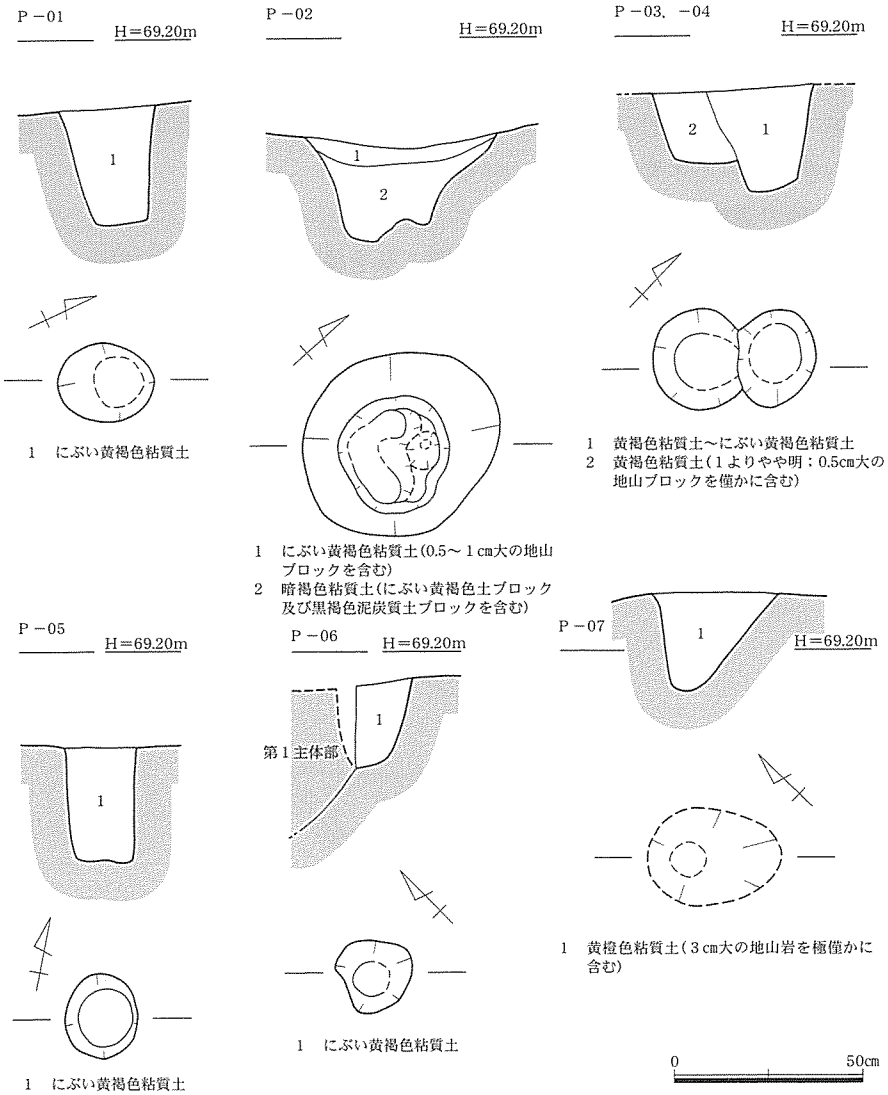
部は外反して面をもつもので、受部には打ち欠きがあり位置的にも転用枕と考えられる。鉇(2)は断面長方形の茎部のみの遺存である。磨石(3)は両面と端面の一部に磨り痕が認められる。

3)その他の遺構

本墳からは埋葬施設以外に墳頂部からピット状遺構7基(P－01～07)が検出された。検出状況および断面観察からいずれも主体部検出面付近から地山まで掘り込まれるものと考えられる。

第1主体部の南から検出したP－01は平面楕円形、断面逆台形状、長さ0.26m、幅0.21m、深さ0.32m、底面標高68.71mを測る。そのすぐ北西に位置するP－02は平面、断面ともに不定形で、長さ0.55m、幅0.48m、深さ0.28m、底面標高68.66mを測る。第1主体部の北西壁に近接するP－03はP－04に切られるが、平面円形、断面逆台形状、長さ(0.22)m、幅0.27m、深さ0.19m、底面標高68.86mを測る。P－04平面円形、断面逆台形状、長さ0.28m、幅0.26m、深さ0.28m、底面標高68.79mを測る。P－03、04の約2m北東のP－05は平面円形、断面長方形、長さ0.22m、幅0.19m、深さ0.31m、底面標高68.64mを測る。P－06は第1主体部の南東隅と切りあっているが、その関係は明確にはできなかった。平面はやや不定な円形で、断面逆台形状、長さ0.20m、幅0.19m、深さ0.24m、底面標高68.89mを測る。第2主体部の南東に位置するP－07は断面からの検出のため平面形は不明確ながら、断面U字形で、深さ0.26m、底面標高69.09mを測る。これらの遺構は一見規則性のない配置となっているが、両主体部の外縁部を囲うようにもみられる。底面標高の違いもあり今のところ明確にはできなかったが、埋葬儀礼等も含めて今後も検討が必要である。

なお第1主体部からの遺物の出土はなかったものの、その石棺の丁寧な組み方と上述の第2主体部の遺物から、倭文8号墳の埋葬時期は古墳時代前期後半代と考えられる。



第43図　倭文8号墳 検出ピット実測図

9．倭文９号墳(付図３、４，第44～46図，PL33、34、57)

1)位置と墳丘

倭文９号墳は調査地中央から北西に伸びる尾根上に立地し、８号墳の北西に隣接する。前述城跡の平坦面５にほぼ重なる。標高は66.6mで、８号墳より2.6m程低い。

墳丘は８号墳と同様に流失等によりかなり不明瞭であるが、南西および南東に本来はつながっていたものと考えられるが、わずかながら円弧状の溝の痕跡を認めた。このため本墳は円墳と考えられ、尾根の高位側に円弧状の溝を掘るとともにそのほかは墳裾の削り出しを行い、さらに若干の盛土を行なって造営したものと考えられる。規模は北東～南西径10.9m、高さは北西側墳裾から1.63mを測る。

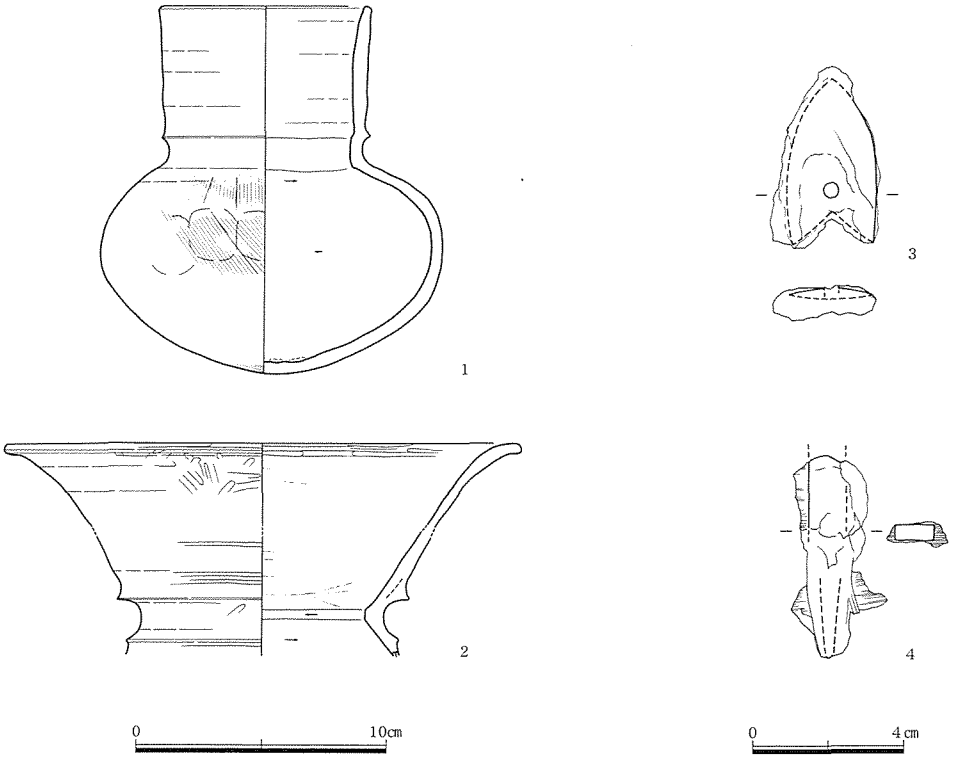
2)埋葬施設と出土遺物等

埋葬施設は現況の墳頂部中央から尾根とほぼ同一方向のN－38.5°－Wに主軸をとって１基が検出された。地山の硬い岩盤を掘り込む墓壙は、隅丸の長方形状を呈し、二段に掘り込まれる。岩盤の節理のためか墓壙の南東側小口部掘り方は部分的に剥離したような形状となるが、規模は、長さ3.92m、幅2.60m、深さ1.06mを測る。断面観察から内側の掘り込みにほぼあわせた長さ約2.8m、幅約0.75m程度の木棺が設置されたものと考えられる。

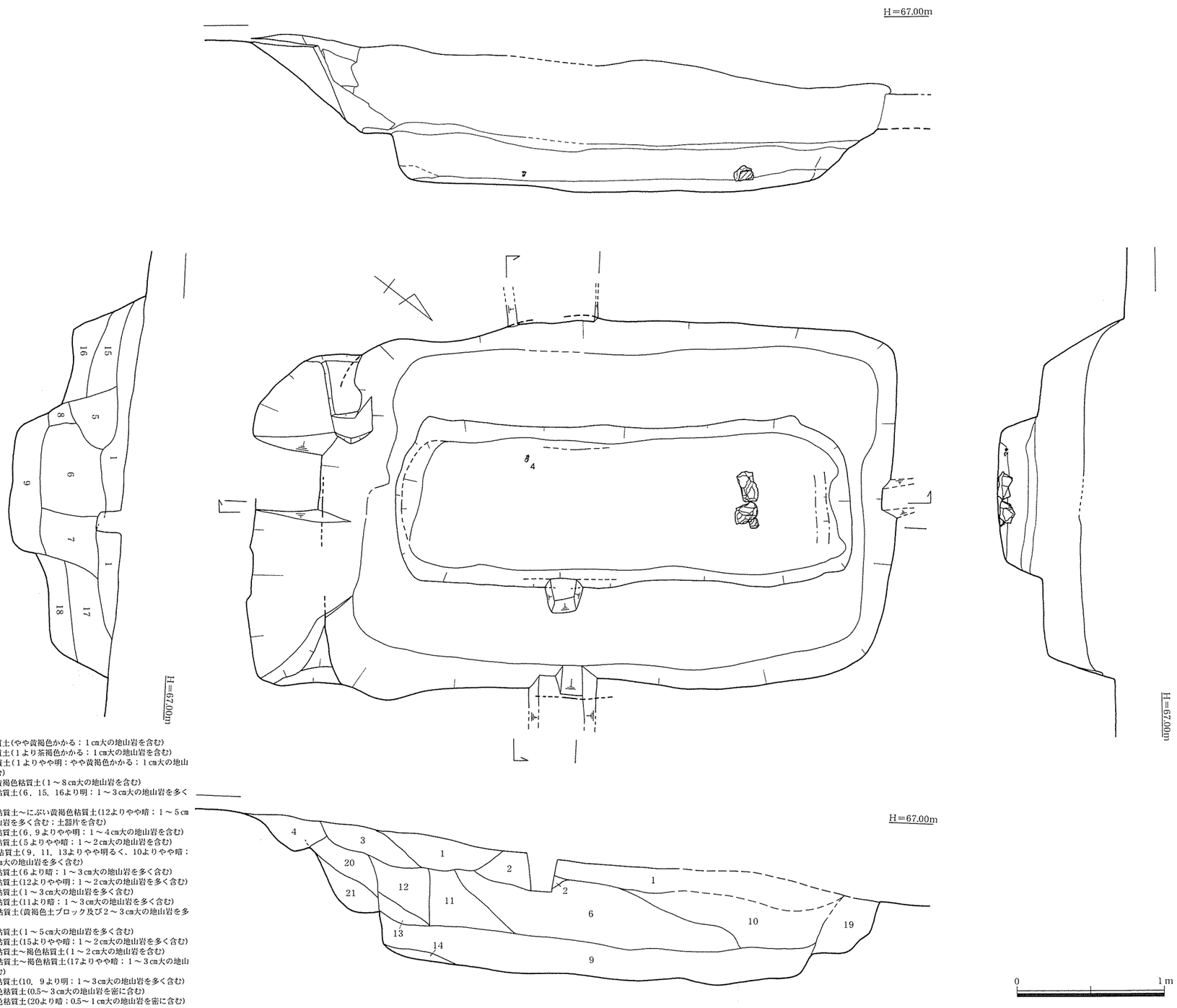
遺物は、棺の腐食による陥没とともに落ち込んだと考えられるやや暗めの第６層中から、墓壙上に置かれていたと考えられる土師器長頸壺(第44図－１)や鼓形器台(同図－２)が検出されている。また墓壙埋土中から鉄鏃(同図－３、４)が検出されたほか、北西小口側床面から15～20cm程度の地山と同質の石２個がちょうど枕状に検出されたが、石枕とみるべきか埋土のブロックとみるべきか判断に苦しむ。長頸壺(１)は直立する口縁部をもち下位の稜はやや鈍い。肩は大きく張り出している。受部が比較的深めの鼓形器台(２)は外反して開く口縁部の端部に平坦面をもつ。平面三角形状の鉄鏃(３)は両端刃造の無頸鏃で、中央部下位に径0.4cmの孔をもつ。頸部～茎部遺存の鉄鏃(４)は片面の直交方向に棺材の可能性も考えられる木質が付着している。

3)その他の遺構

本墳の南西側周溝外縁部から土器棺墓１基を検出した。上位の封土がかなり流失していたとみえ、表土除去中から土器片が確認されたため、現状では丘陵斜面付近ではあるものの慎重に掘り進めたところ、

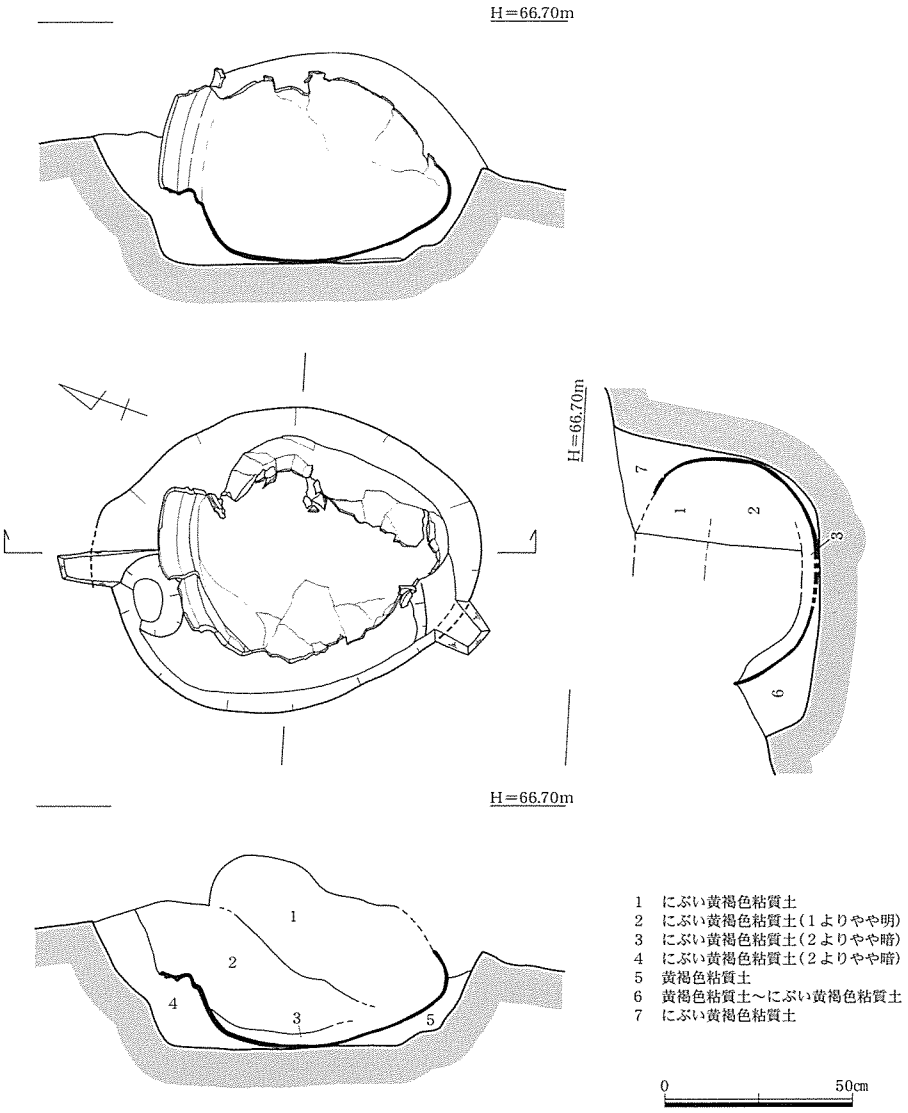


第44図　倭文９号墳 主体部出土遺物実測図



1　褐色粘質土(やや黄褐色かかる：1㎝大の地山岩を含む)
2　褐色粘質土(1より茶褐色かかる：1㎝大の地山岩を含む)
3　褐色粘質土(1よりやや明：やや黄褐色かかる：1㎝大の地山岩を含む)
4　にぶい黄褐色粘質土(1～8㎝大の地山岩を含む)
5　黄褐色粘質土(6，15，16より明：1～3㎝大の地山岩を多く含む)
6　黄褐色粘質土～にぶい黄褐色粘質土(12よりやや暗：1～5㎝大の地山岩を多く含む：土器片を含む)
7　黄褐色粘質土(6，9よりやや明：1～4㎝大の地山岩を含む)
8　黄褐色粘質土(5よりやや暗：1～2㎝大の地山岩を含む)
9　黄褐色粘質土(9，11，13よりやや明るく，10よりやや暗：1～5㎝大の地山岩を多く含む)
10　黄褐色粘質土(6より暗：1～3㎝大の地山岩を多く含む)
11　黄褐色粘質土(12よりやや明：1～2㎝大の地山岩を多く含む)
12　黄褐色粘質土(1～3㎝大の地山岩を多く含む)
13　黄褐色粘質土(11より暗：1～3㎝大の地山岩を多く含む)
14　暗褐色粘質土(黄褐色土ブロック及び2～3㎝大の地山岩を多く含む)
15　黄褐色粘質土(1～5㎝大の地山岩を多く含む)
16　黄褐色粘質土(15よりやや暗：1～2㎝大の地山岩を多く含む)
17　黄褐色粘質土～褐色粘質土(1～2㎝大の地山岩を含む)
18　黄褐色粘質土～褐色粘質土(17よりやや暗：1～3㎝大の地山岩を含む)
19　黄褐色粘質土(10，9より明：1～3㎝大の地山岩を多く含む)
20　明黄褐色粘質土(0.5～3㎝大の地山岩を密に含む)
21　明黄褐色粘質土(20より暗：0.5～1㎝大の地山岩を密に含む)

第45図　倭文9号墳 主体部実測図



第46図　倭文９号墳 周溝外縁部土器棺墓実測図

北西側に口縁部を向けて寝かした大型の壺と、北西～南東にやや長い卵形の墓壙を検出した。地山を掘り込む墓壙は主軸を主体部とはやや角度を振るN－20.5°－Wにとる。規模は、長さ1.03m、幅0.80m、最大遺存深0.56mを測る。図化できなかったが、壺は直立する複合口縁をもち肩の張りがやや認められるが比較的縦長で底部は平底となる。

なお主体部内遺物および土器棺から、本古墳の埋葬時期は古墳時代前期後半代と考えられる。

10. 土壙墓群４（付図３、４，第47～50図，PL34、35、58）

１）位置と現状

今回の調査地内からは古墳に伴わない土器棺墓、木棺墓および土壙計21基がある程度まとまりをもって４か所で検出されている。調査では便宜上尾根の先端部からそれぞれ土壙墓群１～４として分けて調査を実施した。このうち土壙墓群４は、調査地中央から北西に伸びる尾根上に立地し、９号墳の北西に隣接する。前述城跡の平坦面４にほぼ重なる。標高は64.3mで、９号墳より2.3m程低い。現況では墳丘状の高まりは全く認められないものの、南東～東にかけて地山の削り出しを行なってやや不定な長方形状の墓域を形成した痕跡が認められる。規模は南西～北東約12.4m、北西～南東約6.5mである。

2）埋葬施設と出土遺物等

墓域と見られる区画内からは中央部と南西部、北東部から計３基の埋葬施設を検出した。

①第１主体部

本主体部は墓域区画のほぼ中央部にほぼ東西方向のＮ－87.5°－Ｗに主軸をとって地山から掘り込まれる。地山の岩盤の節理のためか墓壙の南東側隅掘り方は部分的に剥離したような形状となるが、平面隅丸の長方形状で、規模は、長さ3.42m、幅1.81m、深さ0.85mを測る。断面観察からこのほぼ中央部に長さ約1.6m、幅約0.45m程度の木棺が設置されたものと考えられる。遺物は墓壙埋土中から土師器細片がわずかに出土したにとどまる。

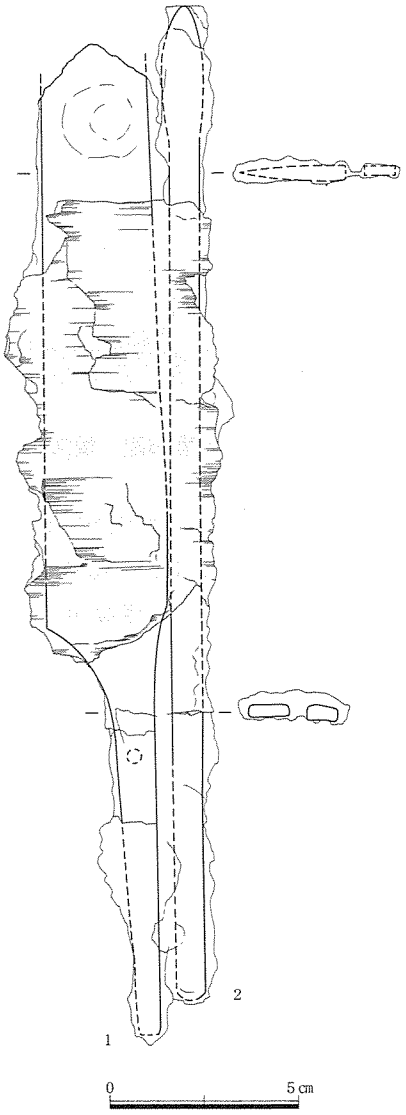
②第２主体部

墓域区画の南西側、第１主体部の２m程南西に位置する本主体部は、第１主体部と直交方向に近いＮ－24.5°－Ｅに主軸をとって地山から掘り込まれる。隅丸長方形状を呈する墓壙は崩落した部分もあると考えられるが、わずか３～20cm幅の段をもつ二段墓壙で、この段に基本的に７枚の厚手の板石を架けて雑ながら蓋としている。墓壙内にはこの蓋以外の構造物もその存在を示すものも検出されなかった。墓壙規模は、長さ2.23m、幅1.02m、深さ0.96mを測り、その内側の壙の規模は長さ1.75m、幅0.40m、深さ0.39mを測る。遺物は、墓壙北東小口床面から15～20cm程度の石２個を検出した。９号墳主体部内と異なり、混入の可能性は無く、やや内側に傾けた設置の仕方、位置から枕石と考えられる。

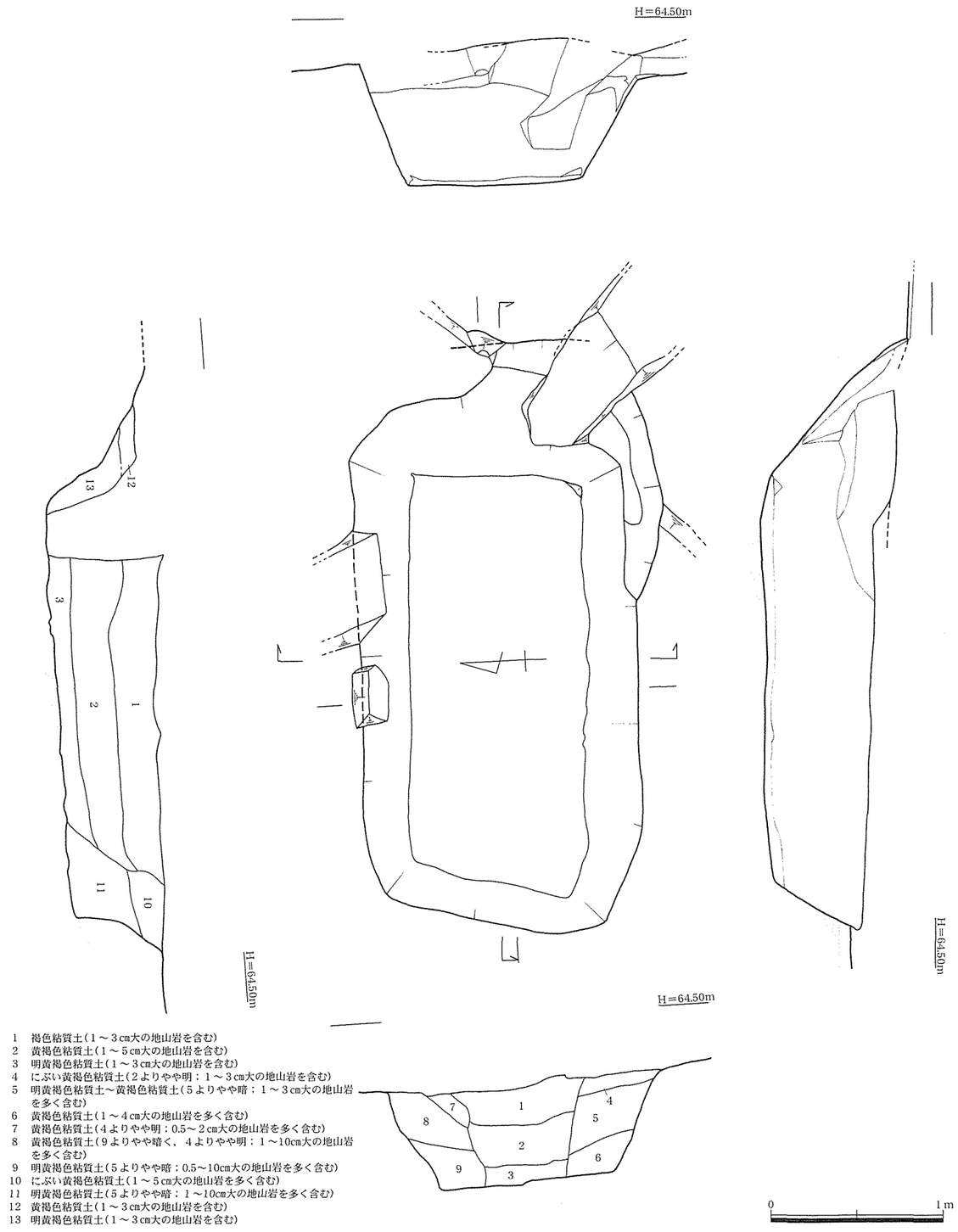
③第３主体部

墓域区画の北東側、第１主体部の２m程北東に位置する本主体部は、第１主体部と平行方向に近いＮ－57.5°－Ｗに主軸をとって地山から掘り込まれる。隅丸長方形状を呈する墓壙の規模は、長さ3.40m、幅1.80m、深さ0.86mを測りほぼ第１主体部と同規模である。断面観察からこのほぼ中央部に長さは不明であるが、幅約0.55m程度の木棺が設置されたものと考えられる。遺物は北西小口から30cmほど内側床面から銹で癒着した鉄刀（第47図－１）と鉈（同図－２）を検出した。両者の裏面には直交方向に棺材の一部の可能性が考えられる木質が遺存している。鉄刀（１）は切先が欠失しているが、遺存長26.5cmで目釘孔１が認められる。鉈（２）は完存で長さ26.4cmを計る。

なお上述の遺物等からは土壙墓群４の埋葬時期を確定できなかった。

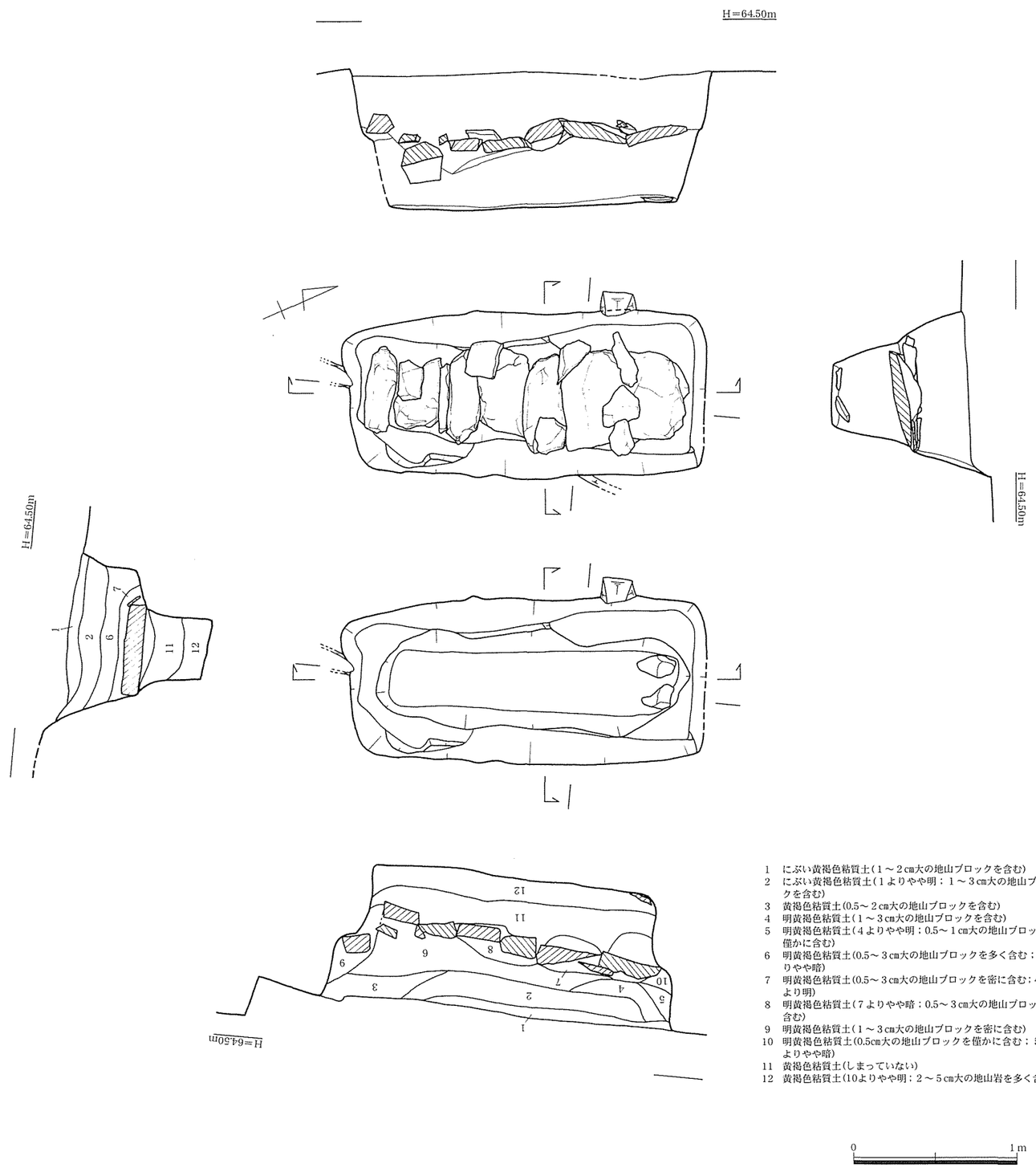


第47図　土壙墓群４　第３主体部出土遺物実測図



1　褐色粘質土（1～3㎝大の地山岩を含む）
2　黄褐色粘質土（1～5㎝大の地山岩を含む）
3　明黄褐色粘質土（1～3㎝大の地山岩を含む）
4　にぶい黄褐色粘質土（2よりやや明；1～3㎝大の地山岩を含む）
5　明黄褐色粘質土～黄褐色粘質土（5よりやや暗；1～3㎝大の地山岩を多く含む）
6　黄褐色粘質土（1～4㎝大の地山岩を多く含む）
7　黄褐色粘質土（4よりやや明；0.5～2㎝大の地山岩を多く含む）
8　黄褐色粘質土（9よりやや暗く、4よりやや明；1～10㎝大の地山岩を多く含む）
9　明黄褐色粘質土（5よりやや暗；0.5～10㎝大の地山岩を多く含む）
10　にぶい黄褐色粘質土（1～5㎝大の地山岩を多く含む）
11　明黄褐色粘質土（5よりやや暗；1～10㎝大の地山岩を多く含む）
12　黄褐色粘質土（1～3㎝大の地山岩を含む）
13　明黄褐色粘質土（1～3㎝大の地山岩を含む）

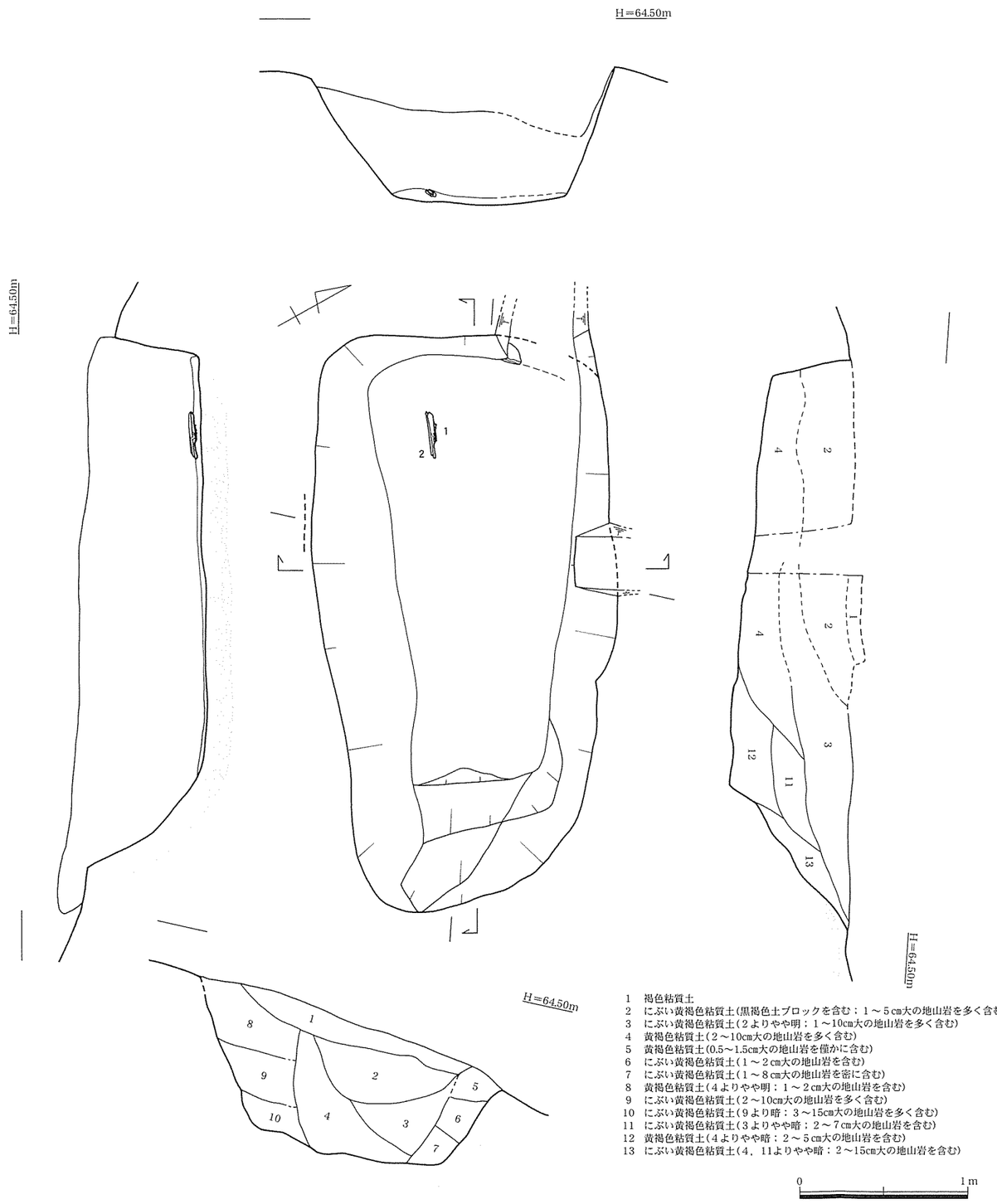
第48図　土壙墓群4　第1主体部実測図



1　にぶい黄褐色粘質土(1～2㎝大の地山ブロックを含む)
2　にぶい黄褐色粘質土(1よりやや明；1～3㎝大の地山ブロックを含む)
3　黄褐色粘質土(0.5～2㎝大の地山ブロックを含む)
4　明黄褐色粘質土(1～3㎝大の地山ブロックを含む)
5　明黄褐色粘質土(4よりやや明；0.5～1㎝大の地山ブロックを僅かに含む)
6　明黄褐色粘質土(0.5～3㎝大の地山ブロックを多く含む；4よりやや暗)
7　明黄褐色粘質土(0.5～3㎝大の地山ブロックを密に含む；4，5より明)
8　明黄褐色粘質土(7よりやや暗；0.5～3㎝大の地山ブロックを含む)
9　明黄褐色粘質土(1～3㎝大の地山ブロックを密に含む)
10　明黄褐色粘質土(0.5㎝大の地山ブロックを僅かに含む；5，7よりやや暗)
11　黄褐色粘質土(しまっていない)
12　黄褐色粘質土(10よりやや明；2～5㎝大の地山岩を多く含む)

0　1m

第49図　土壙墓群4　第2主体部実測図



第50図　土壙墓群４　第３主体部実測図

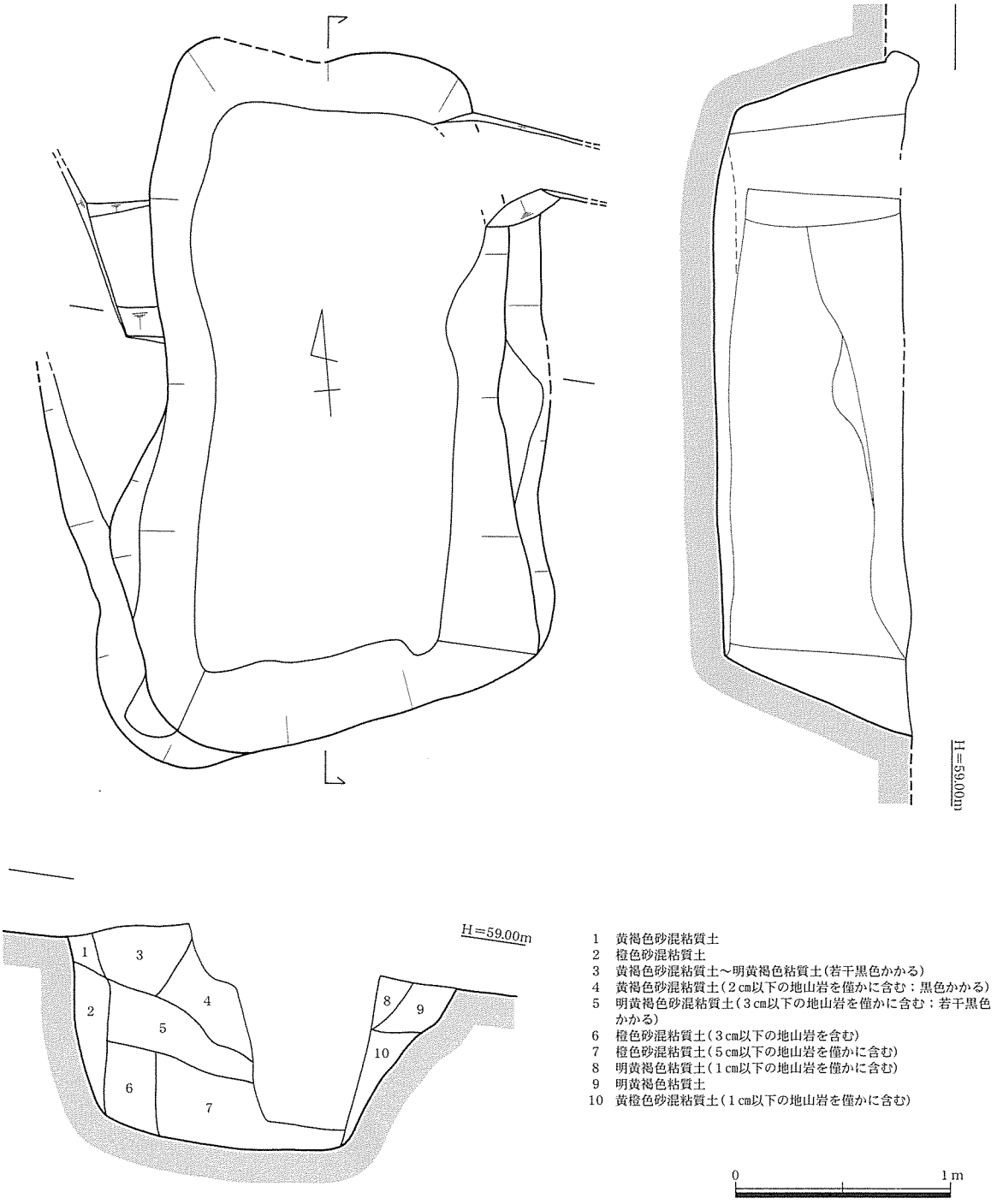
11. 土壙墓群３（付図３、４，第51～66図，PL35～37、58～60）

１）位置と現状

土壙墓群３は、調査地中央から北西に伸びる尾根の斜面上に立地し、土壙墓群４の北西約10mに位置する。前述城跡の平坦面３にほぼ重なり、標高は59m弱で土壙墓群４より５m以上下がる。現況では尾根上の斜面を鋭角に切り削って墓域としての平坦区域を造り出している。形状は円弧状で、自然の崩落や城の時期の掘削の可能性は高いと考えられるが、北西～南東の最大遺存幅４m程度、南西～北東の長さ20m程度の平坦地である。

２）埋葬施設と出土遺物等

墓域と見られる区画内からは計11基の埋葬施設を検出した。



第51図　土壙墓群３　第１主体部実測図

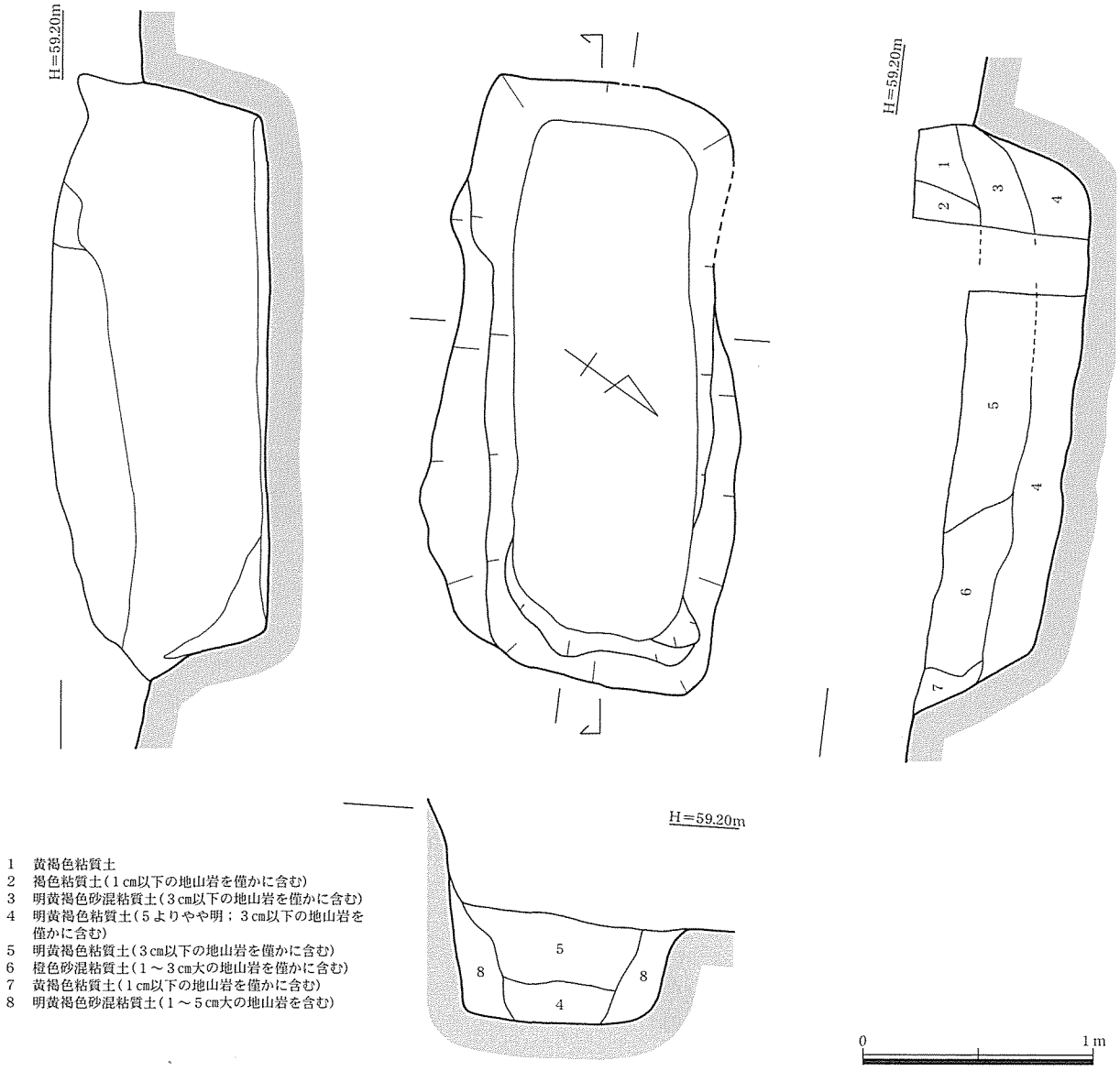
①第１主体部

本主体部は墓域区画の中央部よりやや北東に位置し、尾根方向よりやや軸を振った南北方向のＮ－5.5°－Ｅに主軸をとって地山から掘り込まれる。調査中に埋土が崩壊し、層序の確認が困難となったが、平面形は硬い地山掘削の制約を受けたのか隅の丸い台形状である。規模は、長さ3.21m、幅1.80m、深さ0.87mを測る。埋葬形態は不明瞭であるが、横断面の観察では両側壁面裾付近から立ち上る層序の違いが認められ、かつ硬い岩盤を掘削した床面南東隅には側板を据えるのに手頃な幅10cm程度のくぼみが見て取れる。これらを積極的に判断すると、墓壙内に側壁ぎりぎりの木棺が設置された可能性も考えられる。

遺物は崩落した墓壙埋土中から鼓形器台とみられる外反気味に開く口縁部片（第55図－１）と裾端部付近でさらに大きく開く脚台部片（同図－２）等がわずかに出土したにとどまる。

②第２主体部

本主体部は墓域区画の中央部よりやや南の地山掘削の裾部に位置し、掘削に沿うように尾根に直交方向のＮ－53.5°－Ｅに主軸をとって地山から掘り込まれる。平面形は隅の丸い長方形状を呈し、断面形は基本的には逆台形状だが、地山掘削の南東側はかなり急な立ち上りとなる。規模は、長さ2.61m、幅



第52図　土壙墓群３　第２主体部実測図

1.30m、深さ0.63mを測る。断面観察によると、縦断方向では両小口壁まで明瞭な層序の違いによる立上りは認められないが、横断方向ではそれぞれ両側から20cm付近に層序の違いによる立上りが認められる。このことは、その中央付近に長さは不明瞭ながら幅0.38m程度の木棺が設置された可能性を示すものと思われる。

遺物は、南西小口壁から約５cmで検出面から15cm程度、床面から10cm程度の位置から本墓壙内に浮いた状態で、口縁部を打ち欠きそこに蓋をするように低脚杯が置かれた甕が検出された。形状からみる限り、土器棺の可能性が考えられるが、掘り方は検出できず、しかしながら墓壙内遺物とも考えにくく、詳細は不明である。

なおその他の遺物は本墓壙内からは検出されなかった。

③第３主体部

本主体部は墓域区画の中央部より南西側、第２主体部に隣接して同主体部と同様に掘削面に沿うように尾根に直交方向からやや軸を振ったＮ－40.5°－Ｅに主軸をとって地山から掘り込まれる。平面形は隅の丸い長方形状を呈し、規模は、長さ3.58m、幅1.66m、深さ0.89mを測る。断面観察によると縦断面は崩落等で不明瞭であるが、部分的ながら南西小口底から20cm程度に、また横断面には両側底から10～20cm程度にそれぞれ層序の違いの立上りが認められる。このことは、その中央付近に長さは不明瞭ながら幅0.55m程度の木棺が設置された可能性を示すものと思われる。

遺物は、墓壙上におかれたものが木棺の腐食による陥没によって落ち込んだ可能性も考えられるが、埋土上層から甕(第55図－３)、鼓形器台(同図－４)、高杯(同図－５)の破片が、また南西側床面から鉄刀(同図－６)が検出されている。甕(３)は外反して立ち上がる複合口縁部片で内外面ヨコナデ調整される。(４)は直線的に開く器台受部である。外反気味に立ち上がる高杯(５)は外面は斜位ハケ目後ヘラ磨き、内面ヘラ磨きされる。鉄刀(６)は切先部のみの遺存で詳細は不明である。

④第４主体部

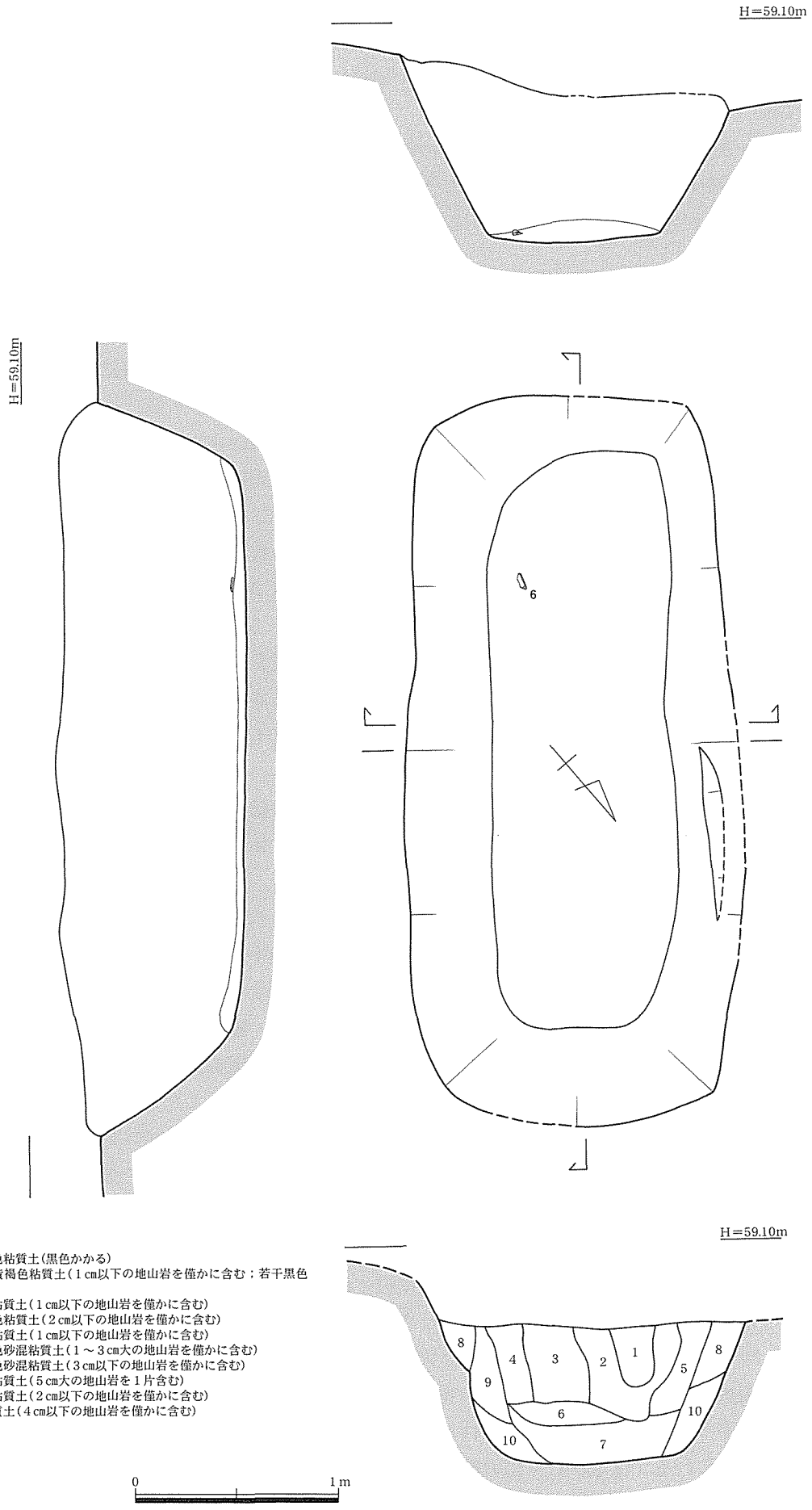
本主体部は墓域区画の中央部に位置する。第１主体部の南西に隣接し、第２主体部と南西隅の一部がわずかに切りあって両者に挟まれるように立地する。第２、第３主体部と同様に掘削面に沿うように尾根に直交方向のＮ－67°－Ｅに主軸をとって地山から掘り込まれる。平面形は、第２主体部と切りあう南西隅がやや突出するが、基本的には隅の丸い長方形で、規模は、長さ3.50m、幅1.59m、深さ0.77mを測る。断面観察によると縦断面では北東小口壁から約45cm、南西小口壁は直に、また横断面では両側壁から40～30cm程度の位置にそれぞれ層序の違いの立上りが認められ、この墓壙中央よりやや南東寄りで南西小口に寄せた位置に木棺が設置されたものと考えられる。推定される棺の規模は、長さ2.33m、幅0.42m、深さ0.50m程度である。なお第２主体部との切りあい関係は明確にはできなかった。

遺物は、墓壙上におかれたものが木棺の腐食による陥没によって落ち込んだ可能性も考えられる、甕(第55図－７、８)と鼓形器台(同図－９)が埋土上層から検出されている。甕はいずれも外傾する複合口縁部片であるが、(８)は(７)より外傾がきつく、端部に面をもつ。直線的に開く鼓形器台受部(９)は端部でさらに大きく外反して丸く納めている。

⑤第５主体部

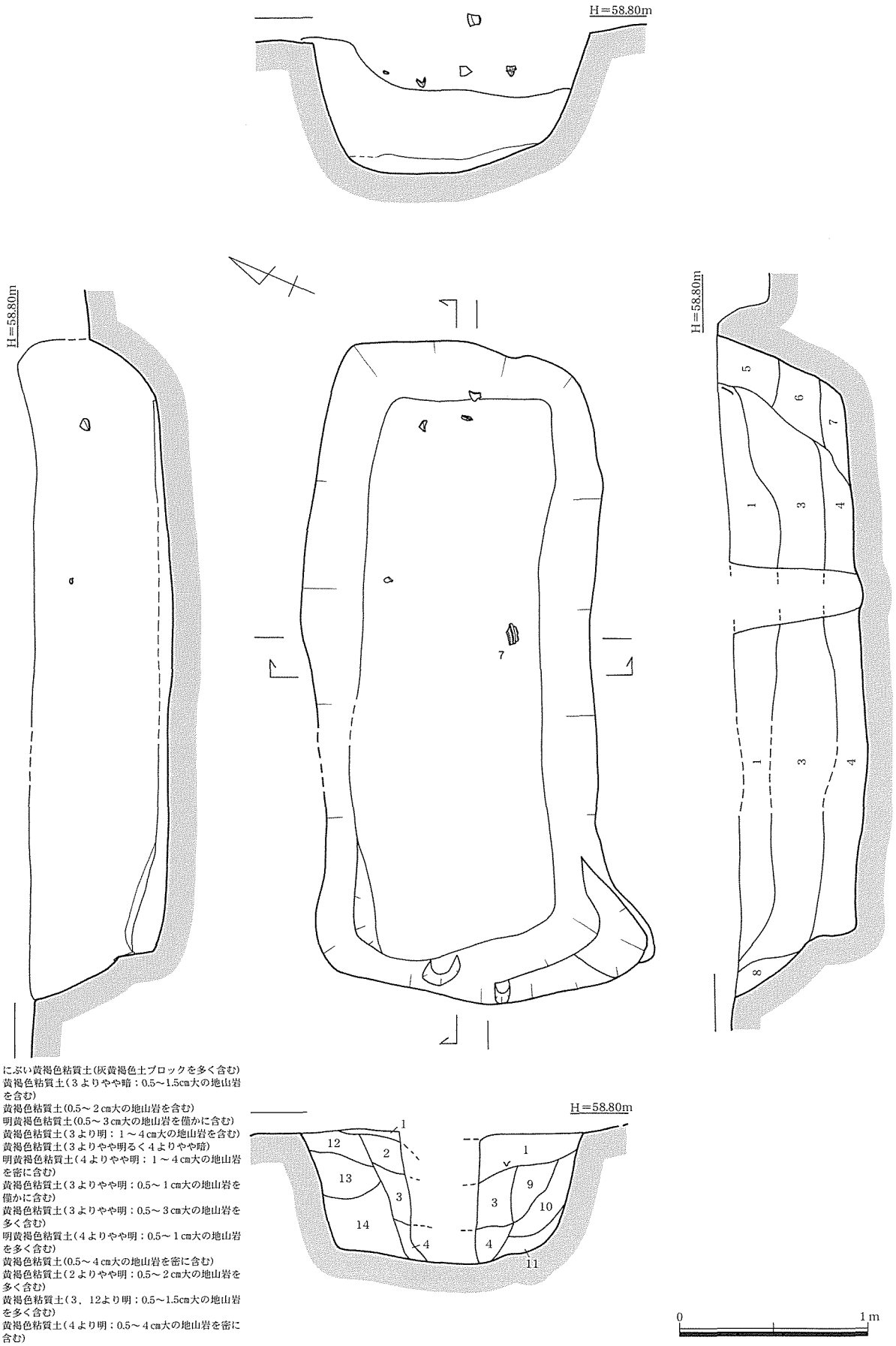
本主体部は墓域区画の北東端部、第１主体部の北東約２ｍに位置する。第２、第３主体部と同様に掘削面に沿うように尾根に直交方向からやや軸を振ったＮ－82°－Ｗに主軸をとって地山から掘り込まれる。平面形は、ややいびつながら隅の丸い長方形状を呈し、規模は、長さ3.04m、幅1.40m、深さ0.67mを測る。断面観察によると縦断面では両小口壁から約25cm、横断面では両側壁から15～20cm程度の位置にそれぞれ層序の違いの立上りが認められる。これにより本主体部も墓壙中央付近に木棺が設置されていたものと考えられる。推定される棺の規模は、長さ1.87m、幅0.40m、深さ0.34m程度である。

遺物は、墓壙埋土中から接合部に稜をもつ鼓形器台片や高杯(第58図－10)が検出されている。高杯



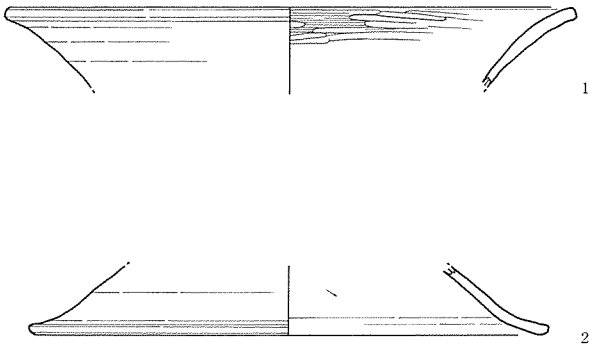
1　灰黄褐色粘質土(黒色かかる)
2　にぶい黄褐色粘質土(1cm以下の地山岩を僅かに含む：若干黒色かかる)
3　黄褐色粘質土(1cm以下の地山岩を僅かに含む)
4　明黄褐色粘質土(2cm以下の地山岩を僅かに含む)
5　黄橙色粘質土(1cm以下の地山岩を僅かに含む)
6　明黄褐色砂混粘質土(1～3cm大の地山岩を僅かに含む)
7　明黄褐色砂混粘質土(3cm以下の地山岩を僅かに含む)
8　黄褐色粘質土(5cm大の地山岩を1片含む)
9　黄橙色粘質土(2cm以下の地山岩を僅かに含む)
10　橙色粘質土(4cm以下の地山岩を僅かに含む)

第53図　土壙墓群3　第3主体部実測図

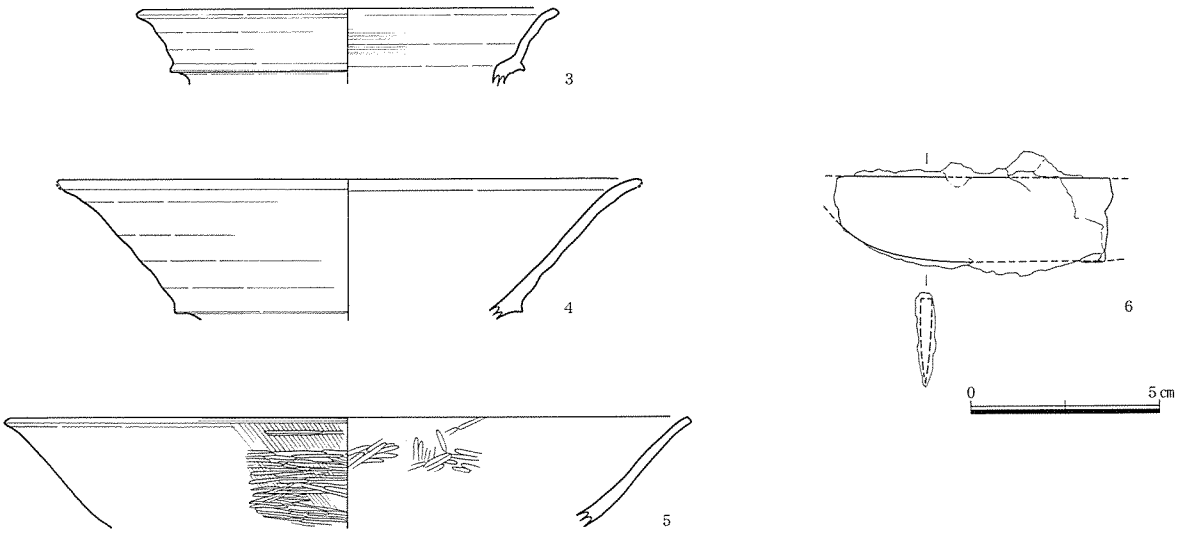


1　にぶい黄褐色粘質土(灰黄褐色土ブロックを多く含む)
2　黄褐色粘質土(3よりやや暗：0.5～1.5cm大の地山岩を含む)
3　黄褐色粘質土(0.5～2cm大の地山岩を含む)
4　明黄褐色粘質土(0.5～3cm大の地山岩を僅かに含む)
5　黄褐色粘質土(3より明：1～4cm大の地山岩を含む)
6　黄褐色粘質土(3よりやや明るく4よりやや暗)
7　明黄褐色粘質土(4よりやや明：1～4cm大の地山岩を密に含む)
8　黄褐色粘質土(3よりやや明：0.5～1cm大の地山岩を僅かに含む)
9　黄褐色粘質土(3よりやや明：0.5～3cm大の地山岩を多く含む)
10　明黄褐色粘質土(4よりやや明：0.5～1cm大の地山岩を多く含む)
11　黄褐色粘質土(0.5～4cm大の地山岩を密に含む)
12　黄褐色粘質土(2よりやや明：0.5～2cm大の地山岩を多く含む)
13　黄褐色粘質土(3，12より明：0.5～1.5cm大の地山岩を多く含む)
14　黄褐色粘質土(4より明：0.5～4cm大の地山岩を密に含む)

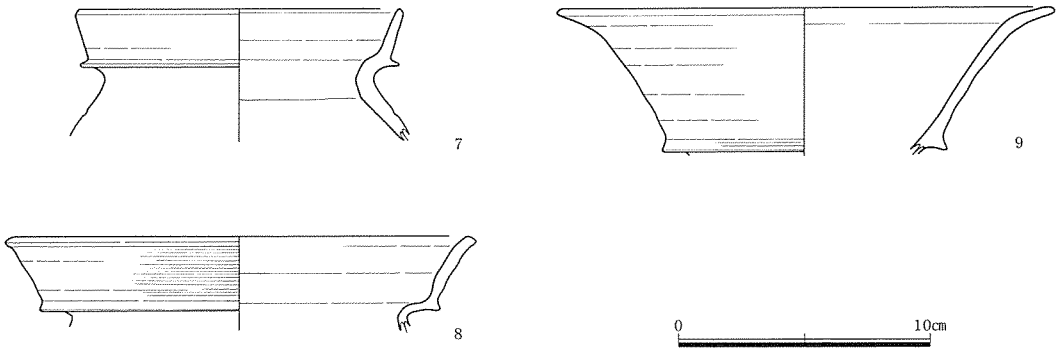
第54図　土壙墓群3　第4主体部実測図



第１主体部

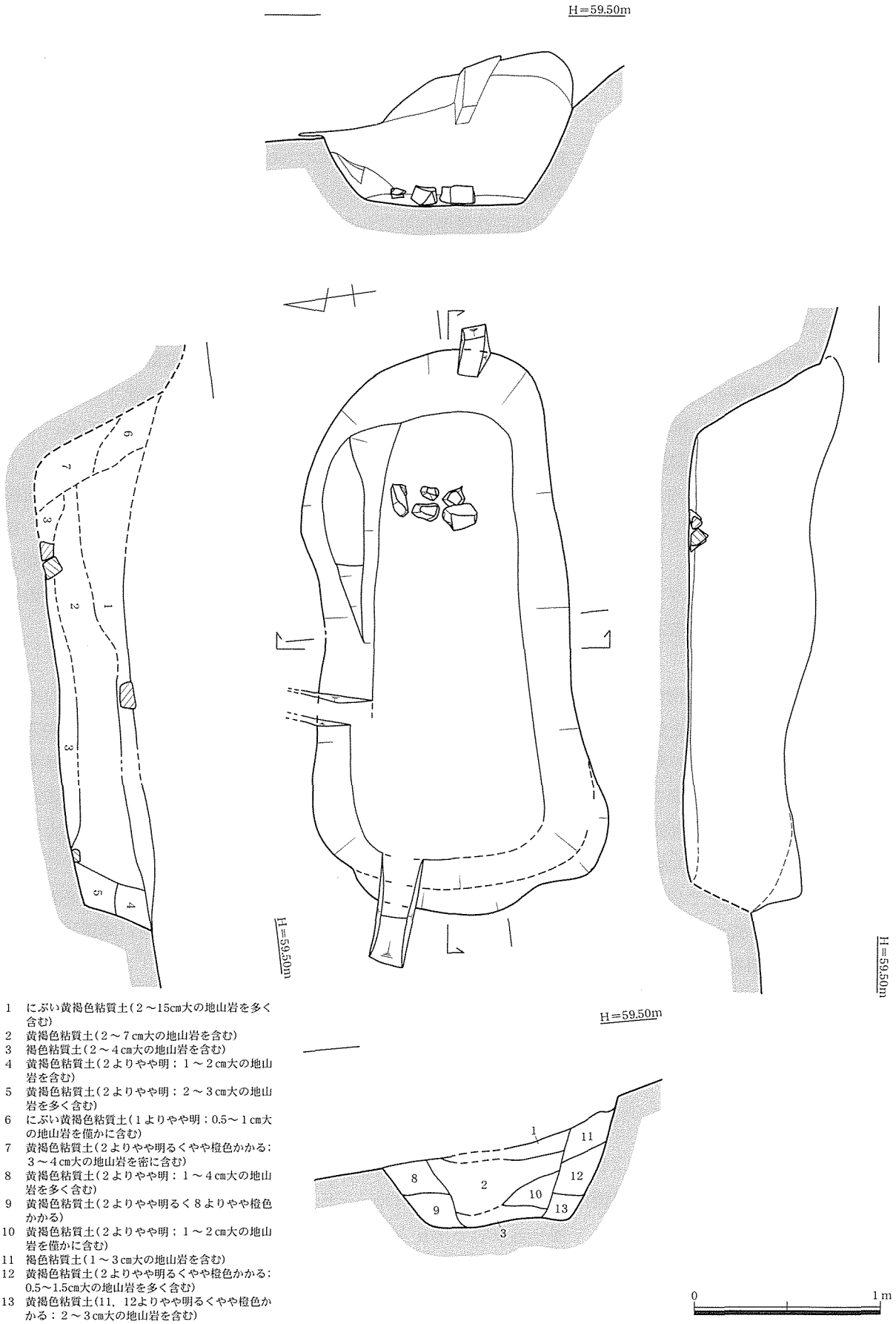


第３主体部



第４主体部

第55図　土壙墓群３　第１・第３・第４主体部出土遺物実測図



1　にぶい黄褐色粘質土（2～15cm大の地山岩を多く含む）
2　黄褐色粘質土（2～7cm大の地山岩を含む）
3　褐色粘質土（2～4cm大の地山岩を含む）
4　黄褐色粘質土（2よりやや明；1～2cm大の地山岩を含む）
5　黄褐色粘質土（2よりやや明；2～3cm大の地山岩を多く含む）
6　にぶい黄褐色粘質土（1よりやや明；0.5～1cm大の地山岩を僅かに含む）
7　黄褐色粘質土（2よりやや明るくやや橙色かかる；3～4cm大の地山岩を密に含む）
8　黄褐色粘質土（2よりやや明；1～4cm大の地山岩を多く含む）
9　黄褐色粘質土（2よりやや明るく8よりやや橙色かかる）
10　黄褐色粘質土（2よりやや明；1～2cm大の地山岩を僅かに含む）
11　褐色粘質土（1～3cm大の地山岩を含む）
12　黄褐色粘質土（2よりやや明るくやや橙色かかる；0.5～1.5cm大の地山岩を多く含む）
13　黄褐色粘質土（11，12よりやや明るくやや橙色かかる；2～3cm大の地山岩を含む）

第56図　土壙墓群3　第5主体部実測図

(10)は杯部外面上半ハケ目後ヨコナデ、下半ヘラ磨き、内面ヘラ磨きである。また、東側小口壁から40cm程度の床面から地山と同質の10～20cm大の石５個が一見並んだように検出された。想定する棺の範囲内でもあるが、その性格を枕状とみるべきか、あるいは単なる埋土のブロックとみるべきか明確にはできなかった。

⑥第６主体部

本主体部は墓域区画の南西側、第３主体部の南西に北東側小口部の上位をわずかに切りあって位置する。第２、第３主体部と同様に掘削面に沿うように尾根に直交方向からやや軸を振ったＮ－34°－Ｅに主軸をとって地山から掘り込まれる。検出当初は墓壙掘り方が判然とせず、部分的に凹む暗めの層に遺物が包含された溜り状の遺構かと考えたが、トレンチ調査の結果、後述の第８主体部とも南東壁側で切りあう埋葬施設と判明した。平面形は切りあいはあるものの基本的に隅の丸い長方形状で、規模は、長さ3.34m、幅1.64m、深さ0.66mを測る。断面観察によると両小口壁から30～40cm程度、横断面では両側壁から30cm程度の位置にそれぞれ層序の違いの立上りが認められる。また上位層には棺の腐食による陥没状態の層序の変化が認められ、これらのことから本主体部も墓壙中央付近に木棺が設置されていたものと考えられる。推定される棺の規模は、長さ2.35m、幅0.53m、深さ0.40m程度である。なお第３主体部との切りあい関係は不明であるが、第８主体部を切っている。

遺物は、上述の落ち込みと考えられる埋土中から長頸壺(第58図－11)、甕(同図－12)、高杯(同図－13、14)等が検出されている。直立する口縁部をもつ長頸壺(11)は体部中位に最大胴径をもつ。複合口縁部をもつ甕(12)は、口縁部は外反気味に開き、体部中位に最大胴径をもつ。肩部に連続刺突文を施す。いわゆるワイングラス状の高杯(13)は、脚部がハの字状に大きく開く。高杯(14)は有段の杯部をもち、内外面ヘラ磨きされる。

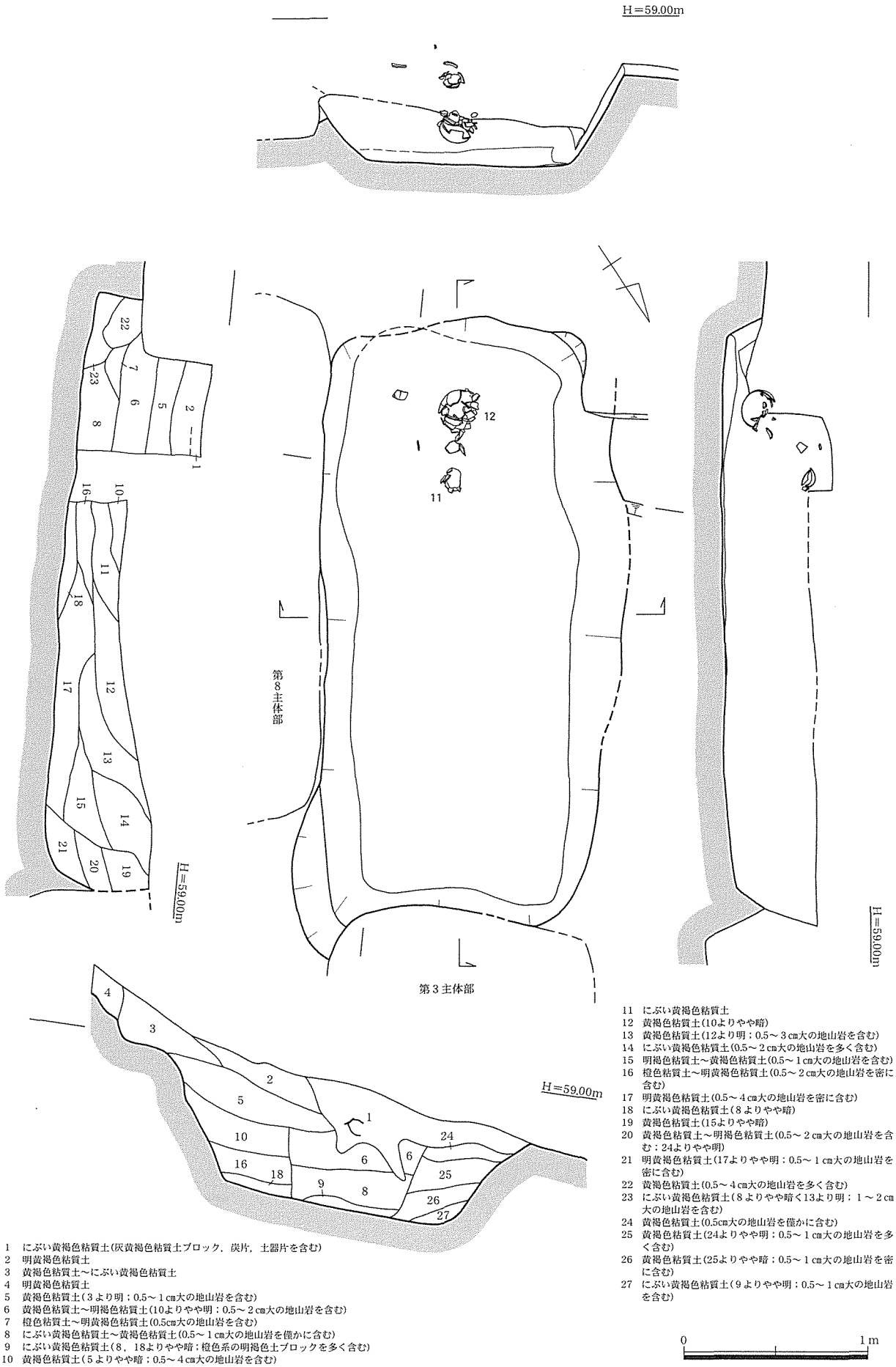
⑦第７主体部

本主体部は墓域区画の南西側、第４主体部の1.5m南西で、南東側面の一部を第３主体部と切りあって位置する。第４主体部と同様に尾根の掘削面にほぼ平行にＮ－62.5°－Ｅに主軸をとって地山から掘り込まれる。平面形は隅の丸い長方形で、規模は、長さ3.85m、幅1.68m、深さ0.70mを測る。本墓域区画内では最大の墓壙である。断面観察によると南西小口側は壁面から30cm程度の位置に層序の違いの立上りが認められ、北東側はトレンチのため不明ながら部分的な二段墓壙状となっている。また横断面では両側壁から20～30cm程度の位置にそれぞれ層序の違いの立上りが認められる。これらのことから本主体部も墓壙中央で北東側小口壁へ寄せて木棺が設置されていたものと考えられる。推定される棺の規模は、長さ2.87m、幅0.63m、深さ0.45m程度である。なお第３主体部との切りあい関係は、第３主体部が本主体部を切るようにも見受けられたが、明確にはできなかった。

遺物は、埋土中から外面がヘラ磨きされた高杯(第58図－15)が検出されている。また南西小口壁から約50cm程度内側の推定棺内床面から地山と同種の15cm程度の石２点を検出した。やや両者の内側に低くなる傾斜をもたせているようにも見え、位置的なことも考慮して消極的ながら石枕の可能性をあげておきたい。

⑧第８主体部

本主体部は墓域区画の南西側、第６主体部の南東側尾根の掘削面との間に位置する。もともとこの掘削面直下に第２主体部と同様に掘削面にほぼ平行にＮ－31.5°－Ｅに主軸をとって地山から掘り込まれているが、その後ほぼそれに平行して掘り込まれる第６主体部に北西壁の多くを切られている。現況での平面形は、隅の丸い細長い長方形で、規模は、長さ2.84m、幅0.82m、深さ0.83mを測る。断面観察では内部構造の痕跡を認めることができないことから、直葬の土壙と考えられる。なお遺物は、埋土中から土師器細片が検出されたにとどまる。

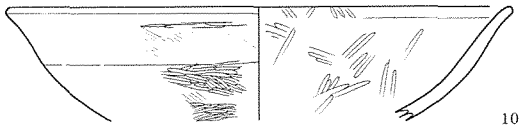


1　にぶい黄褐色粘質土(灰黄褐色粘質土ブロック，炭片，土器片を含む)
2　明黄褐色粘質土
3　黄褐色粘質土～にぶい黄褐色粘質土
4　明黄褐色粘質土
5　黄褐色粘質土(3より明；0.5～1㎝大の地山岩を含む)
6　黄褐色粘質土～明褐色粘質土(10よりやや明：0.5～2㎝大の地山岩を含む)
7　橙色粘質土～明黄褐色粘質土(0.5㎝大の地山岩を含む)
8　にぶい黄褐色粘質土～黄褐色粘質土(0.5～1㎝大の地山岩を僅かに含む)
9　にぶい黄褐色粘質土(8，18よりやや暗；橙色系の明褐色土ブロックを多く含む)
10　黄褐色粘質土(5よりやや暗；0.5～4㎝大の地山岩を含む)
11　にぶい黄褐色粘質土
12　黄褐色粘質土(10よりやや暗)
13　黄褐色粘質土(12より明：0.5～3㎝大の地山岩を含む)
14　にぶい黄褐色粘質土(0.5～2㎝大の地山岩を多く含む)
15　明褐色粘質土～黄褐色粘質土(0.5～1㎝大の地山岩を含む)
16　橙色粘質土～明黄褐色粘質土(0.5～2㎝大の地山岩を密に含む)
17　明黄褐色粘質土(0.5～4㎝大の地山岩を密に含む)
18　にぶい黄褐色粘質土(8よりやや暗)
19　黄褐色粘質土(15よりやや暗)
20　黄褐色粘質土～明褐色粘質土(0.5～2㎝大の地山岩を含む；24よりやや明)
21　明黄褐色粘質土(17よりやや明：0.5～1㎝大の地山岩を密に含む)
22　黄褐色粘質土(0.5～4㎝大の地山岩を多く含む)
23　にぶい黄褐色粘質土(8よりやや暗く13より明；1～2㎝大の地山岩を含む)
24　黄褐色粘質土(0.5㎝大の地山岩を僅かに含む)
25　黄褐色粘質土(24よりやや明：0.5～1㎝大の地山岩を多く含む)
26　黄褐色粘質土(25よりやや暗；0.5～1㎝大の地山岩を密に含む)
27　にぶい黄褐色粘質土(9よりやや明：0.5～1㎝大の地山岩を含む)

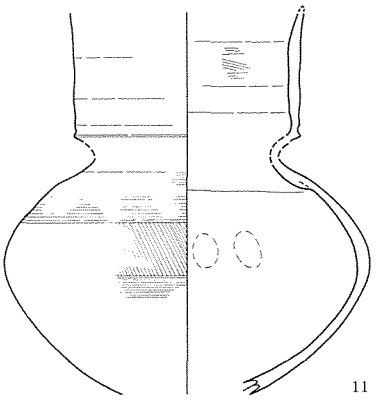
0　1m

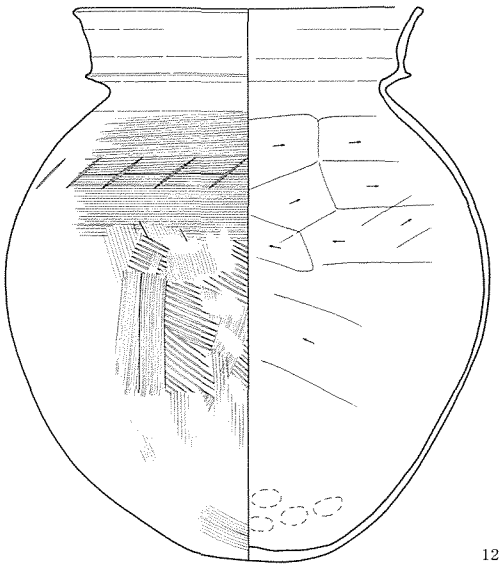
第57図　土壙墓群3　第6主体部実測図

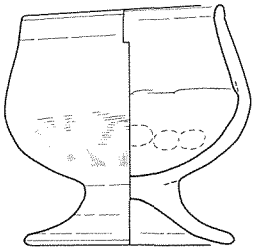
第５主体部

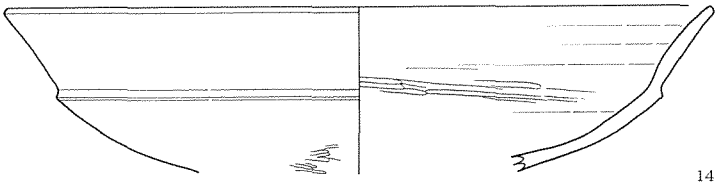


第６主体部

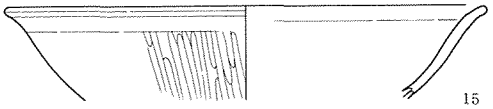




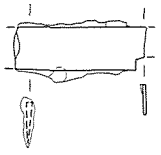




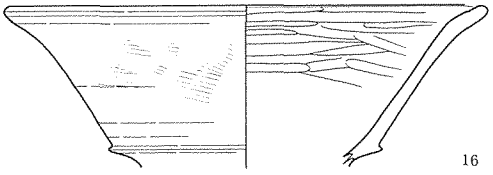
第７主体部



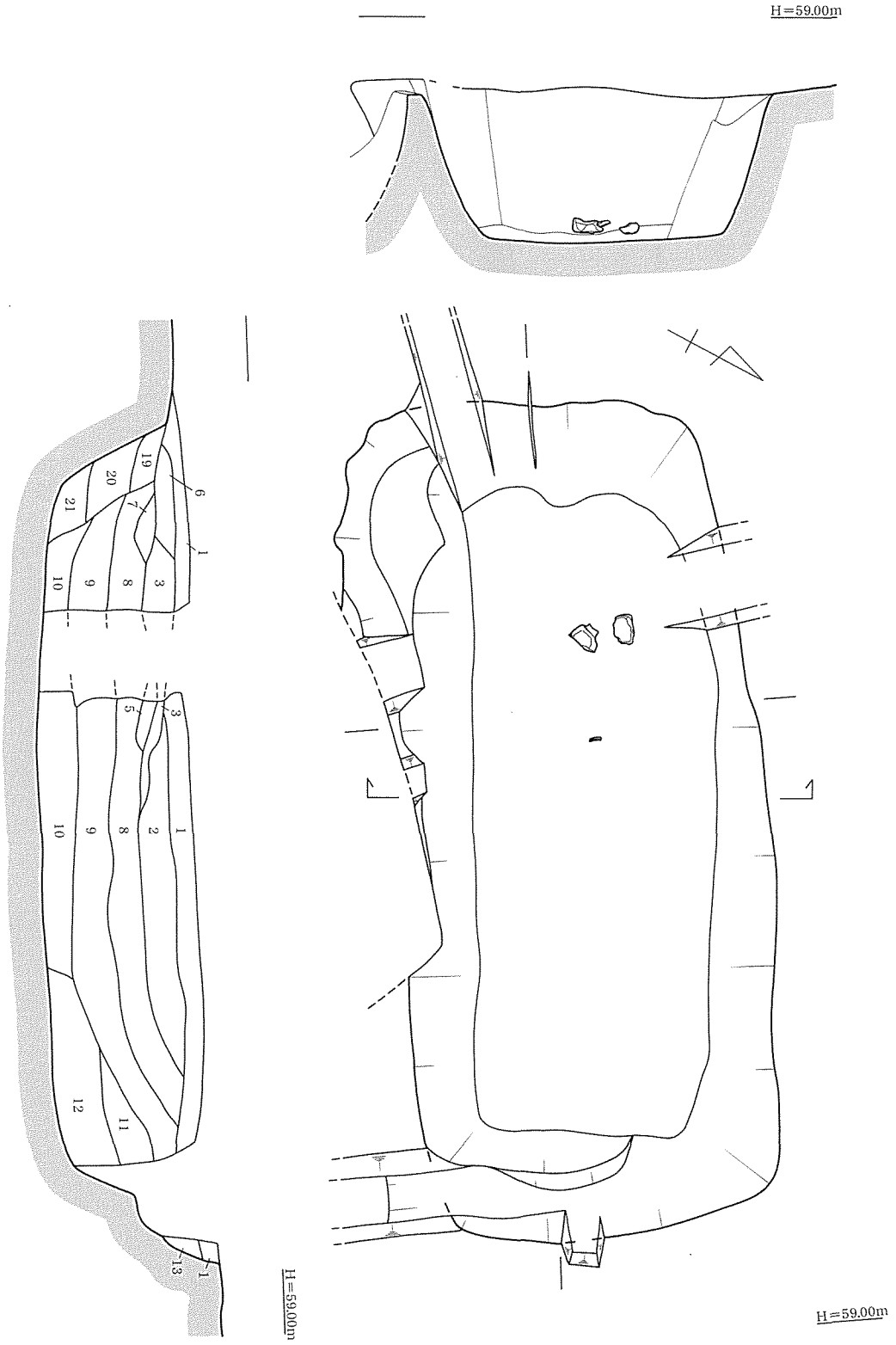
第10主体部



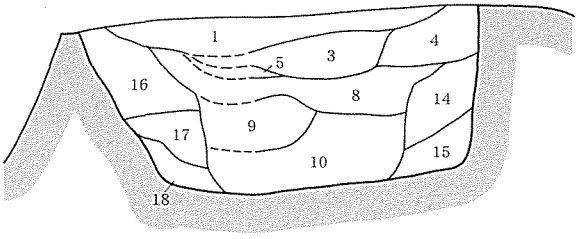
第９主体部



第58図　土壙墓群３　第５・第６・第７・第９・第10主体部出土遺物実測図

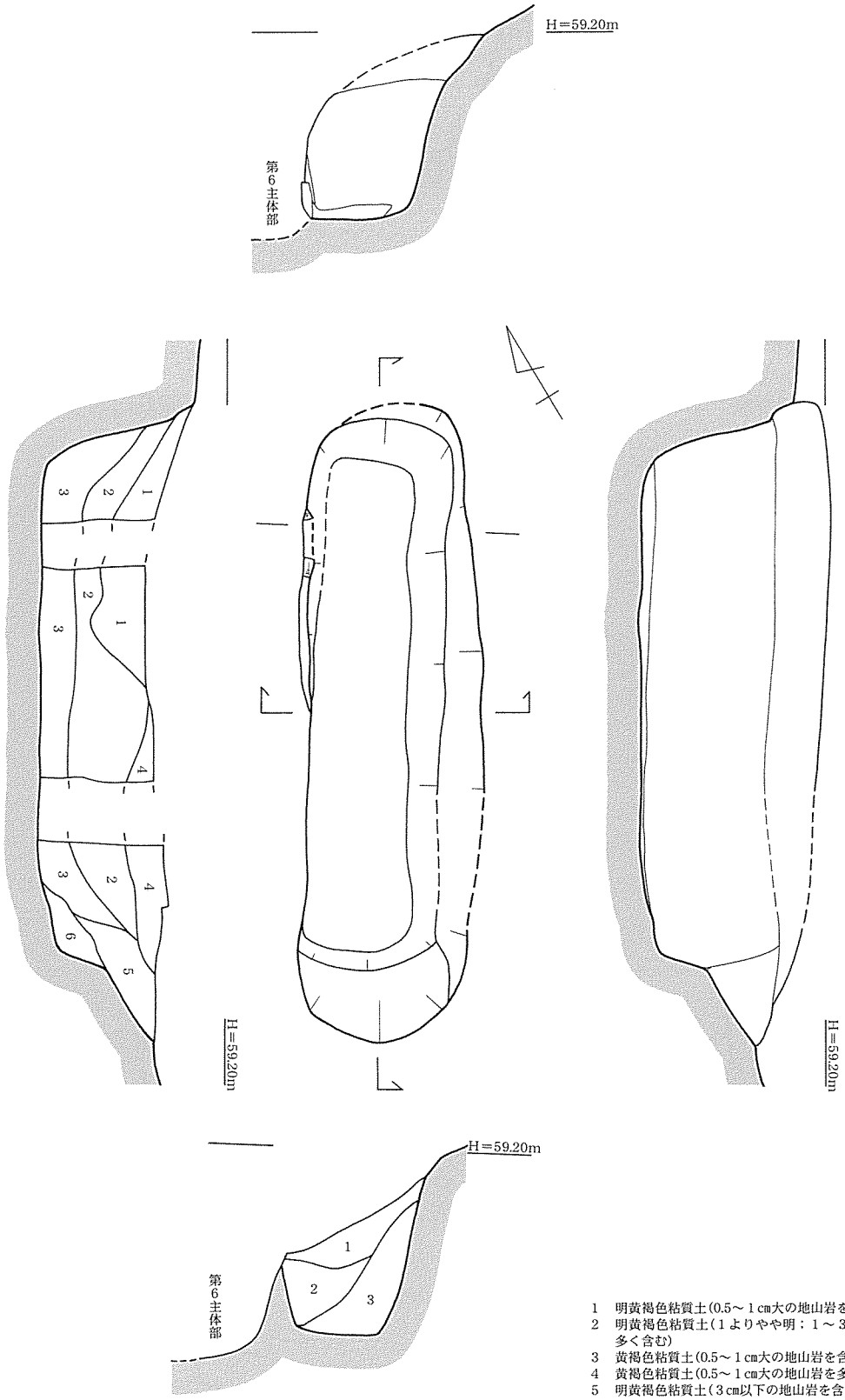


1　黄褐色粘質土(6.5～1㎝大の地山岩を僅かに含む)
2　黄褐色粘質土(1よりやや明：1cm大の地山岩を僅かに含む)
3　灰黄褐色粘質土(黒褐色粘質土を多く含む)
4　黄褐色粘質土(1よりやや暗)
5　明黄褐色粘質土
6　黄褐色粘質土(1よりやや明)
7　にぶい黄褐色粘質土
8　にぶい黄褐色粘質土(やや黄褐色かかる)
9　黄褐色粘質土
10　黄褐色粘質土(9よりやや明)
11　黄褐色粘質土(9より明：0.5～1㎝大の地山岩を含む)
12　黄褐色粘質土(11よりはやや暗く10よりはやや明：明黄褐色土ブロック及び1～10㎝大の地山岩を含む)
13　明黄褐色粘質土(1～2㎝大の地山岩を含む)
14　明黄褐色粘質土(0.5㎝大の地山岩を僅かに含む)
15　黄褐色粘質土(10よりやや明：0.5～1㎝大の地山岩を含む)
16　明黄褐色粘質土(0.5～1㎝大の地山岩を僅かに含む)
17　明黄褐色粘質土(0.3～1㎝大の地山岩を僅かに含む；16よりやや明)
18　明黄褐色粘質土(17よりやや暗：0.5㎝大の地山岩を含む)
19　黄褐色粘質土(6よりやや明)
20　黄褐色粘質土(19よりやや明)
21　にぶい黄褐色粘質土



0　1m

第59図　土壙墓群3　第7主体部実測図



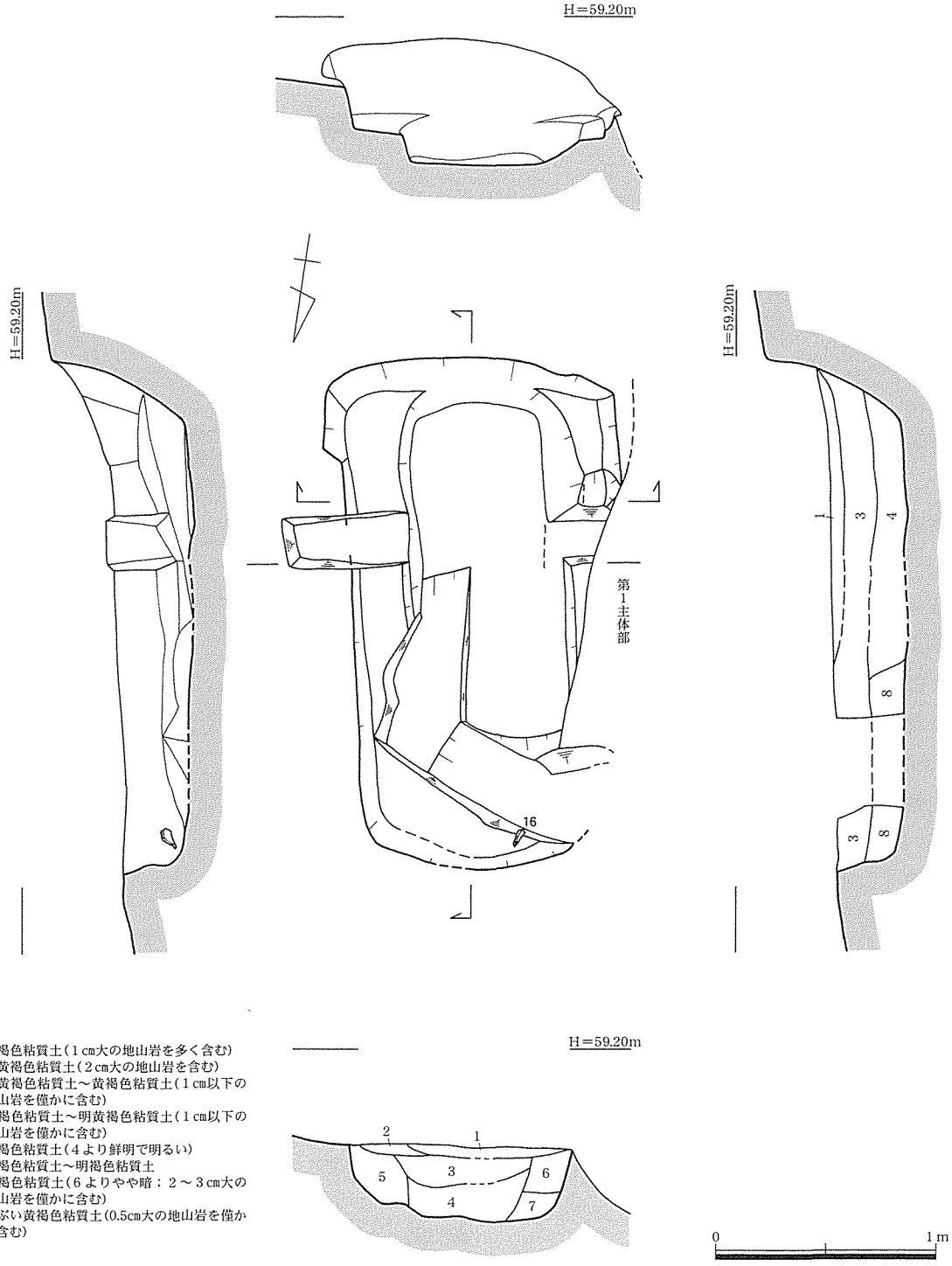
1　明黄褐色粘質土(0.5～1㎝大の地山岩を僅かに含む)
2　明黄褐色粘質土(1よりやや明；1～3㎝大の地山岩を多く含む)
3　黄褐色粘質土(0.5～1㎝大の地山岩を含む)
4　黄褐色粘質土(0.5～1㎝大の地山岩を多く含む)
5　明黄褐色粘質土(3㎝以下の地山岩を含む)
6　橙色粘質土(1～5㎝大の地山岩を含む)

0　1m

第60図　土壙墓群3　第8主体部実測図

⑨第９主体部

本主体部は墓域区画の中央よりやや北東、第１主体部と第５主体部の間に位置し、第１主体部とは北東部が切りあうが、その関係は不明である。第１主体部と同様に尾根方向にほぼ平行するＮ－8.5°－Ｗに主軸をとって地山から掘り込まれているが、部分的ながら東側壁、西側壁とも浅い二段の状況を呈する。北側小口部は大きな根株があり不明瞭な点もあるが、平面形は、隅の丸い長方形で、規模は、長さ2.32ｍ、幅1.33ｍ、深さ0.61ｍを測る。断面観察によると、縦断方向では両小口壁まで明瞭な層序の違いによる立上りは認められないが、横断方向には両側から20cm付近に違いが認められる。このことから墓壙中央付近に長さは不明ながら、幅0.43ｍ程度の木棺が設置された可能性も考えられる。



1　黄褐色粘質土（１cm大の地山岩を多く含む）
2　明黄褐色粘質土（２cm大の地山岩を含む）
3　明黄褐色粘質土～黄褐色粘質土（１cm以下の地山岩を僅かに含む）
4　黄褐色粘質土～明黄褐色粘質土（１cm以下の地山岩を僅かに含む）
5　黄褐色粘質土（４より鮮明で明るい）
6　黄褐色粘質土～明褐色粘質土
7　黄褐色粘質土（６よりやや暗；２～３cm大の地山岩を僅かに含む）
8　にぶい黄褐色粘質土（0.5cm大の地山岩を僅かに含む）

第61図　土壙墓群３　第９主体部実測図

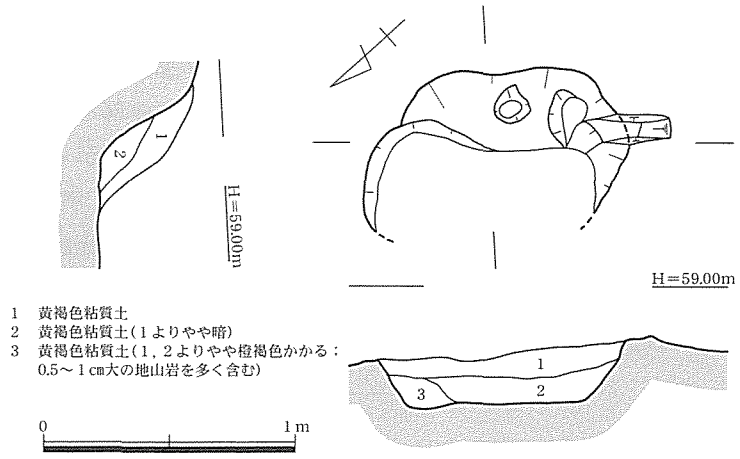
なお遺物は北側小口部から根に絡むように鼓形器台片(第58図－16)が検出された。(16)は直線的に開いて端部で外反する受部で、内面は上半ヘラ磨き、下半ナデ調整される。

⑩第10主体部

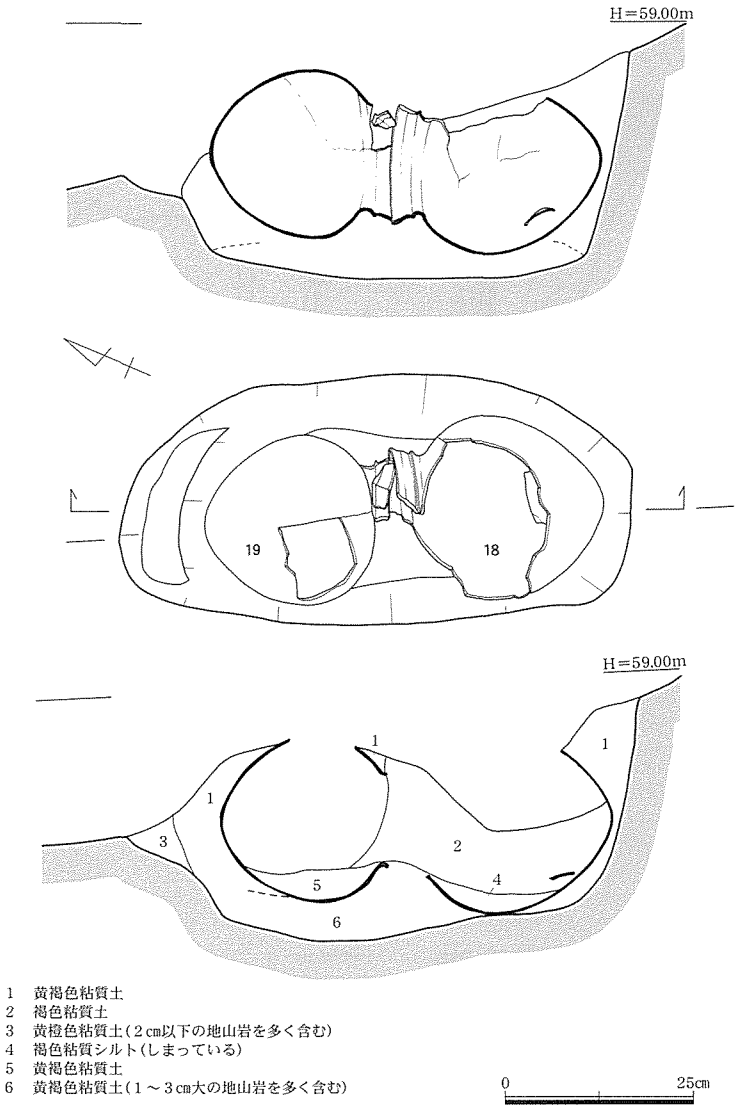
本主体部は墓域区画の最南西端、第６主体部の南西に隣接して位置する。墓壙の北西側が流失しているため、検出した墓壙が小口部のみなのかほぼ全体なのか不明ではあるが、一応後者とみると、第６、第８主体部と同様に掘削面にほぼ平行にＮ－42°－Ｅに主軸をとって地山から掘り込まれている。平面形は隅の丸い長方形が想定され、規模は、長さ約1.02m、幅約0.64m、深さ0.37mである。断面観察では明瞭な層序変化を認められず、直葬の土壙と考えられる。なお遺物は、床面から刀子片(第58図－17)が検出された。

⑪第11主体部

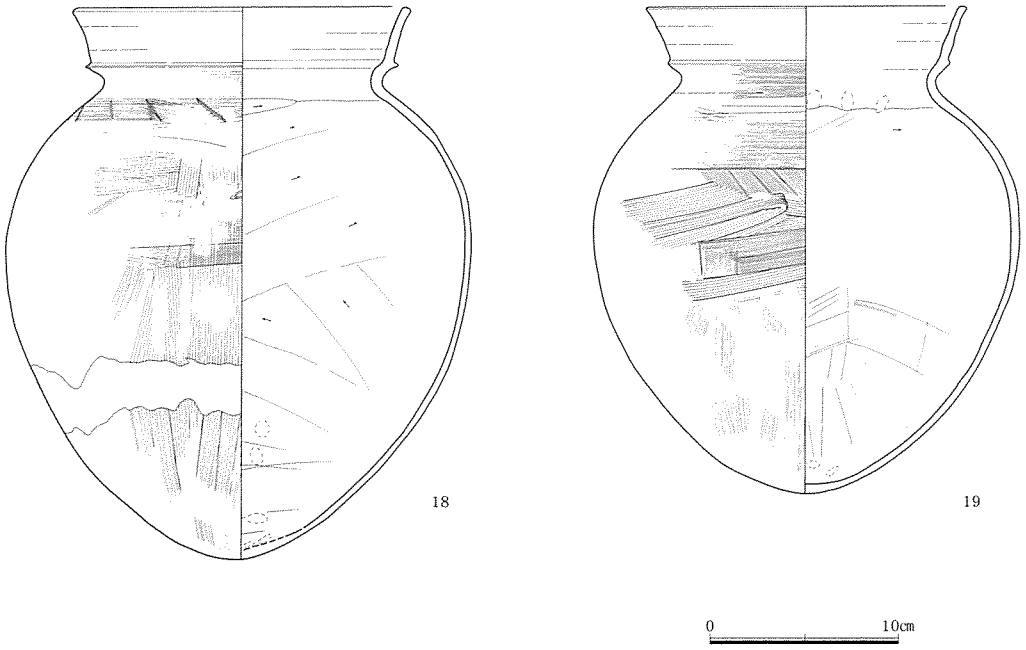
本主体部は墓域区画の中央部、第２主体部の北東側に隣接して位置する。尾根の掘削面近くに尾根方向にほぼ平行するＮ－22.5°－Ｗに主軸をとって地山から掘り込まれている。内部主体を土器棺とする墓壙で、平面形は強いて言うなら長楕円形である。北西小口部が二段となるが、規模は、長さ0.68m、幅約0.33m、深さ0.32mを測る。棺には複合口縁をもつ倒卵形の甕２個(第64図－18、19)を合わせ口で使用している。断面観察から、南東側の甕を床と南東小口壁に固定し、北西側甕は床に土を入れてやや浮かせ気味にぴたりと口縁部を合わせさらに北西小口との間に土を入れて棺を固定埋



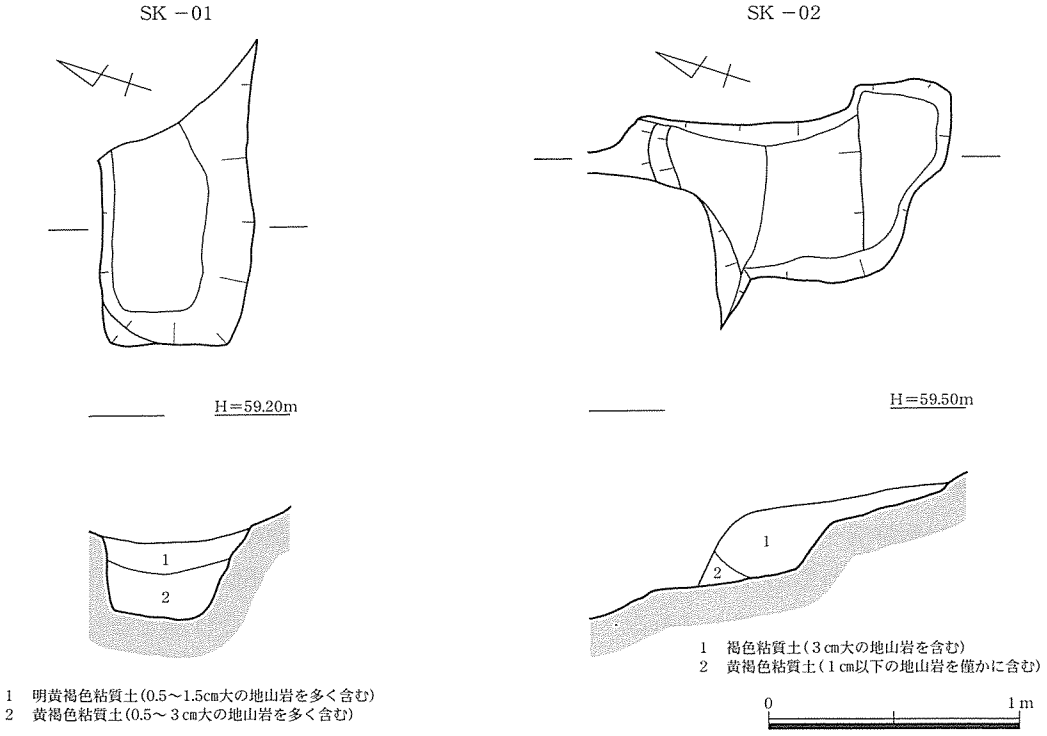
第62図　土壙墓群３　第10主体部実測図



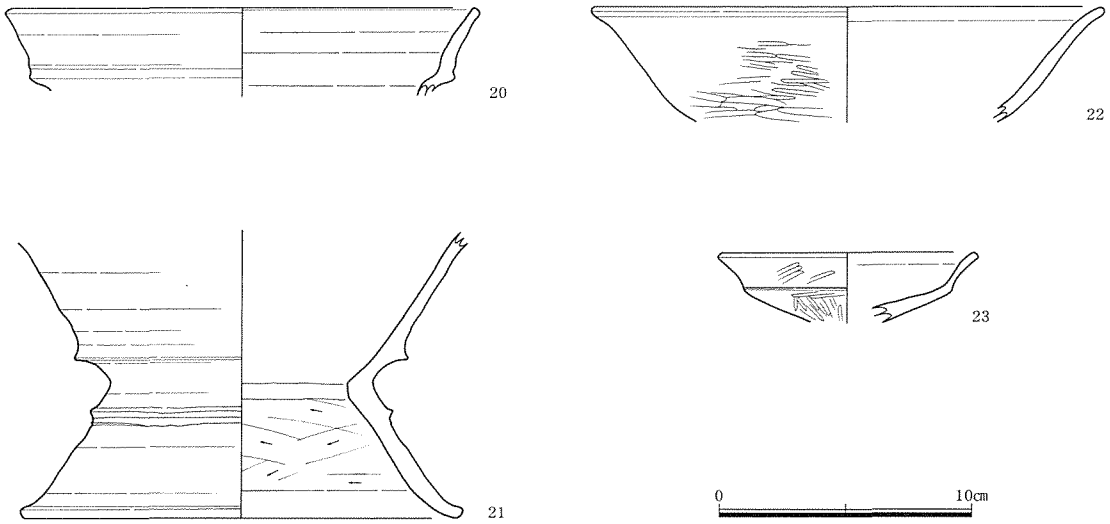
第63図　土壙墓群３　第11主体部実測図



第64図　土壙墓群３　第11主体部出土遺物実測図



第65図　土壙墓群３　SK －01・02実測図



第66図　土壙墓群３　遺構外出土遺物実測図

納したものと考えられる。

３）その他の遺構・遺物

本墓域区画の中からは上述の埋葬施設以外に２基の土坑(SK －01、02)を、またわずかながら遺構に伴わない遺物を検出している。

① SK －01

SK －01は墓域区画の中央部よりやや北東、第４主体部の南東側、第１主体部の南西側にそれぞれに隣接して位置する。第４主体部と同様に掘削面にほぼ平行にN－69.5°－Eに主軸をとって地山から掘り込まれている。北東小口部はトレンチのため不明であるが、平面形は隅の丸い長方形状を呈するものと考えられ、規模は、長さは1.20m強、幅0.64m、深さ0.37mである。小規模な土壙の可能性が考えられるが遺物もなく詳細は不明である。

② SK －02

SK －02は墓域区画の中央部よりやや北東、第１主体部および第９主体部の南側にそれぞれと切りあって位置する。平面形は不定形で、南東側が二段となる。規模は、長さは1.20m強、幅約0.82m、深さ約0.42m程度である。わずかの検出で、人為的な別の遺構の可能性もあるが、遺物もなく詳細は不明である。

③その他の遺物

本墓域区画の北側肩部～斜面付近から、もともとはいずれかの埋葬施設に伴う遺物であった可能性も考えられる遺物が検出されており、比較的残りのよい４点を図化した(第66図－20～23)。甕(20)は外傾して端部に面をもつ複合口縁部片である。鼓形器台(21)は直線的に開く受け部をもち、台部はハの字状に開く。比較的厚手である。外反気味に立ち上がる口縁部をもつ高杯(22)は外面はヘラ磨きである。また高杯(23)は有段の杯部をもつ比較的こぶりなものである。

なお上述の埋葬施設、遺物等から土壙墓群３の埋葬時期は全体として古墳時代前期後半代と考えられる。

12. 土壙墓群２（付図３、４，第67～72図，PL38、39、60、61）

１）位置と現状

土壙墓群２は、調査地北西端近くの丘陵斜面上に立地する。当初この斜面にわずかながら平坦地があったが層序確認のトレンチによって東側と西側にそれぞれ遺構があることが判り、便宜上土壙墓群２東、同西として調査を行なった。このうち土壙墓群２東は、一部前述城の土塁下に位置し、土塁盛土を除去して調査を行なった。その結果、丘陵斜面の北側から北東にかけて裾の削り出しと盛土状の層序の変化を確認したが墳丘状のマウンドほどでもなく、その範囲を明確にするには至らなかった。標高は54.6m程度である。また土壙墓群２西は、同東の北西に位置し、東と同様に一部城の土塁下となる。城跡の平坦面２に一部重なり、標高は51.6m弱で東より３mほど低い。調査の結果、尾根の高位側を地山の岩盤まで削り込んで平坦部を造っているが、その西側は崖で崩落しており、その範囲を明確にするには至らなかった。いずれもその範囲の確定はできなかったが、何らかの区画を設けようとしたことは明らかで、ここでは便宜上調査時の呼称をそのまま用いて述べることとする。

２）埋葬施設と出土遺物等

土壙墓群２東からは、２基の埋葬施設（東第１、第２主体部）を、同西からは１基（西主体部）の埋葬施設とそれを切る後述の炉状遺構１基を検出した。

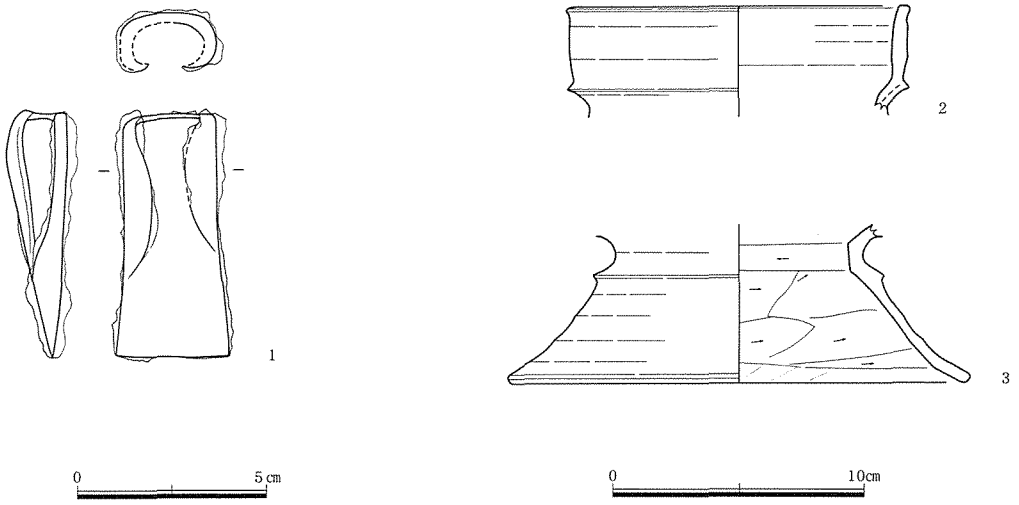
①東第１主体部

本主体部は調査地北西部で、尾根に直交方向のＮ－82.5°－Ｗに主軸をとって掘り込まれる。平面形は隅の丸い長方形で、尾根の高位側、即ち南側壁が二段となる。規模は、長さ3.65m、幅2.05m、深さ0.91mを測る。断面観察によると、東小口壁から80cm程度、西小口壁から30cm程度、北側壁から40cm程度そして南側壁二段裾の位置にそれぞれ層序の違いの立上りが認められ、墓壙中央付近の南側二段め壁に沿わして木棺が設置されていたものと考えられる。推定される棺の規模は、長さ2.06m、幅0.55m、深さ0.5m程度である。

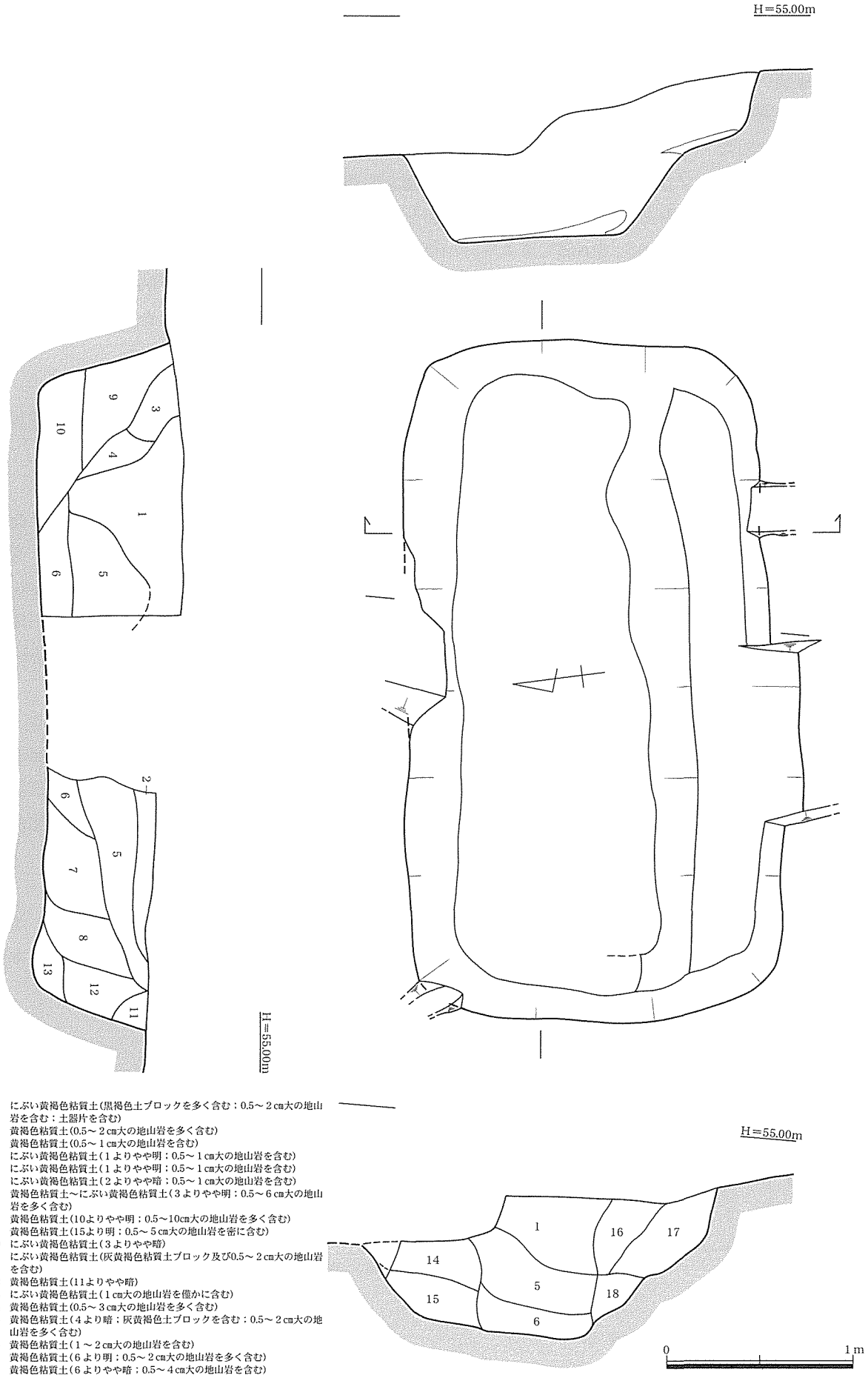
遺物は埋土中から鉄斧（第67図－１）、甕（同図－２）、鼓形器台（同図－３）等が検出されている。有袋鉄斧（１）は長さ6.5cmを計る。平面形は刃部があまり広がらないで長方形に近く、袋部断面は翼を丸く折り曲げて閉じない。甕（２）の複合口縁部は直立し、端部に平坦面をもつ。ハの字状に開く鼓形器台台部（３）は端部でさらに開いて丸く納める。接合部の稜はやや甘くなるが内面にはしっかりした屈曲が認められる。

②東第２主体部

本主体部は層序確認のトレンチで検出した東第１主体部とその北側で切りあう土器棺墓である。不定形な墓壙中に西に口縁部を向けて寝かした中型の壺棺を検出した。断面観察から第１主体部を切る本主



第67図　土壙墓群２東 出土遺物実測図



1　にぶい黄褐色粘質土(黒褐色土ブロックを多く含む；0.5～2㎝大の地山岩を含む；土器片を含む)
2　黄褐色粘質土(0.5～2㎝大の地山岩を多く含む)
3　黄褐色粘質土(0.5～1㎝大の地山岩を含む)
4　にぶい黄褐色粘質土(1よりやや明；0.5～1㎝大の地山岩を含む)
5　にぶい黄褐色粘質土(1よりやや明；0.5～1㎝大の地山岩を含む)
6　にぶい黄褐色粘質土(2よりやや暗；0.5～1㎝大の地山岩を含む)
7　黄褐色粘質土～にぶい黄褐色粘質土(3よりやや明；0.5～6㎝大の地山岩を多く含む)
8　黄褐色粘質土(10よりやや明；0.5～10㎝大の地山岩を多く含む)
9　黄褐色粘質土(15より明；0.5～5㎝大の地山岩を密に含む)
10　にぶい黄褐色粘質土(3よりやや暗)
11　にぶい黄褐色粘質土(灰黄褐色粘質土ブロック及び0.5～2㎝大の地山岩を含む)
12　黄褐色粘質土(11よりやや暗)
13　にぶい黄褐色粘質土(1㎝大の地山岩を僅かに含む)
14　黄褐色粘質土(0.5～3㎝大の地山岩を多く含む)
15　黄褐色粘質土(4より暗；灰黄褐色土ブロックを含む；0.5～2㎝大の地山岩を多く含む)
16　黄褐色粘質土(1～2㎝大の地山岩を含む)
17　黄褐色粘質土(6より明；0.5～2㎝大の地山岩を多く含む)
18　黄褐色粘質土(6よりやや暗；0.5～4㎝大の地山岩を含む)

第68図　土壙墓群2東 第1主体部実測図

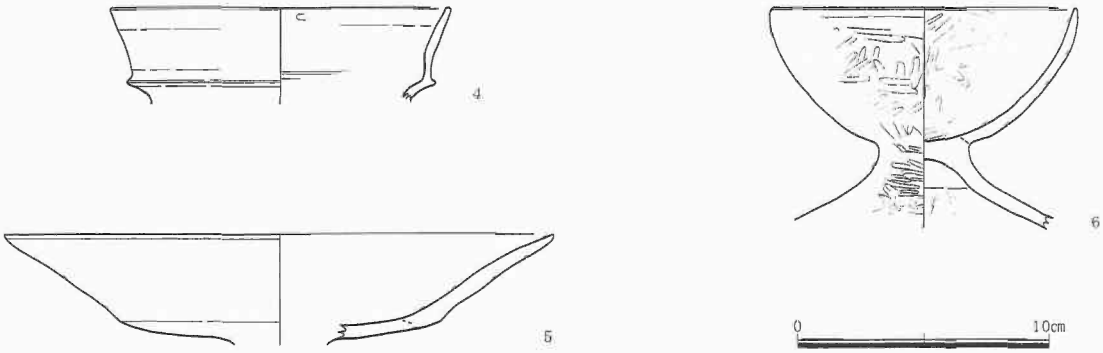
体部は、第１主体部にほぼ平行のＮ－85°－Ｗに主軸をとり、規模は、長さ0.97m、幅0.86m、深さ0.53mを測る。棺は壺の口縁部に高杯の杯部が内面を外側に向けた状態で蓋として使用され、さらにその外側から偏平な自然石で蓋の押えが施されていた。このうち、壺（第71図－７）は外傾して立ち上がる複合口縁をもち、肩部外面には回転を利用したハケ目とその後の連続刺突文が認められる。また脚部を打ち欠いた高杯（同図－８）は外反気味に立ち上がる口縁部で、杯部内面にはヘラ磨きがなされる。

③西主体部

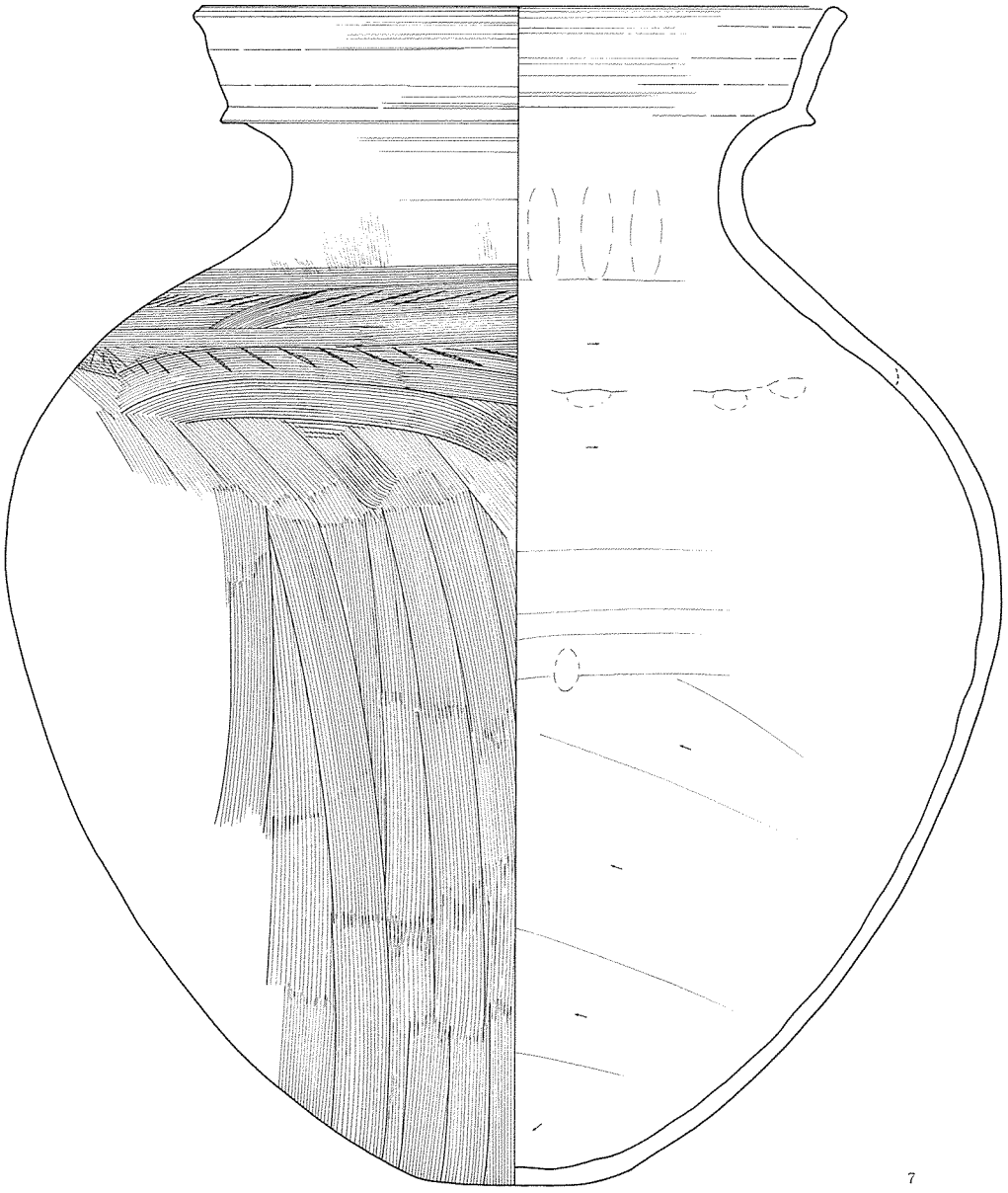
本主体部は、調査区の北西端部に位置し、尾根方向にほぼ垂直のＮ－76.5°－Ｅに主軸をとって掘り込まれる。平面形は隅の丸い長方形で、その中央よりやや西側を後述の炉に切られるが、規模は、長さ3.87m、幅1.80m、深さ0.73mを測る。断面観察によると、横断方向は不明瞭ながら、縦断方向は両小口壁から50cm程度の位置にそれぞれ層序の違いの立上りが認められる。このことから本主体部にも長さ2.40m程度の木棺が設置されていた可能性が考えられる。

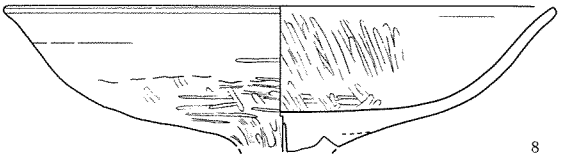
第69図　土壙墓群２東 第２主体部実測図

遺物は埋土中および丘陵掘削部上面から甕（第70図－４）、高杯（同図－５、６）等の土師器片が検出されている。複合口縁部の甕（４）は外傾して端部を丸く納める。外反して先細りながら大きく開く口縁部をもつ高杯（５）は屈曲も甘くなっている。また椀状の杯部の高杯（６）は杯部内外面ヘラ磨きで、脚部も外面ヘラ磨きである。



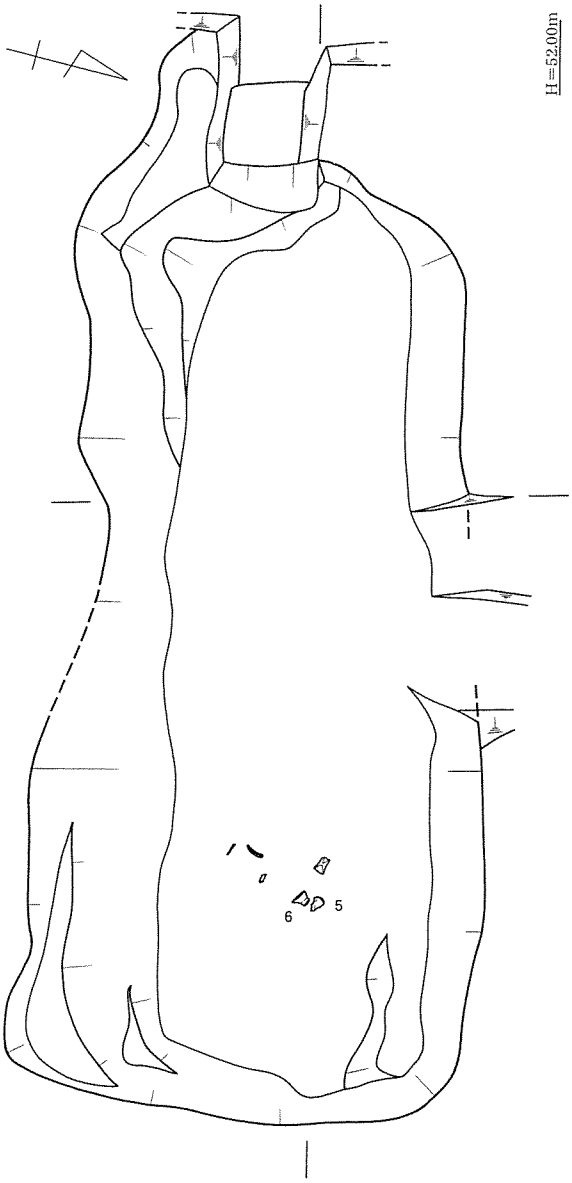
第70図　土壙墓群２西 出土遺物実測図

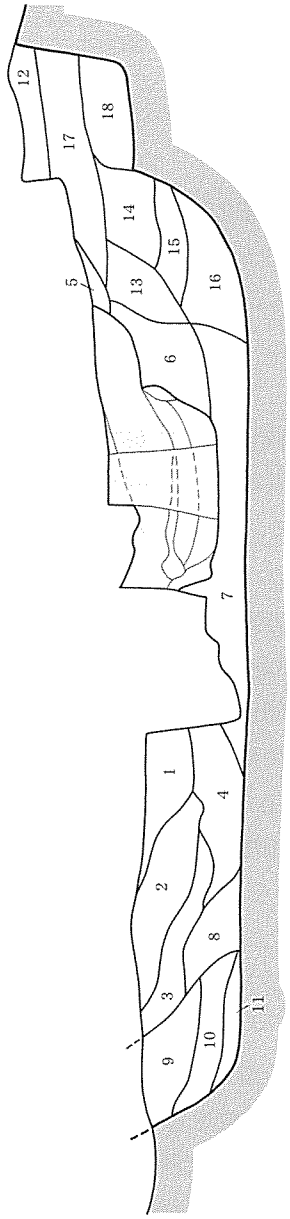


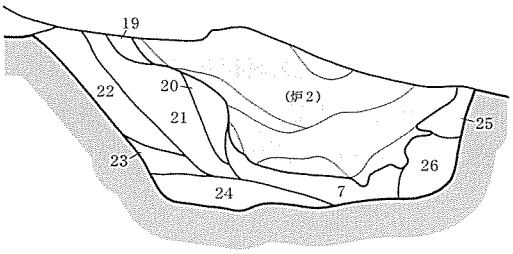


0 10cm

第71図　土壙墓群２東 第２主体部出土遺物実測図







1　黒褐色粘質土（1～7㎝大の地山岩を僅かに含む）
2　にぶい黄褐色粘質土(0.5～3㎝大の地山岩、炭化物、土器片を含む)
3　にぶい黄褐色粘質土（2より明；1～3㎝大の地山岩を僅かに含む；土器片を含む）
4　にぶい黄褐色粘質土（2，3よりやや暗；1～4㎝大の地山岩を含む）
5　にぶい黄褐色粘質土(黒褐色土ブロックを僅かに含む)
6　黄褐色粘質土(0.5～5㎝大の地山岩を極僅かに含む)
7　黄褐色粘質土（6よりやや暗）
8　にぶい黄褐色粘質土（3，4よりやや明；0.5～1㎝大の地山岩を含む）
9　黄褐色粘質土(0.5～3㎝大の地山岩を含む)
10　黄褐色粘質土（9よりやや暗；1～3㎝大の地山岩を含む）
11　黄褐色粘質土（9，10よりやや明；0.5～1.5㎝大の地山岩を含む）
12　にぶい黄褐色粘質土(にぶい褐色土は含まず)
13　黄褐色粘質土（6よりやや暗く7よりやや明；0.5～3㎝大の地山岩を含む）
14　黄褐色粘質土(13より明；0.5～1.5㎝大の地山岩を含む)
15　黄褐色粘質土(13よりやや暗；1～2㎝大の地山岩を多く含む)
16　黄褐色粘質土(13よりやや暗く7よりやや明；1～3㎝大の地山岩を多く含む)
17　黄褐色粘質土(灰黄褐色土ブロック及び0.5～2㎝大の地山岩を含む)
18　黄褐色粘質土(0.5～1.5㎝大の地山岩を含む)
19　にぶい黄褐色粘質土(褐色土ブロックを含む)
20　黄褐色粘質土（0.5～1㎝大の地山岩を含む）
21　黄褐色粘質土（20よりやや暗；0.5～5㎝大の地山岩を含む）
22　黄褐色粘質土（21よりやや暗；1㎝大の地山岩を僅かに含む）
23　にぶい黄褐色粘質土
24　にぶい黄褐色粘質土(23よりやや暗；0.5～1㎝大の地山岩を含む)
25　黄褐色粘質土（3～5㎝大の地山岩を含む）
26　黄褐色粘質土（25よりやや暗；0.5～3㎝大の地山岩を含む）

0　1m

第72図　土壙墓群2西 主体部実測図

なお主体部内遺物および土器棺から、土壙墓群２東、西の埋葬時期はいずれも古墳時代前期後半代と考えられる。

13. 土壙墓群１（付図３、４，第73～79図，PL40、41、61）

１）位置と現状

土壙墓群１は、調査地の最北端部に位置し、土壙墓群２の３～５m程度北となる。前述城跡の平坦面１にほぼ重なり、標高は47.5m前後である。現況では明瞭な墳丘状の盛り上がりはなく、あるいは東側調査範囲外へ区画は広がる可能性もあるが、現段階では尾根斜面を削り出して比較的平坦な墓域としたと見られる。

①第１主体部

本主体部は墓域調査地内西側に位置する。本主体部の南側30cm程度に、本主体部にほぼ平行する地山の掘削面があり、その両端が、本主体部を囲むような北側への微妙な弧を描きかけて東端は消滅、西端は調査地外となっている。城の時期の掘削の可能性もあるが、あるいはもともとはこの延長が墓域の境界であった可能性もある。

本主体部は尾根に直交方向のN－83°－Wに主軸をとって地山から掘り込まれる。平面形は隅の丸い長方形で、規模は、長さ3.51m、幅1.91m、深さ0.89mを測る。断面観察によると、縦断方向は不明瞭ながら、横断方向では北側壁から30cm、南側壁から20～40cm程度の位置にそれぞれ層序の違いの立上りが認められる。また上位層には棺の腐食による陥没で墓壙上に置かれた遺物等が落ち込んだものか、炭片とともに土器片が検出される層が認められる。これらのことから本主体部にも幅25～40cm程度の木棺が設置されていた可能性が考えられる。

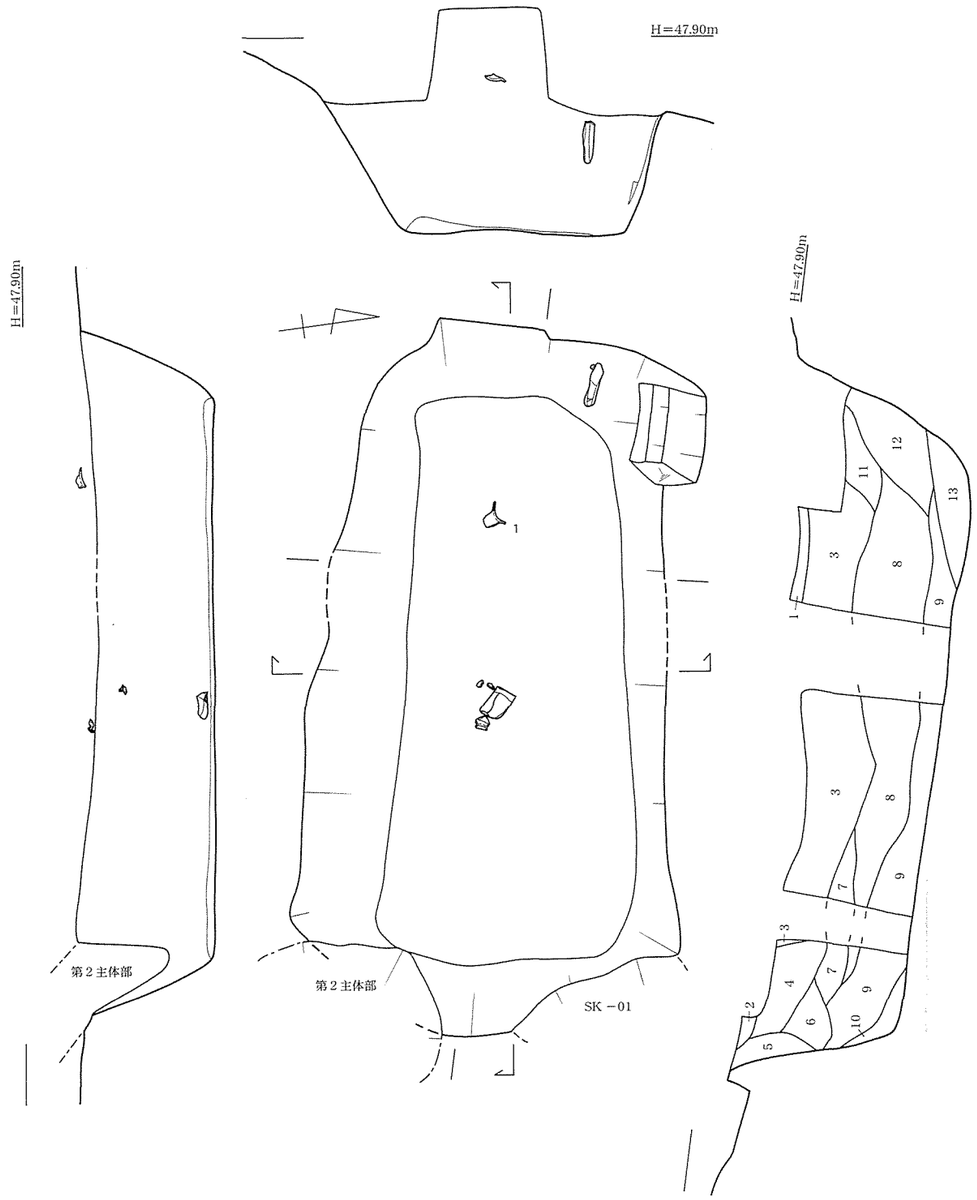
遺物は、主に埋土上層から小型丸底壺や甕、高杯等が検出されたが、遺存状況が悪く、甕（第74図－１）、高杯（同図－２）を図化した。甕（１）は外傾して立ち上がる口縁部で端部に面をもつ。高杯（２）の口縁部も外傾して端部に面をもつ。杯部内外面ヘラ磨きである。

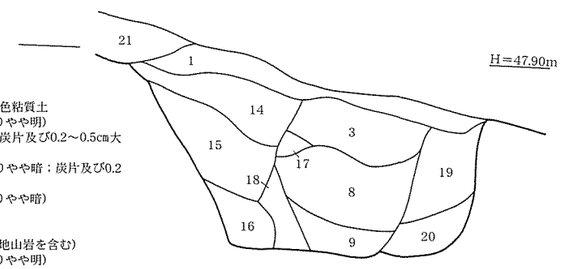
②第２主体部

本主体部は第１主体部の南東隅上位を切る形で掘り込まれる土器棺墓である。墓壙は、第１主体部とほぼ平行のN－73°－Wに主軸をとる。平面形は不定な楕円形で、南側肩部がやや二段状に広がる。断面はこの南側のほかに東側中位に段をもつ。規模は、長さ0.94m、幅1.08m、深さ0.54mを測る。棺としては口縁部を東に向け、墓壙中位の段にその口縁部を乗せるようにして、体部を墓壙床面に横たえた形の中型の壺（第76図－５）が検出された。口縁部から肩部にかけての上位には別の小型壺（同図－６）の底部片が伏せた状態で置かれ、残りの破片が棺本体の底部付近に重ねて覆い被せるように置かれる。このうち本体の壺（５）は、器高56.6cmを計る。複合口縁の口縁部は、直立して立上り、端部に面をもち、下端部の稜がややつまみ出される。肩が張り最大胴径を体部上位にもつ。調整は全体に風化が著しく不明瞭であるが、肩部には回転を利用したハケ目がなされ、後に連続刺突文が綾杉状に二段施され、さらに区画するようにヘラ描き沈線３条が周回する。壺（６）は、球形の体部で、平底の小さな底部をもつ。体部の外面は叩き目後ハケ目、後ヘラ磨きで、内面は無数の工具痕跡や成形時の指頭圧痕が認められるが、丁寧なナデがなされる。

③第３主体部

本主体部は第１主体部北東隅の北約0.5mに後述のSK－01を挟んで位置する土器棺墓である。SK－01と南西側で一部切りあうがその前後関係は明確にはできなかった。墓壙は第１主体部と直交方向のN－6°－Eに主軸をとる。平面形は南北にやや細長い楕円形で、規模は、長さ1.01m、幅0.61m、深さ0.41mを測るが、表土除去段階で既に土器上位が検出され始めており、上位が流失あるいは削平されていたことが窺われる。図化できなかったが、棺には器高55cm程度の壺２個と低脚杯１個が使用されている。

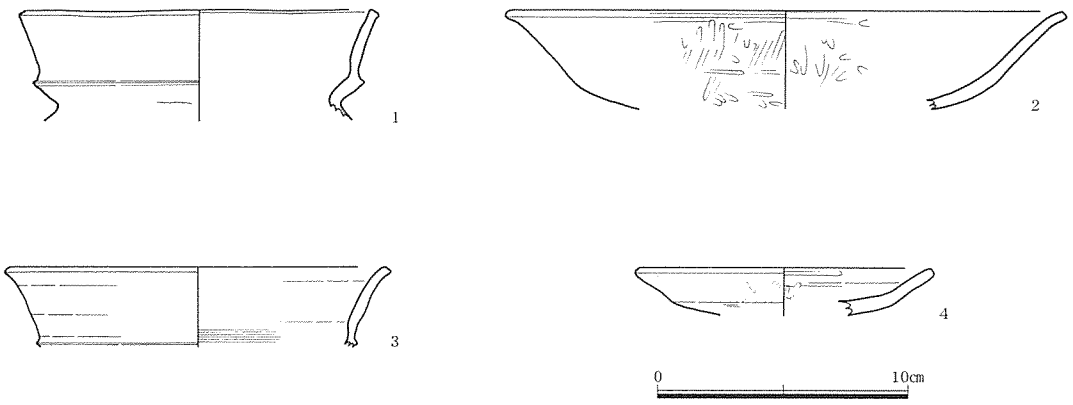




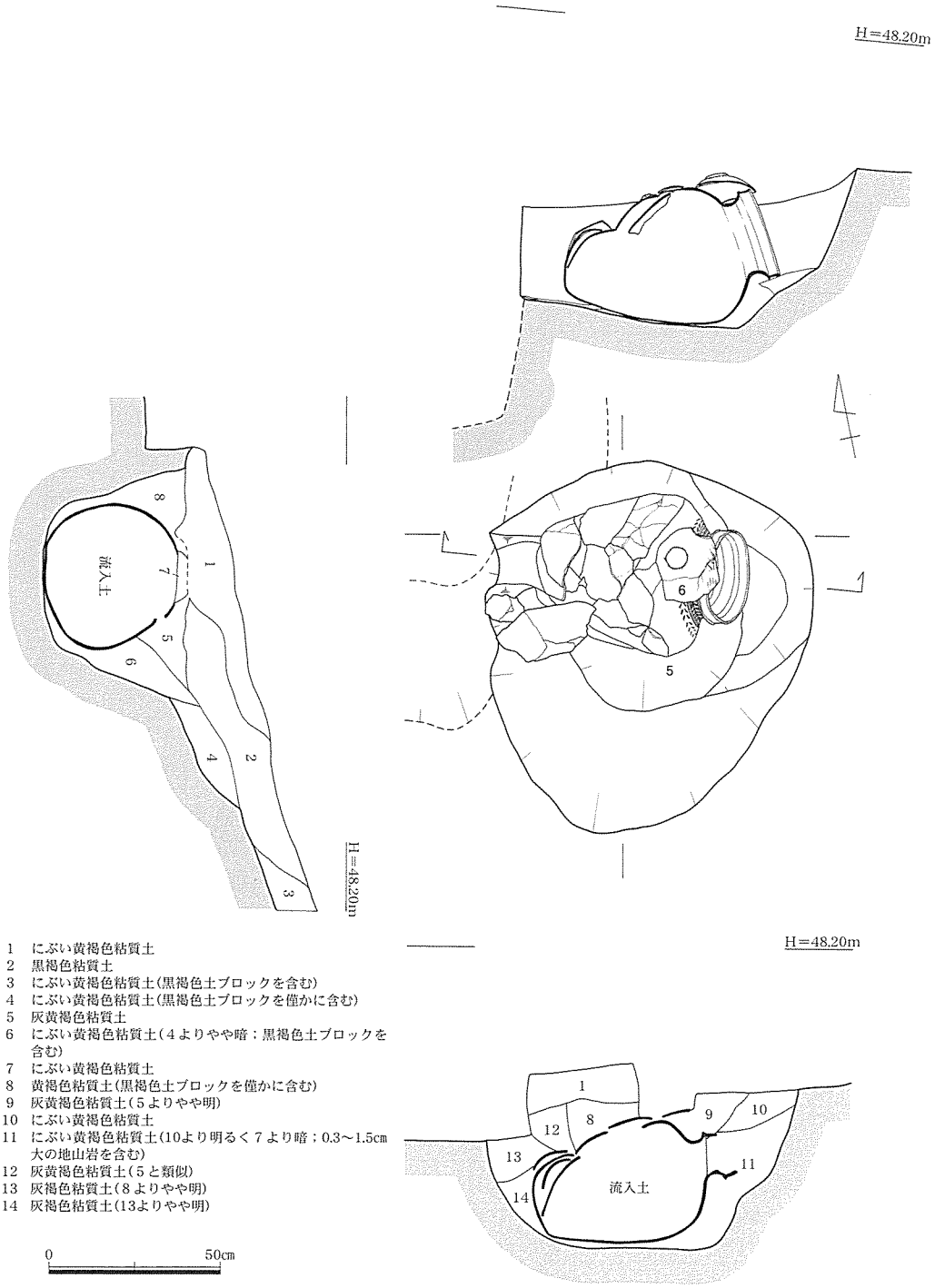
1　黄褐色粘質土～にぶい黄褐色粘質土
2　にぶい黄褐色粘質土（１よりやや明）
3　灰黄褐色粘質土（土器片，炭片及び0.2～0.5㎝大の地山岩を含む）
4　にぶい黄褐色粘質土（２よりやや暗；炭片及び0.2～0.5㎝大の地山岩を含む）
5　にぶい黄褐色粘質土（４よりやや暗）
6　褐色粘質土
7　にぶい黄褐色粘質土
8　褐色粘質土（0.3～１㎝大の地山岩を含む）
9　にぶい黄褐色粘質土（７よりやや明）
10　褐色粘質土（８よりやや赤褐色かかる；１～３㎝大の地山岩を含む）
11　褐色粘質土（８よりやや明；炭片を含む）
12　褐色粘質土（８，14よりやや暗）
13　褐色粘質土（８，14，15よりやや赤褐色かかる；0.3～１㎝大の地山岩を含む）
14　黄褐色粘質土（13よりやや明；0.3～１㎝大の地山岩及び炭片を含む）
15　褐色粘質土（８よりやや暗）
16　褐色粘質土（19より明；0.5～２㎝大の地山岩を含む）
17　褐色粘質土（８よりやや明）
18　にぶい黄褐色粘質土（９よりやや暗；炭片を含む）
19　黄褐色粘質土（13よりやや暗；0.5～２㎝大の地山岩を含む）
20　褐色粘質土（８よりやや暗）
21　灰黄褐色粘質土

0　1m

第73図　土壙墓群１　第１主体部実測図

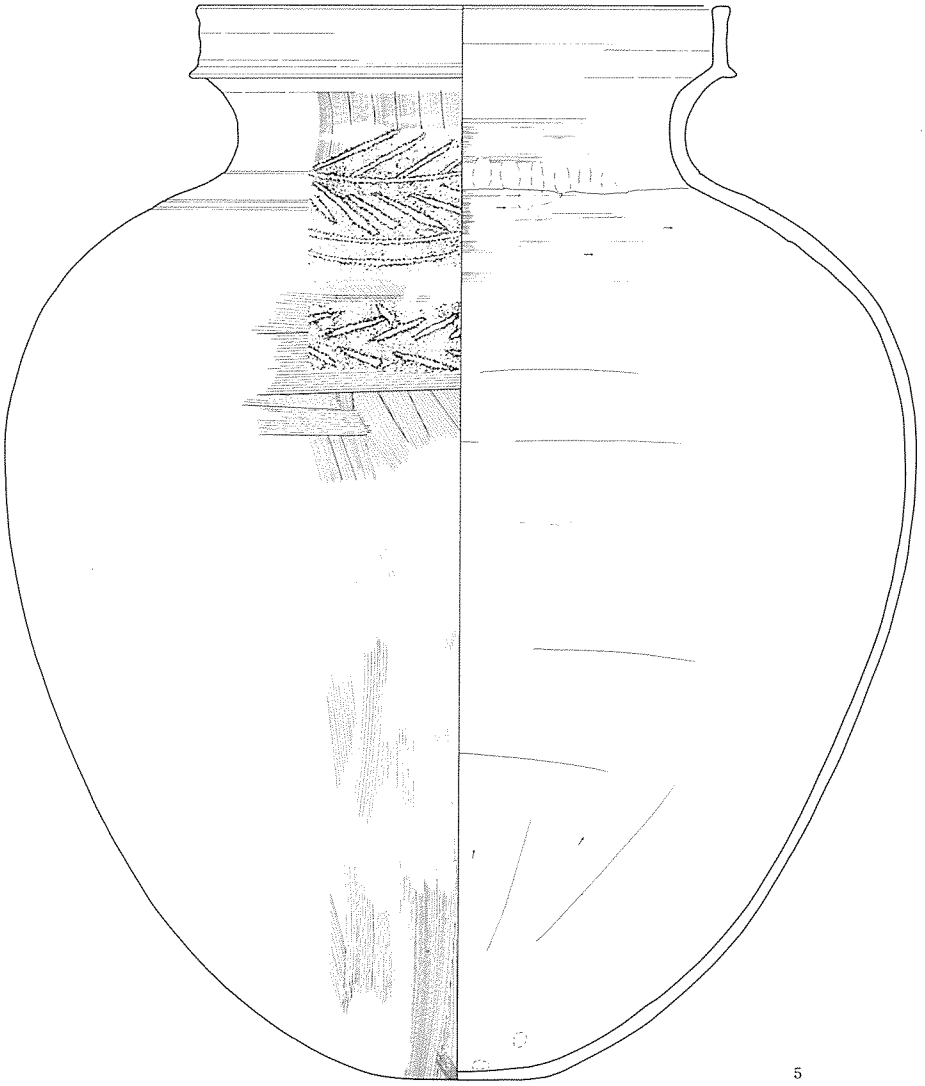


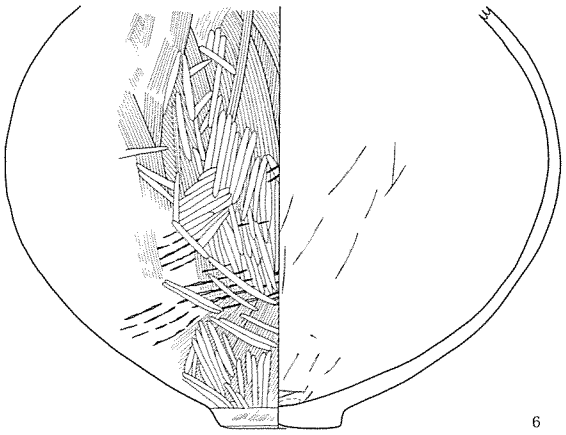
第74図　土壙墓群１　出土遺物実測図



1　にぶい黄褐色粘質土
2　黒褐色粘質土
3　にぶい黄褐色粘質土(黒褐色土ブロックを含む)
4　にぶい黄褐色粘質土(黒褐色土ブロックを僅かに含む)
5　灰黄褐色粘質土
6　にぶい黄褐色粘質土(４よりやや暗；黒褐色土ブロックを含む)
7　にぶい黄褐色粘質土
8　黄褐色粘質土(黒褐色土ブロックを僅かに含む)
9　灰黄褐色粘質土(５よりやや明)
10　にぶい黄褐色粘質土
11　にぶい黄褐色粘質土(10より明るく７より暗；0.3～1.5cm大の地山岩を含む)
12　灰黄褐色粘質土(５と類似)
13　灰褐色粘質土(８よりやや明)
14　灰褐色粘質土(13よりやや明)

第75図　土壙墓群１　第２主体部実測図

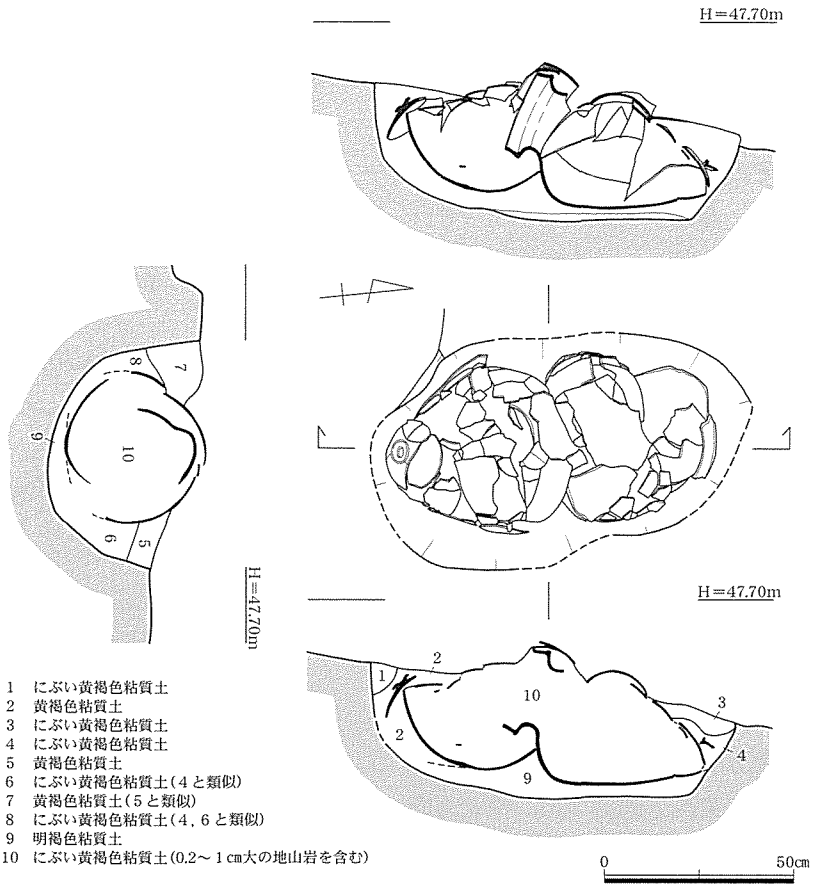




0　　10cm

第76図　土壙墓群１　第２主体部出土遺物実測図

このうち壺は南側個体(a)の口頸部を打ち欠き、北側個体(b)の口縁部に被せる形で重ね合わせ、両底部がそれぞれ南北となるように寝かせている。打ち欠かれた(a)の口頸部の少なくとも一部は(b)底部の外側に置かれ、(a)底部の外側には低脚杯が杯部内面を(a)底部に被せるように置かれる。壺の口縁部はいずれもやや内傾して立ち上がり、端部に面をもつ。体部は肩が張り最大胴径をいずれも体部上位にもつ。底部がやや平底気味である。肩部に回転を利用した横ハケ目が見受けられる。皿状杯部の低脚杯は剥落不明瞭ながら、内面にハケ目をわずかに認める。



第77図　土壙墓群1　第3主体部実測図

④第4主体部

本主体部は、第1主体部の北西約1mに位置する。検出状況から上位が流失あるいは削平されていたようで遺存状況が悪いが、土器棺墓とみられる。墓壙の平面形は円形に近く、規模は遺存値で、径0.41m、深さ0.19m程度である。内部主体の棺には小型の甕2個が使用されている。いずれも口縁部を打ち欠き、まず一方(a)をやや斜めに東側に口縁部を向けて寝かせ、不明瞭ではあるが、その上に別個体(b)をカバーするように被せていた可能性が考えられる。図化できなかったが、いずれの甕も肩の張りは甘くなり、底部はやや丸くなる。肩部外面に波状文が施される。

2)その他の遺構・遺物

本墓域区画の中からは上述の埋葬施設以外に1基の土坑(SK－01)を、またわずかながら遺構に伴わない遺物を検出している。

①SK－01

SK－01は上述のとおり第1主体部の北側、第3主体部の南側の間で、両者と切りあって位置する。平面形はやや不定な楕円形で、断面形はお椀状である。規模は、長さ0.77m、幅(0.55)m、深さ0.41m程度であるが、遺物もなくその性格等は不明である。また切りあい関係も明確にはできなかった。

②その他の遺物

本墓域区画内からは尾根掘削部付近から遺構内からの流出遺物の可能性もあるが、遺構外から土師器片が検出されている。そのうち遺存状況の比較的良い口縁部片(第74図－3)と杯部片(同図－4)を図化した。(3)は第1、第2主体部の東側尾根掘削部検出で、土壙墓群2東付近からの転落遺物の可能性も考えられるが、甕の複合口縁部片で、外反気味に立ち上がる口縁部は端部に面をもつ。内面頸部にはハケ目が認められる。また、第1主体部周辺検出の口縁部が短く外傾して開く小型の浅い杯部(4)は屈曲が甘く、内外面ともヘラ磨き痕が認められる。

なお上述の埋葬施設、遺物等から土壙墓群１の埋葬時期は全体として古墳時代前期後半代と考えられる。

14. その他の遺構・遺物

（付図３、第80～82図，PL42、61）

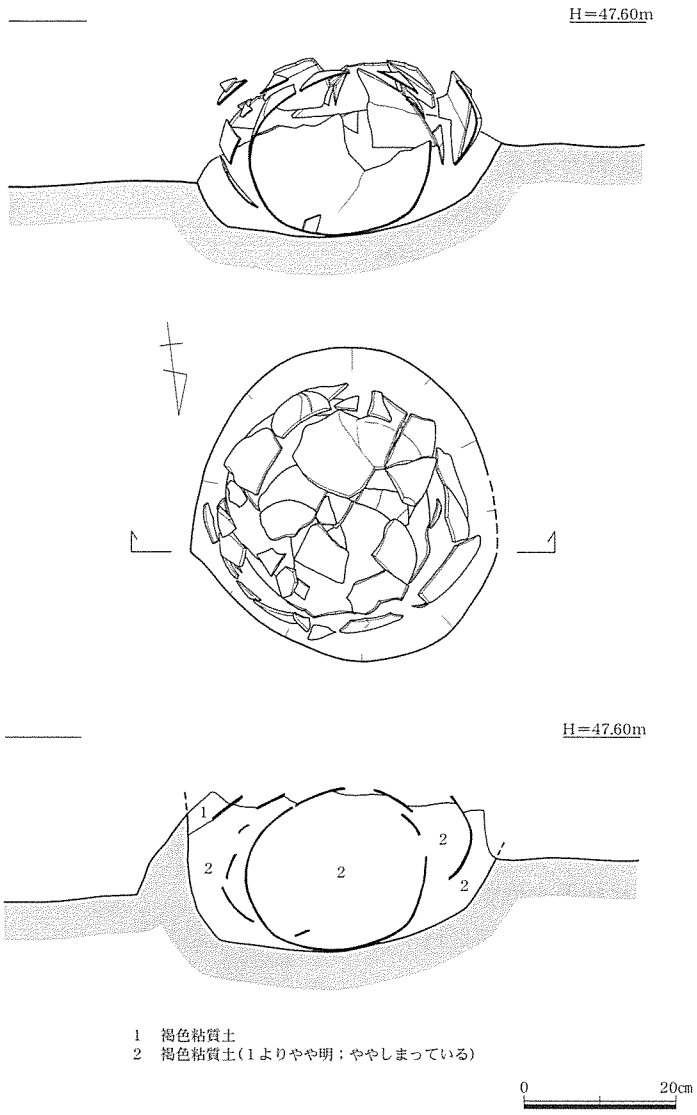
本調査地内からはこれまでに述べてきた城跡、古墳等以外に、焼成痕跡の明瞭な遺構２基を検出した。当初鍛冶炉の可能性を考え炉１、２として調査を行った。以下便宜的に調査時の呼称をそのまま使い、これらについても若干ふれたい。

１）炉１

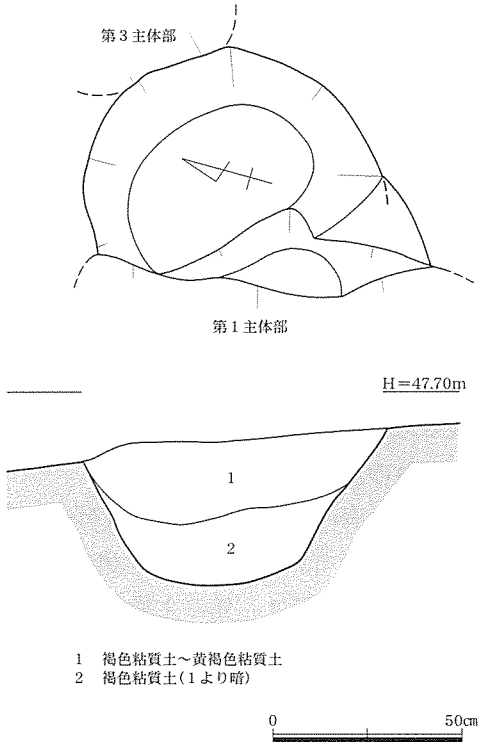
本遺構は調査地最北端部、城跡の平坦面１、あるいは土壙墓群１付近に位置する。標高は47.7m程度で、丘陵裾からの比高差は28m弱である。当初東西方向約２m、南北方向約1.5m程度の範囲に暗褐色土の範囲が認められたが、尾根の掘削部への埋土と同様で区別がつかず、掘り下げの結果、東西方向1.05m、南北方向0.8m、深さ0.27mを測る長方形状の土坑が検出された。この土坑の北壁を除く３方壁には被熱による赤褐色の硬化土が最大５cm程度の厚さで認められた。またこの土坑から続くようにその南西側に平面形コの字状の溝が検出されている。やや掘り過ぎ気味ではあるが、規模は東西方向1.7m、幅0.16～0.45m、深さ0.15m程度である。これらの埋土は、前者の埋土が後者の埋土より黒色が強い傾向がみられるが、いずれからも肉眼では炭片以外には遺構の性格を示すものは認められなかった。

遺物は、本遺構埋土中位および上層から混入遺物の可能性も考えられるが、土師器片が検出されている。このうち比較的遺存状況の良い甕を図化した（第81図－１）。口縁部が外反して開く甕（１）は、頸部からやや丸みをもって下方へ続く。体部外面はハケ目で、内面は口縁部にハケ目痕が残るナデがなされ、体部にはヘラ削り後ナデがなされる。

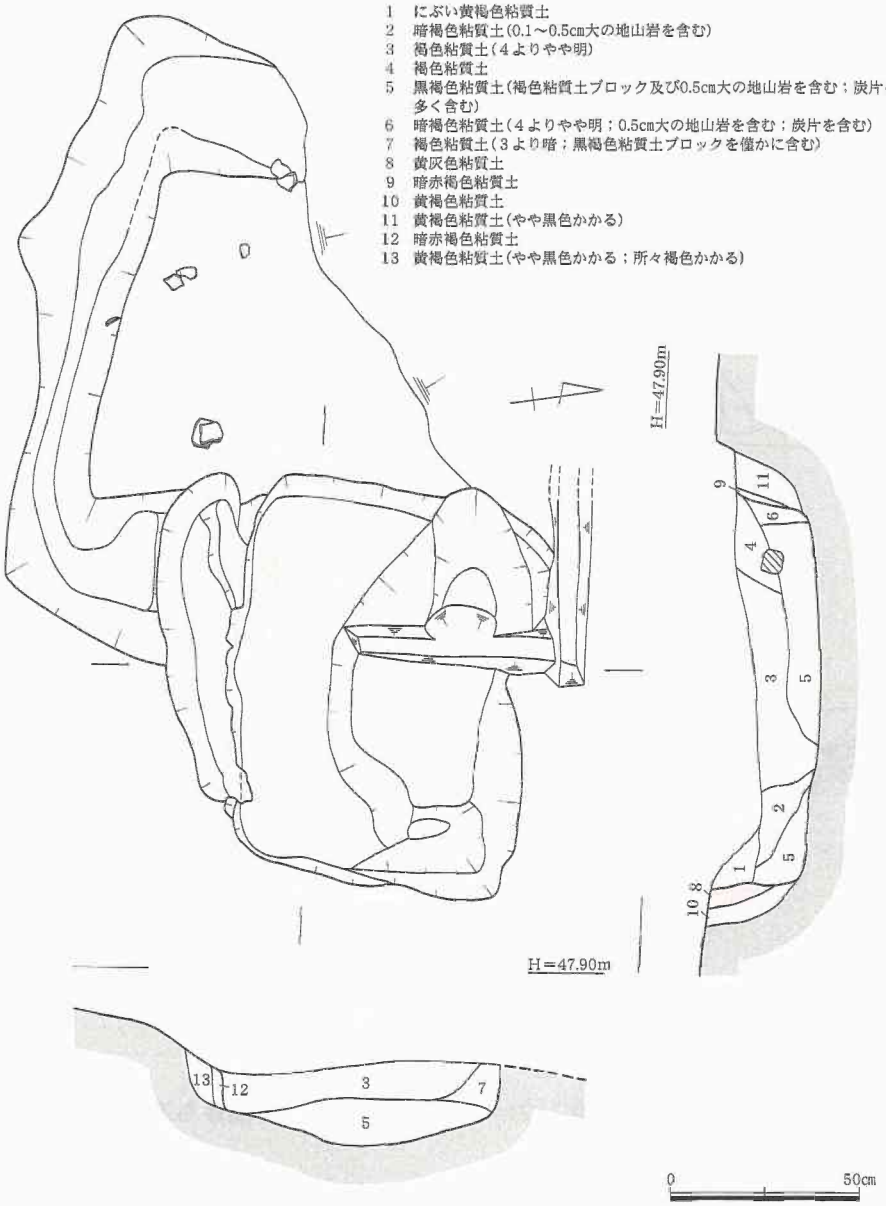
なお本遺構の性格は、上述のとおり詳細は不明ながら、厚さ最大５cm程度の硬化土もあり、炉あるいは何らかの



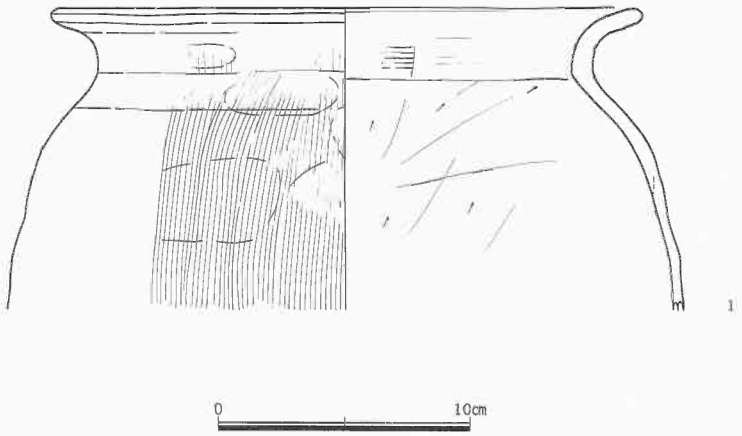
第78図　土壙墓群１　第４主体部実測図



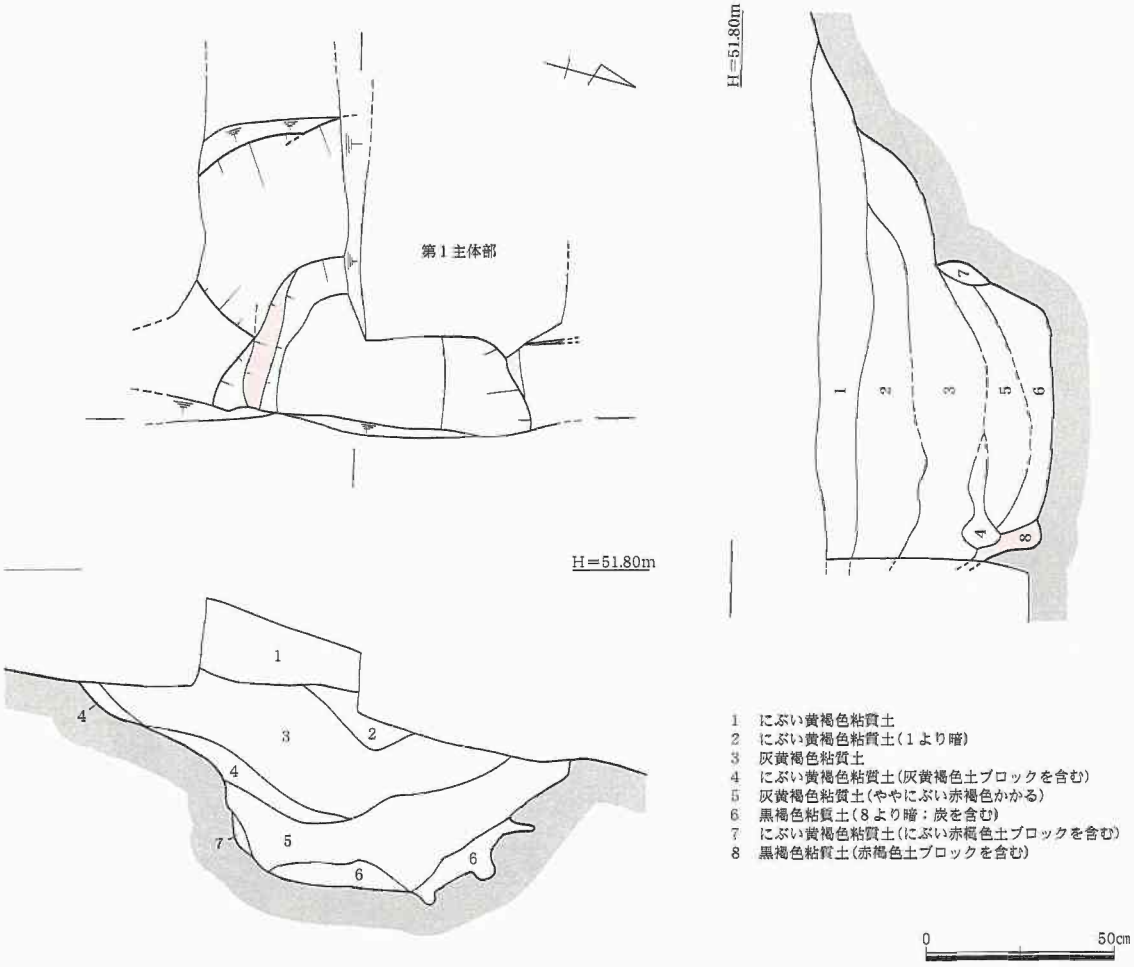
第79図　土壙墓群１　SK －01実測図



第80図　炉1　実測図



第81図　炉1　出土遺物実測図



第82図　炉2　実測図

窯の可能性を考えておきたい。また時期については、混入遺物の可能性も高いが、出土遺物から古墳時代末頃の可能性も考えておきたい。

2)炉2

本遺構は前述のとおり、土壙墓群2西主体部上に位置する。炉1の南西約12mで、標高は51.5m程度、丘陵裾からの比高差は31.5m程である。層序確認のトレンチで検出したが埋葬施設と切りあっていたためその後の埋葬施設調査時の同時調査となった。このため全体像の確認が多少困難となったが、平面的には隅丸の方形の土坑の南側がさらに傾斜をもって広がる形状を呈し、断面形は部分的に二段土坑状となる。規模は遺存値で、南北方向1.3m、東西方向(1.13)m、深さ0.52m程度である。埋土は床面付近に炭を含む黒褐色土が堆積し、各壁には部分的ながら赤褐色系の焼土あるいは焼土ブロックが認められる。しかしながら肉眼では炭片以外には遺構の性格を示すものは認められず、遺物も検出されなかった。したがって本遺構の詳細は不明である。

(註4)鈴木一有氏のご指摘、ご教示による。
(註5)野田真弓氏のご教示による。

V　おわりに

今回の調査は鳥取市倭文地区で実施する本格的な発掘調査としては試掘調査を除くと初めてのものであった。調査地は現在の倭文集落の後背丘陵上に立地し、標高は80m程度とそれほど高くはないものの、現地からの眺望は素晴らしく、中国山地から北流して日本海へ注ぐ千代川とその堆積作用によって形成された鳥取平野を一望できる。調査では、当初から可能性は指摘されていたとはいえ、中世の城跡と重複して古墳８基を含む墳墓がほぼ調査地全域から検出された。その数は城跡の関連施設として、曲輪等の平坦面18か所、堀等の溝９か所、土塁１か所が、また墳墓として古墳８基とそれらに属さない墓壙21基、土坑６基、ピット状遺構９基、その他を検出した。遺物は古墳の時期のものがそのほとんどを占めるが、鉄鉾、鉄剣、鉄刀、鉈、鉄鏃、甲冑、馬具、鏡と言った金属製品のほか、玉類や土器、つぶて石を含む石器等が出土している。調査の結果についてはⅢ、Ⅳ章で述べたが、ここでは調査で明らかとなったこと、さらに検討が必要なことについて再度列挙してまとめに変えたい。

１．倭文所在城跡について

１）城跡の立地は、千代川がその範囲を広げ始める大きな谷の出口付近に位置し、標高は80m程度とそれほど高くはないものの所在する丘陵がちょうどこの谷口に突出した形となるため千代川水域を押さえるには申し分ない位置と言える。

２）遺構のうち防御施設としてとらえた平坦面（曲輪）については、二つのタイプがあるように思われる。経年によって崩落した可能性も否定できないが、まず一つめのタイプとしては、平坦面だけをみると主尾根上に認められるその多くが含まれることになるが、古墳造成後の自然地形に近いのではと考えられるあまり人の手の加わっていないタイプである。

また二つ目としては、主要部周辺の細長い平坦部のように、削り出しでは面積の確保しづらい位置にあえて多量の盛土を行って造りだしているタイプである。これらの違いはあまり手間をかけないで築城し、但し必要なところには十分手を加えて護りを厚くしようとした表れなのか、あるいは改修等によるものなのか今後も検討が必要であろう。

３）調査では溝とした各堀についてもいくつか特徴がある。まず一つ目としては、北西から北東にかけて中腹よりやや下位の丘陵斜面を取り巻くように造られた横堀である。これには土塁と高さを持った切岸がセットになっており重要な防御施設と思われるが調査区内ではほかには検出されていない。

二つ目は、Ⅰ区域の南東部から検出した堀である。溝２として調査した堀は尾根を横断する堀切のようにも見えるが、そのまま横堀状となって通路となる可能性が認められた。またすぐ隣接するように掘り込まれた溝３とした堀は、竪堀のようではあるものの尾根中央付近まで切り込んでおり、かつ突然終っていることから堀切ではない。従って、いずれの堀についてもその性格も含めてさらに検討が必要である。

三つ目としてはⅢ区域から検出した４か所の堀切である。おそらくすべてではないものの、もともとの古墳の裾あるいは周溝も利用してそれらを拡張するように造営したものと考えられるが、溝９の北西端がやや趣が異なるものの、そのほかは堀切の端部をさらに竪堀状に切り落しており、斜面からのまわり込みにも対応した手厚い防御施設となっている。

４）通路や虎口については、調査では不明瞭なままとなったが、まず通路では、可能性のあるものとして、①Ⅰ区域の平坦面５・６の南西側にそれぞれから尾根にほぼ並行の南東方向に延びかかる平坦部の痕跡、②溝２の延長上から平坦面17の南西裾付近にまわり込むもの、③主要部の西側端部から切り落された裾部で平坦面17からややスロープ気味に南東方向へ延びるものがあげられる。今回の調査では確定はできなかったが、まだまだ検討が必要であろう。

次に虎口については明確にすることができなかった。各平坦面の肩部があまり明確でなかったせいも

あるが、通路事態も可能性を考えるにとどまっており、さらに検討が必要である。

5）建物、柵、乱杭と言ったような防御施設が在ったことを示す遺構が全くと言っていいほど検出されなかったのも特徴の一つであろう。このことは当該期の出土遺物の少ないこととあわせて考えると、本城跡が元々常駐の城として築造あるいは使用されたものではなく、陣城のように必要に応じて整備されたものである可能性を示すものではあるまいか。

6）遺物については上述のとおり古墳時代以外のものはその出土はきわめて少ないが、概ね三つの時期に分けられよう。まずは主要部の平坦面９表土中から出土した土師器皿や白磁の時期で、12世紀から13世紀頃のものと考えられる。また主要部の平坦面10や12の表土直下から出土した土鍋は、いずれも14世紀後半から15世紀頃のものと考えられる。さらに平坦面９の表土中や10の表土直下から検出された銅銭や灯明皿は近世のものである。ただ量的なことはもちろんであるが、築城の技法も考えあわせるとこれらの時期が必ずしも直ちに本城跡の時期を示すものとは言えずさらに検討が必要である。

また本城跡からはそれほど多くではないものの、つぶてとして使用されたとみられる河原石が81点検出されている。このうち２点以外は主要部およびその南の溝６と平坦面13、14、18に集中しており、しかしながら平坦面18以外では集積状態で検出されたわけではなく転々と検出されている。このことから、この辺りで使用された可能性も考えられる。大きさについてみると188～2,082ｇとばらつきがあるが、平均値としては11.92×8.59㎝、854.27ｇで、１kgを越える１/４程度はややつらいものの、ほかは片手で十分投げられそうなサイズである。

第１表　倭文所在城跡出土つぶて石一覧

	取上場所	遺物番号	縦(cm)	横(cm)	重量(g)	備　考
1	平坦面１	121	12.0	8.6	914	表土中
2	平坦面５	003	9.4	4.5	188	表土中
3	溝６	1083	10.8	7.0	566	埋土中
4	〃	090－１	12.8	9.8	790	埋土中
5	〃	090－２	11.6	6.4	616	埋土中
6	〃	090－３	10.5	7.8	816	埋土中
7	〃	544	14.0	9.7	1306	埋土中
8	〃	545	14.5	11.6	1606	表土直下
9	〃	546	14.2	7.7	678	埋土中
10	〃	547	12.2	9.7	948	埋土中
11	〃	548	9.5	10.2	612	埋土中
12	〃	549	12.4	10.0	1516	埋土中
13	〃	550	10.9	9.4	812	埋土中
14	〃	551	13.7	13.0	2082	埋土中
15	〃	552	11.1	8.0	646	埋土中
16	平坦面10	203	10.1	9.0	978	表土直下
17	〃	202	10.9	8.8	974	表土直下
18	〃	129	8.4	7.9	500	表土・流土中
19	〃	152	12.2	8.8	1440	表土・流土中
20	平坦面11	246	13.7	10.8	1658	表土直下
21	〃	245	13.4	6.4	760	表土直下
22	〃	245－１	10.9	8.0	608	表土直下
23	〃	247	12.8	9.1	762	表土直下
24	〃	1110	11.1	9.6	978	表土直下
25	平坦面12	126－１	17.3	11.7	1652	表土中
26	〃	126－２	12.4	11.2	1298	表土中
27	〃	126－３	14.3	8.4	1416	表土中
28	〃	126－４	13.4	8.0	704	表土中
29	〃	126－５	11.4	9.4	650	表土中
30	〃	126－６	12.4	10.0	1024	表土中
31	〃	126－７	9.2	8.8	626	表土中
32	〃	126－８	12.4	10.8	950	表土中
33	〃	126－９	13.2	9.4	1004	表土中
34	〃	126－10	10.5	7.8	586	表土中
35	〃	125－１	12.1	9.5	692	表土中
36	〃	125－２	10.8	8.4	820	表土中
37	〃	125－３	10.2	7.7	842	表土中
38	〃	125－４	9.2	8.8	716	表土中
39	〃	151－１	17.7	7.3	1318	平坦面11の可能性あり
40	〃	151－２	15.2	9.6	1584	平坦面11の可能性あり
41	平坦面13	1117－１	14.2	9.5	1518	表土直下
42	平坦面13	1117－２	18.0	10.0	2104	表土直下
43	〃	1117－３	14.9	9.1	1302	表土直下
44	〃	1117－４	15.7	9.8	1410	表土直下
45	〃	1117－５	12.5	7.3	980	表土直下
46	〃	1117－６	12.4	8.5	740	表土直下
47	〃	1117－７	11.0	9.5	642	表土直下
48	〃	1117－８	12.0	7.4	702	表土直下
49	〃	1117－９	10.9	6.6	404	表土直下
50	平坦面14	057	6.5	6.0	170	腐葉土直下
51	〃	058	8.0	5.8	178	腐葉土直下
52	〃	059	11.3	9.8	802	腐葉土直下
53	〃	153	11.2	10.4	926	表土・流土中
54	平坦面18	156	10.0	5.3	230	埋土中
55	〃	157	13.5	8.6	1320	埋土中
56	〃	158	10.8	7.8	704	埋土中
57	〃	159	10.3	9.4	766	埋土中
58	〃	160	13.4	6.3	654	埋土中
59	〃	161	9.8	6.9	314	埋土中
60	〃	162	13.2	10.3	1392	埋土中
61	〃	163	10.2	8.0	498	埋土中
62	〃	164	12.1	8.6	716	埋土中
63	〃	165	8.7	7.7	530	埋土中
64	〃	166	10.7	8.1	560	埋土中
65	〃	167	10.4	9.2	932	埋土中
66	〃	168	10.8	9.7	950	埋土中
67	〃	169	8.5	7.6	492	埋土中
68	〃	170	13.0	7.6	808	埋土中
69	〃	171	11.3	8.5	650	埋土中
70	〃	172	12.3	10.6	670	埋土中
71	〃	173	11.0	6.4	418	埋土中
72	〃	174	16.4	8.3	764	埋土中
73	〃	175	10.9	7.4	518	埋土中
74	〃	176	11.8	7.8	834	埋土中
75	〃	177	11.4	6.7	340	埋土中
76	〃	178	12.0	7.6	574	埋土中
77	〃	180	13.5	7.4	504	埋土中
78	〃	91－１	10.3	7.7	342	埋土中
79	〃	91－２	9.2	8.2	432	埋土中
80	〃	91－３	14.6	9.8	1134	埋土中
81	〃	91－４	10.9	10.2	636	埋土中
	平　均		11.92	8.59	854.27	

以上、本城跡の調査で明らかとなったこと、さらに検討が必要なことのいくつかについて簡単にふれた。ただ調査の結果さらに不明な点が増えた感もあり、もっと周辺地域との関連性や当地域内での時間の流れ等とも合わせて総合的に考えていく必要性が痛感された。

なお本城跡の調査にあたっては多くの方々の指導・助言、ご協力を頂いたが、特に城郭談話会の山野智久氏には格別のご支援、資料提供を頂いた。重ねて感謝いたします。

第２表　倭文所在城跡調査遺構一覧（平坦面）

名　称	標　高（m）	最大長（m）	最大幅（m）	面　積（㎡）	備　考
平坦面１	47.5	15.6	4.9	46.9	つぶて石
平坦面２	51.5	8.8	1.5	13.2	
平坦面３	59.0	25.0	3.5	61.4	切岸
平坦面４	64.4	12.7	4.0	48.4	切岸
平坦面５	66.6	11.0	7.5	70.7	つぶて石
平坦面６	69.2	7.5	5.0	30.7	
平坦面７	77.9	北東～南西6.0	北西～南東5.0	27.8	北側1m ほど下に6×2m 程度の小平坦面あり
平坦面８	73.8	17.5	4.5	62.8	須恵器片
平坦面９	78.8	南北5.9	東西5.3	30.0	白磁底部片、寛永通寶
平坦面10	75.0	10.0～25.0	3.5	最大で53.6	土鍋片、灯明皿、つぶて石
平坦面11	79.6	10.0	7.0	58.3	主郭？、つぶて石
平坦面12	77.7	8.0	2.8	14.9	北西に延びる平坦面の面積は別に23.9㎡、土鍋片、つぶて石
平坦面13	76.3	11.0	8.0	72.2	つぶて石
平坦面14	70.7	21.5	2.6	41.7	つぶて石
平坦面15	74.9	7.5	7.0	42.3	
平坦面16	73.8	11.6	7.5	70.4	
平坦面17	72.5	13.0以上	8.0	90.0以上	通路状スロープ
平坦面18	73.9	6.0～9.5	2.3	12.4～15.6	鉄釘片、つぶて石

第３表　倭文所在城跡調査遺構一覧（溝）

名　称	底標高（m）	長　さ（m）	幅（m）	深　さ（m）	断面形	備　考
溝１	54.5	26.0	2.5	0.3～0.4	浅い皿状	横堀、土塁、切岸
溝２	69.2	11.0	2.5 底幅1.55	1.0～0.3	逆台形状	竪堀状から横堀状へ 通路か？
溝３	71.2	12.0	2.5 底幅1.60	1.0	逆台形状	竪堀？、切岸
溝４	77.1	15.0	3.5	0.2程度	浅い皿状	曲輪か？
溝５	78.6	7.5	3.5	0.3程度	浅い皿状	通路か？、土師皿
溝６	74.9	30.0以上	7.48 底幅1.82	1.63	逆台形状	堀切から竪堀状へ つぶて石
溝７	74.0	31.0以上	6.46 底幅2.04	1.18	逆台形状	堀切から竪堀状へ
溝８	72.6	28.0以上	8.36 底幅3.78	1.5～1.0	逆台形状	堀切から竪堀状へ
溝９	72.6	18.7	1.9～3.5	1.1	お椀状	堀切から竪堀状へ

2．倭文古墳群について

1）今回の調査区では計８基の古墳の存在が明らかとなったが、時期的にはこれらの古墳は古墳時代前期後半の６基と中期末の２基とに大別できる(但し前章でも述べたとおり、７号墳については検出した２基の主体部がそれぞれの時期に相当し、あるいは７基と２基と言った方がよいのかも知れないが)。切り合い関係はあまりなく、中期の６号墳が前期の５号墳を切る程度である。

また墳形についてみると前期古墳６基のうち４基が長方形も含めた方墳、２基が円墳で、中期古墳は２基とも円墳である。

規模的には尾根の一ピークに立地する５号墳が長辺18.6m・短辺14mとやや大きく、最南端部の２号墳が15.1mとこれに次ぐが、その他は最小で径10m程度の９号墳以外は12～13m程度である。

墳丘の築造方法は、前期古墳６基は基本的に墳裾の削り出しと若干の盛土により、中期古墳２基は周溝掘削と墳裾の削り出し、多量の盛土によってなされている。

埋葬施設についてみると、７号墳の下層の第２主体部と８号墳の中心主体部に丁寧な作りの組合せ式の箱式石棺が採用されているが、基本的には前期古墳も中期古墳も木棺直葬が行われている。ただ５号墳には中心主体部以外に石棺・石蓋土壙・埴輪棺・土器棺が伴い、９号墳には周溝外縁部に土器棺が伴う。木棺については、調査地南側の２～４号墳と北側の９号墳が二段墓壙をとり、規模的にもやや大きい傾向がみられる。

埋葬方向は、６号墳はその北東側に小尾根が延びることを考慮すると、５号墳と９号墳以外は基本的に尾根に直交方向に納められている。

遺物についてみると、前期古墳の墓壙内からは大きくは時期差のない鼓形器台や高杯、小型の内行花文鏡、鉄剣、鉄刀、鉄鏃、鉋、刀子、少量の玉類のうちのいくつかが検出されている。これに対して、中期古墳からは墓壙上の須恵器甕・甑、土師器甕・高杯等の他、墓壙内から多量の武器・武具・馬具や多量の玉類等が検出されている。また全てではないものの、前期古墳の埋葬施設からは鼓形器台・高杯を、中期古墳の埋葬施設からは蓋杯を転用した土器枕が検出されている。

これらのことから、調査した８基の古墳について見てみると、尾根の一ピークに立地する５号墳から南側にまず前期の方墳が造られ、次いでそれほど間をおかずに、その北西方向に延びる尾根上に前期の円墳が造営されたものと考えられる。そしてやや間があいてから、しかし前期古墳をある程度意識しながら再度尾根の一ピーク付近に中期の円墳が造営されたものと考えられる。

また本古墳群は、千代川左岸の周辺の各古墳群の中では比較的早く方墳から円墳へ移行し始めた可能性があり、しかしながら他の古墳群と同様に木棺直葬を主流として土器転用枕と鉄製品の副葬が行われる特色はやはり共通性があるものと考えられる。(註6)

2）今回の調査区内からは古墳に伴わない埋葬施設も21基検出されている。これらはいずれも調査区北西の尾根上斜面に位置するもので、尾根の高位側を掘削して平坦部を造成し、そこに掘り込まれている。大まかには４つの区域(土壙墓群１、２東・西、３、４)にその集中がみられる。それぞれをみると土壙墓群１は調査範囲外まで広がる可能性があり不明瞭であるが、調査範囲内に木棺直葬と土器棺計４基が認められる。土壙墓群２東は墓域は不明瞭ながら裾の削り出しと盛土状の層序変化が認められ、調査範囲内に木棺直葬と土器棺の計２基が認められる。土壙墓群２西は尾根の高位側をやや円弧気味に削り、調査範囲外の一部は崩落している可能性もあるが、範囲内では木棺直葬１基が認められる。いずれも古墳のマウンドとはいかないまでも墳丘を意識した状況が感じられる。また土壙墓群３は尾根をほとんど横断するようにその高位側を掘削して東西約20m×南北最大４mの細長い平坦部を墓域として造成する。この中には木棺直葬、土器棺等計11基が認められる。さらに土壙墓群４は尾根の高位側を掘削して平坦部を造成するとともにその東から南東端部は裾を削り出し、あるいはやや溝状に掘り込み墓域を区画しようとした意識が見受けられ、その中に木棺直葬、石蓋土壙の計３基が認められる。

時期的には全体としては古墳時代前期後半代のものと考えられるが、土器棺本体を除くと遺物の量は少ない。鉄製品についても、前述の古墳の埋葬施設と違って、21基の埋葬施設の中で４基の埋葬施設からそれぞれ鉄刀と鉇、鉄刀切先片、刀子片、鉄斧の計５点が検出されたにとどまる。また枕についても、明確なものは土壙墓群４の石蓋土壙内の石枕１点と、石枕の可能性のあるもの１点が検出されているのみである。墓壙の規模は木棺墓と土器棺墓とでは異なるが、木棺墓では、長さ3.5～3.8m程度とさしたる違いは認められない。

これらのことは、この墓域を形成した集団にはまだ卓越した権力が生まれていないことを示すものなのであろうか。あるいは土壙墓群２東・西等にその崩芽をみるべきなのか。また上述の同一尾根上位に形成されている古墳との関係はどうなのか。さらにその出土遺物の特色から周辺古墳群との関係はどうなのか、周辺の古墳に伴わない土坑墓調査の蓄積を重ねながら今後とも検討していく必要がある。

３）今回の調査では、直径13m程度の小規模古墳でありながら６号墳から武器、武具、馬具のセットでその原位置を保つ遺物が多量に検出された点も特筆すべき点といえる。

武器としては、木棺直葬と考えられる棺内から鞘付きながら１mを越える長大な鉄刀２本と刀子１本が、棺外側から長さが3.86m、2.23mと推定できるものを含む３本の鉄鉾が、さらに棺外から盛矢具に納められて置かれたと思われる40本程度の鉄鏃と、棺内の短甲内から同様に盛矢具に納められて置かれたと思われる40～50本程度の鉄鏃が検出されている。このうち鉄刀は、その長さから考えて、一般的には上位階層のものと考えられる。また鉄鉾については、袋部が多角形のものや石突に断面方形の加工がなされるなど新しい要素が認められる。

武具としては、棺内から短甲１領とその中から冑１鉢、それに伴うとみられる連接状態の小札の板状製品が、またいずれかの部品の一部とみられる連接を伴う小札の板状製品が検出されている。このうち短甲は右前胴開閉式の三角板鋲留短甲である。前胴の竪上第２段には横矧板を用いているとみられ、ほぼ全周する鉄包覆輪等の特色をもつが、小さめの鋲を用いているなど、古墳時代中期後半の三角板鋲留短甲の中ではやや古い要素を持つ。しかしながらその中に納められていた冑は横矧板鋲留衝角付冑である。衝角底板は外接式で竪眉庇は簡略化された叩き曲げで造りだしているようで中期の衝角付冑の中では新しい様相を呈する。

馬具としては、棺外から轡部と鐙の一部の可能性のある金具、鞍金具とみられる金具、杏葉が検出されている。このうち轡部は、金銅装のいわゆるｆ字形鏡板付轡部で、鏡板は17cmと大きく、屈曲も強い傾向を持つ。また縁金と地板は20程度のやや少なめの鋲で固定されている。杏葉については、傷みが著しいが、20cm程度の大型の鉄製剣菱形杏葉で、剣先の突出度も高い特徴をもつ。これらの特徴から馬具については古墳時代中期末頃の様相を呈すると考えられる。

以上のことから６号墳は短甲にやや古い要素が若干認められるものの、墓壙上面から検出された瓮も含めた他の遺物をみてみると古墳時代中期末のものと考えてよかろう。ただこの時期にこの丘陵上に、しかも直径13m程度の小規模古墳にその規模や墳形と対比すると特別といえる質と量の副葬品が納められた理由は何であろうか。

出土遺物のうち本県では出土例は少ないながら短甲に目を向けると、短甲出土の古墳としては前期末から中期前葉頃の首長墳とみられる大型前方後円墳である古郡家１号墳(全長約90m)が千代川の対岸付近に所在する。短甲はその第３主体部から長方板革綴短甲が出土しておりその他に素文鏡、竪櫛、鉄剣、鉄鏃、刀子、鉇、錐状鉄製品、針状鉄製品等多くの鉄製品が出土している。また第１主体部からは奈良県新沢千塚500号墳に類例のある八ツ手葉形青銅器が勾玉、管玉、鉄剣等とともに出土している。偶然の一致ではあろうが、６号墳出土の短甲の類似品に奈良県新沢千塚115号墳出土のものがある。中期後半の古墳とみられており、径約18mの円墳である。木棺直葬の棺外に本墳と同様に衝角付冑をその中に入れて埋納されている。右前胴開閉式で小型の鋲を使用しており、前胴に横矧板を使う点も共通

性がある。墳形、墳丘規模、時期、短甲と冑のセットにも共通性があり、飛躍し過ぎかもしれず古郡家１号墳とも時期差はあるが、６号墳周辺地域と新沢千塚周辺に何らかのつながりをみることは無理があろうか。少なくとも今後の検討材料の一つにはなろう。

また千代川左岸の丘陵上に形成された各古墳群に目を向けてみると、そのうちの横枕古墳群では、前期末から中期前葉頃の首長墳とみられる大型前方後円墳である横枕13号墳の築造課程に周辺のそれまでの伝統的な墓制から、小集団の中でも対外的に中心的な役割を果たした地域集団が古墳時代の体制下に取り込まれていく過程を重ねて考えるむきもある。(註6)とすると本古墳群においても前期古墳の時期からやや間をおいて造営された６号墳の築造方法、副葬品の在り方も単に時間の経過だけで捉えるのではなく、そこに何らかの対外的な意図をみることはできまいか。但し、周辺の古墳群で鉄器の副葬事例が多いことは現在のところ当該期の鉄生産遺跡は見つかっていないものの周辺に独自の鉄生産あるいは鉄加工技術をもった集団が存在したことを示す可能性もあり、単に対外交流によってこれらの遺物が入手されたあるいは配布を受けたと考えるべきかはまだ検討を要する。いずれにせよ当該期の倭文６号墳の造営に関係した集団と周辺地域との関係はもとより、その武器・武具・馬具のセットがこの地に埋納された意味を全国的な規模における動勢も含めて今後とも考えていかなければならない。

今回の倭文古墳群の発掘調査は倭文地区では初めてのものとなったが、これまで１基しか知られていなかった古墳の数がこの度の調査で９基に増え、しかも県内外への貴重な資料を提供することとなった。ただ、金属製品を筆頭として遺物についてまだまだ未解明部分が多く、今後とも引き続き調査検討がなされなければならないことを肝に銘じて終わりとしたい。

なお６号墳の調査では、年末・年始の忙しい時期にもかかわらず、降雪の中、高田健一氏には現地での指導および遺物取り上げの協力をいただいた。また本稿の武器・武具・馬具の記述にあたっては鈴木一有氏の有益なるご教示、資料提供を頂き、広く参考にさせて頂いた。記して感謝いたします。

(註６)(財)鳥取市文化財団『横枕古墳群Ⅱ』

【参考文献】

広島県新市町教育委員会『四五迫城跡』1992年
(財)大阪府文化財調査研究センター『佐保栗栖山砦跡』2000年
兵庫県豊岡市教育委員会『中郷朝日遺跡群』2002年
兵庫県竹野町教育委員会『美久仁城址』2002年
高知県鏡村教育委員会『小浜城跡』2002年
奈良県立橿原考古学研究所『後出古墳群』2003年
静岡県袋井市教育委員会『石ノ形古墳』1999年
川西宏幸『古墳時代政治史序説』1988年
豊中市教育委員会『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要』1987年
豊中市教育委員会『豊中市埋蔵文化財発掘調査概要』1988年
(財)向日市埋蔵文化財センター・向日市教育委員会『向日市埋蔵文化財調査報告書第49集』1999年
辰巳和弘『埴輪と絵画の古代学』1992年
辰巳和弘『古墳の思想』2002年
滝沢誠「鋲留短甲の編年」『考古学雑誌』1991年
塚本敏夫「長持山古墳出土挂甲の研究」『大者の武装』京都大学総合博物館1997年
鈴木一有・斎藤香織「剣菱形杏葉出現の意義」『三河考古第9号』1996年
大村雅夫「美和古墳群(８)～(20)」『佐々木古代文化研究室月報ひすい85～97』佐々木古代文化研究室 1961～1962年
奈良県立橿原考古学研究所『新決千塚古墳』1981年
奥野正男『鉄の古代史３』2000年

第４表　調査古墳・埋葬施設等一覧

名称	墳丘	埋葬施設等						出土遺物		備考	時期
	形状・規模(m)	主体部名等	埋葬方法等	墓壙等		棺規模	方位	埋葬施設	墳丘・周溝その他		
				平面形	長さ×幅×深さ(m)	長さ×幅(m)					
倭文２号墳	方墳 15.1(北西～南東) 高さ 0.94(南西側墳裾から) 3.07(南東側墳裾から)	第１主体部	木棺直葬	隅丸長方形 一部二段掘	3.92×1.40×0.65	2.90×0.58	N－47.5°－W	高杯・鉄刀・鉄鏃・管玉 ガラス小玉・炭片		土器枕	古墳時代 前期後半
		SK－01		不定楕円形	(0.83)×(0.67)×(0.24)						
倭文３号墳	方墳 12.5(北西～南東) 高さ 2.12(西側墳裾から)	第１主体部	木棺直葬	隅丸長方形 二段掘	5.19×3.15×0.76	4.30×(－)	N－54.5°－W	鼓形器台・鉇・刀子・鉄鏃 ガラス小玉		鉇は「の」の字状に折り曲げる	古墳時代 前期後半
倭文４号墳	方墳 12.63(東西) 高さ 1.83(東側墳裾から) 0.77(南側墳裾から) 1.22(西側墳裾から)	第１主体部	木棺直葬	隅丸長方形 二段掘	5.13×3.59×1.00	3.92×0.50	N－76.0°－W	鼓形器台・管玉・内行花文鏡・鉇・水銀朱		土器枕	古墳時代 前期後半
		SK－01		不定形 一部二段掘	1.12×0.90×0.49			甕		SK－01，02，03内検出の甕が接合。	
		SK－02		楕円形	0.47×0.38×0.48			甕			
		SK－03		不定楕円形	0.54×0.49×0.14			甕			
倭文５号墳	方墳 14.0(東西) 18.62(南北) 高さ 1.82(西側墳裾から) 1.63(東側墳裾から)	第１主体部	木棺直葬	隅丸長方形	4.15×1.62×0.77	(－)×0.52	N－14°－W	鼓形器台・高杯			古墳時代 前期後半
		第２主体部	石棺	隅丸長方形 二段掘	3.32×1.67×0.72	1.76×0.48	N－77.5°－E	鉄剣片・鼓形器台・低脚杯	低脚杯 (墳丘肩部南側)		
		第３主体部	石蓋土壙？	隅丸長方形	(2.35)×(1.53)×0.66	(1.20)×(0.42)	N－22°－W				
		第４主体部	埴輪棺	隅丸長方形	0.89×0.51×0.38	円筒埴輪棺 器高63.9cm 口径29.2cm 最大胴径29.8cm 基部径22.5cm	N－9°－W	円筒埴輪 壺			
		第５主体部	土器棺	不定(楕)円形	(0.78)×(0.73)×0.28		N－15.5°－W	壺・高杯(杯部)			
		P－01		不定形	1.17×0.86×0.32		N－40°－W				
		P－02		不定形	0.56×0.51×0.14		N－43°－E				
倭文６号墳	円墳 13.14(南北) 13.02(東西) 高さ 3.36(東側墳裾から) 1.74(西側墳裾から) 0.84(南側周溝底から) 5.18(北側墳裾から)	主体部	木棺直葬	隅丸長方形	4.25×3.52×0.64 (2.55)		N－69.5°－W	鉄刀・鉄鉾・石突・刀子・鉄鏃・矢柄・三角板鋲留短甲 横矧板鋲留衝角付冑 冑の小札鋲&頬当て(?)一式 轡部(金銅装f字形鏡板付轡) 剣菱形杏葉・金銅装留金具・鋲他 甕・高杯・甑	円筒埴輪片 多数 形象埴輪		古墳時代 中期末
倭文７号墳	円墳 13.80(北西～南東) 13.32(北東～南西) 高さ 4.55(北西側墳裾から) 1.15(南東側周溝底から) 2.69(北東側墳裾から)	第１主体部		隅丸長方形	(2.96)×1.13×0.38		N－46.5°－E	甕・蓋杯杯身・鉄剣・鉄鏃・勾玉・管玉・ガラス小玉	勾玉	土器枕	古墳時代 中期末
		第２主体部	箱式石棺	隅丸長方形	3.30×2.11×1.00	1.82×0.48 (内法)	N－30.5°－E	鼓形器台・高杯・刀子		土器枕	古墳時代 前期後半
倭文８号墳	円墳 12.23(北東～南西) 10.93(北西～南東) 高さ 2.08(北東側墳裾から) 1.63(南西側墳裾から) 1.63(北西側墳裾から) 0.30(南東側墳裾から)	第１主体部	箱式石棺	隅丸長方形 二段掘	3.39×2.30×0.81	1.57×0.22(北東) 0.26(南西) (内法)	N－43°－E			石棺材を丁寧に調整	古墳時代 前期後半
		第２主体部	木棺直葬	隅丸長方形	3.03×1.08×0.42	(－)×0.37	N－40.5°－E	鼓形器台・鉇	磨石 (第２主体部直上)	土器枕	
		P－01		楕円形	0.26×0.21×0.32						
		P－02		不定形	0.55×0.48×0.28						
		P－03		円形	(0.22)×0.27×0.19					新P－04に切られる	
		P－04		円形	0.28×0.26×0.28					新P－03を切る	
		P－05		円形	0.22×0.19×0.31						
		P－06		やや不定な円形	0.20×0.19×0.24					８号墳第１主体部を切る	
		P－07		－	0.33×(0.26)×0.26					墳丘断面図参照	
倭文９号墳	円墳 9.72(北西～南東) 10.90(北東～南西) 高さ 0.04(南東側周溝底から) 1.63(北西側墳裾から) 1.06(北東側墳裾から) 0.85(南西側墳裾から)	第１主体部	木棺直葬	隅丸長方形 二段掘	(3.92)×2.60×1.06	2.80×(0.75)	N－38.5°－W	長頸壺・鼓形土器・鉄鏃		石枕？	古墳時代 前期後半
		周溝外縁部 土器棺	土器棺	卵形	1.03×0.80×0.56		N－20.5°－W	壺			

名称	墳丘	埋葬施設等						出土遺物		備考	時期
	形状・規模(m)	主体部名等	埋葬方法等	墓壙等		棺規模	方位	埋葬施設	墳丘・周溝その他		
				平面形	長さ×幅×深さ(m)	長さ×幅(m)					
土壙墓群4	約12.4(南西～北東) 約6.5(北西～南東)	第1主体部	木棺直葬	隅丸長方形	3.42×1.81×0.85	約1.60×0.45	N－87.5°－W	土師器細片			
		第2主体部	石蓋土壙	隅丸長方形	2.23×1.02×0.96	1.75×0.40 (内法)	N－24.5°－E	枕石			
		第3主体部	木棺直葬	隅丸長方形	3.40×1.80×0.86	(－)×0.55	N－57.5°－W	鉄刀・鉇・木棺材？		石枕	
土壙墓群3	約20(南西～北東) 最大4(北西～南東)	第1主体部	木棺直葬？	隅丸長方形	3.21×1.80×0.86		N－5.5°－E	鼓形器台			古墳時代前期後半
		第2主体部	木棺直葬	隅丸長方形	2.61×1.30×0.63	(－)×0.38	N－53.5°－E				
		第3主体部	木棺直葬	隅丸長方形	3.58×1.66×0.89	(－)×0.55	N－40.5°－E	甕・鼓形器台・高杯・鉄刀			
		第4主体部	木棺直葬	隅丸長方形	3.50×1.59×0.77	2.33×0.42	N－67°－E	甕・鼓形器台			
		第5主体部	木棺直葬	隅丸長方形	3.04×1.40×0.67	1.87×0.40	N－82°－W	高杯・鼓形器台			
		第6主体部	木棺直葬	隅丸長方形	(3.34)×1.64×0.66	2.35×0.53	N－34°－E	長頸壺・甕・高杯		第8主体部に切られる	
		第7主体部	木棺直葬	隅丸長方形	3.85×1.68×0.70	2.87×0.63	N－62.5°－E	高杯・枕石？		石枕？	
		第8主体部	直葬	隅丸長方形	2.84×0.82×0.83		N－31.5°－E	土師器細片		第6主体部に切られる	
		第9主体部	木棺直葬	隅丸長方形	2.32×1.33×0.61	(－)×0.43	N－8.5°－W	鼓形器台			
		第10主体部	直葬	隅丸長方形	1.02×0.64×0.37		N－42°－E	刀子			
		第11主体部	土器棺	長楕円形	0.68×0.33×0.32		N－22.5°－W	甕			
		SK－01		隅丸長方形	(1.20)×0.64×0.37		N－69.5°－E				
		SK－02		不定形	(1.20)×0.82×0.42		N－17.5°－W				
土壙墓群2東		東第1主体部	木棺直葬	隅丸長方形 一部二段掘	3.65×2.05×0.91	2.06×0.55	N－82.5°－W	甕・鼓形器台・鉄斧	土師器小片		古墳時代前期後半
		東第2主体部	土器棺	不定形	0.97×0.86×0.53		N－85°－W	壺・高杯			
土壙墓群2西		西主体部	木棺直葬	隅丸長方形	3.87×1.80×0.73	2.40×(－)	N－76.5°－E	甕・高杯	高杯		古墳時代前期後半
土壙墓群1		第1主体部	木棺直葬		3.51×1.75×0.89	(－)×(0.40)	N－83°－W	壺・甕・高杯			古墳時代前期後半
		第2主体部	土器棺	不定楕円形	0.94×1.08×0.54		N－73°－W	壺			
		第3主体部	土器棺	楕円形	1.01×0.61×0.41		N－6°－E	壺・低脚杯			
		第4主体部	土器棺	円形	0.41×0.41×0.19			甕			
		SK－01		不定楕円形	0.77×(0.55)×0.41		N－15°－W				
炉1				隅丸長方形 ＋α	1.05×0.80×0.27			甕	甕	被熱による硬化土壁	古墳時代末？
炉2				隅丸方形 ＋α	1.3×(1.13)×0.52		N－77°－E			壁面に焼土或いは焼土ブロック	

出土遺物観察表

—記載事項について—

挿図番号　遺構ごとの実測番号、図版番号、付図内表示番号を統一して示す。

器　　種　土器は形態的特徴から、壺・甕・器台・高杯・低脚杯・土師皿・土鍋・灯明皿等の呼称を用い、須恵器は蓋杯・杯蓋・有蓋高杯・甕・瓶等の従来の呼称を用いた。部分名称の場合は(　)で表示。鉄製品は形態、使用痕等の観察から、鉄刀・鉄剣・鉄鉾・鉈・刀子・鉄鏃・鉄斧の名称を用いた。石製品は形態、使用痕等の観察から、磨石の名称を用いた。

法　　量　土器……口径:①　底径:②　最大胴径:③　器高:④をcmで示す。なお、(　)は復元値。〈　〉は推定値。ただし目安として径の残存が7分の1以下を推定値とした。
石製品・鉄製品……長さ：L　幅：W　厚さ：Tをcmで表す。(　)は現存値。

形態・手法の特徴　主要部分について記述した。土器については口縁部の内外面ヨコナデ調整を特別な場合以外は省略した。

胎土・焼成・色調

①　胎土　砂粒の大きさとその量を示す。

②　焼成　良好(堅緻)・良(普通)・やや不良(やや軟)・不良(軟)の4段階に分けた。
陶磁器については硬質・軟質で表した。

③　色調　主として外面の色調を示すが、内外面が異なる場合(外)・(内)で表示。
陶磁器の場合は断面・施釉を(断)・(釉)で表示。

備　　考　赤彩、黒班、煤、炭化物の有無等を記載。鉄・石製品は重量を記載。(　)は現存値。

遺物登録番号　出土地を調査区分の通し番号で表示。遺物台帳登録番号。

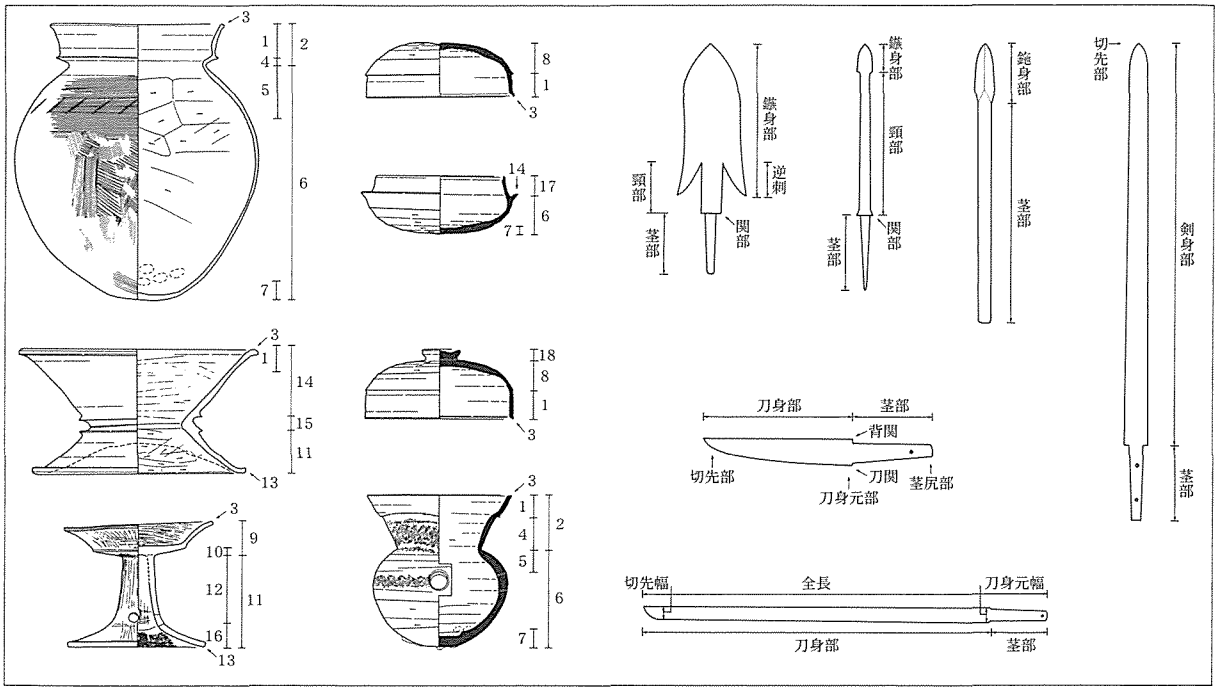
—遺物実測図中における表示—

須恵器：黒塗り　土器回転糸切り：◎　陶磁器：□　赤彩土器：□

土器実測図のヨコナデ調整による稜：□　遺物使用痕範囲：□

—土器の部分名称について—

1：口縁部　2：口頸部　3：口縁端部　4：頸部　5：肩部　6：体部　7：底部
8：天井部　9：杯部　10：杯底部　11：脚(台)部　12：脚柱部　13：脚端部
14：受部　15：接合部　16：裾部　17：立ち上がり　18：つまみ



第83図　土器・鉄製品細部名称図

倭文所在城跡

平坦面９　（第４図）

挿図番号	器　種	法量(cm) ①口　径 ②底　径 ③最大胴径 ④器　高	形態・手法の特徴		①胎　土 ②焼　成 ③色　調	残存状況	備　考	遺　物 登録番号
1	土師皿	①8.9 ②4.8 ④2.7	体部は内湾気味に立ち上がり端部は丸い。	(内外)ヨコナデ。 (外)底部回転糸切り。	①１㎜前後の砂粒を多く含む　３㎜の砂粒有 ②良　③淡橙褐色	(口)２/３ (底)１		536
2	白磁 (底部)	②6.6		(外)ヘラ削り後ヨコナデ。 (内)ヨコナデ後施釉。見込みに一重圏線。	①精緻　１㎜以下の砂粒を僅かに含む ②硬質　③(断)灰白色 (釉)オリーブ灰色	(底)３/５		31

平坦面９　（第５図）

挿図番号	器　種	L(長さ) W(幅) T(厚さ) D(径)	平面形等	形態の特徴	残存状況	備　考	遺物登録番号
3	銅銭	D2.43 T0.14	円形	寛永通寶。 裏面文字無。方形孔。	完存	3.3ｇ	122

平坦面８・10・12　（第６図）

1	須恵器 こね鉢		口縁部は外傾する。	(内外)ヨコナデ、ナデ。	①１㎜以下の砂粒を多く含む　②やや不良 ③淡灰色	一部	片口付近	18
2	土鍋	①〈31.5〉	受け口状の口縁部。 端部に面をもつ。	(外)体部ナデ。 (内)原体不明のナデ。 成形時の指頭圧痕。	①１～２㎜の砂粒を多く含む　②やや不良 ③褐色	(口)１/８	煤付着	194
3	灯明具 (下皿)	①(7.8)	口縁部は外傾して開き端部は丸い。 残存部に弧状？の切り込み１が残る。	(内外)ヨコナデ。 (外)底部工具ナデ？	①0.5㎜以下の砂粒を含む ②良 ③淡橙褐色	(口)１/５		128
4	土鍋	①〈21.4〉	受け口状の口縁部。 端部に平坦面をもつ。	風化剥落不明瞭。 (外)ナデ。 (内)原体不明の丁寧なナデ。 指頭圧痕が全体に段状となって残る。	①１～２㎜の砂粒を多く含む　４㎜の砂礫有 ②やや不良 ③灰褐色	(口)１/16	煤付着	35

倭文古墳群

倭文２号墳　（第10図）

1	高杯	①(18.8)	有段の杯部。脚部は差込み式。 口縁部は外傾して立ち上がり、端部で外反し端面をもつ。 脚部円孔３。	全面風化不明瞭。 杯部(外)ハケ目後ヘラミガキ。 (内)ヘラミガキ。 脚部(外)上半工具ナデ、下半ナデ。 (内)上半絞り目をナデ消し。下半ハケ目痕。 成形時の指頭圧痕。	①0.5㎜以下の砂粒を多く含む ②やや不良 ③淡橙褐色　淡褐色	(杯)３/４ (脚)ほぼ１	杯部打欠 土器転用枕 赤彩 黒斑	294 295 298 299 300 301

倭文４号墳　（第14・15図）

1	器台	①〈17.2〉	受部は直線的に開き端部は丸い。 接合部に稜を持たない。	(外)ヨコナデ後受部、台部共に縦ヘラ磨き。 接合部横ヘラ磨き、工具痕。 (内)受部ハケ目後縦ヘラ磨き。接合部ナデ。 台部ヨコナデ後ハケ目。	①１㎜以下の砂粒を多く含む　３㎜の砂粒有 ②良 ③濃橙色(断)橙褐色	(口)１/10 (受)２/３ (接)１ (台)２/３	黒斑有	187 205 258 269
4	壺	①21.8 ③(38.2)	複合口縁。 口縁部は内傾気味に立ち上がり端部で外反、凸面をもつ。	(外)口縁部ハケ目痕。 体部横、斜位ハケ目後肩部に連続刺突文。 (内)頸部ナデ、成形時の指頭圧痕。体部ヘラ削り。	①１㎜以下の砂粒を多く含む　６㎜の砂礫有 ②やや不良 ③(外)明黄褐色 (内)明黄褐色　橙色	(口)１/２ (肩)ほぼ１	黒斑有	431～436 439 473 563
5	甕	①(15.8)	複合口縁。 口縁部は外傾して立ち上がり、端部に凹面をもつ。	(外)肩部縦ハケ目後横ハケ目。 (内)頸部ナデ。体部ヘラ削り。	①１㎜以下の砂粒を多く含む　②やや不良 ③淡黄褐色	(口)１/３ (肩)１/３	黒斑有	268 425 430

倭文５号墳　（第18・23・24図）

1	器台	①(17.5)	受部は直線的に開き端部で肥厚し面をもつ。 接合部の稜は短く鋭い。	(内外)ヨコナデ。 (内)受部ヘラ磨き。下位に沈線状の工具痕が周回。 接合部ナデ。台部ヘラ削り後軽いナデ。	①0.5㎜の砂粒を多く含む　３㎜の砂粒有 ②やや不良 ③淡橙褐色	(受)１/２ (接)１		462 463
2	器台	①(18.6)	口縁部は外傾し端部で外反して丸く納める。	(外)風化剥落不明瞭。ヨコナデ後ヘラ磨き。 (内)受部ヘラ磨き。接合部ナデ。台部丁寧なヘラ削り。	①0.5㎜以下の砂粒を多く含む　②良 ③淡橙褐色	(口)１/４ (接)１/８		467 469 926
3	器台	①(15.7)		(内外)ヨコナデ後ヘラ磨き。 (内)接合部ナデ。台部ヘラ削り。	①0.5㎜以下の砂粒を多く含む　②良 ③淡橙褐色　橙色	(口)１/４ (接)１/４		049 464 926
4	(杯部)	①(14.5)	杯部は緩やかに内湾して立ち上がり端部に面をもつ。	(外)ハケ目後縦ヘラ磨き。 (内)ヘラ磨き。	①0.5㎜以下の砂粒を多く含む　②良 ③橙褐色　濃橙色	(杯)３/８	赤彩？	465 466
6	低脚杯		杯部は内湾して立ち上がり口縁部を欠く。脚部はハの字状に開く。	杯部(内外)ヘラ磨き。 (外)ハケ目痕 脚部(内外)ナデ。	①１㎜前後の砂粒を僅かに含む　②良 ③(外)暗橙褐色 (内)暗橙褐色　橙色	(杯)３/８		470

挿図番号	器種	法量(cm) ①口径 ②底径 ③最大胴径 ④器高	形態・手法の特徴		①胎土 ②焼成 ③色調	残存状況	備考	遺物登録番号
7	円筒埴輪	①29.2 ②22.5 ③29.8 ④63.9	胴部はほぼ直立して筒状に立ち上がり口縁部で外傾し端部に面をもつ。凹面をもつ凸帯。	(内外)口縁部横ハケ目後ヨコナデ。 (外)胴部縦ハケ目後凸帯を4段に貼付し5段構成とする。外面凸帯貼付後凸帯部周辺ヨコナデ、底部は粘土補充。上から2、3段目にナデ後線刻文を2ヶ所に施し、2～4段目には後にそれぞれ3方向に透かし窓を施す。2、3段目正面にはそれぞれ逆三角形状、分銅形状？残りは全て長方形状を外面から穿つ。基底部一部にハケ状工具による調整痕。 成形時の指頭圧痕。底面板状圧痕、茎状圧痕。 (内)胴部上半ナデ。下半粗い縦ハケ目後細かい縦ハケ目(2種類)後にナデ。	①1㎜以下の砂粒を多く含む　3～5㎜の砂礫有 ②良 ③明黄褐色　橙色	ほぼ1	黒斑有 赤彩？ 線刻	251 449 450 455～458
8	壺	①(38.4) ③(56.2) ④(66.3)	口縁部は直立して立ち上がり端部に平坦面をもつ。体部は中上位に最大胴径をもつ。	全面風化剥落不明瞭。 (外)肩部ハケ状工具による連続刺突文、その下位には同一工具による連続刺突文を綾杉状に2段施す。体部ハケ目痕。 (内)頸部接合痕。肩部、底部ヘラ削り後丁寧な工具ナデ、ハケ目痕。	①1㎜以下の砂粒を多く含む ②やや不良 ③褐色　暗褐色	(口)1/6 (頸)1/2 (体)1/2 (底)1/2		65,92,95,145 248,249,250 252～256 441,443,444 445,447,448 451～454 459,460,1119
9	高杯	①24.6	有段の杯部。 口縁部は外傾して開き、端部で外反し面をもつ。	杯部(外)口縁部ヘラ磨き。底部ハケ目後稜下位工具ナデ。後にヘラ磨き。 (内)ヘラ磨き。中心部に圧痕有。脚部接合の際のものか？ 接合部(内外)ナデ。ハケ目痕。	①1㎜前後の砂粒を含む4～6㎜の砂礫有 ②やや不良 ③淡褐色	(杯)ほぼ1		095 441 442 447

倭文6号墳　(第29～34図)

1	甕	①15.6 ③(23.4)	口縁部は外傾し端部は丸い。	(外)体部横、斜位ハケ目が重複。面取り成形痕。 (内)体部上半縦ハケ目後上位指ナデ。下半丁寧なヘラ削り。	①1～2㎜の砂粒を多く含む　②やや不良 ③褐色　淡褐色	(口)1/2 (肩)3/4 (体)1/4	煤・炭化物付着 二次焼成受？	227 482
2	高杯	①14.0	椀状の杯部。 口縁部は内湾して立ち上がり端部で上方へ丸く納める。	杯部(外)ナデ。成形痕。 (内)口縁部ハケ目後軽いナデ。底部丁寧なナデ。 脚部(外)工具ナデ。 (内)絞り目をナデ消し。 接合部(内外)ナデ。	①0.5㎜以下の砂粒を多く含む ②良 ③淡黄褐色	(口)1/2 (脚)1/2		226 481
3	高杯	①(13.8)	口縁部は内湾して立ち上がり端部で上方へ丸く納める。	口縁部(外)ヨコナデ後軽いナデ。 (内)ハケ目痕。	①0.5㎜以下の砂粒を含む　②良 ③淡黄褐色	(口)3/8		480
4	高杯	②(8.8)	脚部は基部から緩やかに開いて下半でハの字状に大きく開き裾端面をもつ。	脚部(外)上半工具ナデ。ハケ目後上半ナデ。 裾端部ナデ。 (内)上半絞り目をナデ消し。ナデ後ハケ目。 成形時の指頭圧痕。	①0.5㎜以下の砂粒を含む ②良 ③淡褐色	(脚柱)1 (脚裾)3/8		483
5	須恵器 鼎	①11.3 ③10.7 ④12.1 孔径1.5	口頸部は外傾して立ち上がり口縁部で段をなして更に外傾する。端部は平坦面をもつ。 肩部で最大径とし円孔1をもつ。 口縁径は体部径より僅かに大きい。	(内外)ヨコナデ。 (外)口頸部と体部中上位に波状文を施す。工具痕。 体部下位ヘラ削り後底部不定方向へのナデ。 (内)頸部砂の動きが残る。体部ナデ、底部成形時の指頭圧痕。 円孔1は外面より穿つ。	①1㎜以下の砂粒を多く含む　2.5㎜の砂粒有 ②良 ③(外)暗灰色　灰色 青灰色 (内)暗灰色　灰色	ほぼ完形	自然釉付着	229
44	円筒埴輪	①(18.6)	口縁部は直立し端部に凹端面をもつ。 凸帯断面台形状。	(外)口縁部横方向へのナデ。胴部縦ハケ目後残存部に凸帯2を貼付し区画する。後に周辺部ヨコナデ。1段目ヘラ記号1、2段目残存部に透かし窓を2方向観察。 (内)口縁部横ハケ目後上位横方向へのナデ。胴部ハケ目。成形時の指頭圧痕。	①1㎜前後の砂粒を多く含む　4～7㎜の砂礫有 ②不良 ③(外)にぶい橙色　にぶい褐色(内)にぶい橙色　暗灰色	(口～上半) 1/3		240 530 533 539
45	円筒埴輪			(外)胴部縦ハケ目後ヘラ記号1を観察。凸帯貼付後周辺部をヨコナデ。 (内)斜位ハケ目。成形時の指頭圧痕。	①1～2㎜の砂粒を多く含む　4㎜の砂礫有 ②良　③橙色	(胴)一部		1109
46	円筒埴輪	②(12.0)		(外)基部縦ハケ目後凸帯貼付。後周辺部をヨコナデ。基底部指ナデ。成形時の指頭圧痕。接合痕。 (内)胴部斜位ハケ目。基部ナデ、指ナデ。	①1㎜前後の砂粒を多く含む　3～6㎜の砂礫有 ②やや不良　③(外)橙色　淡灰褐色(内)暗灰色	(下半)1/4	煤付着 黒斑有	038 098 530
47	形象埴輪	L(8.5) W(3.1) T5.0	人物埴輪の腕部分か？		①1㎜前後の砂粒を多く含む　3㎜の砂粒有 ②良　③橙褐色			235－3
48	形象埴輪	L(12.0) W3.95 T1.8	片面に2条、一端部に刻み目状に線刻。		①1㎜前後の砂粒を多く含む　2～3㎜の砂粒有 ②良　③橙褐色			235－1

倭文7号墳　(第37・39図)

1	須恵器 甕	①18.4	口縁部は外傾して開き端部で上下につまみ出す。 肩部は大きく張り出す。	(外)口頸部ハケ目、後のヨコナデにより消えかかる。 肩部叩き目。 (内)頸部ナデ。成形時の圧痕有。肩部当て工具痕。	①1㎜前後の砂粒を多く含む　4㎜の砂礫有 ②良 ③暗灰色(断)セピア色	(口)3/4 (肩)1/2		219 511
2	須恵器 蓋杯 蓋	①11.5 ④4.5	天井部は丸く、口縁部は外方に下り端部は段をもつ。 天井部と口縁部を分ける稜線は短く鈍い。	(内外)ヨコナデ。 (外)天井部2/3を逆時計廻りのヘラ削り。中心にヘラ起こし痕をかすかに残す。 (内)天井部ナデ。成形時の指頭圧痕。	①1㎜前後の砂粒を含む　3㎜の砂粒有 ②良　③(外)淡灰色 (内)暗灰色	ほぼ完形	4とセット	507 509
3	須恵器 蓋杯 蓋	①10.8 ④3.6		(内外)ヨコナデ。 (外)天井部2/3を時計廻りの丁寧なヘラ削り。稜下位は1条の沈線後ヨコナデ。 (内)天井部不定方向へのナデ。	①1㎜前後の砂粒を多く含む ②良 ③暗灰色	完形	自然釉 胎土中の溶融物が黒色斑点状に浸み出す 5とセット	508
4	須恵器 蓋杯 杯身	①9.9 ④4.6 受部径12.3	立ち上がりは内傾し端部は段をもつ。 受部は体部から外方へつまみ出す。	(内外)ヨコナデ。 (外)底部2/3を逆時計廻りのヘラ削り。中心にヘラ起こし痕。 (内)底部円孤文工具痕後ナデ。	①1～2㎜前後の砂粒を多く含む ②良 ③(外)灰色(内)暗灰色	ほぼ完形		509

挿図番号	器種	法量(cm) ①口径 ②底径 ③最大胴径 ④器高	形態・手法の特徴		①胎土 ②焼成 ③色調	残存状況	備考	遺物登録番号
5	須恵器 蓋杯 杯身	①9.3 ④4.3 受部径11.3	立ち上がりは内傾し端部は丸い。 受部は体部から水平方向に納める。体部は丸い。	(内外)ヨコナデ。 (外)底部2/3を時計廻りの丁寧なヘラ削り。 (内)底部ナデ。	①1㎜前後の砂粒を多く含む　3㎜の砂粒有 ②良 ③暗灰色	ほぼ1	セット焼痕 緑青の塊遺存	510 1122
21	器台	①18.1 ②16.2 ④10.0	鼓形器台。 受部台部共に端部方向へと直線的に開き、端部で外反して面をもつ。 接合部の稜は短く鋭い。	(外)ヨコナデ。接合部にヘラ状工具痕が周回。 (内)受部ヘラ磨き。接合部ナデ。台部ヘラ削り後ナデ。	①1㎜前後の砂粒を多く含む　5㎜の砂礫有 ②良 ③浅黄橙色	完形	台部打欠 土器転用枕	1097
22	高杯	①11.5 ②10.6 ④10.0 孔径0.8	有段の杯部。 口縁部は外反して開き、端部に面をもつ。 脚部は裾部で大きくハの字状に開き端面をもつ。 円孔3方向。	杯部(内外)ヘラ磨き。 (外)口縁端面に1条の沈線。 脚部(外)ヘラ磨き。裾端面ナデ。 (内)上半絞り目をナデ消し。下半ハケ目、成形時の指頭圧痕。 円孔3は外面より穿つ。	①0.5㎜以下の砂粒を多く含む ②良 ③淡橙褐色	(口)7/8 (杯底)1 (脚柱)1 (脚裾)3/4	赤彩	1098
24	須恵器 有蓋高杯 蓋	つまみ径3.1 ①11.5 ④5.6	凹面をなすつまみ。 天井部は丸く口縁部は直下に下り端部に段をもつ。 天井部と口縁部を分ける稜は短く鋭さに欠ける。	(内外)ヨコナデ。口縁端面は1条の沈線後ヨコナデ。 (外)天井部1/2を逆時計廻りのヘラ削り。つまみ貼付部ヨコナデ。 (内)天井中心部を回転ナデ。円弧文工具痕がかすかに残る。	①1㎜以下の砂粒を多く含む　2㎜の砂粒有 ②良 ③淡灰色	完形		1090－①
25	須恵器 有蓋高杯 蓋	つまみ径3.2 ①11.2 ④5.3		(内外)ヨコナデ。 (外)天井部2/3を逆時計廻りのヘラ削り後1/2上半カキ目。つまみ貼付部ヨコナデ。 (内)天井中心部を回転ナデ。円弧文工具痕がかすかに残る。	①1㎜前後の砂粒を多く含む ②良 ③淡灰色	完形		1090－②
26	椀	①(12.0) ④(4.2)	口縁部は内湾して立ち上がり端部に面をもつ。	(外)体部ハケ目。成形時の圧痕。 (内)ハケ目痕。後丁寧なナデ。	①0.5㎜前後の砂粒を多く含む　②良　③橙色	(口)1/3 (底)1		1092

倭文8号墳　(第42図)

1	器台	①17.8 ②16.3 ④11.4	鼓形器台。 受部、台部共に端部方向へと外傾して開き、端部で外反、面をもつ。	(外)ヨコナデ。 (内)風化剥落不明瞭。受部ヘラ磨き。 台部ヘラ削り後丁寧なナデ。	①0.5㎜以下の砂粒を多く含む　1.5㎜の砂粒有　②やや不良 ③淡橙褐色	(口)1/2 (台)7/8 (接)一部	受部打欠 土器転用枕	1089
3	磨石	L15.0 W12.1 T8.4	自然石。	長軸2、端部1に磨り痕。他1端部に敲打痕？	③淡灰色　淡褐色	完存	2482g	1089－②

倭文9号墳　(第44図)

1	長頸壺	①(8.0) ③(13.5) ④(14.65)	口縁部は直立して立ち上がり端部は丸い。 肩部は大きく張り出し体部中位に最大胴径をもつ。	(外)肩部縦ハケ目後頸部ヨコナデ。体部斜位ハケ目後上半軽いナデ、下半丁寧なナデ。 (内)頸部ナデ。体部ヘラ削り後ナデ。成形時の指頭圧痕。	①0.5㎜以下の砂粒を多く含む3㎜の砂粒有 ②良 ③淡褐色	(口)1/3 (体)3/8		357
2	器台	①(20.2)	口縁部は外反して開き端部に平坦面をもつ。	(外)ヘラ磨き。 (内)受部ヘラ磨き。接合部ナデ、台部ヘラ削り。	①1～2㎜の砂粒を含む ②やや不良 ③浅黄橙色	(口)1/5 (接)1/4		358

土壙墓群3　(第55・58・64・66図)

1	(口縁部)	①〈22.1〉	外反気味に大きく開き端部に面をもつ。	(内)ハケ目後ヘラ磨き。	①1㎜以下の砂粒を多く含む　②良　③浅黄色	(口)1/7		1005
2	(脚部)	②〈19.8〉	ハの字状に開き端部で更に大きく開いて丸く納める。	(内外)ヨコナデ。 (内)ヘラ削り。	①1㎜以下の砂粒を多く含む　②良 ③浅黄色	(脚裾)1/10		1005
3	甕	①〈16.2〉	複合口縁。 口縁部は外反して立ち上がり端部に面をもつ。	(内外)原体不明のヨコナデ。	①0.5㎜以下の砂粒を多く含む　②良 ③(外)にぶい黄橙色 (内)灰黄褐色	(口)1/16		1007
4	器台	①〈22.6〉	受部は端部方向へと直線的に開き端部で外反する。	(外)ヨコナデ。 (内)ナデ。	①1㎜以下の砂粒を多く含む　②良　③(外)にぶい橙色(内)橙色	(口)1/18 (受)1/6		1007
5	高杯	①〈26.7〉	口縁部は外反気味に立ち上がり端部に面をもつ。	(外)杯部斜位ハケ目後ヘラ磨き。後に口縁端面横ハケ目。 (内)ヘラ磨き。	①1㎜前後の砂粒を多く含む　3㎜の砂粒有 ②良　③橙色	(口)1/19		1007
7	甕	①(12.6)	複合口縁。 口縁部は外傾し端部は丸い。	風化剥落不明瞭。 (内)頸部ナデ。肩部ヘラ削り。	①1㎜以下の砂粒を多く含む　②良 ③浅黄橙色	(口)1/6 (頸)1/3		1020
8	甕	①〈17.9〉	複合口縁。 口縁部は外傾し端部に面をもつ。	(外)口縁部ハケ状工具によるヨコナデ。 (内)頸部ナデ。	①1㎜以下の砂粒を多く含む　②やや不良 ③黄橙色	(口)1/11	黒斑有	1016
9	器台	①〈19.2〉	受部は端部方向へと直線的に開き端部で外反して丸く納める。	(外)ハケ状工具によるヨコナデ。 (内)ナデ。	①1㎜以下の砂粒を多く含む　2㎜の砂粒有 ②不良　③浅黄色	(口)1/7		1018
10	高杯	①〈19.7〉	口縁部は外反気味に立ち上がり端部は丸い。	(外)杯部上半ハケ目後ヨコナデ。下半ヘラ磨き。 (内)杯部ヘラ磨き。	①1㎜以下の砂粒を多く含む　2㎜の砂粒有 ②良　③明黄褐色	(口)1/9		1023
11	長頸壺	③(14.4)	口縁部は直立して立ち上がり端部を欠く。 肩部は大きく張り出す。	(外)体部斜位ハケ目後横ハケ目。底部剥落不明瞭。 (内)口縁部ハケ目痕。頸部ナデ。体部剥落不明瞭、成形時の指頭圧痕。	①1㎜前後の砂粒を多く含む　3㎜の砂粒有 ②良　③黄橙色	(口)1/5 (体)1/2		1031 1032
12	甕	①13.4 ③19.1 ④21.9	複合口縁。 口縁部は外反気味に開き端部に面をもつ。 体部中位に最大胴径をもつ。	(外)体部叩き目後2種類のハケ工具使用により上半横位、下半縦位ハケ目が重複する。後肩部に連続刺突文。 (内)頸部ナデ。体部ヘラ削り。成形時の指頭圧痕。	①0.5㎜以下の砂粒を多く含む3㎜の砂粒有 ②良 ③橙色　褐灰色	(口)3/4 (体)ほぼ1	黒斑有	1029 1033 1034

挿図番号	器種	法量(cm) ①口径 ②底径 ③最大胴径 ④器高	形態・手法の特徴		①胎土 ②焼成 ③色調	残存状況	備考	遺物登録番号
13	高杯	①7.7 ②7.8 ③9.7 ④9.5	ワイングラス状。 口縁部は内傾し端部で上方に丸く納める。 脚部はハの字状に大きく開く。	杯部(外)不定方向へのハケ目後口縁部ヨコナデ。 (内)上半ナデ。下位成形時の指頭圧痕。 脚部(外)ヨコナデ。ハケ目痕。 (内)風化剥落不明瞭。	①1㎜以下の砂粒を多く含む　2㎜の砂粒有 ②良 ③にぶい黄橙色	(杯)1/2 (脚)2/3		1009
14	高杯	①(27.6)	有段の杯部。 口縁部は外傾し端部は丸い。	杯部(内外)ヘラ磨き。 (内)杯底部ナデ。	①1㎜前後の砂粒を多く含む　5㎜の砂礫有 ②良　③にぶい黄橙色	(杯)1/5		1009
15	高杯	①(18.6)	口縁部は外反気味に立ち上がり端部は丸い。	杯部(外)ヘラ磨き後口縁部ヨコナデ。 (内)風化剥落不明瞭。	①0.5㎜以下の砂粒を多く含む　2㎜の砂粒有 ②不良　③(外)にぶい黄橙色(内)にぶい黄橙色　灰色	(口)1/11	黒班有	1037
16	器台	①(18.6)	受部は直線的に開き端部で外反して丸く納める。	(外)ヨコナデ後ハケ目。後に接合部ヨコナデ。 (内)上半ヘラ磨き。下半ナデ。	①1㎜以下の砂粒を多く含む　2㎜の砂粒有 ②やや不良 ③明黄褐色	(受)1/5		1045
18	甕	①17.2 ③24.7 ④29.0	複合口縁。 口縁部は外傾し端部は面をもつ。倒卵形の体部中上位に最大胴径をもつ。	(外)肩部回転を利用したハケ目。以下縦位のハケ目後最大胴径位斜位ハケ目。後肩部に連続刺突文。 (内)頸部ナデ。体部上半横位、以下縦位ヘラ削り。成形時の指頭圧痕。	①0.5㎜以下の砂粒を多く含む　②良 ③橙褐色　褐色　暗橙褐色	ほぼ1	煤・炭化物付着	1008 1047 1048 1053
19	甕	①16.1 ③22.4 ④25.5		(外)肩部回転を利用したハケ目。最大胴径位斜位ハケ目。以下縦、斜位ハケ目。 (内)頸部ナデ、成形時の指頭圧痕。体部ヘラ削り。下半工具ナデ、ハケ目痕。成形時の指頭圧痕。	①1㎜以下の砂粒を多く含む　2～3㎜の砂粒有 ②良　③(外)橙色　褐色　濃橙色 (内)橙色　褐色	ほぼ1	煤付着 二次焼成受	1047
20	甕	①(18.1)	複合口縁。 口縁部は外傾し端部に面をもつ。	(内外)ヨコナデ。	①0.5㎜以下の砂粒を多く含む　2㎜の砂粒有 ②良好　③(外)にぶい黄橙色(内)明黄褐色	(口)1/10		1051
21	器台	②(17.0)	受部は直線的に開き端部を欠く。 台部はハの字状に開き端部で外反して丸く納める。	(外)ヨコナデ。 (内)受部、接合部ナデ。台部ヘラ削り後軽いナデ。	①1㎜以下の砂粒を多く含む　2㎜の砂粒有 ②やや不良　③(外)橙色(内)にぶい黄橙色	(受)1/8 (台)1/3		102 103 1050
22	高杯	①(20.0)	口縁部は外反気味に立ち上がり端部は丸い。	杯部(外)ヘラ磨き。 (内)風化剥落不明瞭。	①1㎜前後の砂粒を多く含む　②やや不良 ③黄褐色	(口)1/11		554
23	高杯	①(9.8)	有段の杯部。 口縁部は外反し端部方向へと肥厚して面をもつ。	杯部(外)口縁部ヘラ磨き、杯底部縦ヘラ磨き。 稜横位ヘラ磨き。 (内)風化剥落不明瞭。	①0.5㎜以下の砂粒を多く含む　2～4㎜砂粒有 ②良 ③(外)橙色(内)黄褐色	(口)1/7 (杯)1/4		7

土壙墓群2　(第67・70・71図)

2	甕	①(12.8)	複合口縁。 口縁部は直立し端部に平坦面をもつ。	(内)頸部ナデ。	①0.5㎜以下の砂粒を多く含む2㎜の砂粒有 ②やや不良 ③淡橙褐色	(口)1/13		1062
3	器台	②(17.8)	台部はハの字状に開き端部で更に開いて丸く納める。	(外)ヨコナデ。 (内)ヨコナデ。接合部、台部ヘラ削り。	①1㎜以下の砂粒を多く含む　4㎜の砂礫有 ②良　③淡黄褐色　褐色	(台)1/4		1054
4	甕	①(13.2)	複合口縁。 口縁部は外傾し端部は丸い。	風化剥落不明瞭。	①0.5㎜以下の砂粒を多く含む　②やや不良 ③暗褐色	(口)1/10		1069
5	高杯	①(21.6)	口縁部は外傾して大きく開き端部は細る。	風化剥落不明瞭。	①0.5㎜以下の砂粒を多く含む　②やや不良 ③淡橙褐色	(口)1/12	赤彩	54 1071 1078
6	高杯	①12.0	椀状の杯部。 口縁部で内湾して立ち上がり端部は細る。脚部はハの字状に大きく開き裾端部を欠く。	杯部(内外)ヘラ磨き。 (内)底部風化剥落著しい。 脚部(外)ヘラ磨き。 (内)上半ナデ。下半ハケ目痕。	①1㎜以下の砂粒を多く含む　3～5.5㎜の砂礫有 ②良 ③橙色	1/2	赤彩	1057 1076
7	壺	①24.8 ③39.7 ④47.3	複合口縁。 口縁部は外傾して立ち上がり端部に凹面をもつ。 体部中上位に最大胴径をもち大きく張り出す。	(外)肩部回転を利用したハケ目。後ハケ状工具による連続刺突文。最大胴径位斜位のハケ目。以下縦位ハケ目が重複する。底面ハケ状工具による不定方向のナデ。 (内)頸部ナデ、下位指ナデ。体部ヘラ削り後丁寧な工具ナデ。成形時の指頭圧痕。接合痕。	①1㎜以下の砂粒を多く含む　5～6㎜の砂礫有 ②良 ③(外)淡褐色　淡橙褐色(内)淡褐色　灰褐色	ほぼ1	黒班有 煤付着？	1112
8	高杯	①21.5	口縁部は外反気味に立ち上がり端部は丸い。	杯部(内外)口縁部ヘラ磨き後ヨコナデ。 (外)杯底部ハケ目後杯部ヘラ磨き。 (内)杯部のヘラ磨き、杯底部不定方向へのヘラ磨き。	①1㎜前後の砂粒を多く含む　②良 ③(外)淡黄褐色　淡橙褐色　淡褐色 (内)淡黄褐色　淡褐色	(杯)ほぼ1	藁付着痕	1113－②

土壙墓群1　(第74図)

1	甕	①(13.1)	複合口縁。 口縁部は外傾し端部で肥厚して面をもつ。	風化剥落不明瞭。 (外)頸部工具痕。	①1㎜前後の砂粒を多く含む　②やや不良 ③浅黄橙色	(口)1/4		989
2	高杯	①(21.5)	口縁部は外傾し端部で外反して面をもつ。	風化剥落不明瞭。 (内外)杯部ヘラ磨き。	①1㎜以下の砂粒を多く含む5㎜の砂礫有　②やや不良　③暗橙褐色	(口)1/10		60
3	甕	①(14.7)	複合口縁。 口縁部は外反気味に立ち上がり端部に面をもつ。	(内)頸部ハケ目。	①0.5㎜以下の砂粒を多く含む　②良 ③淡橙褐色	(口)1/6		112

挿図番号	器種	法量(cm) ①口径 ②底径 ③最大胴径 ④器高	形態・手法の特徴		①胎土 ②焼成 ③色調	残存状況	備考	遺物登録番号
4	(杯部)	①〈11.4〉	口縁部は短く外傾して開き端部に面をもつ。	(内外)ヘラ磨き痕。	①0.5㎜以下の砂粒を多く含む　②やや不良 ③(外)褐色 (内)淡橙褐色	(口)1/7		118
5	壺	①26.6 ③47.8 ④56.6	複合口縁。 口縁部は直立して立ち上がり端部で肥厚して端面をもつ。 体部上位に最大胴径をもつ。	全面風化剥落不明瞭。 (外)頸部縦ハケ目後稜下位ヨコナデ。肩部回転を利用した横ハケ目後ハケ状工具による連続刺突文を綾杉状に二段施す。後に独立した3条のヘラ描沈線を周回、区画？させる。以下体部縦ハケ目、底面ナデ。 (内)頸部上半ナデ、下半ハケ目後指ナデ。体部ヘラ削り後丁寧な工具ナデ。底部成形時の指頭圧痕。	①1㎜以下の砂粒を多く含む ②良 ③浅黄橙色　浅黄褐色	ほぼ1	黒斑有	927 949～959 982 984 986 987
6	壺 (体部)	②最大6.2 最小5.7 ③29.1	体部は球形。 平底の小さな底部。	(外)体部叩き目後斜位、縦位のハケ目。後にヘラ磨き。底面ナデ。 (内)体部丁寧なナデ。工具圧痕。成形時の指頭圧痕。砂の動きが残る。	①1㎜以下の砂粒を多く含む5㎜の砂礫有 ②不良 ③(外)橙色(内)黒色	(体)1/2 (底)1	赤彩 黒斑有	948

炉1　(第81図)

1	甕	①〈22.6〉	口縁部は外反して開き端部は丸い。	(外)体部ハケ目後口頸部ヨコナデ。成形時の圧痕。 (内)口頸部ナデ、ハケ目痕。体部ヘラ削り後ナデ。	①1㎜前後の砂粒を多く含む2～3㎜の砂粒有 ②やや不良　③(外)にぶい黄橙色　橙色(内)にぶい黄橙色　褐色	(口)1/3 (肩)1/4	煤付着	555

倭文古墳群　鉄製品　(鉄刀・鉄鉾・刀子・鉈・鉄斧他)

出土地	挿図番号	器種	全長	法量 刀部 長さ	刀部 断面形	茎部 長さ	茎部 断面形	断面 計測部位	断面 幅	断面 厚さ	形態の特徴	残存状況	備考	遺物登録番号
2号墳 主体部	第10図 2	大刀	75.80		二等辺 三角形		台形状	刀身切先部 刀身中央部 刀身元部 茎中央部	2.15 2.21 2.64 2.13	0.50 0.43 0.71 0.62	銹化する。 刀身は切先方向へ幅、厚を僅かに減らし切先は丸い。 刃関、背関は銹の為不明瞭。 目釘孔1。	完存	454g 木質痕 布目痕	288
3号墳 主体部	第11図 1	刀子	(25.10)	(16.90)	二等辺 三角形	8.20	長方形	刀身中央部 刀身元部 茎尻部	1.58 1.35 0.86	0.25 0.39 0.23	銹化する。 柄木質一部遺存する。 刃部角関、棟は不明。 目釘孔1。	ほぼ完存	(44.5)g 木質痕	276
	第11図 2	鉈	(38.30)	3.00	凸状 裏凹状	35.30	長方形	刀身切先部 茎中央部	0.45 0.80	0.17 0.32	銹化する。 先端部は反りを持つ。 茎部は長くほぼ一定幅とし尻部で幅を減らし「の」字状に折れ曲がる。鎺身部近くに鉄鏃の茎部、茎尖端部に別鉄製品が癒着。	完存	(72)g	275 277 278
	第11図 3	鑿(？)	9.30				長方形	茎中央部	0.45	0.30	片刃？ 茎部に木質痕。	完存	木質痕	275
4号墳 主体部	第14図 2	鉈	(30.20)				長方形	茎中央部 茎尻部	0.69 0.48	0.25 0.20	銹化する。 先端部は反りを持つ。 茎部は長くほぼ一定幅とし尻部で幅を減らす。	ほぼ完存	(23.5)g 木質痕	272
5号墳 第2主体部	第18図 5	鉄剣	(20.30)	(17.90)	菱形	(2.40)	長方形	剣身中央部 剣身元部 茎元部	3.03 3.26 1.42	0.57 0.65 0.24	銹化する。 剣身中心軸の鎬は不明瞭。 斜角両関。	切先部 茎部欠	(110)g	440
6号墳 主体部	第30図 6	大刀	(107.40)	鞘長 (87.10)		20.30		刀身切先部 刀身中央部 刀身元部 茎中央部	3.65 4.01 4.81 2.81	1.45 1.48 1.65 1.40	銹化する。 刀身に木製鞘、茎には木製柄の木質が銹着する。鞘木表面には飾板の一部？(漆膜状)が遺存。鞘木に覆われる為刀としての形態不明瞭。 柄間には巻締痕。目釘孔3。	ほぼ完存	(1400)g 木質痕 巻締痕	371
	第30図 7	大刀	103.30	85.00	二等辺 三角形	18.30	台形状	刀身切先部 刀身中央部 茎中央部	2.53 3.15 1.97	0.80 0.70 0.65	銹化する。 刀身には全体に木製鞘が銹着しており、木目は主軸(背)に平行する。 茎部巻締痕、目釘孔3を観察(X線観察より)	完存	1170g 木質痕 巻締痕	372
	第30図 8	刀子	(14.20)	(9.60)	二等辺 三角形	4.60	方形状	刀身切先部 刀身元部	1.30 1.68	0.20 0.28	銹化する。 刀身は刃関から切先へ向かって幅・厚を減じ切先部は僅かに欠。 刀身部に漆膜状のものが認められる。刃関に対し棟関が付く。 茎長は刀身の約1/2とする。	ほぼ完存	(21.8)g 木質痕	385 416 474
	第31図 13	鉄鉾	39.70	22.00	菱形	17.70	袋閉環状	切先部 鉾身元部 袋端部	2.71 3.23 3.14	0.47 0.81 0.29	銹化する。 鉾身は元部から切先に向けて幅、厚を減じる。中心軸の鎬は不明瞭。 袋端部突合せ部と対面の2方向で山形の切込みを入れる。	完存	474g 袋部木質遺存	383
	第31図 14	鉄鉾	(38.40)	(22.75)	菱形	15.75	(六角形？)	鉾身中央部 鉾身元部 袋中央部	0.80 1.13 2.30	0.80 1.00	銹化する。 鉾身、断面正方形に近い菱形で無関。多角形袋穂式。 袋端部山形の切込みを入れる。	切先部欠	(288)g 木質痕 袋部木質遺存	386
	第31図 15	鉄鉾	(20.60)	11.00	菱形	9.60	袋閉環状	鉾身中央部 鉾身元部 袋端部	0.87 1.08 3.08	0.64 1.00 0.39	銹化する。 無関。 袋部は銹化膨張。	ほぼ完存	(130)g 袋部木質遺存	394
	第31図 16	石突	(12.50)					中央部	2.00	1.35	銹化する。 有袋式。装着部楕円形。 14とセット？	ほぼ完存	(78)g 袋部木質遺存	361

倭文古墳群　鉄製品　（鉄刀・鉄鉾・刀子・鉇・鉄斧他）

出土地	挿図番号	器種	全長	法量 刀部 長さ	刀部 断面形	茎部 長さ	茎部 断面形	断面 計測部位	断面 幅	断面 厚さ	形態の特徴	残存状況	備考	遺物登録番号
6号墳 主体部	第31図 17	石突	(11.00)					袋着装部 尖端部	2.19 0.65	0.27 0.40	銹化する。 有袋式。中央部僅かに叩き潰す。 先端部方形に加工される。 15とセット？	ほぼ完存	(50) g 袋部木質遺存	400
7号墳 第1主体部	第37図 6	鉄剣	(36.70)	31.80	(菱形)	(5.90)	長方形	剣身切先部 剣身中央部 剣身元部 茎中央部	2.30 2.51 2.65 1.52	0.40 0.41 0.48 0.22	銹化する。 剣身は先端方向へ幅・厚を僅かに減じ、中心軸の鎬は不明瞭。 直角両関。繊の痕跡有。	茎尖端部欠	(134) g 木質痕	556
7号墳 第2主体部	第39図 23	刀子	12.08	7.48	二等辺三角形	4.60	長方形	刀身切先部 刀身元部 茎中央部	0.68 1.35 1.00	0.14 0.24 0.12	銹化する。 刀身は刃関から徐々に幅・厚を減じ、切先部は僅かに折れ曲がる。 鞘口部分は漏斗状を呈し鹿角製柄と思われる。 茎は目釘孔1、茎尻不明瞭。	完存	22.6 g 木質痕	1095
8号墳 第2主体部	第42図 2	鉇？	(13.00)			(13.00)	長方形	茎中央部 茎尻部	0.82 0.76	0.35 0.25	銹化する。ほぼ一定幅とし、尻部で僅かに幅を減らす。		(15.4) g 木質痕	1084
土壙墓群4 第3主体部	第47図 1	鉄刀	(26.50)	(15.60)	二等辺三角形	10.90	長方形状	刀身切先部 茎元部	(2.85) 1.07	(0.45) 1.32	銹化、癒着する。 片面木質遺存。 目釘孔1。	切先部欠	(178) g 木質痕	1012
	第47図 2	鉇	26.40					鉇身元部 茎中央部	0.75 0.80	0.23 0.40	茎部はほぼ一定幅とする。	完存		
土壙墓群3 第3主体部	第55図 6	鉄刀	(7.35)	(7.35)	二等辺三角形			刀身切先部	2.18	0.27		切先部	(21.0) g	1011
土壙墓群3 第10主体部	第58図 17	刀子	(3.50)	(3.20)	二等辺三角形	(0.30)	長方形状	刀身中央部 茎元部	1.19 0.80	(0.17) 0.10	刃関。		(3.2) g	1046
土壙墓群2 東主体部	第67図 1	鉄斧	L6.5 W3.0 T0.3 D2.5 D1.5								有袋鉄斧。 基部幅と刃部幅がほぼ同じ。 平面形は長方形。 翼は丸く折り曲げて閉じない。	完存	35.3 g	1073

倭文古墳群　鉄製品　（鉄鏃）

出土地	挿図番号	器種	全長 ①鏃身部 ②頸部 ③茎部	鏃身部 平面形 断面形	鏃身部 断面計測部位 W幅 T厚さ	鏃身部 逆刺 逆刺長	頸部 関部平面形 断面形	頸部 断面計測部位 W幅 T厚さ	茎部 断面形	茎部 断面計測部位 W幅 T厚さ	形態の特徴	残存状況	備考	遺物登録番号
2号墳 主体部	第10図 3	鉄鏃	(12.20) ①9.50	柳葉形 平造	中央部 W1.94 T0.37				方形	尖端部 W(0.87)	鏃身部は先端部にふくらを有し内湾した後緩やかに外湾、頸部へ続く。	ほぼ完存	(23.5) g 布目痕 巻締痕 木質痕	291
	第10図 4	鉄鏃	(12.40)	柳葉形 平造	中央部 W2.26 T0.42				方形	尖端部 W0.30 T0.30	鏃身部は先端部にふくらを有した後ほぼ直線的に垂下し、身元部で斜位に頸部へ続く。	尖端部欠	(23.8) g 巻締痕 木質痕	290
	第10図 5	鉄鏃	(9.55) ①(6.35)	柳葉形 平造	中央部 W2.33 T0.26				方形	中央部 W0.25 T0.18	鏃身部は先端部にふくらを有し幅は僅かに増し、下半で斜位に頸部へ続く。	鏃身先端欠 頸～茎一部	(17.7) g 布目痕 木質痕	289
3号墳 主体部	第11図 4	鉄鏃	(3.00)						長方形	尖端部 W0.36 T0.24		尖端部	巻締痕 木質痕	278
6号墳 主体部	第30図 9	鉄鏃	(13.90) ①3.40	長三角形？ 平造	中央部 W0.94 T0.2		台形状？	中央部 W0.35 T0.22			銹化する。 長頸鏃。 関部銹により形態不明瞭。	尖端部欠	(21.0) g 木質痕 巻締痕	382－③
	第30図 10	鉄鏃	(13.40) ①3.40 ②7.85 ③(2.15)	平造	中央部 W0.82 T0.19		台形状	中央部 W0.39 T0.29	長方形	尖端部 W0.30 T0.20	銹化する。 長頸鏃。 鏃身片小爪逆刺？	尖端部欠		382－④
	第30図 11	鉄鏃	(7.10) ①3.10 ②(4.70)	平造	先端部 W0.87	0.6	長方形	中央部 W0.5 T0.35			長頸鏃。 頸部上位に片逆刺を持つ。	頸～茎部欠	(7.4) g	382－②
	第30図 12	(頸部)	(15.90)				長方形	中央部 W0.8 T0.38			全体に木質で覆われる。 両端部欠失の為形態不明なるが幅を一定とする。鉇か？		(32.2) g 木質痕	384
9号墳 主体部	第44図 3	鉄鏃	4.40 ①4.40	三角形状 両端刃造	中央部 W2.35 T0.45						無頸鏃。 切先よりふくらを有して内湾した後そのまま逆刺端に至る。 中央部下位に径0.4cmの孔1。	完存	11.3 g	209－い
	第44図 4	鉄鏃	(5.35)				長方形	基部 W1.1 T0.41			関部形態不明瞭。 片面木質遺存。	頸～茎部	(5.2) g	561

倭文６号墳　主体部　馬具　（第32、33図）

挿図番号	器種	全長	法量 測定部	長さ	断面形	測定部	幅	厚さ	形態の特徴	備考	遺物番号
18	轡		鏡板	17.0					金銅装ｆ字形鏡板付轡。 鏡板は、金銅の地板に金箔を包みこんだ縁金で構成される。縁金具に沿って打たれた鋲数は20鋲前後確認できる。鋲は１ヶ単位で、縁金は細かい箔単位で丁寧に折り込み又は巻き込まれた痕跡が見て取れる。（Ｘ線撮影より） 銹化のため装飾の観察不明瞭。 立聞端部まで含めた縦方向の高さは最大6.1cm。立聞は0.9×3.5cmの横長長方形を呈し、中央に0.7×1.2cmの孔に鉤金具が遺存する。 鉤金具は金銅板で覆われ形状は縦長の長方形に近いが下端幅2.3cm、上端幅2.1cmと僅かに台形を呈し中央先端にＵ字状の鉤舌が続く。革帯を裏面で留める為に上、中、下端に計６鋲を配す。 銜は２条の鉄棒を円環によって結合、銜先は同規模の円環で引手に連結される。銜は別造りの細い紐状のもので螺旋状に往復して巻かれる。引手先端には３連の兵庫鎖を介して瓢形の引手壺が伴い先端部には径2.6cmの円環が存在する。	完存 844ｇ	373
			立聞	3.5			0.9				
			鉤金具	5.8			2.1				
			銜	21.4	円形						
			引手	15.2	円形	中央部	0.8				
			兵庫鎖	4.7							
			引手壺	7.2	円形		4.8	0.6			
19	杏葉	(20.0)				上部	(9.0)		剣菱形杏葉。 身の楕円部と剣菱部、その境に縁金を渡し上半部の縁金が内側へ突出する。縁金と身全面乱打に打ち込まれた鋲は70鋲前後を数える。鋲１つ１つ箔を丁寧に覆い被せた様子がうかがえる。（Ｘ線撮影より） 立聞形態は、立聞孔を持つ方形で吊手式の鉤金具が伴う。	216ｇ	390
						下部	(11.0)				
20	杏葉	(15.9)				上部	(8.7)			(174)ｇ	391
						下部	(9.7)				
21	杏葉	19.9				上部				198ｇ	389
						下部	10.7				
22	鈹具	7.7	前縁	3.0	円形		3.8		馬蹄形。縁金の前縁が隅丸長方形で縁金が基部に向かって幅を減少させ、前縁から基部に移る部分の内側に稜が見られる。環状の輪の部分と鞍に打ち込む「脚」の部分とを一体に造っており「座金具？」の一部遺存。 鞍金具。	(24.4)ｇ 木質痕	388
			基部	4.7							
			刺金		楕円形		0.4	0.3			
23	鈹具	(5.4)	縁金		円形				環状形。前縁が馬蹄形ないし隅丸方形をとり縁金が基部に向かって緩やかに狭まる。	(9.0)ｇ	403 411
24	金具	2.2	金銅装の方形板辻金具。 (24)～(31)は面繋を構成する辻金具と思われる。 2.3cmと2.0×2.1cmの正方形に銀被せ鋲(？)を使用。 介在する3.0×0.5cmの責金具(28)は表面螺旋状を描く様に刻み目が入る。 遺存状態のよい鋲脚の長さは0.7cmである。							(5.6)ｇ	374
25		2.2								(7.0)ｇ	375－①
26		2.1								(5.1)ｇ	375－②
27		2.0								(5.4)ｇ	376
28		2.4								(6.5)ｇ	377
29		2.2								(5.1)ｇ	378
30		2.1								(4.7)ｇ	379
31		2.1								(6.0)ｇ	380
32		2.1								(4.7)ｇ	396
33		2.3								(5.2)ｇ	412
34		(4.1)				中央部	2.6	0.1	木芯輪鐙の柄と輪の接合部内面を保護する内湾鉄板の一部と見られる。内側木質痕。端部に鋲１確認。	(6.3)ｇ	415
35		3.1				中央部	2.3	0.15	銹化する。 鋲の痕跡有。	(8.8)ｇ	395
36	鋲	2.1	まとまった出土。 尻繋部分に伴う鋲か？ いずれも鋲頭以下木質痕。							0.1ｇ	393
37		(1.9)								(0.4)ｇ	393
38		2.35								0.8ｇ	402
39		2.1								0.6ｇ	413
40		2.3								0.9ｇ	407
41		2.0								0.9ｇ	407
42		2.2								0.6ｇ	407
43		(1.9)								(0.9)ｇ	407

倭文２号墳　出土玉類　（第10図）

挿図番号	種　類	長さ(mm)	径(mm)	孔径(mm)		穿孔	色調		重量(g)	材質	残存状況	備考	遺物番号
6	小玉	2.9	4.6	2.0			淡青色	不透明	0.070	ガラス	完存	気泡	280
7	小玉	2.0	4.2	1.3			淡青色	不透明	0.038	ガラス	完存	気泡	281
8	小玉	3.2	4.2	1.3			淡青色	不透明	0.073	ガラス	完存	気泡	282
9	小玉	2.5	4.3	1.5			淡青色	不透明	0.053	ガラス	完存	気泡	283
10	小玉	2.3	4.5	1.7			淡青色	不透明	0.052	ガラス	完存	気泡	285
11	小玉	5.3	4.7	2.1			淡青色	不透明	0.130	ガラス	完存	気泡	286
12	小玉	3.6	4.0	1.6			淡青色	不透明	0.073	ガラス	完存	気泡	559
	小玉	－	－				淡緑色		－	ガラス	1/2	気泡	284
	小玉	－	－	－			淡緑色		－	ガラス	破片		560－①
	管玉	－	－	－			灰青緑色		－		ほぼ完存		287

倭文３号墳　出土玉類　（第11図）

挿図番号	種　類	長さ (mm)	径 (mm)	孔　径 (mm)		穿　孔	色　調	重　量 (g)	材　質	残存状況	備　考	遺物番号
5	小玉	3.1	5.9	2.1			淡青緑色　不透明	0.130	ガラス	完存	気泡	273
6	小玉	6.5	5.9	1.8			淡青緑色　不透明	0.291	ガラス	完存	気泡	274

倭文４号墳　出土玉類　（第14図）

3	管玉	25.6	7.4	3.6		両面	濃緑色	2.329	碧玉？	完存		271－①

倭文７号墳　出土玉類　（第37・39図）

27	勾玉	24.0	9.4	3.3	1.6	片面	濃緑色	2.634	碧玉？	完存		23
7	勾玉	31.7	12.1	3.1	1.3	片面	淡白色	6.500	水晶？	尾部欠		242－②
8	勾玉	26.8	9.2	3.2	1.0	片面	淡白色	3.297	水晶？	完存		242－①
9	管玉	18.7	6.2	2.4		両面	淡青灰色	1.300	碧玉？	完存		689
10	小玉	4.6	6.4	2.3			紺色　半透明	0.252	ガラス	完存	気泡	242－③
11	小玉	5.7	6.1	1.8			紺色　半透明	0.313	ガラス	完存	気泡	620
12	小玉	1.8	3.1	0.8			紺色　半透明	0.023	ガラス	完存	気泡	242－④
13	小玉	2.1	3.3	1.0			淡青緑色　半透明	0.030	ガラス	完存	気泡	323
15	小玉	2.4	3.5	0.9			黄色　半透明	0.039	ガラス	完存	気泡	863
14	小玉	1.8	3.9	1.1			淡緑色　半透明	0.036	ガラス	完存	気泡	924
16	小玉	3.5	5.4	0.9			紺色　半透明	0.145	ガラス	完存	気泡	347
17	小玉	2.2	5.0	1.2			淡青色　半透明	0.063	ガラス	完存	気泡	714
18	小玉	1.2	2.1	0.8			緑色　半透明	0.006	ガラス	完存	気泡	664
19	小玉	1.4	2.3	0.7			紺色　半透明	0.012	ガラス	完存	気泡	923－①
20	小玉	1.2	1.9	0.7			紺色　半透明	0.007	ガラス	完存	気泡	766
	小玉	2.2	3.4	1.0			淡緑色　半透明	0.037	ガラス	完存	気泡	222
	小玉	2.3	3.3	0.8			紺色　半透明	0.036	ガラス	完存	気泡	302－①
	小玉	1.6	2.8	0.8			紺色　半透明	0.014	ガラス	完存	気泡	302－②
	小玉	1.1	2.7	0.9			紺色　半透明	0.008	ガラス	完存	気泡	302－③
	小玉	2.1	2.6	1.7			紺色　半透明	0.021	ガラス	完存	気泡	304
	小玉	1.8	3.0	0.9			紺色　半透明	0.021	ガラス	完存	気泡	305
	小玉	1.9	(3.4)	－			紺色　半透明	(0.014)	ガラス	1/2	気泡	306
	小玉	1.7	3.0	0.8			紺色　半透明	0.024	ガラス	完存	気泡	307
	小玉	2.3	3.1	0.7			紺色　半透明	0.034	ガラス	完存	気泡	308
	小玉	1.4	3.0	0.8			淡青緑色　半透明	0.020	ガラス	完存	気泡	309
	小玉	2.4	3.0	1.1			紺色　半透明	0.032	ガラス	完存	気泡	310
	小玉	2.2	3.4	0.8			紺色　半透明	0.035	ガラス	完存	気泡	311
	小玉	1.7	2.9	1.0			紺色　半透明	0.024	ガラス	完存	気泡	312
	小玉	1.9	2.4	0.7			紺色　半透明	0.018	ガラス	完存	気泡	313
	小玉	1.7	3.3	1.3			紺色　半透明	0.026	ガラス	完存	気泡	314
	小玉	1.8	3.0	1.1			紺色　半透明	0.024	ガラス	完存	気泡	315
	小玉	1.6	3.3	1.1			紺色　半透明	0.028	ガラス	完存	気泡	316
	小玉	1.4	2.8	0.9			紺色　半透明	0.018	ガラス	完存	気泡	317
	小玉	－	－	－			紺色	－	ガラス	ほぼ完存	気泡	318
	小玉	1.8	3.0	1.0			淡青緑色　半透明	0.020	ガラス	完存	気泡	319
	小玉	2.5	3.6	0.9			紺色　半透明	0.044	ガラス	完存	気泡	320
	小玉	1.9	3.2	0.9			紺色　半透明	0.027	ガラス	完存	気泡	321
	小玉	1.9	2.7	0.9			紺色　半透明	0.024	ガラス	完存	気泡	322
	小玉	1.6	2.9	0.9			淡青色　半透明	(0.018)	ガラス	完存	気泡	324
	小玉	2.9	2.5	0.8			淡青緑色　半透明	0.025	ガラス	完存	気泡	325
	小玉	1.4	2.9	0.9			紺色　半透明	0.020	ガラス	完存	気泡	326
	小玉	2.6	3.2	1.0			紺色　半透明	0.035	ガラス	完存	気泡	327
	小玉	－	－	－			紺色	－	ガラス	ほぼ完存	気泡	328
	小玉	1.5	2.5	1.1			紺色　半透明	0.014	ガラス	完存	気泡	329
	小玉	1.5	3.5	1.1			淡青色　半透明	0.023	ガラス	完存	気泡	330
	小玉	－	－	－			淡青緑色	－	ガラス	ほぼ完存	気泡	331
	小玉	3.0	3.3	0.9			淡青色　半透明	0.046	ガラス	完存	気泡	332
	小玉	4.5	6.2	2.2			紺色　半透明	0.257	ガラス	完存	気泡	333

倭文７号墳　出土玉類

挿図番号	種　類	長さ(mm)	径(mm)	孔　径(mm)		穿　孔	色　調	重　量(g)	材　質	残存状況	備　考	遺物番号
	小玉	3.1	3.1	1.0			紺色　半透明	0.040	ガラス	完存	気泡	334
	小玉	1.5	3.6	1.2			淡青色　半透明	0.044	ガラス	完存	気泡	335
	小玉	2.8	3.8	0.8			紺色　半透明	0.056	ガラス	完存	気泡	336
	小玉	2.0	3.5	0.8			紺色　半透明	0.036	ガラス	完存	気泡	337
	小玉	3.6	3.6	1.3			淡緑色　半透明	0.064	ガラス	完存	気泡	338
	小玉	2.0	3.0	0.9			紺色　半透明	0.029	ガラス	完存	気泡	339
	小玉	1.7	2.8	0.8			紺色　半透明	0.020	ガラス	完存	気泡	340
	小玉	2.6	3.4	1.0			淡緑色　半透明	0.049	ガラス	完存	気泡	341
	小玉	－	－	－			淡青色	－	ガラス	1/4		342
	小玉	2.3	(2.9)	－			紺色　半透明	(0.017)	ガラス	1/2	気泡	343
	小玉	2.1	3.3	0.9			紺色　半透明	0.033	ガラス	完存	気泡	344
	小玉	2.2	3.7	1.0			紺色　半透明	0.045	ガラス	完存	気泡	345
	小玉	2.3	3.3	1.3			淡緑色　半透明	0.036	ガラス	完存	気泡	346
	小玉	2.2	3.7	1.4			紺色　半透明	0.046	ガラス	完存	気泡	348
	小玉	2.1	2.8	0.7			淡青色　半透明	0.026	ガラス	完存	気泡	349
	小玉	1.5	3.3	1.1			紺色　半透明	0.019	ガラス	完存	気泡	350
	小玉	1.4	2.6	0.8			紺色　半透明	0.015	ガラス	完存	気泡	351
	小玉	－	－	－			淡緑色	－	ガラス	1/2	気泡	352
	小玉	2.4	3.4	1.2			紺色　半透明	0.030	ガラス	完存	気泡	353
	小玉	1.6	2.8	0.7			紺色　半透明	0.018	ガラス	完存	気泡	509－①
	小玉	2.6	3.2	0.9			紺色　半透明	0.029	ガラス	完存	気泡	509－②
	小玉	3.0	3.4	1.0			淡青緑色　半透明	0.046	ガラス	完存	気泡	509－③
	小玉	2.5	3.2	0.8			紺色　半透明	0.030	ガラス	完存	気泡	509－④
	小玉	2.1	3.3	0.8			紺色　半透明	0.032	ガラス	完存	気泡	509－⑤
	小玉	1.8	3.3	0.9			紺色　半透明	0.028	ガラス	完存	気泡	509－⑥
	小玉	－	－	－			淡青色	－	ガラス	破片		509－⑦
	小玉	1.9	3.2	1.0			紺色　半透明	0.027	ガラス	完存	気泡	568
	小玉	2.2	3.2	1.0			紺色　半透明	0.029	ガラス	完存	気泡	569
	小玉	2.8	3.1	1.0			淡青色　半透明	0.039	ガラス	完存	気泡	570
	小玉	1.5	2.8	1.0			紺色　半透明	0.017	ガラス	完存	気泡	571
	小玉	2.6	3.0	1.0			紺色　半透明	0.035	ガラス	完存	気泡	572
	小玉	2.1	3.4	1.0			紺色　半透明	0.035	ガラス	完存	気泡	573
	小玉	1.9	3.1	1.0			淡青色　半透明	0.026	ガラス	完存	気泡	574
	小玉	1.7	3.2	1.0			紺色　半透明	0.024	ガラス	完存	気泡	575
	小玉	－	－	－			淡青色	－	ガラス	ほぼ完存	気泡	576
	小玉	2.2	3.1	0.9			紺色　半透明	0.032	ガラス	完存	気泡	577
	小玉	1.3	3.4	1.1			淡緑色　半透明	0.023	ガラス	完存	気泡	578
	小玉	2.7	3.4	1.0			淡青色　半透明	0.046	ガラス	完存	気泡	579
	小玉	2.3	3.2	1.0			淡緑色　半透明	0.032	ガラス	完存	気泡	580
	小玉	2.1	3.3	0.9			紺色　半透明	0.033	ガラス	完存	気泡	581
	小玉	2.0	3.2	0.9			淡青色　半透明	0.032	ガラス	完存	気泡	582
	小玉	2.3	3.6	0.9			紺色　半透明	0.044	ガラス	完存	気泡	583
	小玉	3.1	2.0	0.8			紺色　半透明	0.029	ガラス	完存	気泡	584
	小玉	2.1	3.3	0.8			紺色　半透明	0.033	ガラス	完存	気泡	585
	小玉	2.0	3.2	1.1			淡青色　半透明	0.030	ガラス	完存	気泡	586
	小玉	3.3	3.4	1.0			淡青色　半透明	0.051	ガラス	完存	気泡	587
	小玉	2.3	3.1	1.0			淡緑色　半透明	0.032	ガラス	完存	気泡	588
	小玉	2.1	3.0	0.8			淡緑色　半透明	0.034	ガラス	完存	気泡	589
	小玉	2.2	3.2	0.9			紺色　半透明	0.034	ガラス	完存	気泡	590
	小玉	－	－	－			紺色	－	ガラス	1/2	気泡	591
	小玉	2.2	3.7	1.1			紺色　半透明	0.042	ガラス	完存	気泡	592
	小玉	－	－	－			淡青色	－	ガラス	ほぼ完存	気泡	593
	小玉	2.0	3.2	0.7			紺色　半透明	0.028	ガラス	完存	気泡	594
	小玉	1.4	3.1	1.0			淡青色　半透明	0.018	ガラス	完存	気泡	595
	小玉	3.6	3.7	1.3			淡青色　半透明	0.076	ガラス	完存	気泡	596
	小玉	2.0	3.3	0.8			紺色　半透明	0.034	ガラス	完存	気泡	597
	小玉	2.2	2.9	0.9			紺色　半透明	0.026	ガラス	完存	気泡	598
	小玉	2.4	3.3	0.9			紺色　半透明	0.037	ガラス	完存	気泡	599
	小玉	2.2	3.7	1.0			淡緑色　半透明	0.043	ガラス	完存	気泡	600
	小玉	3.3	4.0	1.4			淡青色　半透明	0.069	ガラス	完存	気泡	601

倭文７号墳　出土玉類

挿図番号	種　類	長さ (mm)	径 (mm)	孔　径 (mm)		穿　孔	色　調	重　量 (g)	材　質	残存状況	備　考	遺物番号
	小玉	2.8	3.4	0.9			淡青緑色　半透明	0.051	ガラス	完存	気泡	602
	小玉	4.1	6.7	2.0			紺色　半透明	0.244	ガラス	完存	気泡	603
	小玉	1.9	3.1	0.8			淡青色　半透明	0.030	ガラス	完存	気泡	604
	小玉	－	－	－			淡青色	－	ガラス	破片		605
	小玉	2.9	3.3	1.0			淡青緑色　半透明	0.046	ガラス	完存	気泡	606
	小玉	4.5	6.6	2.4			紺色　半透明	0.266	ガラス	完存	気泡	607
	小玉	2.2	3.2	1.1			紺色　半透明	0.038	ガラス	完存	気泡	608
	小玉	2.2	3.1	0.9			紺色　半透明	0.028	ガラス	完存	気泡	609
	小玉	1.9	3.0	1.0			紺色　半透明	0.030	ガラス	完存	気泡	610
	小玉	2.2	2.6	0.8			紺色　半透明	0.023	ガラス	完存	気泡	611
	小玉	4.5	6.8	2.7			紺色　半透明	0.267	ガラス	完存	気泡	612
	小玉	5.1	7.1	1.6			紺色　半透明	0.361	ガラス	完存	気泡	613
	小玉	5.0	7.3	1.9			紺色　半透明	0.351	ガラス	完存	気泡	614
	小玉	5.4	6.4	1.8			紺色　半透明	0.288	ガラス	完存	気泡	615
	小玉	5.0	6.8	2.8			紺色　半透明	0.267	ガラス	完存	気泡	616
	小玉	3.7	6.8	2.4			紺色　半透明	0.228	ガラス	完存	気泡	617
	小玉	4.4	6.3	1.8			紺色　半透明	0.235	ガラス	完存	気泡	618
	小玉	5.4	6.5	2.4			紺色　半透明	0.296	ガラス	完存	気泡	619
	小玉	4.8	5.8	1.6			紺色　半透明	0.313	ガラス	完存	気泡	621
	小玉	1.8	3.1	0.8			紺色　半透明	0.028	ガラス	完存	気泡	622
	小玉	2.8	3.7	1.0			淡青色　半透明	0.045	ガラス	完存	気泡	623
	小玉	1.5	2.6	0.9			紺色　半透明	0.013	ガラス	完存	気泡	624
	小玉	2.2	3.1	0.9			紺色　半透明	0.028	ガラス	完存	気泡	625
	小玉	1.8	2.9	1.0			淡緑色　半透明	0.022	ガラス	完存	気泡	626
	小玉	3.2	2.6	0.7			紺色　半透明	0.034	ガラス	完存	気泡	627
	小玉	2.0	3.5	1.2			紺色　半透明	0.030	ガラス	完存	気泡	628
	小玉	1.5	3.3	0.9			淡青色　半透明	0.023	ガラス	完存	気泡	629
	小玉	2.5	3.4	0.9			淡緑色　半透明	0.038	ガラス	完存	気泡	630
	小玉	2.1	3.6	1.1			淡緑色　半透明	0.038	ガラス	完存	気泡	631
	小玉	2.4	3.2	0.9			淡青色　半透明	0.033	ガラス	完存	気泡	632
	小玉	2.6	3.2	0.9			紺色　半透明	0.039	ガラス	完存	気泡	633
	小玉	3.9	3.4	1.1			淡緑色　半透明	0.065	ガラス	完存	気泡	634
	小玉	3.0	3.6	1.2			淡緑色　半透明	0.062	ガラス	完存	気泡	635
	小玉	2.1	4.4	1.5			淡緑色　半透明	0.050	ガラス	完存	気泡	636
	小玉	－	－	－			淡青色	(0.016)	ガラス	1/2	気泡	637
	小玉	2.4	2.4	0.5			紺色　半透明	0.022	ガラス	完存	気泡	638
	小玉	1.4	2.9	0.9			紺色　半透明	0.018	ガラス	完存	気泡	639
	小玉	3.8	6.4	2.6			紺色　半透明	0.211	ガラス	完存	気泡	640
	小玉	4.1	5.3	1.8			淡青色　半透明	0.150	ガラス	完存	気泡	641
	小玉	1.8	3.2	1.1			紺色　半透明	0.031	ガラス	完存	気泡	642
	小玉	4.6	7.5	2.3			紺色　半透明	0.316	ガラス	完存	気泡	643
	小玉	4.3	6.0	2.2			紺色　半透明	0.226	ガラス	完存	気泡	644
	小玉	5.4	6.4	2.6			紺色　半透明	0.279	ガラス	完存	気泡	645
	小玉	4.5	6.5	3.0			紺色　半透明	0.256	ガラス	完存	気泡	646
	小玉	3.6	(6.6)	－			紺色	(0.223)	ガラス	ほぼ完存	気泡	647
	小玉	4.4	6.5	1.9			紺色　半透明	0.254	ガラス	完存	気泡	648
	小玉	2.5	3.0	1.1			淡青緑色　半透明	0.031	ガラス	完存	気泡	649
	小玉	2.6	3.6	1.0			黄色　半透明	0.047	ガラス	完存	気泡	650
	小玉	4.9	7.2	2.0			紺色　半透明	0.316	ガラス	完存	気泡	651
	小玉	5.7	6.5	2.0			紺色　半透明	0.349	ガラス	完存	気泡	652
	小玉	5.5	6.9	1.6			紺色　半透明	0.348	ガラス	完存	気泡	653
	小玉	2.0	3.3	1.0			紺色　半透明	0.028	ガラス	完存	気泡	654
	小玉	1.8	4.1	1.5			紺色　半透明	0.038	ガラス	完存	気泡	655
	小玉	4.7	7.3	2.0			紺色　半透明	0.315	ガラス	完存	気泡	656
	小玉	1.7	3.4	1.0			紺色　半透明	0.019	ガラス	完存	気泡	657
	小玉	2.2	3.0	0.9			紺色　半透明	0.027	ガラス	完存	気泡	658
	小玉	4.9	6.4	1.6			紺色　半透明	0.269	ガラス	完存	気泡	659
	小玉	2.3	－	－			紺色	(0.028)	ガラス	ほぼ完存	気泡	660
	小玉	3.6	6.1	2.4			紺色　半透明	0.203	ガラス	完存	気泡	661
	小玉	2.0	3.3	0.9			紺色　半透明	0.027	ガラス	完存	気泡	662

倭文７号墳　出土玉類

挿図番号	種　類	長さ(mm)	径(mm)	孔　径(mm)		穿　孔	色　調	重　量(g)	材　質	残存状況	備　考	遺物番号
	小玉	1.7	2.8	0.9			淡青色　半透明	0.018	ガラス	完存	気泡	663
	小玉	3.9	6.3	1.7			紺色　半透明	0.231	ガラス	完存	気泡	665
	小玉	1.4	3.3	1.2			紺色　半透明	0.021	ガラス	完存	気泡	666
	小玉	1.8	2.7	0.7			紺色　半透明	0.016	ガラス	完存	気泡	667
	小玉	1.7	2.8	0.8			淡青色　半透明	0.011	ガラス	完存	気泡	668
	小玉	1.4	3.1	1.1			紺色　半透明	0.015	ガラス	完存	気泡	669
	小玉	2.3	3.5	1.0			淡緑色　半透明	0.036	ガラス	完存	気泡	670
	小玉	2.1	3.2	1.0			紺色　半透明	0.027	ガラス	完存	気泡	671
	小玉	2.0	3.1	0.9			紺色　半透明	0.023	ガラス	完存	気泡	672
	小玉	1.5	2.8	0.8			紺色　半透明	0.012	ガラス	完存	気泡	673
	小玉	1.9	4.0	1.2			淡青緑色　半透明	0.044	ガラス	完存	気泡	674
	小玉	1.8	3.2	0.9			淡青緑色　半透明	0.020	ガラス	完存	気泡	675
	小玉	2.2	3.4	1.0			淡青緑色　半透明	0.036	ガラス	完存	気泡	676
	小玉	1.6	3.2	1.1			紺色　半透明	0.022	ガラス	完存	気泡	677
	小玉	2.2	3.1	0.9			淡青緑色　半透明	0.036	ガラス	完存	気泡	678
	小玉	1.7	2.7	0.9			紺色　半透明	0.014	ガラス	完存	気泡	679
	小玉	2.1	3.2	0.9			紺色　半透明	0.026	ガラス	完存	気泡	680
	小玉	1.9	3.1	0.9			紺色　半透明	0.023	ガラス	完存	気泡	681
	小玉	2.1	3.5	1.3			淡青緑色　半透明	0.033	ガラス	完存	気泡	682
	小玉	2.2	3.2	1.0			淡青色　半透明	0.027	ガラス	完存	気泡	683
	小玉	1.9	3.4	1.0			淡青緑色　半透明	0.025	ガラス	完存	気泡	684
	小玉	2.3	3.4	0.9			淡青色　半透明	0.032	ガラス	完存	気泡	685
	小玉	2.4	3.3	0.8			淡青緑色　半透明	0.032	ガラス	完存	気泡	686
	管玉	(20.2)	5.7	－			淡青灰色	－	碧玉？	ほぼ完存	気泡	687
	小玉	2.0	3.2	0.8			紺色　半透明	0.023	ガラス	完存	気泡	690
	小玉	1.8	3.5	0.9			紺色　半透明	0.032	ガラス	完存	気泡	691
	小玉	2.1	3.2	0.8			紺色　半透明	0.029	ガラス	完存	気泡	692
	小玉	1.4	3.3	1.0			紺色　半透明	0.021	ガラス	完存	気泡	693
	小玉	2.4	3.3	0.9			紺色　半透明	0.035	ガラス	完存	気泡	694
	小玉	2.2	3.3	1.1			紺色　半透明	0.031	ガラス	完存	気泡	695
	小玉	2.3	3.1	1.1			紺色　半透明	0.027	ガラス	完存	気泡	696
	小玉	2.0	3.4	1.0			紺色　半透明	0.034	ガラス	完存	気泡	697
	小玉	2.3	3.5	0.9			紺色　半透明	0.035	ガラス	完存	気泡	698
	小玉	1.9	3.6	1.0			淡青緑色　半透明	0.027	ガラス	完存	気泡	699
	小玉	2.2	3.2	0.9			紺色　半透明	0.029	ガラス	完存	気泡	700
	小玉	2.1	3.7	1.0			淡青緑色　半透明	0.034	ガラス	完存	気泡	701
	小玉	1.8	3.1	0.9			紺色　半透明	0.018	ガラス	完存	気泡	702
	小玉	2.2	3.2	1.0			紺色　半透明	0.026	ガラス	完存	気泡	703
	小玉	1.5	3.4	1.4			淡青緑色　半透明	0.019	ガラス	完存	気泡	704
	小玉	2.0	3.0	0.8			淡青色　半透明	0.020	ガラス	完存	気泡	705
	小玉	2.6	3.5	1.0			淡緑色　半透明	0.039	ガラス	完存	気泡	706
	小玉	1.4	2.8	0.7			紺色　半透明	0.013	ガラス	完存	気泡	707
	小玉	1.6	3.0	1.0			紺色　半透明	0.016	ガラス	完存	気泡	708
	小玉	(1.7)	3.2	1.1			淡青緑色　半透明	(0.026)	ガラス	完存	気泡	709
	小玉	2.0	3.6	1.1			淡緑色　半透明	0.030	ガラス	完存	気泡	710
	小玉	－	－	－			淡青緑色　半透明	－	ガラス	破片		711
	小玉	2.0	3.6	1.3			紺色　半透明	0.025	ガラス	完存	気泡	713
	小玉	6.0	6.8	2.0			紺色　半透明	0.384	ガラス	完存	気泡	715
	小玉	2.0	2.8	1.0			紺色　半透明	0.020	ガラス	完存	気泡	716
	小玉	2.6	3.5	1.1			紺色　半透明	0.042	ガラス	完存	気泡	717
	小玉	4.8	6.7	2.1			紺色　半透明	0.287	ガラス	完存	気泡	718
	小玉	2.0	3.2	1.0			紺色　半透明	0.027	ガラス	完存	気泡	719
	小玉	4.8	7.4	2.9			紺色　半透明	0.332	ガラス	完存	気泡	720
	小玉	2.4	3.5	0.9			紺色　半透明	0.039	ガラス	完存	気泡	721
	小玉	－	－	－			紺色	－	ガラス	破片		722
	小玉	1.6	3.6	1.0			紺色　半透明	0.033	ガラス	完存	気泡	723
	小玉	2.0	2.9	1.1			紺色　半透明	0.027	ガラス	完存	気泡	724
	小玉	2.1	3.1	0.8			紺色　半透明	0.026	ガラス	完存	気泡	725
	小玉	2.1	3.2	0.9			紺色　半透明	0.029	ガラス	完存	気泡	726
	小玉	1.1	3.0	0.9			紺色　半透明	0.017	ガラス	完存	気泡	727

倭文７号墳　出土玉類

挿図番号	種　類	長さ (mm)	径 (mm)	孔　径 (mm)		穿　孔	色　調	重　量 (g)	材　質	残存状況	備　考	遺物番号
	小玉	2.3	3.4	1.1			淡青緑色　半透明	0.040	ガラス	完存	気泡	728
	小玉	5.0	5.8	2.3			紺色　半透明	0.231	ガラス	完存	気泡	729
	小玉	2.0	2.8	0.7			淡青色　半透明	0.021	ガラス	完存	気泡	730
	小玉	－	－	－			淡青色　半透明	－	ガラス	破片		731
	小玉	－	－	－			紺色	－	ガラス	ほぼ完存	気泡	732
	小玉	2.2	2.8	0.8			紺色　半透明	0.026	ガラス	完存	気泡	733
	小玉	1.5	2.6	0.8			紺色　半透明	0.015	ガラス	完存	気泡	734
	小玉	4.1～4.9	7.6	2.7			紺色　半透明	0.359	ガラス	完存	気泡	735
	小玉	4.9	6.5	2.1			紺色　半透明	0.298	ガラス	完存	気泡	736
	小玉	4.2	6.4	2.3			紺色　半透明	0.231	ガラス	完存	気泡	737
	小玉	2.7	3.7	1.1			淡緑色　半透明	0.045	ガラス	完存	気泡	738
	小玉	1.6	3.4	0.9			淡青色　半透明	0.026	ガラス	完存	気泡	739
	小玉	3.0	3.6	1.2			淡青緑色　半透明	0.049	ガラス	完存	気泡	740
	小玉	2.4	2.5	0.8			淡青色　半透明	0.021	ガラス	完存	気泡	741
	小玉	1.4	2.8	1.0			淡青色　半透明	0.016	ガラス	完存	気泡	742
	小玉	3.2	3.1	0.9			淡緑色　半透明	0.045	ガラス	完存	気泡	743
	小玉	1.8	3.2	0.8			紺色　半透明	0.027	ガラス	完存	気泡	744
	小玉	2.9	3.7	1.0			淡青色　半透明	0.051	ガラス	完存	気泡	745
	小玉	1.1	3.1	1.4			紺色　半透明	0.015	ガラス	完存	気泡	746
	小玉	1.9	3.3	0.9			淡青緑色　半透明	0.028	ガラス	完存	気泡	747
	小玉	2.2	3.0	0.8			淡青緑色　半透明	0.030	ガラス	完存	気泡	748
	小玉	1.8	2.8	1.0			紺色　半透明	0.021	ガラス	完存	気泡	749
	小玉	2.8	3.6	0.8			淡緑色　半透明	0.048	ガラス	完存	気泡	750
	小玉	2.6	3.2	0.9			紺色　半透明	0.038	ガラス	完存	気泡	751
	小玉	2.7	3.6	1.2			淡青緑色　半透明	0.045	ガラス	完存	気泡	752
	小玉	1.7	3.0	0.8			淡青色　半透明	0.020	ガラス	完存	気泡	753
	小玉	2.3	3.4	1.2			紺色　半透明	0.037	ガラス	完存	気泡	754
	小玉	2.7	3.2	0.7			紺色　半透明	(0.036)	ガラス	ほぼ完存	気泡	755
	小玉	2.4	3.5	1.0			紺色　半透明	0.039	ガラス	完存	気泡	756
	小玉	1.4	2.7	0.8			紺色　半透明	0.012	ガラス	完存	気泡	757
	小玉	3.3	3.9	1.2			淡青色　半透明	0.068	ガラス	完存	気泡	758
	小玉	3.6	4.2	0.9			淡青色　半透明	0.073	ガラス	完存	気泡	759
	小玉	7.0	5.0	2.1			紺色　半透明	0.304	ガラス	完存	気泡	760
	小玉	1.6	3.2	1.0			紺色　半透明	0.022	ガラス	完存	気泡	761
	小玉	1.9	3.4	1.0			紺色　半透明	0.031	ガラス	完存	気泡	762
	小玉	4.4	6.8	1.2			紺色　半透明	0.318	ガラス	完存	気泡	763
	小玉	5.2	6.6	1.9			紺色　半透明	0.293	ガラス	完存	気泡	764
	小玉	1.6	3.1	0.8			紺色　半透明	0.018	ガラス	完存	気泡	765
	小玉	1.4	2.8	0.9			淡青色　半透明	0.016	ガラス	完存	気泡	767
	小玉	－	－	－			淡青色	－	ガラス	ほぼ完存	気泡	768
	小玉	2.3	2.8	0.9			淡青色　半透明	0.024	ガラス	完存	気泡	769
	小玉	1.8	3.1	－			淡青色　半透明	(0.012)	ガラス	ほぼ完存	気泡	770
	小玉	1.9	3.0	0.9			紺色　半透明	0.022	ガラス	完存	気泡	771
	小玉	1.8	2.7	0.9			紺色　半透明	0.018	ガラス	完存	気泡	772
	小玉	5.4	6.3	1.8			紺色　半透明	0.308	ガラス	完存	気泡	773
	小玉	2.5	3.4	0.9			紺色　半透明	0.038	ガラス	完存	気泡	774
	小玉	2.3	3.6	1.1			淡緑色　半透明	0.039	ガラス	完存	気泡	775
	小玉	－	－	－			淡青色	－	ガラス	1/2	気泡	776
	小玉	5.8	6.9	2.4			紺色　半透明	0.367	ガラス	完存	気泡	777
	小玉	6.0	6.2	1.9			紺色　半透明	0.303	ガラス	完存	気泡	778
	小玉	5.8	6.4	2.4	1.5		紺色　半透明	0.317	ガラス	完存	気泡	779
	小玉	5.3	6.7	2.4			紺色　半透明	0.259	ガラス	完存	気泡	780
	小玉	3.9	7.0	2.8			紺色　半透明	0.231	ガラス	完存	気泡	781
	小玉	2.3	3.3	0.8			淡緑色　半透明	0.035	ガラス	完存	気泡	782
	小玉	3.0	3.3	0.9			淡青色　半透明	0.050	ガラス	完存	気泡	783
	小玉	2.7	3.5	0.9			紺色　半透明	0.040	ガラス	完存	気泡	784
	小玉	1.4	3.0	0.9			淡青色　半透明	0.020	ガラス	完存	気泡	785
	小玉	2.3	3.3	1.1			淡緑色　半透明	0.040	ガラス	完存	気泡	786
	小玉	2.2	3.1	0.7			淡青色　半透明	0.032	ガラス	完存	気泡	787
	小玉	1.6	2.9	0.9			淡緑色　半透明	0.024	ガラス	完存	気泡	788

倭文７号墳　出土玉類

挿図番号	種　類	長さ(mm)	径(mm)	孔　径(mm)		穿　孔	色　調	重　量(g)	材　質	残存状況	備　考	遺物番号
	小玉	2.3	3.4	0.8			淡青緑色　半透明	0.039	ガラス	完存	気泡	789
	小玉	2.6	3.4	1.4			淡青緑色　半透明	0.051	ガラス	完存	気泡	790
	小玉	2.1	3.2	0.9			紺色　半透明	0.032	ガラス	完存	気泡	791
	小玉	2.1	3.4	1.2			淡青緑色　半透明	0.034	ガラス	完存	気泡	792
	小玉	2.3	2.4	0.9			淡青緑色　半透明	0.024	ガラス	完存	気泡	793
	小玉	2.4	－	－			紺色	(0.027)	ガラス	1/2残	気泡	794
	小玉	2.6	3.1	1.2			紺色　半透明	0.039	ガラス	完存	気泡	795
	小玉	2.1	3.4	1.0			淡青緑色　半透明	0.037	ガラス	完存	気泡	796
	小玉	2.4	3.4	0.7			紺色　半透明	0.040	ガラス	完存	気泡	797
	小玉	3.4	5.0	1.3			紺色　半透明	0.120	ガラス	完存	気泡	798
	小玉	4.5	6.6	2.0			紺色　半透明	0.279	ガラス	完存	気泡	799
	小玉	3.1	3.4	1.1			淡青緑色　半透明	0.053	ガラス	完存	気泡	800
	小玉	－	－	－			紺色	－	ガラス	ほぼ完存	気泡	801
	小玉	3.1	3.5	0.9			淡緑色　半透明	0.052	ガラス	完存	気泡	803
	小玉	2.3	3.4	0.9			淡青緑色　半透明	0.038	ガラス	完存	気泡	804
	小玉	－	－	－			淡青色	－	ガラス	破片		805
	小玉	3.1	3.7	1.4			淡青緑色　半透明	0.053	ガラス	完存	気泡	806
	小玉	2.0	3.5	1.2			淡緑色　半透明	0.035	ガラス	完存	気泡	807
	小玉	2.3	3.4	1.2			淡青緑色　半透明	0.032	ガラス	完存	気泡	808
	小玉	2.5	3.2	0.9			淡青緑色　半透明	0.034	ガラス	完存	気泡	809
	小玉	1.2	2.6	0.9			淡青緑色　半透明	0.011	ガラス	完存	気泡	810
	小玉	2.1	2.9	1.2			紺色　半透明	0.023	ガラス	完存	気泡	811
	小玉	2.9	3.7	1.0			淡緑色　半透明	0.050	ガラス	完存	気泡	812
	小玉	2.5	2.5	0.9			紺色　半透明	0.021	ガラス	完存	気泡	813
	小玉	2.2	3.4	1.0			淡青色　半透明	0.032	ガラス	完存	気泡	814
	小玉	1.9	3.2	0.9			紺色　半透明	0.028	ガラス	完存	気泡	815
	小玉	2.5	2.7	1.0			淡青色　半透明	0.027	ガラス	完存	気泡	816
	小玉	2.6	3.5	0.8			紺色　半透明	0.017	ガラス	完存	気泡	817－①
	小玉	1.5	2.8	0.9			淡青色　半透明	0.048	ガラス	完存	気泡	817－②
	小玉	2.1	3.4	1.0			淡青色　半透明	0.028	ガラス	完存	気泡	818
	小玉	2.4	3.2	0.8			紺色　半透明	0.034	ガラス	完存	気泡	819
	小玉	2.4	3.2	1.1			紺色　半透明	0.031	ガラス	完存	気泡	820
	小玉	1.5	2.7	1.0			淡青色　半透明	0.013	ガラス	完存	気泡	821
	小玉	1.9	3.3	0.9			紺色　半透明	0.023	ガラス	完存	気泡	822
	小玉	2.0	3.5	0.9			紺色　半透明	0.035	ガラス	完存	気泡	823
	小玉	2.4	3.2	0.9			紺色　半透明	0.037	ガラス	完存	気泡	824
	小玉	1.3	2.8	0.9			淡青色　半透明	0.016	ガラス	完存	気泡	825
	小玉	5.0	6.7	1.8			紺色　半透明	0.310	ガラス	完存	気泡	826
	小玉	2.5	3.4	1.1			淡青色　半透明	0.036	ガラス	完存	気泡	827
	小玉	2.2	4.0	1.4			紺色　半透明	0.050	ガラス	完存	気泡	828
	小玉	－	－	－			淡青緑色	(0.012)	ガラス	1/2	気泡	829
	小玉	2.0	3.0	0.9			紺色　半透明	0.024	ガラス	完存	気泡	830
	小玉	2.7	3.3	1.1			紺色　半透明	0.041	ガラス	完存	気泡	831
	小玉	2.2	3.1	1.0			紺色　半透明	0.031	ガラス	完存	気泡	832
	小玉	1.8	3.2	0.8			紺色　半透明	0.025	ガラス	完存	気泡	833
	小玉	1.8	3.0	0.9			淡青色　半透明	0.020	ガラス	完存	気泡	834
	小玉	1.8	2.6	0.7			紺色　半透明	0.017	ガラス	完存	気泡	835
	小玉	2.7	3.3	0.9			淡青色　半透明	0.038	ガラス	完存	気泡	836
	小玉	1.3	2.8	0.8			紺色　半透明	0.015	ガラス	完存	気泡	837
	小玉	－	－	－			紺色　半透明	－	ガラス	ほぼ完存	気泡	838
	小玉	2.9	3.6	0.9			紺色　半透明	0.054	ガラス	完存	気泡	839
	小玉	1.8	3.1	1.0			紺色　半透明	0.024	ガラス	完存	気泡	840
	小玉	2.1	3.1	0.7			紺色　半透明	0.027	ガラス	完存	気泡	841
	小玉	－	－	－			淡青緑色　半透明	－	ガラス	ほぼ完存	気泡	842
	小玉	2.2	3.1	1.1			紺色　半透明	0.031	ガラス	完存	気泡	844
	小玉	3.2	4.9	1.6			淡青緑色　半透明	0.088	ガラス	完存	気泡	845
	小玉	1.9	2.7	1.1			紺色　半透明	0.019	ガラス	完存	気泡	846
	小玉	2.0	3.0	0.7			淡青色　半透明	0.026	ガラス	完存	気泡	847
	小玉	1.6	2.4	0.8			紺色　半透明	0.013	ガラス	完存	気泡	848
	小玉	1.6	(3.2)	－			紺色　半透明	(0.011)	ガラス	1/2	気泡	849

倭文７号墳　出土玉類

挿図番号	種　類	長さ (mm)	径 (mm)	孔　径 (mm)		穿　孔	色　調	重　量 (g)	材　質	残存状況	備　考	遺物番号
	小玉	2.2	2.9	1.0			淡青色　半透明	0.028	ガラス	完存	気泡	850
	小玉	1.4	2.3	0.8			紺色　半透明	0.010	ガラス	完存	気泡	851
	小玉	1.2	2.7	1.0			紺色　半透明	0.012	ガラス	完存	気泡	852
	小玉	1.8	3.6	0.9			淡青緑色　半透明	0.030	ガラス	完存	気泡	853
	小玉	1.4	2.6	0.7			紺色　半透明	0.013	ガラス	完存	気泡	854
	小玉	1.2	2.2	0.9			淡青色　半透明	0.007	ガラス	完存	気泡	855
	小玉	1.5	2.6	0.8			紺色　半透明	0.015	ガラス	完存	気泡	856
	小玉	2.1	3.7	1.1			淡青緑色　半透明	0.038	ガラス	完存	気泡	857
	小玉	－	－	－			紺色　半透明	－	ガラス	破片		858
	小玉	2.4	3.8	0.9			淡緑色　半透明	0.047	ガラス	完存	気泡	859
	小玉	1.8	3.7	1.1			淡青緑色　半透明	0.035	ガラス	完存	気泡	860
	小玉	2.4	3.8	1.2			淡青色　半透明	0.040	ガラス	完存	気泡	861
	小玉	1.5	3.0	1.1			紺色　半透明	0.019	ガラス	完存	気泡	862
	小玉	－	－	－			紺色　半透明	－	ガラス	破片		864
	小玉	1.9	2.6	0.8			紺色　半透明	0.017	ガラス	完存	気泡	865
	小玉	1.9	3.2	0.9			淡緑色　半透明	0.024	ガラス	完存	気泡	866
	小玉	2.2	2.9	0.9			淡青色　半透明	0.025	ガラス	完存	気泡	867
	小玉	1.9	4.8	1.7			淡青緑色　半透明	0.051	ガラス	完存	気泡	868
	小玉	3.0	3.3	1.0			淡青緑色　半透明	0.044	ガラス	完存	気泡	869
	小玉	1.6	2.0	0.8			紺色　半透明	0.018	ガラス	完存	気泡	871
	小玉	2.8	3.5	1.1			紺色　半透明	0.039	ガラス	完存	気泡	872
	小玉	2.2	3.2	0.8			紺色　半透明	0.032	ガラス	完存	気泡	873
	小玉	1.9	3.7	1.0			淡青緑色　半透明	0.030	ガラス	完存	気泡	874
	小玉	2.7	3.6	0.9			淡青緑色　半透明	0.042	ガラス	完存	気泡	875
	小玉	1.9	3.6	1.1			淡青緑色　半透明	0.033	ガラス	完存	気泡	876
	小玉	1.7	4.0	1.3			紺色　半透明	0.038	ガラス	完存	気泡	877
	小玉	3.0	2.7	1.0			淡青色　半透明	0.030	ガラス	完存	気泡	878
	小玉	－	－	－			淡青色　半透明	－	ガラス	ほぼ完存	気泡	879
	小玉	2.9	3.0	0.7			淡青色　半透明	0.022	ガラス	完存	気泡	880
	小玉	3.3	3.6	1.1			淡青緑色　半透明	0.055	ガラス	完存	気泡	881
	小玉	1.8	3.1	0.9			淡青色　半透明	0.023	ガラス	完存	気泡	882
	小玉	－	－	－			淡青色　半透明	－	ガラス	ほぼ完存	気泡	883
	小玉	1.9	2.8	0.8			淡緑色　半透明	0.019	ガラス	完存	気泡	884
	小玉	1.6	3.0	0.8			淡青色　半透明	0.021	ガラス	完存	気泡	885
	小玉	2.0	2.5	0.6			紺色　半透明	0.014	ガラス	完存	気泡	886
	小玉	1.5	2.5	0.7			紺色　半透明	0.012	ガラス	完存	気泡	887
	小玉	2.8	3.2	1.2			淡青色　半透明	0.039	ガラス	完存	気泡	888
	小玉	－	－	－			淡青緑色　半透明	－	ガラス	破片		889
	小玉	2.6	3.4	0.9			紺色　半透明	0.039	ガラス	完存	気泡	890
	小玉	2.3	3.9	1.3			淡青緑色　半透明	0.041	ガラス	完存	気泡	891
	小玉	1.6	3.0	1.1			淡青色　半透明	0.021	ガラス	完存	気泡	892
	小玉	1.3	2.6	0.7			紺色　半透明	0.012	ガラス	完存	気泡	893
	小玉	2.3	3.1	0.7			紺色　半透明	0.029	ガラス	完存	気泡	894
	小玉	1.5	3.1	0.8			淡青色　半透明	0.018	ガラス	完存	気泡	895
	小玉	2.1	3.3	1.0			淡青色　半透明	0.031	ガラス	完存	気泡	896
	小玉	1.5	2.8	0.9			紺色　半透明	0.019	ガラス	完存	気泡	897
	小玉	1.8	2.9	0.7			紺色　半透明	0.021	ガラス	完存	気泡	898
	小玉	1.8	3.0	0.9			紺色　半透明	0.026	ガラス	完存	気泡	899
	小玉	2.5	3.5	0.8			淡青色　半透明	0.042	ガラス	完存	気泡	900
	小玉	－	－	－			紺色	－	ガラス	ほぼ完存	気泡	901
	小玉	1.4	3.9	1.2			淡青緑色　半透明	0.032	ガラス	完存	気泡	902
	小玉	2.4	3.1	1.1			淡青色　半透明	0.033	ガラス	完存	気泡	903
	小玉	1.9	3.2	1.0			紺色　半透明	0.027	ガラス	完存	気泡	904
	小玉	1.7	3.0	(1.0)			淡青色　半透明	(0.023)	ガラス	完存	気泡	905
	小玉	－	－	－			紺色	－	ガラス	破片		906
	小玉	1.9	3.4	1.0			紺色　半透明	0.026	ガラス	完存	気泡	907
	小玉	3.0	2.6	0.9			淡青緑色　半透明	0.032	ガラス	完存	気泡	908
	小玉	2.9	3.3	1.2			紺色　半透明	0.016	ガラス	完存	気泡	909
	小玉	2.0	2.4	0.8			淡青色　半透明	0.042	ガラス	完存	気泡	910
	小玉	2.5	3.5	1.0			淡青緑色　半透明	0.043	ガラス	完存	気泡	911

倭文７号墳　出土玉類

挿図番号	種　類	長さ (mm)	径 (mm)	孔　径 (mm)		穿　孔	色　　調	重　量 (g)	材　質	残存状況	備　考	遺物番号
	小玉	−	−	−			紺色	−	ガラス	ほぼ完存	気泡	912
	小玉	1.7	2.8	0.7			紺色　半透明	0.019	ガラス	完存	気泡	913
	小玉	2.1	3.3	0.8			紺色　半透明	0.029	ガラス	完存	気泡	914
	小玉	2.6	2.9	1.0			淡青緑色　半透明	0.033	ガラス	完存	気泡	915
	小玉	2.2	3.9	1.2			淡青色　半透明	0.048	ガラス	完存	気泡	916
	小玉	1.7	3.1	0.8			淡緑色　半透明	0.023	ガラス	完存	気泡	917
	小玉	−	−	−			淡青緑色	−	ガラス	1/2	気泡	918
	小玉	2.6	3.5	1.1			紺色　半透明	0.043	ガラス	完存	気泡	919
	小玉	2.2	3.2	1.0			紺色　半透明	0.033	ガラス	完存	気泡	920
	小玉	1.7	3.5	1.1			紺色　半透明	0.028	ガラス	完存	気泡	921
	小玉	2.9	3.3	0.8			淡青緑色　半透明	0.043	ガラス	完存	気泡	922−①
	小玉	2.4	3.4	1.0			淡青色　半透明	0.037	ガラス	完存	気泡	922−②
	小玉	1.5	2.2	0.8			淡青色　半透明	0.007	ガラス	完存	気泡	922−③
	小玉	1.9	(3.5)	(1.0)			紺色　半透明	(0.016)	ガラス	2/3	気泡	922−④
	小玉	−	−	−			淡青色	−	ガラス	破片		922−⑤
	小玉	−	−	−			淡青色	−	ガラス	破片		923−②
	小玉	3.5	3.6	1.1			淡緑色　半透明	0.056	ガラス	完存	気泡	1125−①
	小玉	2.4	3.5	1.1			淡青色　半透明	0.042	ガラス	完存	気泡	1125−②
	小玉	2.3	3.2	1.2			淡青緑色　半透明	0.032	ガラス	完存	気泡	1125−③
	小玉	1.8	3.5	0.9			淡青緑色　半透明	0.032	ガラス	完存	気泡	1125−④
	小玉	1.9	3.3	1.1			淡青色　半透明	0.030	ガラス	完存	気泡	1125−⑤
	小玉	1.4	3.3	1.2			淡青緑色　半透明	0.021	ガラス	完存	気泡	1125−⑥
	小玉	2.1	2.8	0.9			淡青色　半透明	0.026	ガラス	完存	気泡	1125−⑦
	小玉	1.6	2.2	0.7			淡青緑色　半透明	0.013	ガラス	完存	気泡	1125−⑧
	小玉	1.7	2.6	0.7			紺色　半透明	0.016	ガラス	完存	気泡	1125−⑨
	小玉	2.1	3.0	0.8			紺色　半透明	0.026	ガラス	完存	気泡	1125−⑩
	小玉	2.2	3.3	0.6			紺色　半透明	0.034	ガラス	完存	気泡	1125−⑪
	小玉	2.3	3.1	1.0			紺色　半透明	0.032	ガラス	完存	気泡	1125−⑫
	小玉	2.2	3.1	0.9			紺色　半透明	0.031	ガラス	完存	気泡	1125−⑬
	小玉	2.3	3.1	0.9			紺色　半透明	0.033	ガラス	完存	気泡	1125−⑭
	小玉	2.1	3.5	1.1			紺色　半透明	0.029	ガラス	完存	気泡	1125−⑮
	小玉	1.8	2.9	0.9			紺色　半透明	0.021	ガラス	完存	気泡	1125−⑯
	小玉	1.4	2.6	0.8			紺色　半透明	0.014	ガラス	完存	気泡	1125−⑰
	小玉	1.6	2.8	0.9			紺色　半透明	0.019	ガラス	完存	気泡	1125−⑱
	小玉	1.9	2.9	1.0			紺色　半透明	0.022	ガラス	完存	気泡	1125−⑲
	小玉	1.6	2.8	0.9			紺色　半透明	0.017	ガラス	完存	気泡	1125−⑳
	小玉	1.3	3.0	1.0			紺色　半透明	0.015	ガラス	完存	気泡	1125−㉑
	小玉	1.0	3.1	1.0			紺色　半透明	0.013	ガラス	完存	気泡	1125−㉒
	小玉	1.3	1.5	0.7			紺色　半透明	0.011	ガラス	完存	気泡	1125−㉓
	小玉	1.4	2.4	0.7			紺色　半透明	0.012	ガラス	完存	気泡	1125−㉔
	小玉	−	−	−				−	ガラス	ほぼ完存	気泡	1125−㉕